

令和2年度 調査研究報告書

特別区における 小地域人口・世帯分析及び 壮年期単身者の現状と課題

令和2年度 調査研究報告書

特別区における小地域人口・世帯分析及び壮年期単身者の現状と課題

特別区長会調査研究機構



特別区長会調査研究機構



特別区長会調査研究機構

令和 2 年度 調査研究報告書

特別区における 小地域人口・世帯分析及び 壮年期単身者の現状と課題



特別区長会調査研究機構

Kuchokai
Institute for Research and Study

はじめに

特別区23区長が組織する特別区長会は、平成30（2018）年6月15日、特別区長会調査研究機構を設置しました。

その趣旨は、特別区及び地方行政に関わる課題について、大学その他の研究機関、国及び地方自治体と連携して調査研究を行うことにより、特別区長会における諸課題の検討に資するとともに、特別区の発信力を高めることにあります。

平成31（2019）年4月から、各区より寄せられた特別区の行政運営に資する課題について、学識経験者・特別区職員が研究員となり、プロジェクト方式で調査研究を開始しました。以降、特別区の課題解決を中心に据えながら、広く他の自治体の課題解決の一助となること、さらには国及び他自治体との連携の可能性も視野に入れ調査研究を行っています。

本調査研究報告書は、令和2（2020）年度の1年間の調査研究成果を取りまとめたものです。令和2年度は、新型コロナウイルス感染拡大という未曾有の環境変化に伴い、特別区の行政及び区民生活は大きな影響を受けました。このことは、本調査研究においても今後の展望を議論するなかで俎上に上る一方、オンラインによる会議の開催やインタビューの実施など、新たな手法を導入する契機ともなりました。

調査研究の成果が特別区政の関係者のみならず、地方自治体の皆様、学術研究の場など多方面でご活用いただけると幸いです。

最後に、調査等にご協力いただいた地方自治体関係者の皆様、民間企業の皆様をはじめとして、報告書完成までにご協力をいただきました全ての方に深く御礼申し上げます。

特別区長会調査研究機構

令和3年3月

目次

第1章 研究の概要

1. 研究の目的と内容……………6
2. 研究の方法……………7

第2章 東京区部における単身者の現状と動向

1. 単身者の定義……………12
2. 東京区部における単身者の動向……………13
3. 単身者率（単独世帯主率）の動向……………15
4. 未婚単身者率の動向……………17
5. 壮年期単身者の就業特性……………21
6. 東京区部における単身者の将来動向……………23

第3章 壮年期単身者はどのような人たちか

1. 壮年期単身者の位置づけ……………32
2. 壮年期単身者の概況……………36
3. 就業状況……………38
4. 住宅と居住歴……………42
5. 経済状態と暮らし向き……………45
6. 結婚の状態と結婚していない理由……………49
7. 居住継続意向・一人暮らし継続意向・高齢期の経済的備え……………55
8. 生活満足度……………57
9. 結論……………59

第4章 壮年期単身者の日常生活：大都市で「一人で過ごす」とは？

1. はじめに……………64
2. 休日にどのように過ごすことが多いか……………66
3. 一人ですること、過ごす場所・人……………73
4. 食生活、健康……………78
5. 社会関係……………82
6. 困っていること、区政に望むこと……………86
7. 生活満足度と高齢期の暮らし方の意向……………89
8. 一人で過ごすことと生活満足度、高齢期の暮らし方との関係……………90
9. まとめと考察……………96

第1章

研究の概要

目次

第5章	インタビュー調査からみた壮年期単身者のライフストーリーと展望	
1.	インタビューの概要	104
2.	22人のライフストーリー	105
3.	インタビューからみた壮年期単身者の生活歴	143
4.	インタビューからみた壮年期単身者の社会関係	144
5.	インタビューからみた壮年期単身者の将来への展望	145
第6章	特別区をめぐる人口移動の変化	
1.	特別区をめぐる人口移動数の推移	148
2.	特別区をめぐるモビリティの変化	152
3.	国勢調査による2000年と2015年の5年間転入率	158
4.	配偶関係別に見る壮年期居住者の特別区内居住期間	163
5.	住宅所有関係別に見た世帯数の変化	166
6.	コロナウイルス感染拡大の人口移動パターンへの影響	167
7.	特別区内に居住する壮年期人口の小地域分析	170
8.	第6章のまとめ	176
第7章	壮年期単身者の研究から明らかになったこと	
	～増加する壮年期未婚単身者問題への特別区の政策対応～	
1.	国勢調査データから見た壮年期単身者の動向と将来	180
2.	特別区をめぐる人口移動の実態	181
3.	壮年期単身者はどのような人たちか	182
4.	社会的孤立傾向の未婚単身者	185
5.	壮年期未婚単身者の不安とニーズ	186
6.	増加する壮年期単身者問題への特別区の政策対応	186
	研究体制	189
	活動実績	189
	執筆担当	190
	インタビュー調査委託	190

第1章 研究の概要

1. 研究の目的と内容

特別区においては、以前から若年単身者（34歳以下）が全国や東京圏と比較して多いことはよく知られているが、近年増加傾向を示している壮年期（35～64歳）の単身者に対しては十分に目が向けられてこなかった。単身のまま高齢期に入ると、現在の高齢者よりも一層孤立的な状態に置かれる可能性も高いことから、壮年単身者の現状や将来に対する意識等を明らかにするとともに、政策的にどのような枠組みで捉えていくかを検討する必要がある。

令和元年度は、全国・東京圏の中での特別区部という視点で、市区町村単位で単身者の属性の変化を分析するとともに、3区（世田谷区・豊島区・墨田区）を対象にアンケート調査を実施し、その基本的特性の把握を行った。その結果、壮年期の未婚単身者が特別区部に地域的差異を伴いつつ集中する傾向があること、人間関係が薄い層が確実に存在すること、6割が定住意向を持つことなどが明らかになった。

今年度（令和2年度）は、昨年度の調査、分析、議論を踏まえて、東京区部における壮年単身者をより深くかつ多角的に分析することに力点をおいた。

第一に、昨年度実施したアンケート調査データを用い、壮年期単身者とはどのような人々かをより明確にするとともに、「1人で過ごす」という生活行為について深く分析した。

第二に、壮年期単身者に対するインタビュー調査を実施した。当初は、アンケート調査対象者から抽出してインタビュー調査を行うことを考えていたが、コロナウイルス感染拡大防止上、面談によるインタビューは実施不可能となったため、別途募集した人々へのインタビューを遠隔方式で実施した。

第三に、東京区部の壮年期単身者の動向を明らかにするために、東京区部全体の単身者のコーホート分析を行った。本研究のタイトルは、「特別区における小地域人口・世帯分析及び壮年期単身者の現状と課題」であるが、小地域（町丁単位）では、特別集計を行ったとしても取得できるデータに制約があるため、単身者の属性間の豊富なクロス集計が得られる東京区部を集計単位とした分析に重点をおいた。

第四に、東京区部の壮年期単身者は区部外との移動によって入れ替わりながら増加している点に着目し、移動傾向を詳細に分析した。令和2（2020）年はコロナウイルス感染拡大に伴う生活上の様々な変化があった年であり、限定的なデータの分析であるが、その影響についても考察した。

2. 研究の方法

(1) アンケート調査

アンケート調査の方法と回収結果については昨年度の報告書に掲載したが、ここに再掲しておく。

図表1-1 調査方法

- ・調査対象：世田谷区、豊島区、墨田区の35-64歳の単独世帯の単身者
- ・調査方法：質問紙調査・郵送法
- ・調査項目：質問紙を9つのパートに分けて、現居住区での居住状況、以前の居住状況、居住区への要望、家族（親・きょうだい・子）とのつながり、知人・友人・地域とのつながり、日常の過ごし方、食生活・健康の状況、高齢期の生活の見通し、基本属性（性別、学歴、仕事の状況、くらし向き、生活費、年収）等をたずねた。
- ・抽出法：各区の住民基本台帳より単独世帯を各区5,000人単純無作為抽出
- ・調査期間：令和元(2019)年10月1日～31日
- ・その他：調査項目の作成にあたり3区の担当者と協議し、質問紙に対するご意見、ご要望、ご提案等をいただいた。住民基本台帳からの抽出作業は全面的に各区のご協力いただいた。各区のご担当の皆様ならびに調査の回答にご協力いただいた区民の皆様に深く御礼申し上げます。

図表1-2 抽出数と有効回収数

	A) 抽出数 (配布数)	(配布されなかった数)		D) 有効 回収数	E) 推定有効 回収率% [D ÷ (A-B-C)]
		B) Aのう ち不在返送 数(*1)	C) Aのう ち 「一人暮らし ではない」 返送数(*2)		
世田谷区	5,000	163	177	868	18.6%
豊島区	5,000	161	144	845	18.0%
墨田区	5,000	158	131	885	18.8%
合計	15,000	482	452	2,598	18.5%

注1 その住所に該当者が居住しておらず返送された数

注2 質問紙の最初に「一人暮らし」であるかどうかのフィルター質問で「一人暮らしではない」と回答して返送された数

(2) インタビュー調査

調査対象者の選定

20名のインタビューについてはその募集を調査会社に委託した。調査会社では事前にウェブサイトなどで様々な調査に参加を希望する人を募集しており、その中から今回の調査内容に合致する対象者（23区在住単身者、40代および50代）を居住区が偏らないよう絞り込んだ。その後、個別に連絡を行い、本研究の趣旨を説明し承諾を得た方かつ通信機器等の準備が可能な方と日程の調整を行った。また、区のご協力をいただき、チラシによる参加者募集を行った結果、2名の23区在住単身者の方の参加を得ることができた。すべての参加者にはインタビューへの同意書に署名をいただき、別途規定の謝金が支払われた。なお、選定にあたっては40代と50代を対象としたが、結果的に30代と60代が1名ずつ加わった。

調査方法

ビデオ会議システムによるオンラインインタビューとし、22名の方に個別に実施した。研究員2名（もしくは研究員1名と事務局1名の立ち合い）により約1時間から1時間半聞き取りを行った。うち1名は通信状態不良のため音声のみで聞き取りを行った。内容は録音され、個人を特定しない方法でメモに記録された。すべての過程で、個人情報保護に対する手続きを徹底した。

調査項目

昨年度実施したアンケート調査に沿って、参加者のこれまでの居住歴、職業歴、家族や友人との社会関係、日常生活、将来への展望などを聞き取った。また今回あらたにコロナ禍における暮らしや不安などについても質問を行った。

今回新型コロナにより様々な影響がある中、インタビューにご協力いただいた皆様に深く御礼を申し上げます。また、このような状況下インタビューの実施には多くの困難がありましたが、調査会社の迅速な手配、墨田区のご協力により、22名のインタビューを短期間で安全に実施することができました。御礼申し上げます。

(3) 国勢調査データの分析

e-Stat上に蓄積されている国勢調査および住民基本台帳人口移動報告のデータを用いた。主に用いたデータは、1980年から2015年までの単身者の年齢属性、配偶関係属性、就業属性に関するデータ、人口移動に関するデータ、小地域データ等である。国勢調査データは、2010年調査以降、年齢や配偶関係の「不詳」が増加しており、東京区部の2015年では、単独世帯の37%が配偶関係不詳となっている。分析に際しては補正をかけている。詳細は本論を参照していただきたい。

第2章

東京区部における 単身者の現状と動向

第2章 東京区部における単身者の現状と動向

1. 単身者の定義

本章では、国勢調査データを用いて単身者の分析を行う。このため、本章における図表はすべて国勢調査にもとづいて作成したものであり、個々の図表に入れるべき「資料：国勢調査」は省略する。

分析に入る前に、国勢調査における単身者の定義について簡単にみておくことにする。

国勢調査では1985年から世帯分類が変更され、大きく「一般世帯」と「施設等の世帯」に分けられるようになった。「一般世帯」とは次のように定義されている。

- (1) 住居と生計を共にしている人の集まり又は一戸を構えて住んでいる単身者
- (2) 上記の世帯と住居を共にし、別の生計を維持している間借りの単身者又は下宿屋などに下宿している単身者
- (3) 会社・団体・商店・官公庁などの寄宿舎、独身寮などに居住している単身者

(1)の「一戸を構えて住んでいる単身者」と(2)と(3)を合わせたものが「世帯の家族類型」における「単独世帯」という分類になる。本研究では、この「単独世帯」を用いて単身者の分析を行う。

1980年以前は「普通世帯」と「準世帯」に分けられていた。「普通世帯」の定義は(1)と同じで、それ以外の単身者の集団を「準世帯」としていた。時代とともに「準世帯」の居住実態が変化したことを踏まえて、(2)(3)に該当する単身者を「普通世帯」に加えて「一般世帯」とした。つまり、(2)や(3)の単身者を「一戸を構えて住んでいる単身者」と同等と見なすようにしたということである。一方、「施設等の世帯」は、「準世帯」から(2)(3)を除いたものということになり、寮・寄宿舎の学生・生徒、病院・療養所の入院者、社会施設の入所者、自衛隊営舎内居住者、矯正施設の入所者、その他がこれに当たる。「施設等の世帯」は親族関係で構成されていないという意味で単身者の集まりであるが、個々人の属性の一部が共通する集団としての側面から捉えている。

1980年以前の分類がずっと同じだった訳ではない。普通世帯と準世帯という大きな分類は継続されたが、「単身の住み込み営業使用人」、「単身の下宿人」などの扱いは何度か変更されている。これは、都市に集まる単身者をどうい

世帯（居住単位）として捉えることが適切かを巡る変遷であった。1985年に世帯分類が変更になった背景には、住み込みや下宿という居住形態も少なくなり、単身者を一般世帯のなかの単独世帯として位置づけることが適切であるという実態が広がったことがある。こうして定着した「一人暮らし」の現在をわれわれの研究は扱っている。

国勢調査における「世帯の家族類型」のなかの「単独世帯」を、以下では「単身者」と表記することにする。

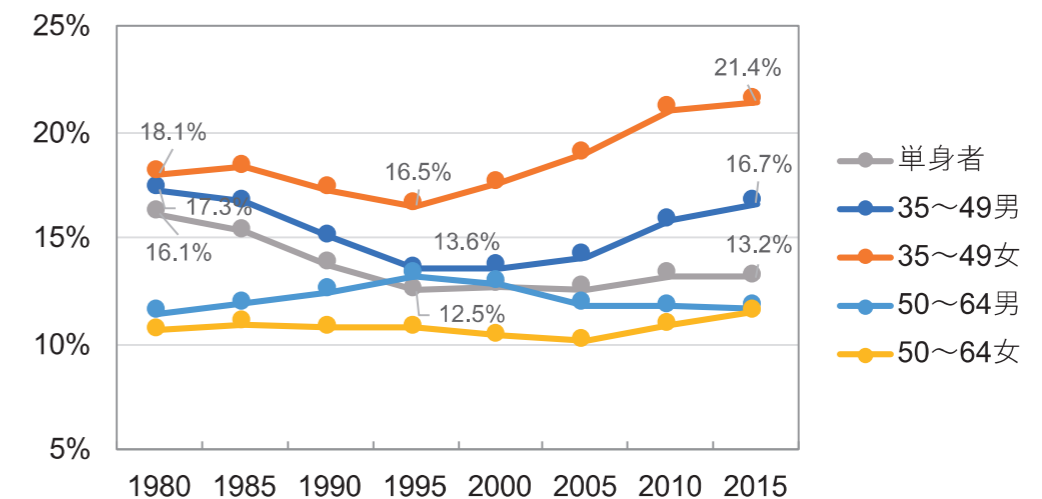
2. 東京区部における単身者の動向

第1章で、「東京区部では壮年期単身者が増加している」と述べたが、これは必ずしも正確な表現ではない。ではどう表現することが正しいのだろうか。

昨年度の報告書で詳しくみたように、国勢調査によれば、東京区部の人口は1965年をピークに減少に転じ、1995年に底を打ったあと2015年まで増加を続けている。1995年から2015年までの20年間の人口増加率は16.9%で、全国の同期間の1.2%をはるかに上回る。世帯数もこれに影響されるのは当然で、一般世帯総数の同期間の増加率は、東京区部38.0%、全国21.5%である。肝心の単身者はどうかというと、東京区部72.3%、全国63.9%となっており、総人口や一般世帯総数の増加率と比較すると差はむしろ小さい。これはもともと東京区部に単身者が多かったこと、全国でも単身化が進行したことが要因として考えられる。

そこで、全国の単身者に占める東京区部の単身者の割合を計算してみることにしよう。単身者全体に加えて、壮年期単身者を男女別、前後期別に計算した。結果は図表2-1のようになる。

図表2-1 東京区部における壮年期単身者の男女・前後期別の対全国シェア



単身者全体は1980年の16.1%から1995年に12.5%へ低下し、2015年に13.2%まで若干上昇した。これと比較して最も目立った動きを見せたのが35～49歳の女性である。1980年、1995年、2015年のそれぞれの割合は、18.1%、16.5%、21.4%と推移し、1995年から2015年の上昇が顕著である。35～49歳の男性がこれに続き、1995年から2015年にかけて13.6%から16.7%に上昇している。

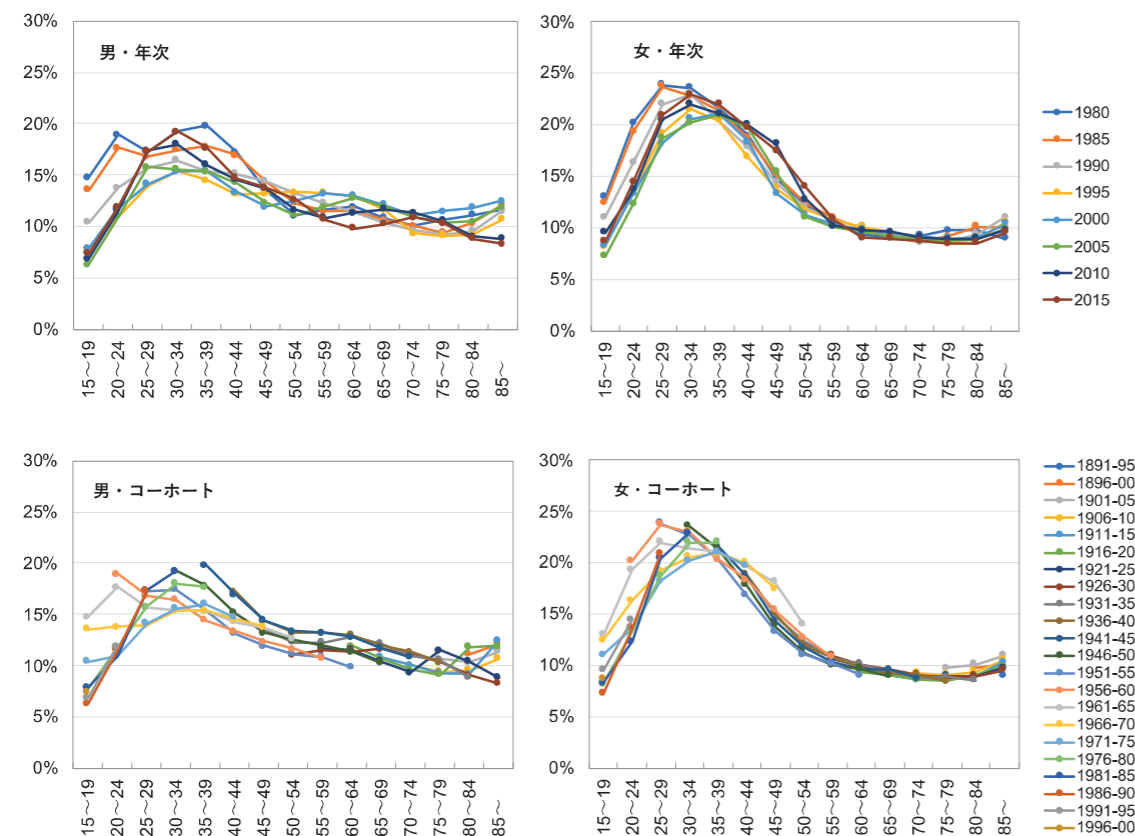
壮年後期単身者は、ほとんどの年次において、男女とも単身者全体よりも低い割合であり、とくに1995年以降に大きな上昇はみられない。男性に関しては低下傾向をみせている。

以上のように、人口が増加に転じた1995年以降の東京区部における単身者の動向で特徴的な点は、35～49歳の壮年期単身者の増加・集中傾向が顕著であるという点、とくに女性においてそれが一層顕著であるという点である。

参考として、男女・年齢別に、全国の単身者のうち東京区部に集中している割合をみたものが図表2-2である。年次別とコーホート別の図を作成した。コーホート別とは、凡例にあるように、ある5年間に生まれた集団を追跡したものである。各コーホートは最大8年次分の折れ線で表示されている。最も右側が2015年の値である。

男性のパターンは不安定で傾向を読み取りにくい。詳細にみれば変化の傾向を読み取ることは可能であるが、ここでは省略する。

図表2-2 東京区部における単身者の対全国シェア



女性は、年次、コーホートともに同じようなパターンであるようにみえるが、よくみると、2010年と2015年で45～49歳で高くなっているのがわかる。これは1961-65・1966-70コーホートによって引き起こされたものであり、未婚率の上昇が始まった世代が壮年期前にさしかかり、単身者割合を上昇させていると考えられる。

3. 単身者率（単独世帯主率）の動向

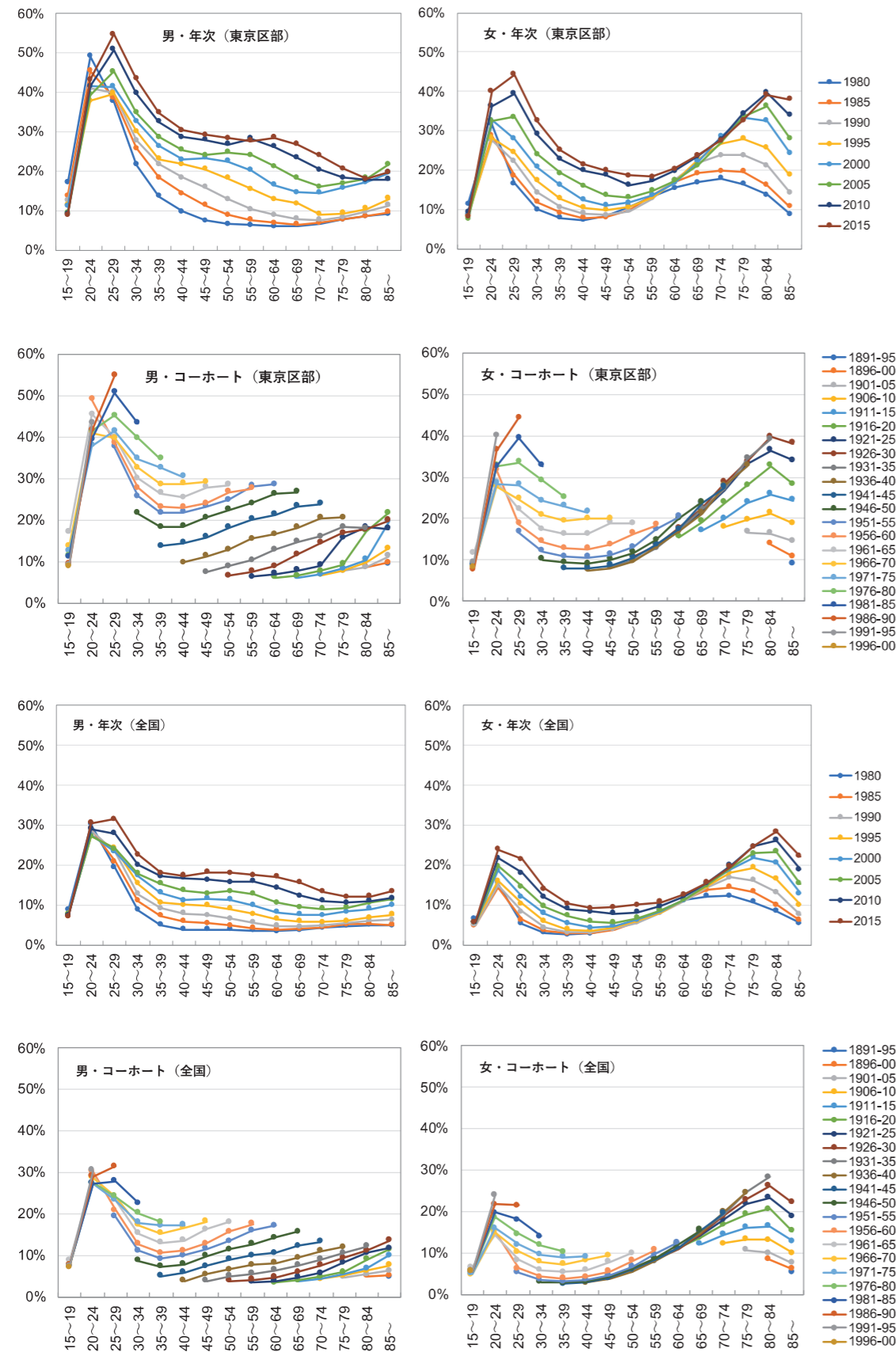
男女・年齢別の人口に占める単独世帯主の割合を「単独世帯主率」という。本報告書での用語にしたがえば「単身者率」になる。この尺度は、男女別にどのような年齢階層でどのくらいの割合の人が単身者となっているかを示している。この変化の傾向を観察することによって、単身化の進行をより深く理解することができる。

まず東京区部をみてみよう。1980年から2015年の8時点の変化をみると、男性の場合、20代後半以降のほぼすべての年齢で、近年になるほど単身者率が上昇している。ピークは、1980年から1990年までは20代前半にあったが、1995年以降は20代後半に移行し、2015年には54.8%まで上昇している。東京区部に住む20代後半の男性は半分以上が1人暮らしをしている、ということである。30代以上では年齢が上がるにつれて低下傾向を示すが、近年になるほど高止まりしており、2015年の壮年期（35～64歳）ではほぼ30%と高い水準を維持している。

女性の場合も、男性と同様に、近年になるほど単身者率は上昇している。ピークが20代後半に移るのは2005年以降で男性よりも10年遅く、またピークの水準も44.3%と男性よりも10ポイントほど低い。それでも20代後半の女性の半数近くが一人暮らしをしており、全国の21.6%の2倍以上に当たる。壮年期では男性よりも低いレベルまで下がり、50代では20%前後となるが、60代から上昇に転じ、80代前半で39.2%に達する。この高齢期における上昇は、死別による単身化が影響している。

つぎに、以上の経年変化をコーホートに変換すると、きわめて明解な傾向が示される。25歳以上の年齢層では、男女とも新しいコーホートがほぼ一貫して高い水準へとシフトしている。男性では1931-35コーホートから上方へのシフトの幅が大きくなり、1951-55コーホートまで続く。これらのコーホートの動きが現在の壮年期の高い単身者率に結びついている。その後のコーホートも上方へのシフトが続くが、男性の1976-80コーホートからシフト幅が再び大きくなる傾向がみてとれる。一方、女性では1961-65コーホートからシフト幅が大きくなり、2015年に20代後半に達した1986-90コーホートまで続いている。

図表 2-3 男女・年齢別単身者率 (年次・コホート、東京区部・全国)



以上から言えることは、東京区部の単身化の傾向は高いレベルで一貫して続いており、弱まる兆候はないということである。全国の傾向も同じであるが、その水準は東京区部の半分から4分の3といったところである。東京区部は全国で進んでいる単身化が最も先鋭的に現れている場所と言えよう。

最後に、データの補正について述べておくことにする。

コホートの動きのなかでやや不自然な箇所が見受けられる。男性の1911-15コホートから1921-25コホートで高齢期に急に上昇する箇所や、各コホートの2015年(右端の点)の動きである。前者は2000年と2005年の75歳以上のデータ、後者は2015年のデータに起因している。これらはともに「不詳」の配分と関係している。

ここでの分析に際しては、「不詳」を配分してデータセットを作成している。これを行わないとグラフはバラバラな状態になり分析不能になってしまうからである。「配偶関係不詳」は近年になるほど増加しており、単身者総数に占める割合は、東京区部の場合、1985年までは5%未満であったものが、2005年14.5%、2010年24.0%、2015年36.6%と、無視し得ない大きさになっている。いくつかの補正の方法を検討した結果、年齢階級ごとに未婚・有配偶・死別・離別の単身者数に比例する形で配分することにした。2010年と2015年では、「年齢不詳」が表章されており、単身者総数の年齢不詳はすべて配偶関係不詳の年齢不詳とされている。この2年次に関しては、まず年齢不詳を配偶関係不詳の年齢構成に比例して配分したのち、上記の配分を行っている。

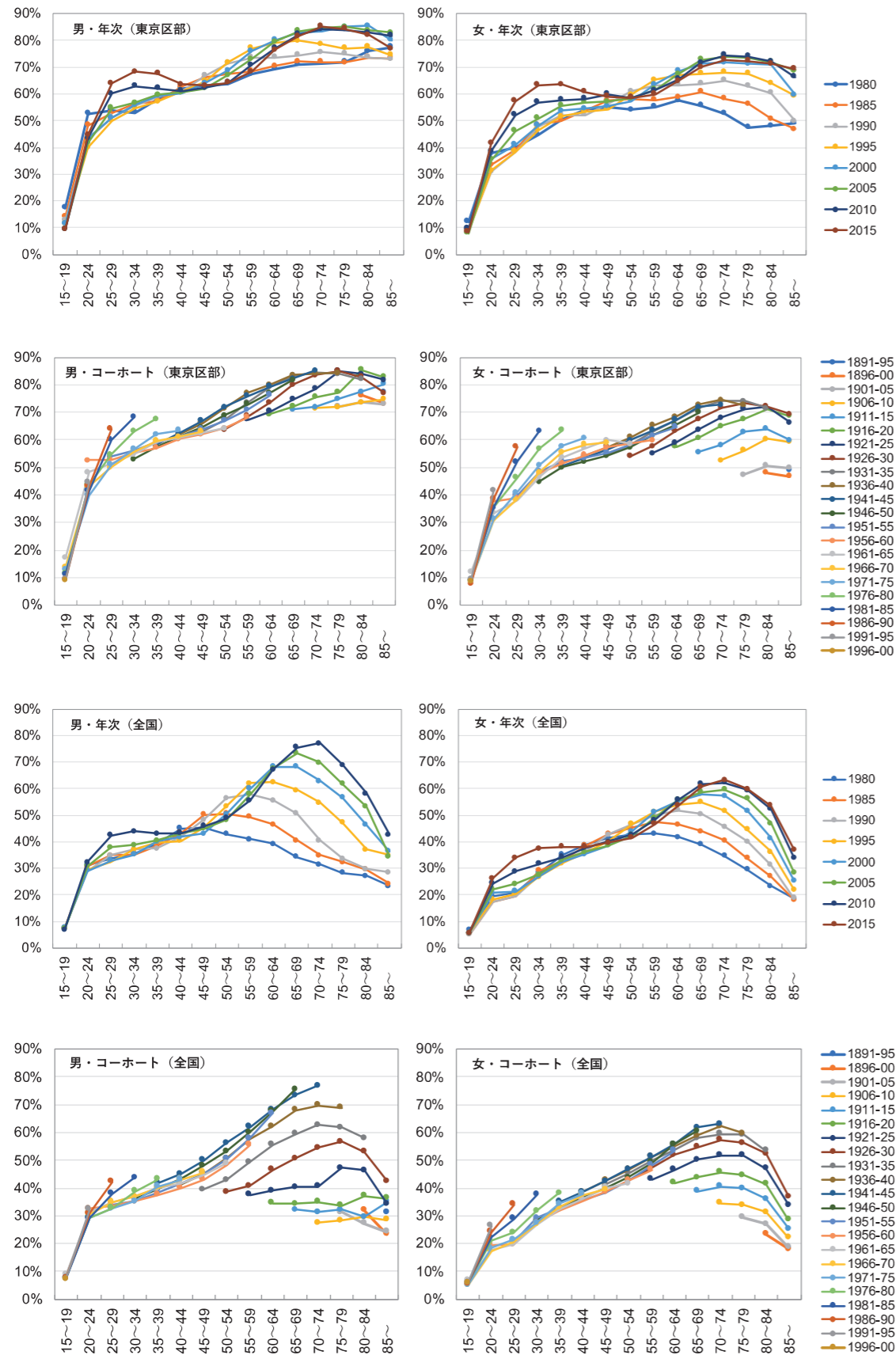
2000年と2005年の75歳以上のデータが不自然な理由は、配偶関係不詳の年齢分布が不自然な点にある。総務省統計局では国勢調査で回収した調査票のなかでの論理的矛盾があるデータに関して「補訂作業」と呼ばれるデータ修正作業を加えており、推測の域を出ないが、その影響も考えられる。なお、2015年のデータに関では、男性の20代後半から40代前半で配偶関係不詳が40%を超えており、上記の補正方法では十分な精度を持ち得ない可能性がある。

4. 未婚単身者率の動向

壮年期単身者率の上昇が壮年未婚率の上昇に起因していることは容易に想像がつく。グラフは省くが、1980年から2015年までの8時点の壮年未婚率と壮年期単身者率の回帰分析を行うと、決定係数0.986とほぼ直線上に分布する。しかし、未婚者に占める未婚単身者の割合である「未婚単身者率」が不変とは考えられない。今後、未婚者がさらに増加すると見通されるなか、そこからどのように単身者が発生するかは、単身者全体の将来動向を左右する。そこで、未婚単身者率について、単身者率と同様の分析を行う。

- 第1章 1
- 第2章 2
- 第3章 3
- 第4章 4
- 第5章 5
- 第6章 6
- 第7章 7

図表2-4 男女・年齢別未婚単身者率（年次・コホート、東京区部・全国）



結果は図表2-4に示したようになった。ここでは、まず全国の動向からみていくことにする。男性のグラフを参照すると、中高年層において、未婚単身者率は単身者率と同様に、近年のコホートほど上方にシフトしていく傾向がみられる。しかし、それは1941-45コホートまでで、それ以降は壮年期で低下していく。40代の年齢層に着目すると、1946-50コホートから低下しはじめ、1956-60コホートが最も低いレベルにある。昨年度の報告書に掲載したが、未婚者で単身化しない人々のほとんどは親と同居している。

親と同居するか否かは「意思・意向」の問題と考えられがちであるが、物理的な条件がある。それは、親が生存していること、競合するきょうだい（兄弟姉妹）が少ないことである。1946-50コホートくらいから、親の長寿化ときょうだい数の減少が始まっており、未婚者の同居が進んだと考えられる。

1946-50コホートは、30代前半時点で1941-45コホートを下回っていたが、60代後半に上回った。これは親が他界した結果、単身者になったということだと理解できる。つまり、未婚者は高齢期に単身者率を一層高める方向に作用するということである。

近年、未婚者の親との同居傾向は転換を迎つつある。1976-80コホートは2015年に35～39歳に達したところであるが、先行するどのコホートよりも上位にあり、以降の1981-85コホート、1986-90コホートはさらに高い値をとっている。未婚者が若い年齢層で単身化する傾向をもちはじめたことは、単身者率の一層の上昇に結びつく可能性のある動きである。なお、全国の女性は男性とほぼ同様の傾向をみせている。

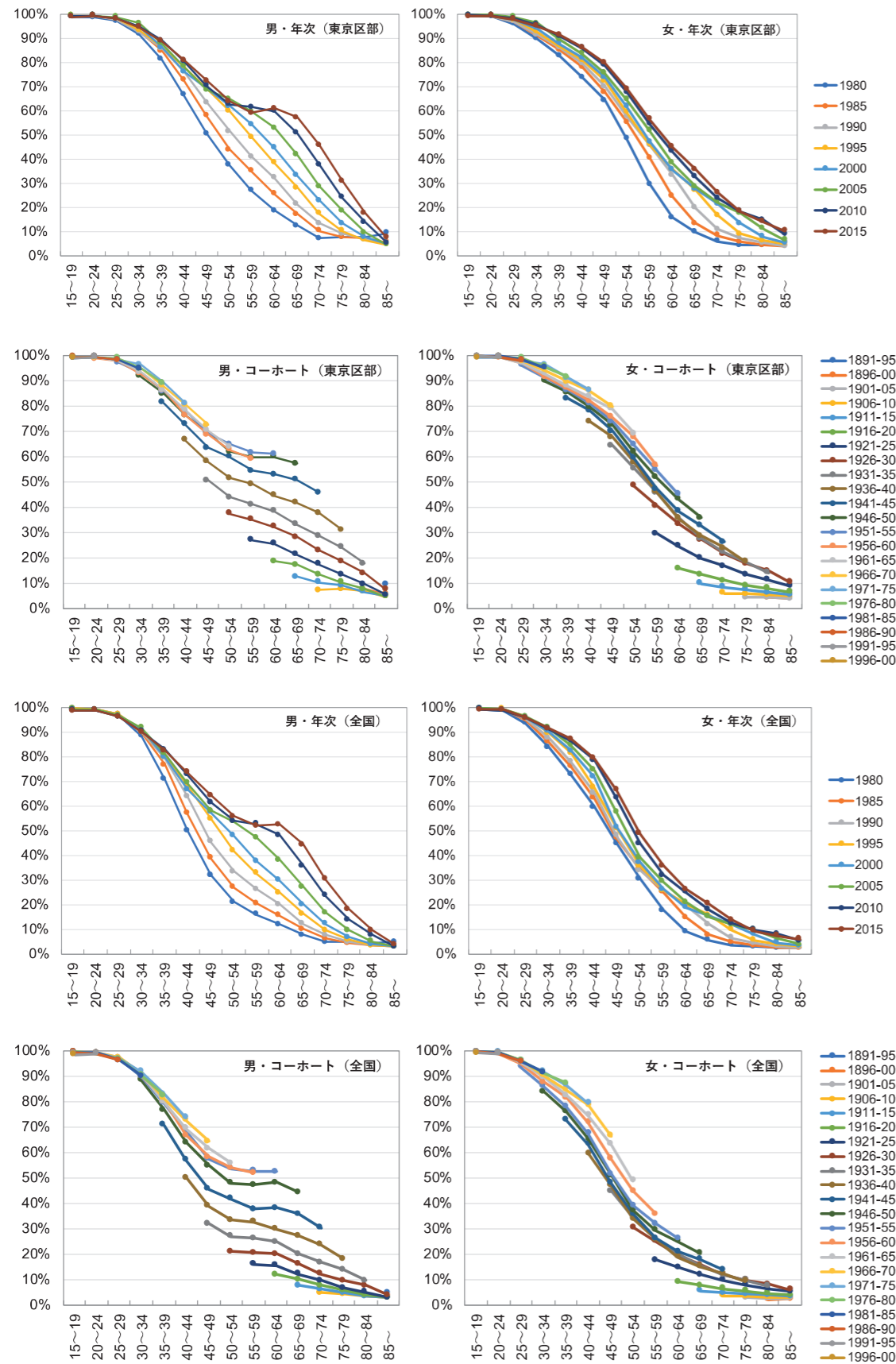
つぎに東京区部についてみていこう。男女の違いは小さいため、男性のグラフにもとづいて述べていく。東京区部は中高年層の未婚単身者率がもともと高いレベルにあるが、全国と同様に1941-45コホートまで上方にシフトしている。そこから反転して低下するのも全国と同様で、1956-60コホートが最も低いレベルにあることも同じである。1946-50コホートはまだ1941-45コホートを追い抜いていないが、まもなく逆転は起きるだろう。

1976-80コホートから上昇傾向が顕著になった点も全国と同様であるが、その勢いは全国よりも明確である。とくに女性の動きが目立つ。壮年期単身者の一層の増加へと結びつく動きとして注目する必要がある。

最後に、単身者に占める未婚単身者の割合を男女・年齢別にみておきたい。東京区部と全国について、年次とコホートのグラフを作成した。割合は100%から徐々に低下し10%程度にいたる。未婚が低下した分は中年期では有配偶が増加し、離別、死別へとシフトしていく。2015年で85歳以上に到達しているのは1926-30コホートであり、未婚のまま高齢期にいたる割合は小さいが、今後上昇していくことは間違いがない。

第1章 1
2
第2章 1
2
3
4
5
6
第3章 1
2
3
4
5
6
7
8
9
第4章 1
2
3
4
5
6
7
8
9
第5章 1
2
3
4
5
第6章 1
2
3
4
5
6
7
8
第7章 1
2
3
4
5
6

図表 2-5 男女・年齢別単身者の未婚者割合（年次・コホート、東京区部・全国）

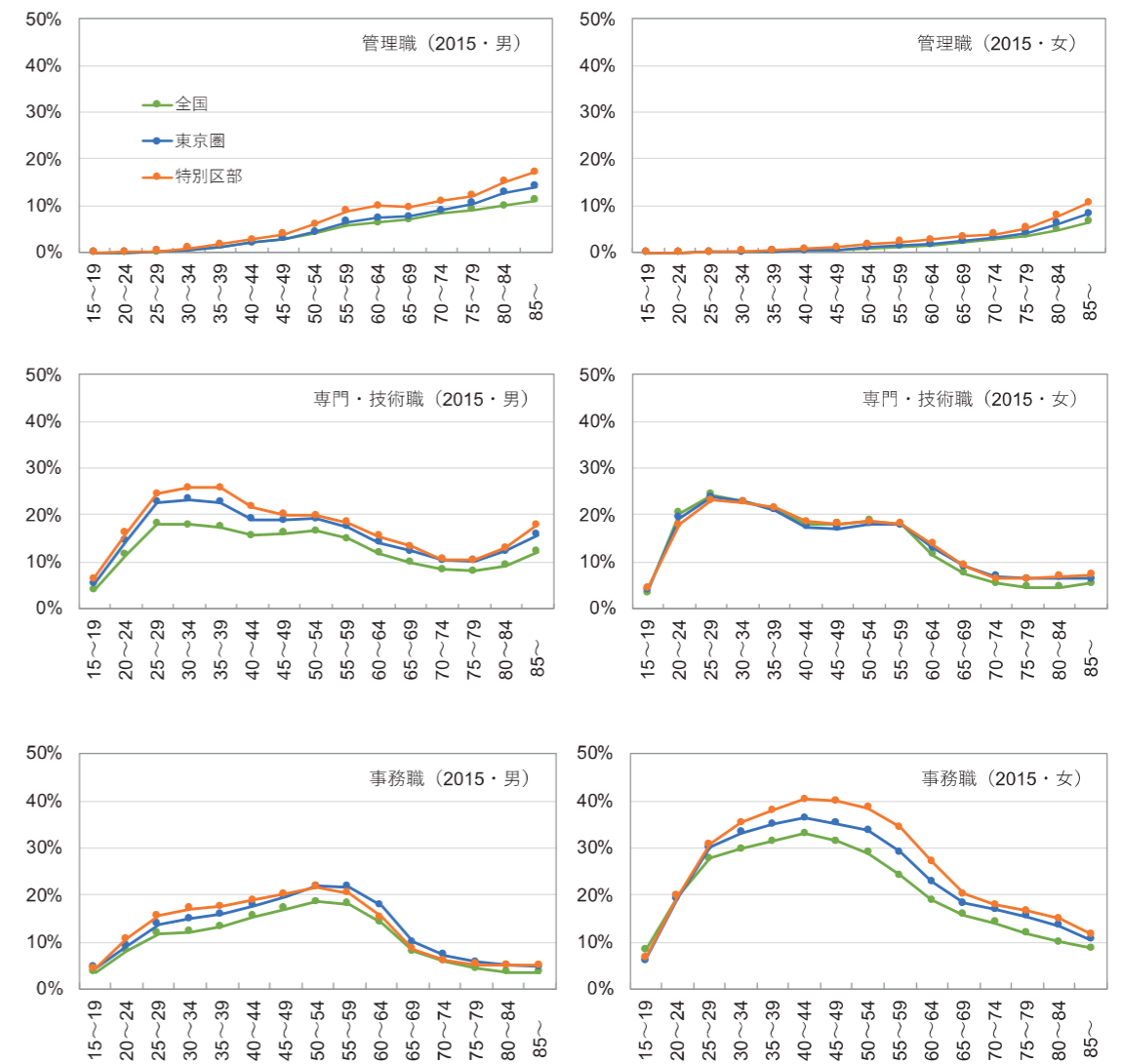


5. 壮年期単身者の就業特性

近年、壮年期単身者が東京区部で増加し、また東京区部への集中が続いており、とくに女性においてその傾向が強い。東京区部で増加している壮年期単身者はどのような働き方をしているのだろうか。国勢調査から直接的に壮年期単身者の就業状況は把握できないため、未婚者で代替して分析する。すでにみたように、東京区部は未婚者に占める単身者の割合が、壮年前期で男性81%、女性76%、壮年後期で男性81%、女性69%と高く、変数として代替可能である。

分析対象は職業大分類のなかから「A. 管理的職業従事者」、「B. 専門的・技術的職業従事者」、「C. 事務従事者」を選択した（以下、管理職、専門・技術職、事務職と表記）。東京区部に居住する壮年期単身者は専門・技術職に就く者が

図表 2-6 男女・年齢別・職業別就業率（2015年、東京区部・東京圏・全国）



第1章 1
2
第2章 1
2
3
4
5
6
第3章 1
2
3
4
5
6
7
8
9
第4章 1
2
3
4
5
6
7
8
9
第5章 1
2
3
4
5
第6章 1
2
3
4
5
6
7
8
第7章 1
2
3
4
5
6

多く、そのワークスタイルとの関連で居住地を選択しているのではないかという仮説が背後にある。管理職と事務職は比較のために選択した。

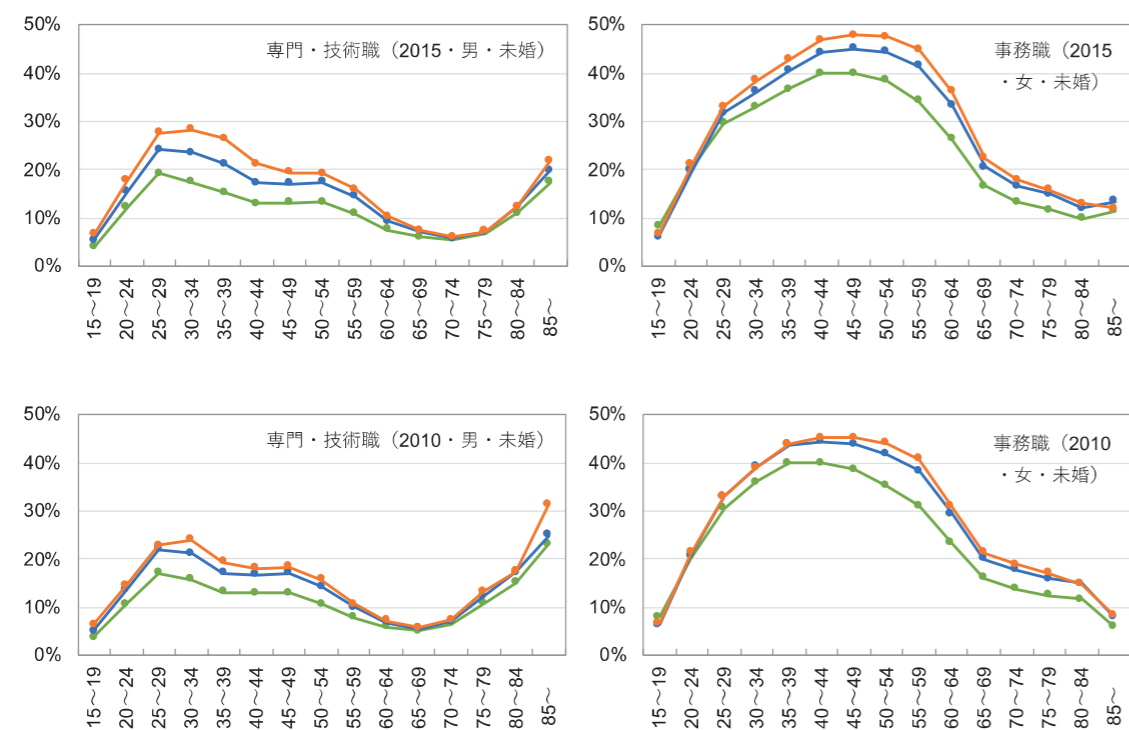
2010年と2015年の就業者全体と未婚就業者について、東京区部を全国、東京圏と比較し、特徴をみた。図表2-6で、まず2015年の就業者全体についてみると、東京区部が全国や東京圏と比較して高いのは、男性の管理職、男性の専門・技術職、女性の事務職である。

つぎに図表2-7で2015年の未婚就業者をみると、管理職はほとんど差がなく（図は省略）、差が明確にあるのは男性の専門・技術職と女性の事務職である。なかでも男性の専門・技術職は就業者全体と比較して、東京区部の割合が前期壮年者で高いことが確認できる。

未婚就業者が他地域よりも東京区部に集中している男性の専門・技術職と女性の事務職の2010年からの変化をみると、ともに2010年よりも差が拡大していることがわかる。

以上をまとめると、2015年において、全国、東京圏と比較して、東京区部の未婚者の職業特性で最も目立つ点は、男性の30代を中心とした専門・技術職の割合の高さである。2010年には、東京圏との差はほとんどなかったことから、近年こうした傾向が現れたと考えることができる。

図表2-7 男女・年齢別・職業別未婚者就業率（2010年・2015年、東京区部・東京圏・全国）



6. 東京区部における単身者の将来動向

(1) 目的と方法

壮年期単身者の増加・集中が進む東京区部において、この傾向は今後どのように進むのかを定量的に明らかにするために、単身者の将来推計を行う。

最初に述べたように、ここで「単身者」と表記しカウントしているのは、国勢調査における家族類型上の「単独世帯」である。その将来推計は、世帯推計として行うのがオーソドックスであり、推計の方法としては、最も一般的な世帯主率法を用いる。

世帯主率とは、一般に男女・年齢別に計算される測度で、男女・年齢別人口に占める世帯主の割合である。男女・年齢別人口の内訳を世帯属性からみると、世帯主と世帯員に分かれ、さらに世帯主は単独世帯主、夫婦のみ世帯主などに分かれる。単独世帯主の割合を計算したものが単独世帯主率（単身者率）である。

世帯主率法とは、男女・年齢別に推計した将来人口に、将来の男女・年齢別の世帯主率を乗じて、世帯主数、すなわち世帯数を計算する方法である。単独世帯主率（単身者率）を用いれば単独世帯数（単身者数）の推計ができる。

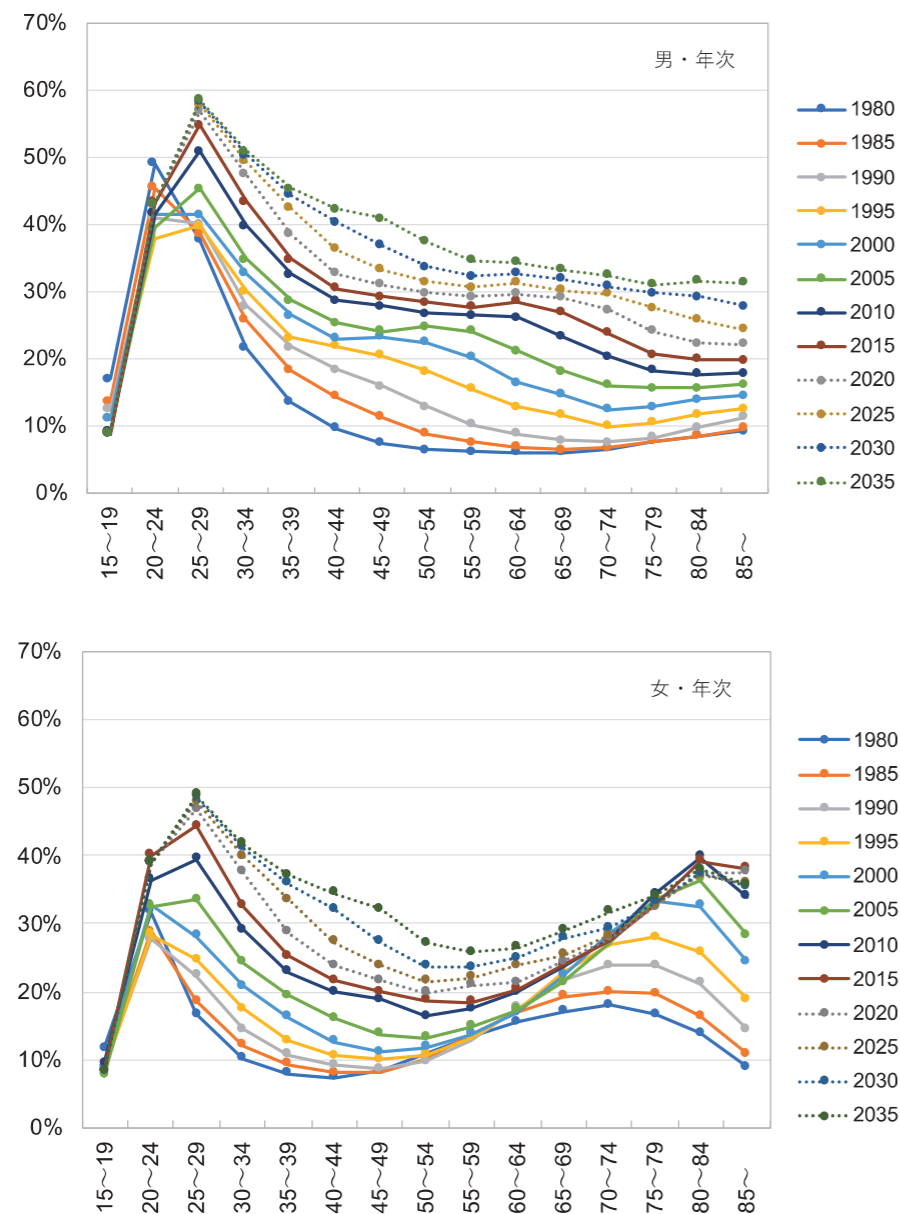
(2) 将来単身者率の設定

上述のように、世帯主率法による推計は、推計された将来人口に世帯主率を乗じて計算する。この世帯主率のような変数を推計モデルにおけるパラメータと呼ぶ。地域人口推計における最もシンプルなモデルであるコーホート変化率法では、コーホート変化率と、ゼロ歳（あるいは0～4歳）人口の導出に用いる女性子ども比と出生性比の3つがパラメータである（出生性比は固定値と考えてよいので実質2つである）。

人口推計や世帯数推計の推計方法は、その変動メカニズムをモデル化することが基本にあるが、最も重要な点は安定的なパラメータを探すことにある。安定的なパラメータとは、過去の値に規則性があり、将来に延長できるということである。定数の形でおくことができたり（ $y=k$ ）、時間（year）の関数としておくことができたり（ $y=f(t)$ ）、グラフに描けば安定した軌道を持つものとなる。モデル化が理論的に優れていても、安定したパラメータが得られなければ実用には向かない。

男女・年齢別の単身者率は、国勢調査からクロスセクション（年次）のデー

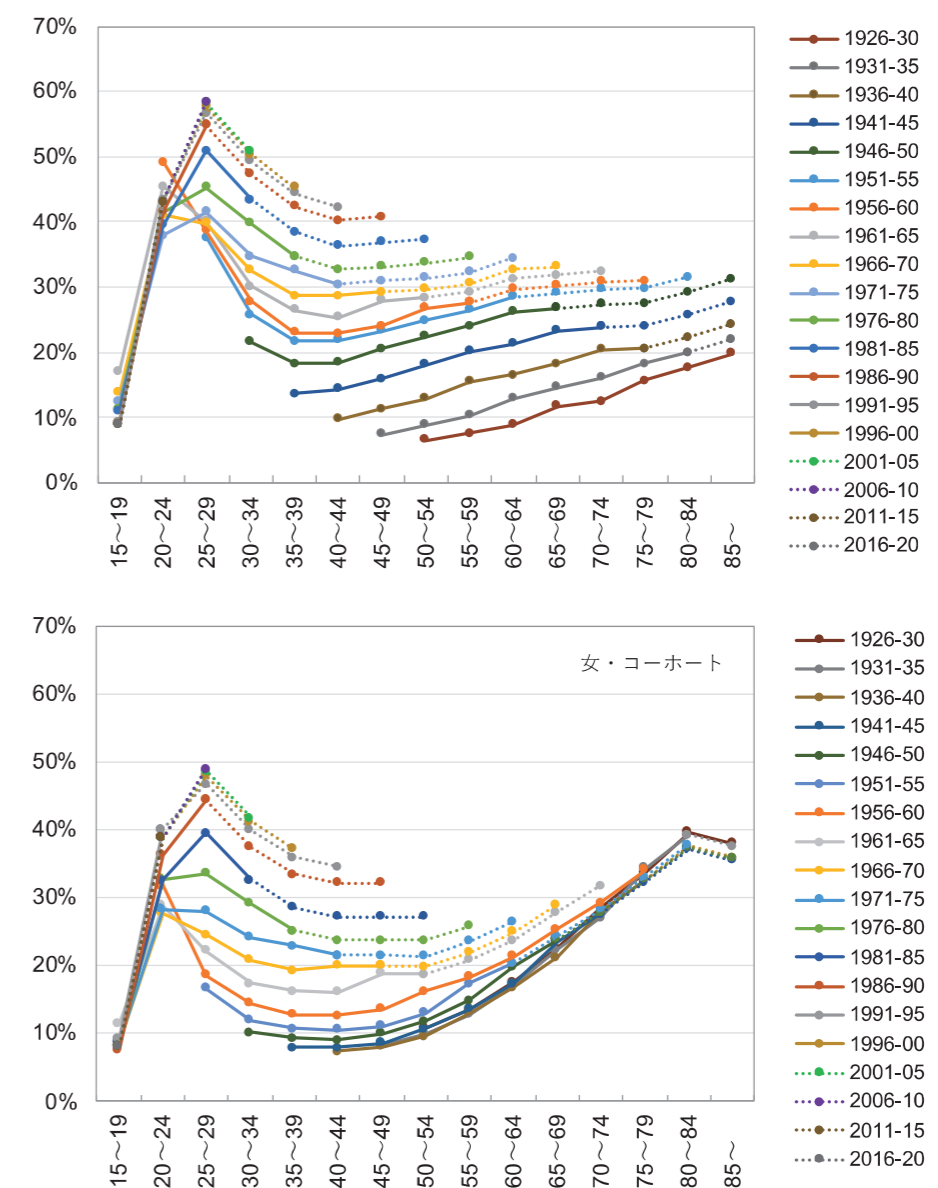
図表2-7 男女・年齢別・単身者率の将来設定（年次）



タとして得られる。1980年から2015年のグラフをみると、25～29歳以上の年齢階級では、新しい年次が常に上にくることが読み取れる（図表2-7）。推計のためのパラメーター設定は、2020年以降の単身者率分布を決めるということであり、かなりの高い確率で上方にシフトしていくことが予想される。しかし、年齢階級ごとの上方へのシフトのテンポに必ずしも規則性はなく、どのように上方にシフトするかを決めることは容易ではない。

しかし、クロスセクション・データをコーホート変換して観察すると、ほとんどのコーホートにおいて、25～29歳より上の年齢階級では、先行するコーホートと一定の差を保持しながら推移していることが読み取れる（図表2-

図表2-8 男女・年齢別・単身者率の将来設定（コーホート）



8)。男女・コーホート別単身者率は安定的パラメーターであると判断できる。

そこで、各コーホート別単身者率が、25～29歳より上の年齢階級では、将来も先行コーホートとの差を保ちながら推移するという仮定をおいて、20年先の2035年まで延長する。

このほかに単身者率に関して2つの設定を行う必要がある。一つは25～29歳のピークがどこまで上昇するかという設定で、もう一つは15～19歳の単身化率の設定である。

25～29歳の単身者率は、近年の3コーホートでピークを上昇させている。先に分析した未婚単身者率が1976-80コーホートから上昇の勢いを増している

ことを勘案すると、さらにピークは上昇すると考えられる。ただ、どこまで上昇するかを判断する根拠はない。こうした場合、複数のケースをおくことが一般的であるが、本研究での推計は試算という性格が強いものであるため、あまり詳細な検討は行わない。ここでは、男女ともに、直近の上昇幅が半減していくという仮定とした。現在の勢いがしばらく続き、その後は収束するという見方である。

15～19歳の単身者率は、男性では近年0.2ポイントずつ低下する傾向が続いている。一方、女性は一定していない。そこで、男女とも直近の値で固定することにする。

このようにして延長した男女・コホート別単身者率を年次データに再び変換して、推計人口に乗じるパラメータとする。

(3) 東京区部の将来推計人口

今年度、別のプロジェクトとして「将来人口推計のあり方」に関する研究を行っている。そのなかで、コホート・シェア延長法という筆者が開発した人口推計方法を用いて、東京区部の将来人口推計を行っている。推計の詳細は当該研究の報告書をご覧ください。ここでは簡単な説明を加えておく。

第一に、本来ならば2020年を起点とした推計を行いたいところであるが、2020年国勢調査結果はまだ公表されておらず、推計の基準人口は2015年値を使わざるを得ない。東京都が2015年国勢調査を基準として推計した2020年の東京区部人口は966.8万人とされており、この値は参考とする必要がある。

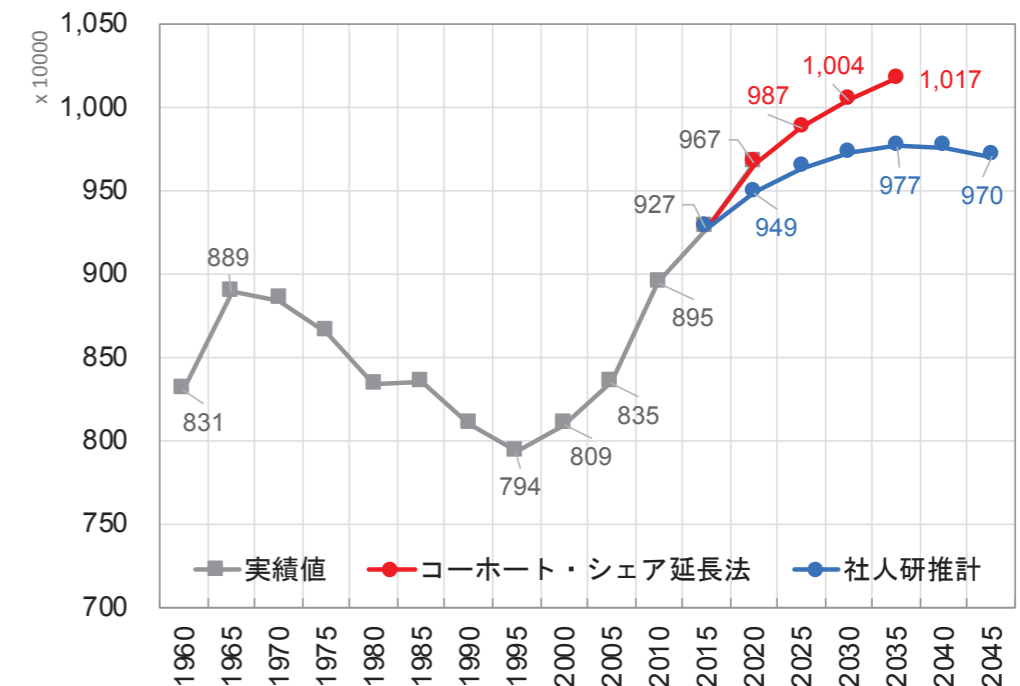
第二に、2020年はコロナウイルス問題の発生によって人口増加にブレーキがかかっている。しかし、2015年から2019年までは、2010年から2015年の増加率を上回る勢いがあり、結果として2015年から2020年の5年間の人口増加率は4.3%と2010年から2015年の3.7%を上回った。コロナ問題がなければさらに大きな増加となっていたと思われる。いずれにしても、暫定値的意味合いが強いものの2020年967万人を通過する推計を、2015年を起点として行う必要がある。社人研推計は、2000年基準の推計から市町村推計を開始したが、東京区部に関しては常に過少推計であった。2015年基準の推計でも、2020年で既に18万人の過少となっている。

第三に、2020年以降、コロナウイルスによる経済の停滞等を反映して、東京区部の人口増加は鈍化する可能性が高い。2010年から2015年で増加率が鈍化したのは、2008年9月のリーマンショックの影響が残ったためであると考えられる。同様のことが2020年以降に起こることが予想され、2015年から2020年の傾向が2020年以降も続くようなパラメータ設定をすれば、過大な

推計結果をもたらすことになるだろう。コホート・シェア延長法は細かいパラメータ設定が可能な手法であるため、2020年以降は2010年から2015年間の傾向が反映されるようにパラメータ設定を行った。

推計期間は20年間としたが、2030年に1,000万人を超える推計結果となった。この推計の男女・年齢別人口を単身者推計に利用する。

図表2-9 東京区部の将来推計人口



資料：国勢調査、国立社会保障・人口問題研究所

(4) 単身者推計の結果

以上のようなプロセスによって推計された、東京区部における単身者の将来推計結果が図表2-10と図表2-11である。この図表には参考のために65歳以上も付け加えた。

単身者総数は、2015年の243万人から増加を続け、20年後の2035年には326万人に到達する。この間の増加は83万人、34%である。以下では、壮年前期、壮年後期、高齢期の男女ごと（6分類）に、2015年から2035年の推移をみていこう。

壮年前期の35～49歳男性は、37.3万から46.3万へ9万増加し、2035年の数としては最も大きい。20年間の増加率は5位である。35～49歳女性は、25.4万から37.0万へ11.6万増加し、2035年の数、増加率ともに4位である。

壮年後期の50～64歳男性は、23.4万から40.0万へ16.6万増加し、2035年の

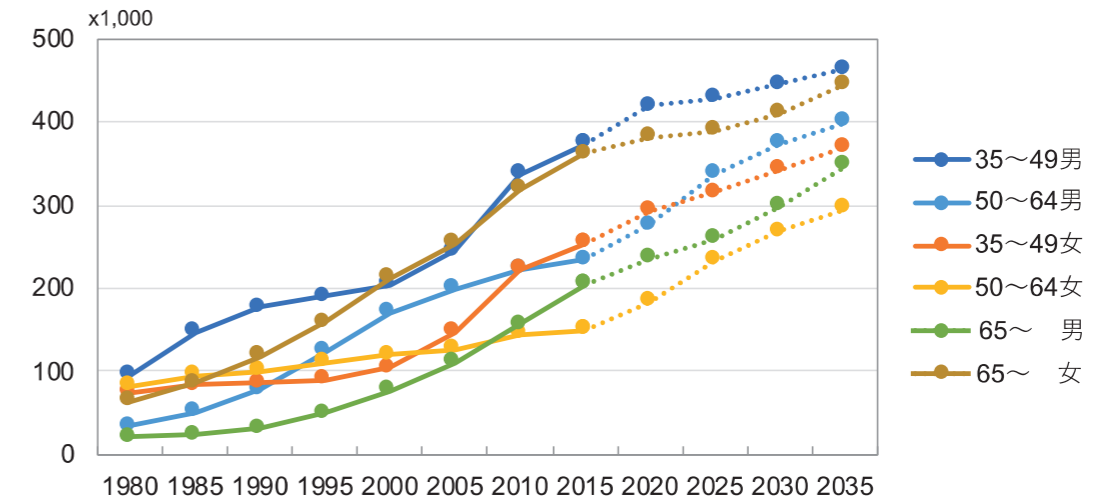
数は3位、増加率は2位である。50～64歳女性は15.0万から29.6万へ14.6万増加し、2035年の数は6位、増加率は1位である。

高齢期の65歳以上男性は20.5万から34.8万へ14.3万増加し、2035年の数は5位、増加率は3位である。65歳以上女性は36.2万から44.6万へ8.4万増加し、2035年の数は2位、増加率は6位である。

図表2-10 東京区部の単身者の将来推計結果

年次	男				女				男女計			
	総数	35～49	50～64	65～	総数	35～49	50～64	65～	総数	35～49	50～64	65～
1980	676	95	34	21	472	74	82	64	1,147	169	116	84
1985	709	147	51	24	498	83	95	86	1,207	230	146	110
1990	737	177	78	31	551	86	101	119	1,288	263	179	150
1995	789	190	123	50	622	91	111	159	1,410	281	234	209
2000	898	204	171	77	732	105	120	212	1,630	309	291	290
2005	985	245	200	111	834	147	127	254	1,819	392	327	365
2010	1,178	337	222	156	1,041	223	145	320	2,219	560	367	476
2015	1,283	373	234	205	1,144	254	150	362	2,427	628	385	566
2020	1,415	419	277	235	1,253	293	184	381	2,668	712	461	617
2025	1,523	429	337	260	1,347	315	233	389	2,870	744	570	649
2030	1,625	445	374	299	1,441	343	268	411	3,066	788	642	709
2035	1,720	463	400	348	1,536	370	296	446	3,256	833	696	794
1980	0.53	0.25	0.15	0.10	0.41	0.29	0.55	0.18	0.47	0.27	0.30	0.15
1985	0.55	0.39	0.22	0.12	0.44	0.33	0.63	0.24	0.50	0.37	0.38	0.19
1990	0.57	0.47	0.33	0.15	0.48	0.34	0.67	0.33	0.53	0.42	0.47	0.26
1995	0.61	0.51	0.53	0.24	0.54	0.36	0.74	0.44	0.58	0.45	0.61	0.37
2000	0.70	0.55	0.73	0.38	0.64	0.41	0.80	0.59	0.67	0.49	0.76	0.51
2005	0.77	0.66	0.85	0.54	0.73	0.58	0.84	0.70	0.75	0.62	0.85	0.64
2010	0.92	0.90	0.95	0.76	0.91	0.88	0.96	0.88	0.91	0.89	0.95	0.84
2015	1.00	1.00	1.00	1.00	1.00	1.00	1.00	1.00	1.00	1.00	1.00	1.00
2020	1.10	1.12	1.18	1.15	1.10	1.15	1.22	1.06	1.10	1.13	1.20	1.09
2025	1.19	1.15	1.44	1.27	1.18	1.24	1.55	1.08	1.18	1.19	1.48	1.15
2030	1.27	1.19	1.60	1.46	1.26	1.35	1.78	1.14	1.26	1.25	1.67	1.25
2035	1.34	1.24	1.71	1.70	1.34	1.45	1.97	1.23	1.34	1.33	1.81	1.40

図表2-11 東京区部の単身者の将来推計結果



本研究の対象である壮年期単身者にしぼって再度整理をすると、男女とも前期の方が後期よりも数は大きい。しかし、後期の方が増加率は高い。単身者は年齢階級別人口に年齢階級別単身者率を乗じたものであることを思い出してほしい。単身者数の増加には、人口規模と単身者率の上昇の両方が寄与しており、人口規模の影響は無視できない。

2015年の35～49歳は1966-80コーホートで、1970年代前半生まれの第2次ベビーブーム世代が中心にいる規模の大きな集団である。50～64歳は1951-65コーホートで、第1次ベビーブーム世代と第2次ベビーブーム世代の谷間の世代である。全国人口でみると、1966-80コーホートは2702万人、1951-65コーホートは2418万人で、前者は後者の1.12倍あるが、東京区部では前者233万人に対し後者162万人で、前者は後者の1.44倍も大きい。これが15年後の2030年になると、35～49歳は1981-95コーホート、50～64歳は1966-80コーホートに入れ替わり、前者218万人、後者226万人となる。2015年と比較して35～49歳が減少するのに対して、50～64歳は増加となり、その増加も64万人、1.4倍と大きい。このことが今後20年間に50～64歳の壮年後期単身者が大きく増加する主要因である。もちろん、単身者率の上昇、その背後にある未婚率の上昇も寄与している。

2015年の東京区部に住む壮年前期の単身者は、加齢していく過程で結婚し家族形成を経験する人も出てくるなど、かれらがそのまま壮年後期に移行する訳ではないが、彼らの持つ定位家族属性や家族規範、就業経験、価値観などは、変化しつつも壮年後期に引き継がれる可能性がある。2030年の壮年後期単身者は量的に増えるだけでなく、2015年の壮年後期とは異なる属性を持つ人々になっているという視点を持つことは、今後の単身者問題を考える上で不

第3章

壮年期単身者は どのような人たちか

可欠である。

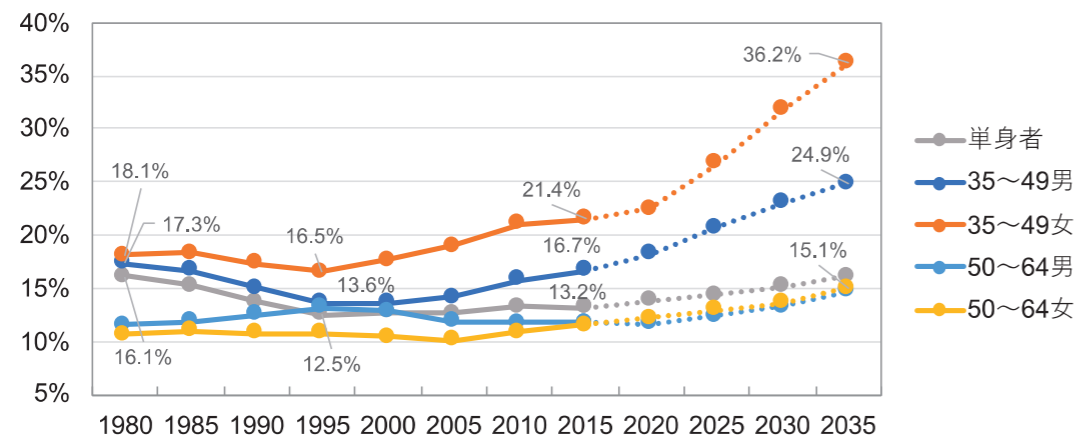
最後に、東京区部の単身者の将来推計結果を全国の将来動向と比較しよう。
図表2-1を将来に延長した図表2-12を作成した。全国世帯推計は、国立社会保障・人口問題研究所「日本の世帯数の将来推計（全国推計）」（2018年推計）を用いた。

一目で分かることは、男女とも壮年前期の割合が顕著に上昇する点である。なかでも女性の壮年前期の割合の上昇が大きく、2035年に全国の36.2%を占めると見通される。2035年における東京区部人口は全国人口の8.8%であり、36.2%という割合はきわめて大きい。単身者推計を行う過程で、25～29歳の単身者率のピークがもう少し高くなるケースを設定したが、36.2%という値が40%近くまでさらに上昇するという結果になったために採用しなかった。

このように2035年の女性の壮年前期単身者の割合が高くなるのは、全国における推計値が2020年の130万人をピークに減少に転じ、2035年には102万人になると見通されているためである。やや過少推計になっているように思われなくもないが、少なくとも2020年の国勢調査結果が出なければ判断できない。

東京区部における壮年期単身者推計結果のもっとも特徴的な点は、全国と比較して、女性の壮年前期単身者の存在が一層顕著になるということである。

図表2-12 東京区部における壮年期単身者の男女・前後期別の対全国シェア（推計を含む）



第3章 壮年期単身者はどのような人たちか

1. 壮年期単身者の位置づけ

壮年期単身者が増加の趨勢にある東京区部は、どのような特性をもった単身者で構成されているのだろうか。本章はそれを知るために、主に年齢、性別、出身地（東京区部、東京圏郊外部、地方圏の3区分）、学歴、職業、所得を軸にしてその実態を見ていく。本調査の対象とする壮年期は35歳から64歳の30年間である。30歳代から40歳代前半期の人々は今後結婚する可能性があり、それにともなって23区から外部へと移動することも見込まれる。この年齢層を除く45代後半から60代前半までの人々が、23区の安定した単身者のコアであることが予想され、この層が増えていくことが東京区部の単身者の比率を上げ、その結果として将来の高齢期単身者の増加をもたらすだろう。

分析に先立って、先行研究から壮年期単身世帯に関する知見を整理してみよう。藤森克彦¹は、全国の勤労世代の単身世帯を、家計、資産、貧困率、社会的孤立、生きがいの5項目でとらえている。そのなかで、本章の関心と一致する3点をおさえておこう。

- ・勤労世代の単身世帯と二人以上世帯の家計・資産の平均像を比べると、単身世帯の貧困率は、二人以上世帯よりも恵まれた状態にあるが、高齢期になると二人以上世帯よりも悪化する（二人以上世帯に関しては等価ベースの所得（等価所得）を算出して比較）。
- ・単身世帯の所得・資産は格差が大きい。単身世帯は男女共に「ひとり親と未婚子のみ世帯」に次いで低い水準にある。
- ・単身世帯で低所得層の割合が高い要因としては、①非正規労働者として働く人の比率が高いこと、②無業者となる人の比率が高いこと、があげられる。無業者のなかには病気や障害を理由とする者が相対的に多い。
- ・無業者や非正規労働者は経済的に不安定なために結婚したくてもできないか、経済的要因から離婚して単身世帯になったことが考えられる。

一方、未婚者の増加という趨勢のなかで、単身者の増加と同時に、親と同居する未婚者の増加という新しい現象も生じている。たとえば35～44歳の未婚者数は、1980年には39万人でこの年齢人口のわずか2.2%だったが、2000年を境に増加の一途をたどり、2015年には308万人（17.0%）と、実数、割合ともにピークに達した後に減少に転じはしたが未だに高い水準が続いている。

藤森²は、40歳代、50歳代の未婚男女を、一人暮らしと二人以上世帯に分けてその特徴を見ている。分析によると、一人暮らしの方が、二人以上世帯（親との同居者とほぼ同義）に比べて就業が安定し所得も良好である（学生は除く）。多くの調査結果によれば、経済力と親との同居は有意に逆相関している。二人以上世帯は単身世帯より低所得の比率が高く、親との同居で生計を維持している人の比率が高い。現時点では親などの同居者から経済的援助や看病・家事などのサポートが得られるものの、同居者がいなくなればこうした援助を受けることは難しくなる。さらに、二人以上世帯は要介護者を抱える比率が高く、家族の介護が同居の一因となっている。また、非正規雇用者の同居率は正規雇用者より高いことが歴然としている。この傾向は若者期を経て、40歳代から50歳代まで続くことに注意を払う必要があるという。

中澤高志³は、東京圏における世帯内単身者率（親と同居する未婚者とほぼ同義）とブルーカラー従事者率の関係から都市構造の変容を見ている。従業上の地位で30歳代未婚の世帯内単身者の社会経済的地位をみた結果、2010年はそれ以前より男女とも世帯内単身者は他の家族状況に比べて失業者や不安定就業状態にある人が多くなっている。特に男性の世帯内単身者は、正規雇用の割合が57.6%にとどまる一方で、失業率は15.5%に達しており、世帯主となっている同世代との違いが際立っている。しかも、2010年になると世帯内単身者は都心の外縁部に明瞭な同心円構造を示すようになってきたという。またブルーカラー従事者率で見ても同様の傾向が確認されるようになった。このことは、地代負担力の高いホワイトカラーが住宅市場における非人格的競争の勝者となって都心周辺を占拠し、地代負担力の低いブルーカラーや親から自立できない若者が郊外に追いやられ、あるいは親元に滞留したりする方向で居住分化が深化していることを示していると中澤は考察する。このような現象は近年社会的に認識されてきた8050問題や7040問題に通じる。

以上の動向は、2000年以降事業所の集積に伴い、東京都心部で知識集約型の専門サービスの需要が高くなり、高学歴労働者の雇用吸収先となってきたことと関係している⁴。のちに見るように東京区部の単身者の経済格差が大きいということは、知識集約型の専門サービスの集積と同時に、その外縁にさまざまな非熟練・低賃金労働が集積していることを意味している。

東京区部に壮年期単身者が多く、その比率が増加する趨勢にあることは、東京区部が世帯形態の多様化という社会的流れの先頭を歩んでいることを意味し

2 藤森克彦「中年未婚者の生活実態と老後リスクについて」『年金研究』No.3、78-111、2016年

3 中澤高志『住まいと仕事の地理学』旬報社、第8章、2019年

4 田中善行・東雄大・勇上和史「労働市場「東京」の特徴」『日本労働研究雑誌』No.718,2020.5

1 藤森克彦『単身急増社会の希望』日本経済出版社2017年

ている。その点について中澤⁵は、2005年国勢調査を使った研究で、団塊世代と団塊ジュニア世代それぞれの30～34歳時の世帯形態を比較している。団塊世代は都心周辺を振り出しにして「住宅すごろく」のコマを進め、その後20～50Km圏に家庭をもつ人が多かった。一方、団塊ジュニア世代は、出生時から4人に1人以上が東京圏居住者であり、東京圏郊外部は住宅すごろくの「ふりだし」だった。やがてこの世代に都心に向かって逆走する動きが生じたが、都心回帰の背景に単独世帯の増加がある。この世代は30歳代前半でも世帯形態の多様化ははるかに大きい、その原因は晩婚化・非婚化、子どもなしだった。つまり、団塊ジュニア世代にとって単独世帯や夫婦のみ世帯は、団塊世代と同じ意味をもっていなかったのである。2005年国勢調査で中澤が対象とした団塊ジュニアは、本調査では40歳代後半期にあたる。2005年の時点で、それまでの住宅すごろくを歩まなくなっている世代と指摘された人々のなかで、その後も単独居住を続けてきた人々（一部離婚を含む）が今回の調査対象者の前半期の人々にあたるだろう。

つぎに、東京区部居住者は、どのような仕事に従事しているのかを見ると、男女とも高学歴者は大企業、「専門的・技術的就業上の地位」「事務」に就職する傾向がある。女性は男性より非正規雇用が多いが、学歴による差が大きく、高学歴女性ほど正規雇用の傾向がある。グローバル化やサービス経済化にともなって雇用機会は大都市に集中し、高学歴女性の受け皿になっている⁶。

職種に関する研究によれば、近年に近づくほど就業上の地位の多様性は小さくなり、知識集約型の産業や就業上の地位に特化していることが、高学歴労働力を吸収する源となっている。事務従事者、管理的就業上の地位従事者、販売従事者、専門的・技術的就業上の地位従事者などである。事業所の集積に伴い、知識集約型の専門的サービスの需要が都心部で拡大し、高学歴労働者の雇用吸収先となっているのである⁷。

第2章で、国勢調査を用いて東京23区、東京圏、全国の就業上の地位構成を男女別に比較した大江守之の分析結果によれば、2015年の就業者の就業上の地位で、23区でより比率が高いのは、専門・技術職（男）と事務職（女）であった。さらに未婚者に限定して比較すると、男性の30歳代を中心として専門・技術職の割合が際立って高くなっている。2010年には、この差異はほとんどなかったことから、近年こうした傾向が現れたと考えることができる。若い年齢層を中心とする就業上の地位構成の変化は、高学歴者の増加と

5 中澤高志「団塊ジュニア世代の東京居住」『家計経済研究』No.87,2010

6 由井義通「東京大都市圏における女性の生活空間」、安井大輔「東京圏における地域格差—産業・就業上の地位・意識」『日本労働研究雑誌』No.718,2020.5

7 田中善行・東雄大・勇上和史「労働市場「東京」の特徴」『日本労働研究雑誌』No.718,2020.5

密接に結びついているのである。したがって、本章が対象とする壮年期単身者のなかの40歳代以上層は、専門・技術職（男）と事務職（女）が集積するより前の世代であると見ることができよう。40歳代後半の団塊ジュニア層もそれに該当する。

先行研究の以上の知見を踏まえて、本章で分析する項目はつぎのとおりである。

- ①東京23区の壮年期単身者はどこから来た（出身地）人々だろうか。そこに年齢・性別・学歴による違いがあるだろうか。
- ②東京の高学歴化は全国の筆頭にあるが、壮年期単身者はどのような学歴で構成されているのだろうか。学歴は年齢・性別・出身地による違いがあるだろうか。また、就業上の地位や所得との間にどのような関係がみられるだろうか。
- ③壮年期単身者はどのような職業に従事しているのだろうか。それは年齢・性別・学歴等によってどのような違いがあるだろうか。東京区部の就業上の地位の高度化という趨勢がどのように投影されているだろうか。その趨勢のなかにある社会格差を含めて探る。
- ④壮年期単身者はどのような住まいに住んでいるだろうか。
- ⑤壮年期単身者の経済と暮らし向きはどのようなものだろうか。それは年齢・性別・学歴等によってどのような違いをもっているだろうか。また、高齢期に近い年齢層の経済的備えはどのようなものだろうか。経済格差の実態を含めて探る。
- ⑥壮年期単身者は、未婚・離婚・死別・事実婚など、結婚に関してどのような状態にあるのだろうか。なぜ結婚をしていないのだろうか。また、「一人暮らし」という状態に対してどのような意向をもっているだろうか。
- ⑦壮年期単身者は、どのような居住継続意向をもっているだろうか。
- ⑧壮年期単身者の生活満足度はどのような状態だろうか。

以上の分析において重視するのはつぎの点である。

- ①東京区部は、教育水準も所得水準も平均値では全国のトップ水準にあるが社会格差は大きい。壮年期単身者のなかのどのような人々が社会経済的に好条件で暮らし、反対の極にどのような人々がいるのかを把握する。
- ②1990年代に始まるデフレ経済と雇用不安の波はどのような影響を及ぼしただろうか。
- ③壮年期の社会格差は、高齢期の社会格差につながっていくだろう。どのような状況にある壮年期単身者に高齢期のリスクが内包されているかを探る。
- ④「結婚するつもりはない」とする人は1割程度と少ないにもかかわらず、ど

のような要因が未婚者の増加を進めているのだろうか。東京区部に一人暮らしをするという環境条件が単身化を進めているのか、それとも就業上の地位や所得条件によるものなのか、その一端を探る。

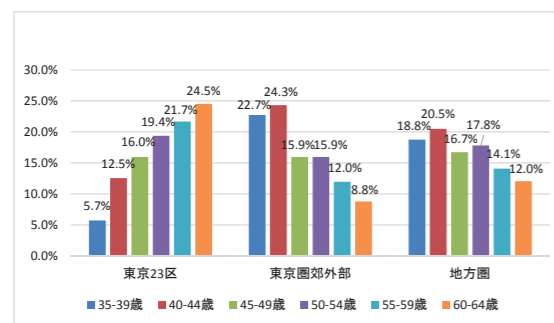
2. 壮年期単身者の概況

東京23区の単身者はどこから来た人々だろうか。アンケート調査では、「中学校を卒業した時、どちらにお住まいでしたか」という設問の回答を出身地と見なした。出身地を、東京区部、東京圏郊外部（東京都多摩地区、千葉県、埼玉県、神奈川県）、地方圏の3地域に区分してその構成を見てみよう。

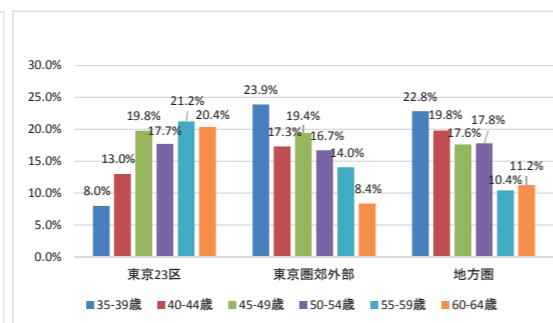
中学校を卒業したときの居住地でもっとも多いのは「地方圏」（45.4%）、次いで「東京圏郊外部」（20.7%）である。「東京区部」（15.4%）はもっとも少ない。男女別に見ると、「地方圏」出身者は男性がより多く（男性49.6%；女性41.9%）「東京圏郊外部」出身者は女性がより多い（女性23.8%；男性17.1%）。東京区部出身者は男女ほぼ同じ比率である。

図3-1は、出身地と年齢の関係を示したものである。東京区部出身者は、高齢者が多い。他方、東京圏郊外部と地方圏は若い年齢層が多い。東京圏郊外部の男性は35～44歳で、東京圏郊外部と地方圏の女性は30歳代後半で急増している。

図3-1 出身地と年齢 —男性—



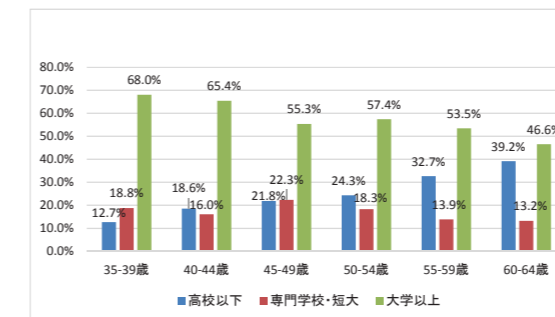
出身地と年齢 —女性—



つぎに学歴構成を見てみよう。学歴は、「大学（4年制）」約40%、「専門学校」と「短大・高専」を合わせて約10%～20%である。男女別では、「大学（4年制）」は男性50%弱、女性約35%と男性の方が高い比率を占めているが、女性は「短大・高専」が約20%を占めるため、「短大・高専」と「大学以上」を合計すると、男女ともほぼ60%である。なお、これ以降は高専を短大に含めて記述する。図3-2は、年齢と学歴の関係を男女別に比較したものである。男性の場合、どの年齢層でも大卒者の比率が高いが、とくに30歳代後半から40歳代前半（つま

り団塊ジュニアより若い層）で大卒以上が6割強と多く、この世代において高学歴化がより進んだことを示している。女性の場合、40歳代後半以上の年齢層の大卒以上は男性と大きな乖離がある。それを補完するのが専門学校・短大である。しかし、それより若い年齢層で一気に大卒以上が増加して男女差が小さくなっている。高卒以下は男女共に高齢層ほど高い比率を占めている。とくに50歳代後半以後の男性においてその比率が高く、女性との差が大きい。

図3-2 年齢と学歴 —男性—



年齢と学歴 —女性—

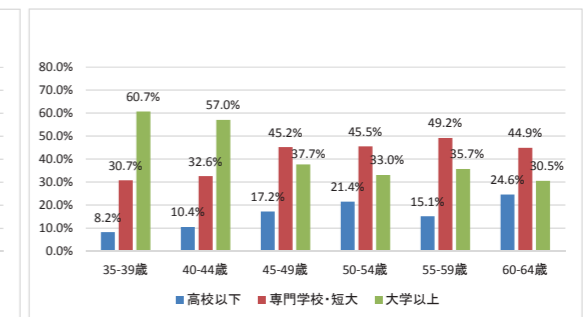
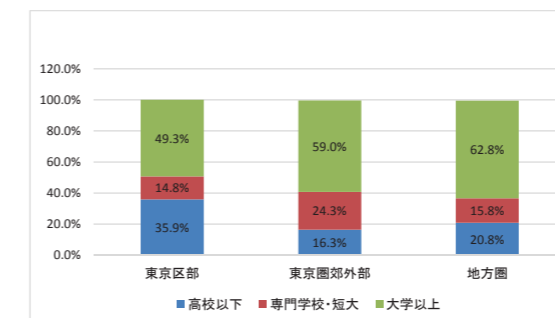
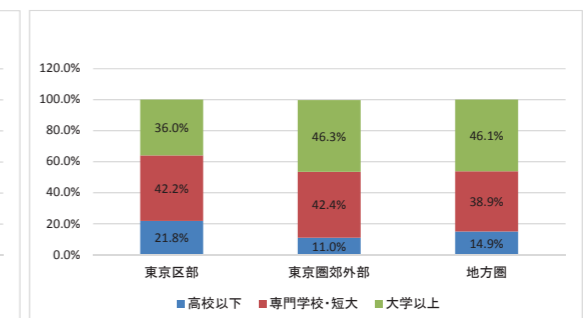


図3-3は、出身地と学歴の関係を示したものである。男性の場合、大卒以上の比率は地方圏出身者がもっとも高い。逆に高校以下の比率は東京区部がもっとも高い。それよりは下回るが、地方圏の方が東京圏郊外部より高卒比率が高い。東京圏郊外部は、専門学校・短大の比率が他より高く、中間的位置を占めている。女性の場合、大卒比率は男性より低い。東京圏郊外部と地方圏はほぼ同水準にあり、東京区部はそれを下回る。男性の大卒に替わるのが専門学校・短大で、東京区部と東京圏郊外部はほぼ同比率である。

図3-3 出身地と学歴 —男性—



出身地と学歴 —女性—



以上をまとめると、壮年期単身者は、年齢の後半期では東京区部出身者が多く、学歴は他の出身者と比べると高卒以下が多い。また、高卒以下は女性より男性の方が多い。対照的に年齢の前半期では地方圏と東京圏郊外部出身者が多く、学歴は大卒以上の高学歴者が多いことが特徴となっている。

3. 就業状況

つぎに、壮年期単身者はどのような職業に従事しているのかを見てみよう。もっとも多いのが正規雇用(41.1%)、つぎが非正規雇用(20.2%)である。また、会社などの経営者・役員(3.3%)、正規雇用の課長職以上の管理職(14.8%)がいる。また、自営業(家族従業者、内職、自由業、フリーランスを含む)(8.9%)、無業(9.1%)という内訳である。男女で比較すると、経営者・役員、正規雇用の管理職以上の比率は男性の方がやや多く、正規雇用、非正規雇用は女性の方が多い。

図3-4は就業上の地位と年齢の関係を示したものである。人数がもっとも多い正規雇用を年齢で見ると若いほど正規雇用の比率が高い。その後経営者・正規雇用の管理職が増え50歳代でピークになっているのは、正規雇用者の一部が年齢とともに管理職に昇進していくからであろう。男性の方が昇進する比率が高いことが反映されている。一方、非正規雇用者の比率はどの年齢でも女性の方が男性を上回っている。年齢による違いを見ると、50歳代前半までは男女共に横ばいであるが、それより上の年齢では非正規雇用の比率が高く、とくに60代前半でもっとも高くなっている。男女ともに、定年退職後に非正規雇用で働いている例が多いことを示している。無業者も60代前半で一気に増加する。

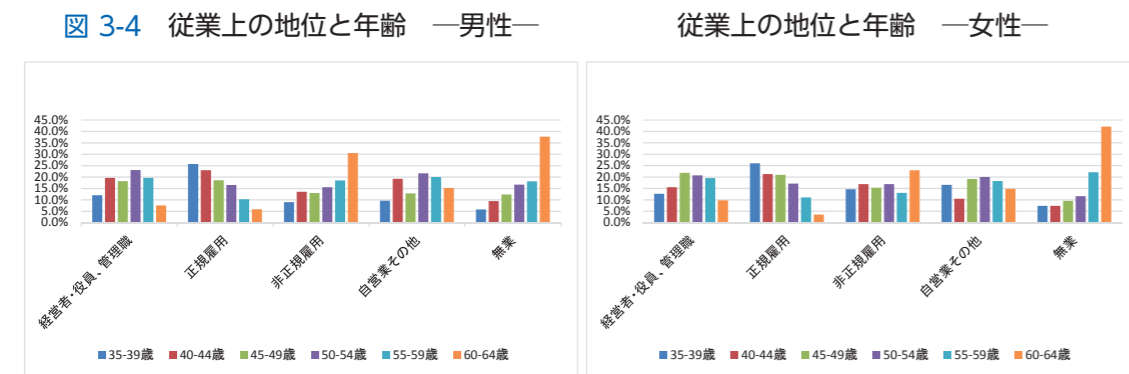


図3-5は、就業上の地位と学歴の関係を示したものである。男性に関しては、どの地位においても大卒以上の比率が高いが、「経営者・役員、管理職」および正規雇用においてその比率が高い。無業と非正規雇用は高校以下の比率がより高い。一方、女性に関しては、専門学校・短大の比率が高い分、男性とはやや異なる傾向がみられる。「経営者・役員、管理職」は大卒以上が際立っている。また、正規雇用、自営業その他においても、大卒以上および専門・短大の比率が高い傾向がみられる。自営業その他の学歴が相対的に高いのは、従

事する女性の多様な職種を反映しているのかもしれない。なお、高卒の傾向を見ると、男性と同様に非正規雇用と無業でその比率が高い傾向がみられる。

図3-5 就業上の地位と学歴 —男性— 就業上の地位と学歴 —女性—

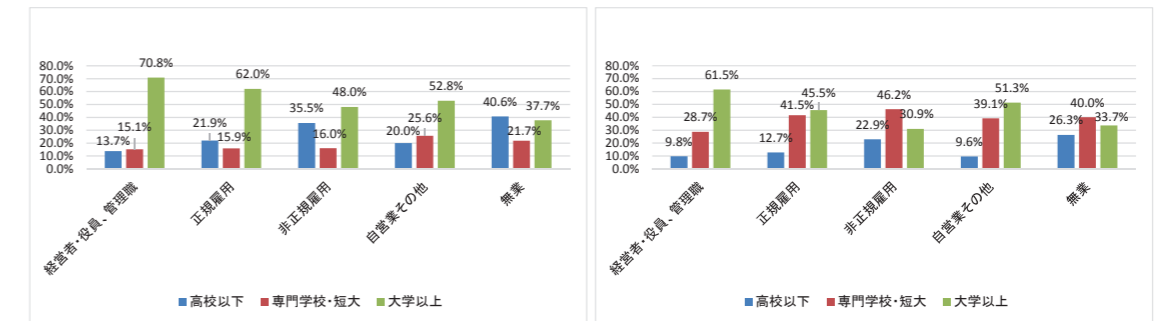


図3-6は、出身地と就業上の地位の関係を示したものである。男性の場合、東京圏郊外部出身者が、経営者・役員、管理職の比率でもっとも高く、正規雇用の比率も高い。地方圏出身者がそれに次ぐ。女性の場合も同様である。これらの特徴は、学歴構成の違いと年齢構成の違いを反映しているものと思われる。

図3-6 出身地と従業上の地位 —男性— 出身地と従業上の地位 —女性—

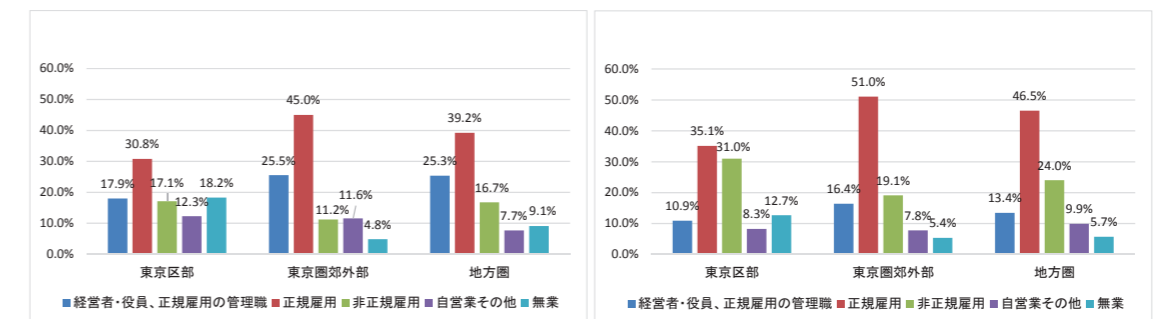
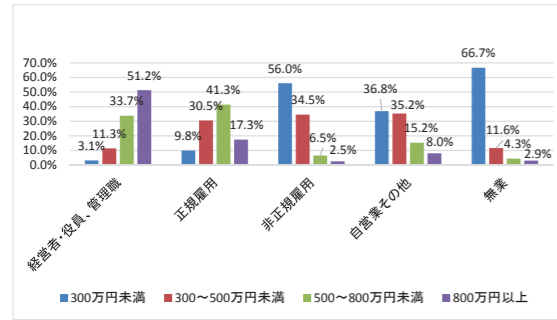
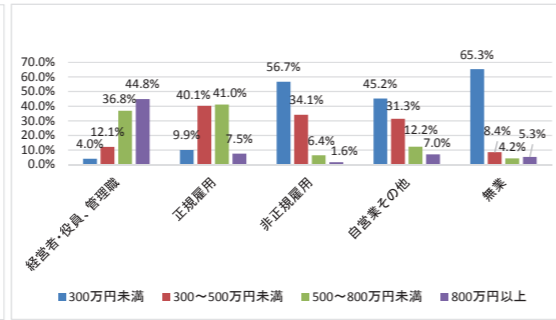


図3-7は、従業上の地位と所得の関係を示したものである。男女共、従業上の地位と所得との関係が明瞭に出ている。無業、非正規雇用、自営業その他で、年収300円未満の低所得者が多い。正規雇用の所得分布は男女で異なり、女性の所得の方が低い。

図 3-7 従業上の地位と所得 —男性—



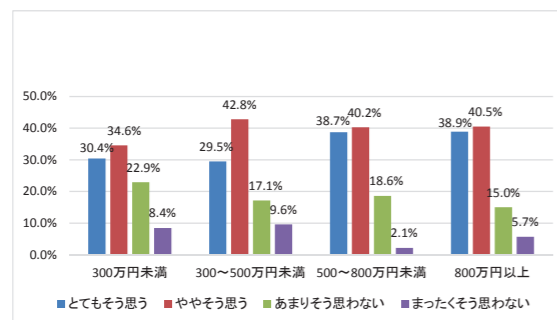
従業上の地位と所得 —女性—



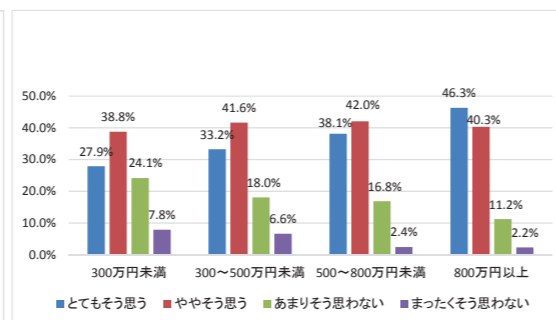
これらの人たちがどのような働き方をしているのかを知るために、「過去1か月間、以下の時間帯や日に働くことがありますか」と聞いている。「午後6時～午後10時」の夜間の就業が60%弱と比率が最も高い。男女差はほとんど見られない。続いて「土曜日に働く」「日曜日・祝日に働く」の順である。若い年齢層の方が長時間労働や変則勤務が多いことを示している。大都市における産業構造が夜型、週末型の勤務を多くしているのであろう。また、調査では、働き方や働くことについてどのように考えているかを4問で聞いている。まず、＜仕事に対する満足＞では、「とても満足」と「やや満足」を合計すると70%弱が満足している。男女別、年齢別で大きな違いは見られない。＜仕事が好きではない＞では、「とても」と「やや」を合計すると約45%がそのように感じている。男女別、年齢別で大きな違いは見られない。つぎに、＜仕事の専門能力を高めたい＞を見ると、「とても」と「やや」を合計して約75%がそのように感じている。男女別では大きな違いは見られないが、年齢別では前半期の方が後半期より望んでいる割合が約10ポイント高い。

図 3-8 は、所得と「仕事の専門能力を高めたい」という意識との関係を示したものである。中所得から高所得では「仕事の専門能力を高めたい」が多く男女で大きな違いは見られない。唯一、年収800万円以上の女性で「とてもそう思う」の比率が高い。

図 3-8 所得と仕事意識
＜仕事の能力を高めたい＞ 男性



所得と仕事意識
＜仕事の能力を高めたい＞ 女性



さいごに、＜管理職やより上の立場をめざしたい＞では、「とても」と「やや」を合計すると約30%が希望している。男女別では大きな違いは見られないが、年齢別では前半期の方が後半期より約17ポイント勝っている。

現在の就業の有無に関係なく、これまでの転職経験についてたずねたところ、転職経験「ある」が約70%である。女性の方が男性よりも転職経験が約10ポイント高い。年齢差はみられない。転職経験者について、これまでの転職回数をたずねたところ、「1回」、「2回」、「3回」までが各20%前後、3回、4回、5回が各10%程度であった。男女別では、男性よりも女性の方が転職回数がやや多い傾向が見られる。

なお、無業者は、約60%が就業を希望していることを付け加えておく。

このように、壮年期単身者は若い年齢層（30歳代後半から40歳代前半）ほど高学歴者が多く、正規雇用や管理職比率が高く、男女差は縮小する傾向がみられる。また女性の場合には、雇用者ではなくさまざまな自由業（本章では「自営業その他」と表記）に従事している傾向も見て取れる。これらの若年層の中心は、東京圏郊外部および地方圏からの転入者である。男女ともに東京圏郊外部出身者の経営者・役員、管理職の比率がもっとも高く、正規雇用の比率も高い。地方圏出身者がそれに次ぐ。女性の場合、東京圏郊外部出身者の正規雇用率や年収が相対的に高いことも特徴である。

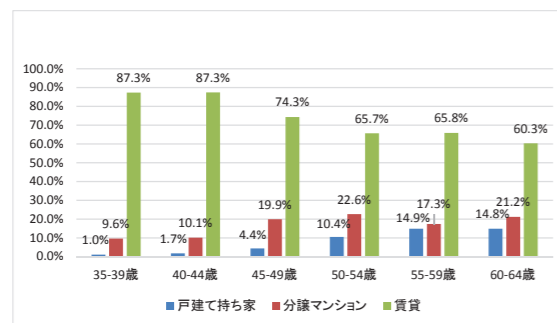
すでに述べたように、就業上の地位に関する研究によれば、男女とも高学歴者は大企業、「専門的・技術的職業」「事務」に就職する傾向がある。女性は男性より非正規雇用が多いが、学歴による差が大きく、高学歴女性ほど正規雇用の比率が高い。グローバル化やサービス経済化にともなって雇用機会は大都市に集中し、高学歴女性の受け皿になっている⁸。本調査において30歳代後半から40歳代前半の年齢層において高学歴者の男女比率が接近しているのはその表れで、この世代以後、高学歴の女性たちが東京圏郊外部、地方圏から東京区部に転入したことを示している。他方で、女性の非正規雇用率は男性よりかなり高く、低所得と連動している。女性内部の格差が大きいことにも注意を払う必要がある。

8 由井義通「東京大都市圏における女性の生活空間」；安井大輔「東京圏における地域格差—産業・就業上の地位・意識」『日本労働研究雑誌』No.718,2020.5

4. 住宅と居住歴

単独居住者はどのような住宅に住んでいるだろうか。その形態を見ると、「賃貸マンション・アパート」(62.1%)が多数を占めている。「分譲マンション・アパート」(21.4%)がそれに次いでいる。床面積で住宅の広さを見ると、「20～30m²未満」(26.4%)「30～40m²未満」(21.3%)が多数を占め、「50～70m²未満」(14.2%)がそれに続いている。男性は女性より「20m²未満」がやや多い。その他には大きな違いはない。このように、単身者の住宅は民間の賃貸住宅が圧倒的に多く、床面積から見て狭小な住宅が多いことがわかる。公営住宅や寮・社宅の割合は極めて少ない。単身者が東京区部で住宅を見つける場合、民間の住宅市場で探すほかはない。未婚の若者に対する住宅などの生活面で支援する顕著な政策は見られない結果といえるだろう⁹。図3-9は、年齢と住宅形態の関係を示している。年齢が若いほど賃貸住宅が多いが、女性の方が、年齢が増すほど「賃貸マンション・アパート」が減り、「分譲マンション・アパート」次いで「戸建て持ち家」が多くなる。

図3-9 年齢と住宅形態 —男性—



年齢と住宅形態 —女性—

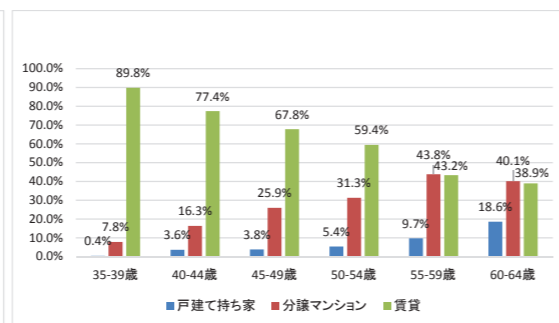
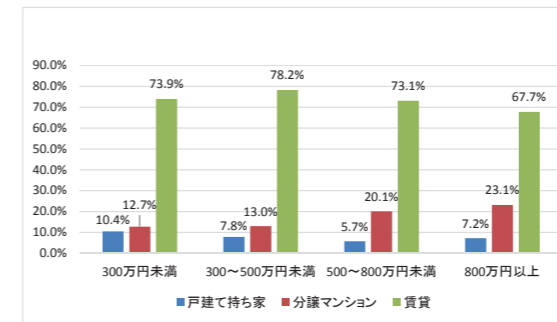
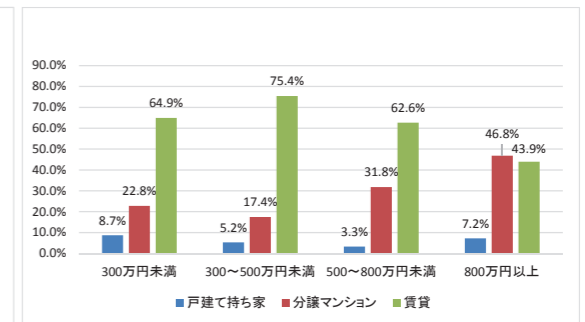


図3-10は、所得と住宅形態の関係を示したものである。男女共に所得が高いほど持ち家が増える傾向はみられるが、女性の方が男性より所得と持ち家率との関係は明確で、年収800万円以上で分譲マンションの比率が際立って高い。

図3-10 所得と住宅形態 —男性—



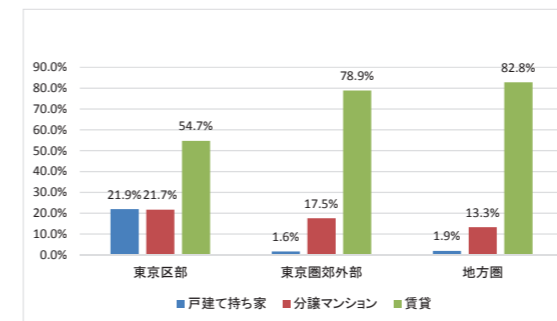
所得と住宅形態 —女性—



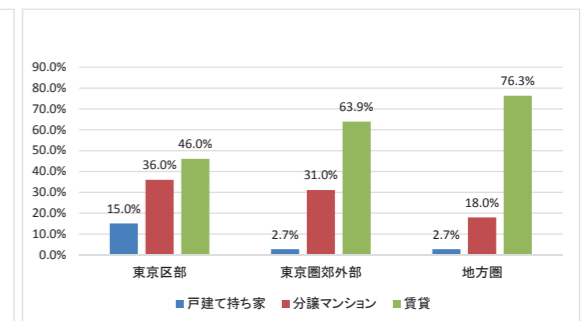
図には示さないが学歴との関係も、とくに男性においてはそれほど明らかではない。全体としては学歴や所得よりも年齢による差の方が大きい。

図3-11は、出身地と住宅形態の関係を示したものである。地方圏出身者の賃貸率が高くて、東京圏外部がそれに次ぎ、戸建て・分譲マンション比率は東京区部出身者がより多いという傾向がみられる。東京区部出身者は年齢層が高いことが反映しているであろう。女性の場合、東京圏外部出身者の分譲マンション比率が高いことは特徴のひとつといえるかもしれない。

図3-11 出身地と住宅形態 —男性—



出身地と住宅形態 —女性—



持ち家率に出身地の差が出るのは親の存在が影響している面もある。たとえば東京区部出身者のなかには親や親族の住宅を利用する例が散見される。その後本人名義に変える例もある。また、東京区部出身者や首都圏外部出身者のように親が通勤可能な場所に住んでいる場合は、親元から通勤している間に住宅購入のための貯金をする例や、一人暮らしをしても頻繁に実家をたずねて物資の援助を受けている例があることがインタビュー調査からわかる。

「墨田区にマンションを買って独立。親から独立したかった。当時の会社に近かったので墨田区を探す。貯金で買った。それほど高くはなかった」(男性)というケースは、親の家に暮らした期間が住宅購入費を蓄える絶好の機会だったことを示している。つまり親が東京区部、または通勤可能な東京圏外部に

9 由井義通「東京大都市圏における女性の生活空間」『日本労働研究雑誌』No.718,2020.5

いる人は、地方圏出身者にはない有利さをもっている。それと比較して地方圏出身者は、親の家を離れて一人暮らしをする際、家賃を払いながら住宅資金を貯めなければならない難しさがある。住宅購入に対する親の援助という点でも、相対的に所得水準が高い東京圏郊外部に親をもつ人の方が有利であろう。ただし、大企業勤務などで賃金や福利厚生（社員寮や住宅貸付）に恵まれた人は、出身地に限らず持ち家取得が可能だったことがインタビュー調査からもうかがわれる。

藤森¹⁰が、単身世帯を二人以上世帯の家計収支と比較した結果によれば、男女共に「家賃・地代」の比率が際立って大きい。2014年の「全国消費実態調査」によれば、35～59歳の単身世帯の「家賃・地代」の比率は男女ともに約14%であるのに対して、二人以上世帯はわずか3.6%である。藤森は単身世帯と二人以上世帯の持ち家率の差が大きい理由として、二人以上世帯では、結婚や出産などによる世帯規模の拡大に合わせて住宅購入を検討する機会があるのに対して、単身世帯ではこのような機会が乏しいことをあげている。その結果として、高齢期になると単身世帯は、年金収入から家賃を捻出することになり、家賃負担が重くのしかかることが懸念されるのである。

では、男性より所得水準が低い傾向にある女性の持ち家率が男性より高いのはなぜだろうか。一人暮らしをする女性にとって、住宅は安全性と深くかかわっている。大都市圏に転入した女性の住宅に関する研究によれば、女性は夜も明るく安全な場所を選好する点で東京区部を求める傾向が男性より強い。山の手地区には木賃ベルトとワンルームマンションが豊富である。ジェンダーマップで見るピンクカラーゲッターとなっている。女性の方が男性より住宅に対する意識が高いのである。また、シングルの生活を続け高齢期を迎えることを想定し、持ち家に住む安心感を求めてマンション購入を決意する女性未婚者が増える傾向は、すでに2000年代初期に指摘されていた¹¹。

安全性以外にも女性の住宅行動には特徴がある。女性の方が持ち家率が高いのは海外の傾向とも一致する。単身者の住宅所有の男女差に関する先行研究によれば、持ち家取得の願望は男女で差がみられる。それは、女性の経済力が高まったことだけが理由ではない¹²。収入だけなら男性の方が全体としては高いからである。調査によれば、単身生活にかかわる社会心理の劇的な変化にかかわっていることが示唆されているという。これまで女性にとって大人になる節

10 藤森克彦『単身急増社会の希望』第3章 日本経済新聞社2017年

11 洋由井吉通「都心居住—シングル女性向けマンションの購入」若林ほか編『シングル女性の都市空間』大明堂2002；「シングル女性のマンション購入とその背景」由井義通・神谷浩夫・若林芳樹・中澤高志編『働く女性の都市空間』古今書店141-166；平山洋介『東京の果てに』NTT出版2009

12 エリック・クライネンバーク『シングルトン』鳥影社2014年

目は結婚だった。しかし、「成人早期の独身女性にとっては、住まいを購入することが人生の段階を移行するための大きなきっかけとなると考える人が、ますます増えている。住宅の購入は自分に対しても周囲に対しても、自分自身に投資する準備が整ったことのあるしなのだ」。対照的に「30歳代から40歳代の単身世帯の男性は、すまいのかたちや住む場所にはあまりこだわらず、大多数は身を落ちつける必要も感じていない」とクライネンバークは指摘している。

持ち家をもつことは老後を見越した資産としても意識されている。インタビュー調査で一人の女性は、「7年半前江東区にマンションを購入。独身なので、将来施設に入る時にはマンションを売ればいいという思いがあった」（大卒50歳）という。また、ある女性は、「最初買った横浜市内の住居が80m²と広かったので（離婚前の住宅）、いったん広いところに住むと狭いのは嫌で、賃貸では広くて値段的に折り合ういい物件がなかったので、横浜の物件は売却して今のマンションを買った。投資目的ではない。が、同時にまた機会があれば売らるだろう（大卒40歳代後半）」。

後段で示すように、一人暮らしを続けようという意思を固める時期が、女性は男性より早い。そのことと持ち家の取得とは密接な関係があると思われる。

5. 経済状態と暮らし向き

つぎに、経済状態を見てみよう。本調査では、年収100万円未満が約5%、100万円台が8%という低所得者の対極に、1000万円以上が約7%いる。その間の、200万円台、300万円台、400万円台、500万円台それぞれが10%を少し超える割合となっている。男女で比較すると、男性の方が女性より分散が大きい。年齢別では、後半期の方が100万円未満、200万円未満の比率がかなり高くなっているが、1000万円以上の比率も後半期の方がやや高く、後半期は所得の分散が大きいといえる。

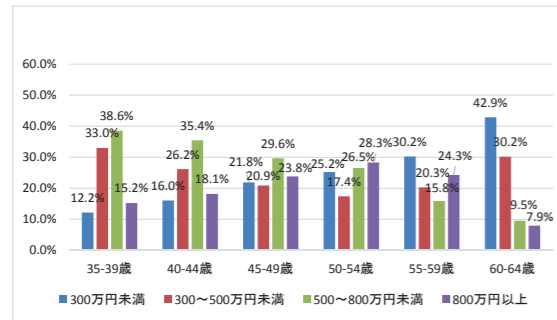
全国で東京都の所得は突出して高い。全国の地域間格差は男性より女性の方が大きい。東京都以外の所得は減少しているため、東京都と他地域の格差は拡大傾向にある。女性について見ると、東京都は300万円未満の所得者が相対的に少なく700万円以上の所得者が多い。その傾向は男性も同じである¹³。

所得に関する調査結果を見ていこう。図3-12は、年齢と所得の関係をみたものである。若い年齢層は中所得者の比率が高い。高所得者の比率は50歳代前半がピークである。300万円未満の低所得者は年齢が上昇するにしたがって増加している。その一方で、年収800万円以上の高所得者もいることから、年

13 田中善行・東雄大・勇上和史「労働市場「東京」の特徴」『日本労働研究雑誌』No.718,2020.5

年齢が高いほど所得格差が大きくなる傾向がうかがわれる。300万円未満の低所得者は60歳代前半がもっとも多いが、女性の55%がそれにあたり男性を大幅に上回っている。

図 3-12 年齢と所得 —男性—



年齢と所得 —女性—

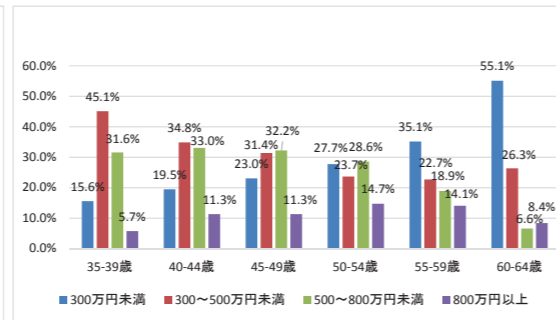
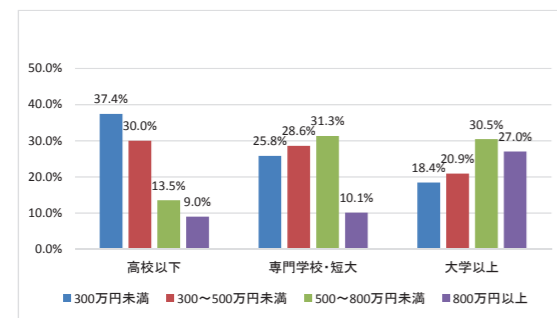


図 3-13 は、学歴と所得の関係を見たものである。男女共に両者の関係は明確で、大学以上は中所得以上が格段に多い。女性は男性以上に高校以下で年収300万円以下が多い。また女性は大卒以上で年収800万円以上が男性より少ない。

図 3-13 学歴と所得 —男性—



学歴と所得 —女性—

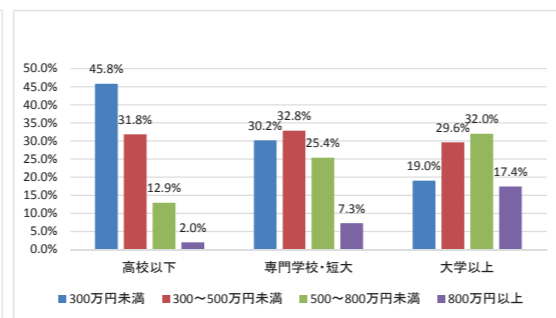
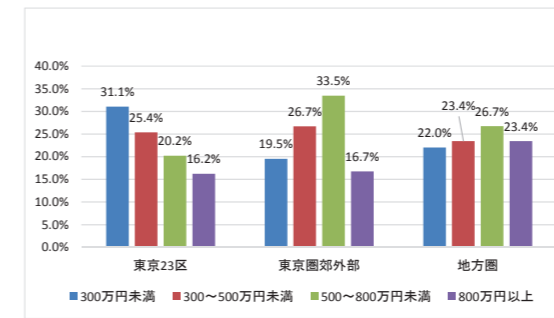
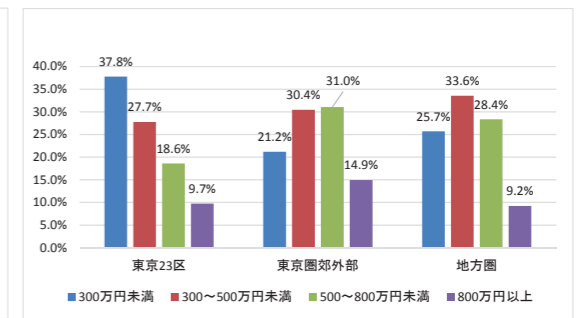


図 3-14 は、出身地と所得の関係を示したものである。男女共に東京区部は低所得層がより多く、その傾向は女性に顕著である。東京圏郊外部と地方圏を比べると、男性の場合は年収800万円以上が地方圏により多く、女性の場合は東京圏郊外部により多い。また、地方圏出身の女性は所得の低い方により多い傾向がみられる。これは図 3-3 の出身地と学歴で見たように、高卒以下がやや多いことによるものと思われる。

図 3-14 出身地と所得 —男性—



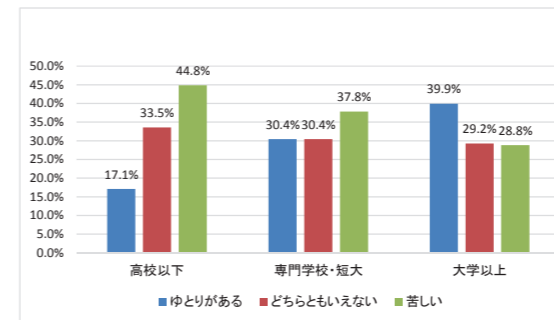
出身地と所得 —女性—



経済生活を所得で見てきたが、調査では暮らし向きについても聞いている。現在の暮らし向きは「大変ゆとりがある」が4~5%、「ややゆとりがある」が20%台後半から30%、「どちらともいえない」が30%台前半、「やや苦しい」が約20%、「大変苦しい」が9~12%程度で、男女別年齢別いずれも大きな違いは見られない。ただし、年齢が後半期の方が前半期と比べて「ややゆとりがある」が約27%と、前半期と比べて約5ポイント低い。

図 3-15 は、学歴と暮らしむきの関係を示したものである。所得とは異なって暮らし向きにはいろいろな要素が入るものと思われるが、大卒以上者の4割以上は「ゆとりがある」で、「苦しい」は2割の後半である。一方、高卒以下の4割強は「苦しい」という状態で、「ゆとりがある」は2割前後である。このように学歴による差は大きい。男女で見ると、大卒以上の場合、女性の方が男性より「ゆとりがある」が多く、「苦しい」が男性より少ない。高卒以下の場合には、「苦しい」とする比率は45%で男女に差がないが、「ゆとりがある」は20%前後で大卒以上者の場合と同じく男性より女性の方が多い。

図 3-15 学歴と暮らし向き —男性—



学歴と暮らし向き —女性—

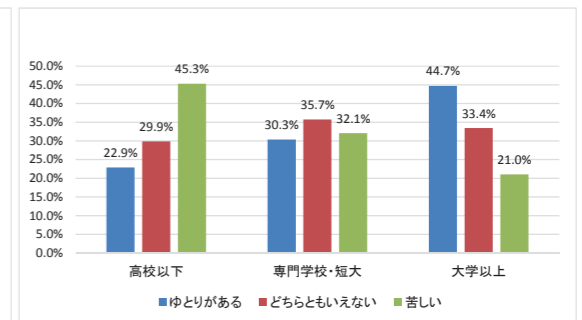
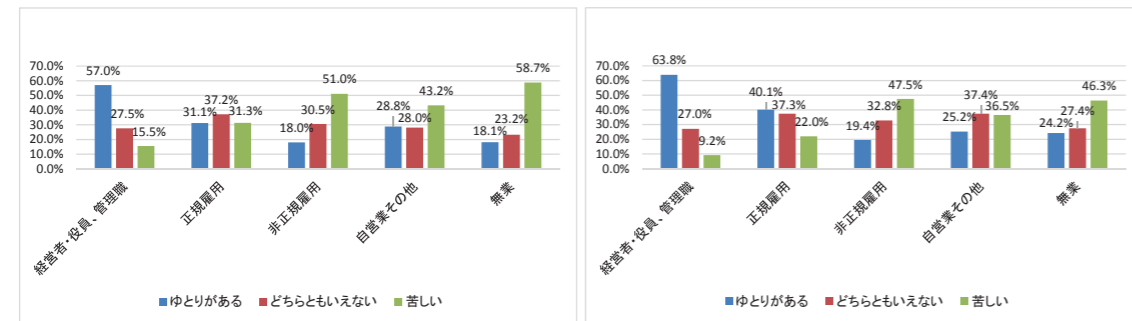


図 3-16 は、従業上の地位と暮らしむきの関係を示したものである。所得で見た場合とほぼ同様で、男女共に「経営者・役員、管理職」はゆとりのある暮らし向きとなっている。女性は、正規雇用者も同様である。無業と非正規雇用

は男女共に「苦しい」が多い。無業の男性の「苦しい」は58.7%で、女性の場合よりかなり比率が高い。

図 3-16 従業上の地位と暮らし向き —男性— 従業上の地位と暮らし向き —女性—



暮らし向きを規定する要因を把握するために重回帰分析をおこなった結果が表 3-1 である。

表 3-1 暮らし向きと属性：重回帰分析

	B	標準化 係数β	
女性ダミー	.259	.120	***
中学卒業時の居住地 (参照：23区)			
東京圏郊外部	-.102	-.040	+
地方圏	-.168	-.078	***
年齢 (参照：35-44歳)			
45-54歳	-.019	-.009	
55-64歳	.080	.033	
学歴 (参照：中・高)			
専門学校・短大	.095	.040	+
大学以上	.212	.099	***
職業 (参照：正規雇用)			
経営者・役員、正規管理職	.147	.054	*
非正規雇用	-.041	-.016	
自営業その他	.055	.015	
無業	.021	.005	
年収 (参照：300万円未満)			
300～500万円未満	.521	.221	***
500～800万円未満	1.027	.427	***
800万円以上	1.468	.502	***
定数	2.093		***
調整R2		.274	***
度数 (n)		(2,387)	

(+ P<.10, * P<.05, ** P<.01, *** P<.001)

暮らし向きを被説明変数とし、それを説明する変数として、出身地、年齢、学歴、職業、年収の5つを用いた。有意水準5%未満で影響があるものを列挙していくと、男性より女性が、学歴が高校以下より大学以上が、職業が正規雇用より経営者・役員、正規管理職が、年収300万円より300万円以上の階層が、暮らし向きがより良いという傾向がある。また、地方圏出身より東京区部出身も暮らし向きを高め、東京圏郊外部出身に関しても東京区部よりやや暮らし向きがより良いという傾向がある。

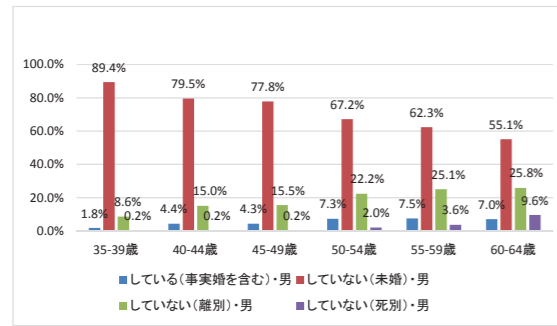
女性の暮らし向きが男性より高いことは、女性の所得水準が男性より低いという実態に反している。女性の方が暮らし向きに高い評価を与えている背後に、男女のライフスタイルの違いが投影している可能性がある。単身者にとって住宅費支出と並んで多い支出は、単身男性の外出費で、その比率は二人以上世帯の2倍以上である。一方、35～59歳の単身女性の外出費（飲酒を含む）はそれより相当低い水準にある。自炊をしている比率が高いからで、われわれの調査でも女性は自炊している傾向があることを把握できた。また、男性より女性の方が「ゆとりがある」とする比率が高いのは、相対的に所得水準の低い女性集団を参照して自分を評価しているために、男性より自分の暮らし向きをより高く評価する傾向があるのではなかろうか。

6. 結婚の状態と結婚していない理由

つぎに、結婚に関する状態を見てみよう。離別、死別を経験している人が2割ほどいる。また、一人暮らしだが「結婚している」（事実婚を含む）人が5%ほどいて、男性の方が女性より多い。「離別」「死別」は女性の方がやや多い。

図 3-17 は、年齢と結婚の状態との関係を示したものである。全体としては「結婚していない（未婚）」が圧倒的に多いが、未婚者は若い年齢層ほど多く、年齢が上になるほど未婚の比率が低下し、離別の比率が高まる。50歳代以上では離別の比率が2割台である。死別の比率は低い。男女で差はない。

図 3-17 年齢と結婚の状態 —男性—



年齢と結婚の状態 —女性—

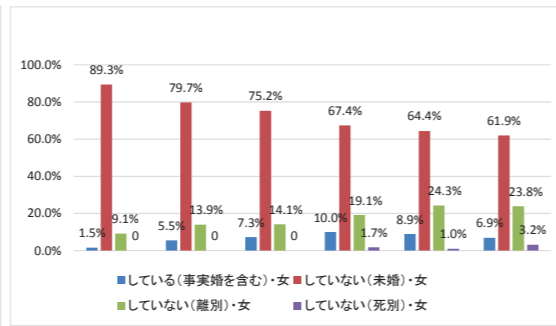
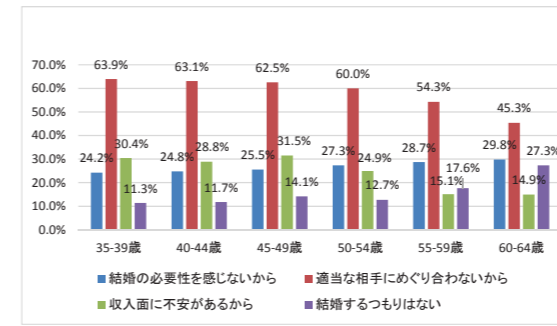


図 3-19 年齢と結婚していない理由 —男性—



年齢と結婚していない理由 —女性—

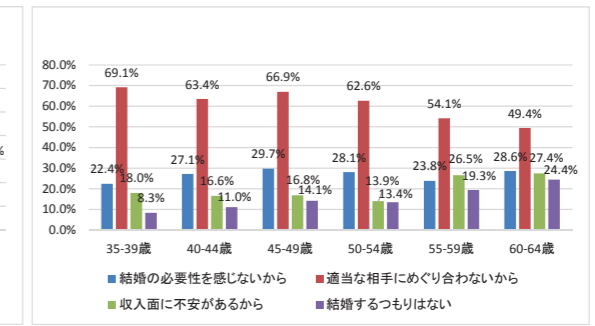
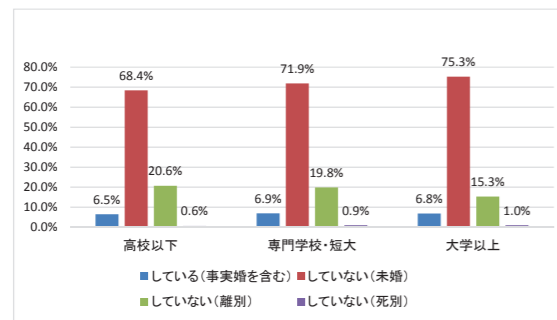
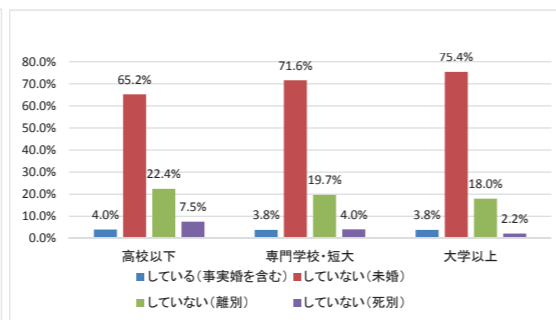


図 3-18 は学歴と結婚の状態との関係を示したものである。未婚者は男女共に大卒以上者に多い傾向がみられる。一方、離婚経験者は大卒以上者でやや少ない。これらの傾向は年齢による差も反映しているだろう。

図 3-18 学歴と結婚状態 —男性—



学歴と結婚状態 —女性—



結婚していない理由（複数回答）を見ると、「適切な相手にめぐり合わない」が6割と最も多く、次が「必要性を感じない」で3割弱であった。「結婚するつもりがない」は4.8%と少ない。「収入面に不安があるから」は、男性（28.2%）が女性（4.3%）より圧倒的に多く、また、「うまくつきあえない」も男性（18.5%）に多い（女性：0.7%）。女性は結婚していない理由として「自由に使える時間が減る」「必要性を感じない」という回答が男性よりやや多い。

図 3-19 は、年齢と結婚していない理由（主な理由）の関係を示したものである。もっとも多い「適切な相手にめぐりあわないから」は、30歳代後半から40歳代後半で60%台だが、50歳代以上では年齢が増すほど減少している。つぎに多いのは「収入面に不安があるから」で40歳代以上の年齢の男性に多くほぼ3割の比率を占めている。これに続くのは、「結婚の必要性を感じないから」で40歳代以上はほぼ同じ比率である。30～40歳代の男性は女性よりやや多い傾向にある。

「その他」と回答し、自由記載をした人の中では、「親の介護」「本人の健康状態」を挙げる人が多い。「同性とパートナー関係にあり、結婚が認められていないので」という回答もみられる。

結婚していない理由に「適切な相手にめぐり合わない」をあげた人はどのような属性と関係があるのかを二項ロジスティック回帰分析でみたのが表 3-2 (1)である。「適切な相手にめぐり合わない」を被説明変数とし、それを説明する変数として、表 3-1 と同様の説明変数を用いた。有意水準5%未満で影響があるものを列挙していくと、「適切な人にめぐり合わない」をあげる傾向は、東京区部出身より地方圏出身で、高校以下の学歴より大学以上で強い。専門学校・短大もややその傾向が見受けられる（10%水準有意傾向）。また、55～64歳より35～44歳で、無業より正規雇用で強い。非正規雇用でもややその傾向が見受けられる（10%水準有意傾向）。ただし、表の下に記載してある疑似決定係数（疑似R²）は低い値となっており、これらの説明変数で結婚していない理由（適切な相手にめぐり合わないから）を説明できているとはいえない。「適切な人にめぐり合えない」には、これらの傾向だけでは説明できない多様性があるのだろう。

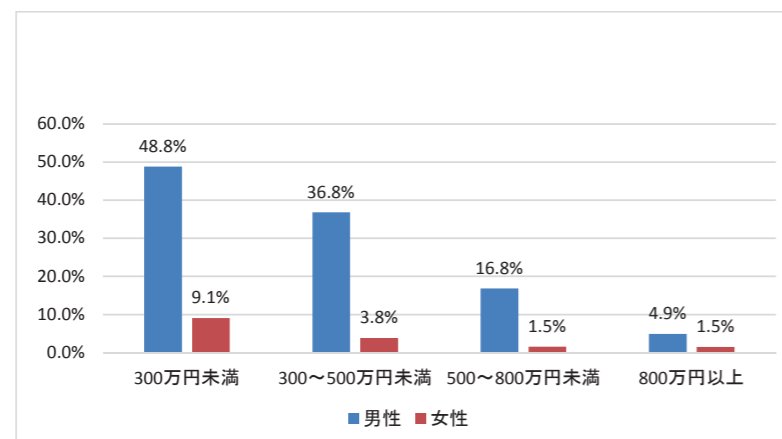
第1章 1
2
第2章 1
2
3
4
5
6
第3章 1
2
3
4
5
6
7
8
9
第4章 1
2
3
4
5
6
7
8
9
第5章 1
2
3
4
5
第6章 1
2
3
4
5
6
7
8
第7章 1
2
3
4
5
6

表 3-2(1) 結婚していない理由と属性：二項ロジスティック分析<適当な相手にめぐり合わないから>

	B	Exp(B)
女性ダミー	.117	1.124
中学卒業時の居住地 (参照：23区)		
東京圏郊外部	.176	1.193
地方圏	.248	1.281 *
年齢 (参照：35-44歳)		
45-54歳	.033	1.033
55-64歳	-.376	.687 ** *
学歴 (参照：中・高)		
専門学校・短大	.234	1.264 +
大学以上	.283	1.328 *
職業 (参照：正規雇用)		
経営者・役員、正規管理職	.093	1.097
非正規雇用	-.226	.798 +
自営業その他	-.256	.774
無業	-.489	.613 *
年収 (参照：300万円未満)		
300～500万円未満	.180	1.197
500～800万円未満	.153	1.166
800万円以上	.063	1.065
定数	.166	1.181
Narelkerke R ²		.047
モデルχ ²		78.161 ** *
分析 (n)		(2,245)

(+P<.10、* P<.05、** P<.01、*** P<.001)

図 3-20 は、所得と「収入面に不安があるから」との関係性を年齢別、男女別に示したものである。低所得の男性にその傾向が顕著で、所得が上がるにしたがって減少している。一方、女性にはその傾向はほとんどみられない。就業上の地位との関係性をみたところ、どの就業上の地位においてもこの理由をあげるのは男性に圧倒的に多く、非正規雇用と無職に多い。女性にはこの傾向はみられない。

図 3-20 所得と結婚していない理由
<収入面に不安があるから> (複数回答)

結婚していない理由に「収入に不安があるから」をあげた人はどのような属性と関係があるのかを二項ロジスティック回帰分析でみたのが表 3-2(2)である。「収入に不安があるから」を被説明変数とし、それを説明する変数として、表 3-1 と同様の説明変数を用いた。有意水準 5% 未満で影響があるものを列挙していくと、「収入に不安があるから」を結婚していない理由にあげるのは、女性より男性で、55～64歳より 35～44歳で、年収300万円以上のすべての所得階層より年収300万円未満にみられる傾向である。学歴が大卒以上より高校以下、経営・管理、正規管理職より正規雇用でもややその傾向がみられる (10% 水準有意傾向)。

表 3-2(2) 結婚していない理由と属性
<収入面に不安があるから>

	B	Exp(B)
女性ダミー	-2.565	.077 ** *
中学卒業時の居住地 (参照：23区)		
東京圏郊外部	.126	1.134
地方圏	.203	1.225
年齢 (参照：35-44歳)		
45-54歳	-.235	.791
55-64歳	-.722	.486 ** *
学歴 (参照：中・高)		
専門学校・短大	-.114	.893
大学以上	-.322	.725 +
職業 (参照：正規雇用)		
経営者・役員、正規管理職	-.432	.649 +
非正規雇用	.048	1.049
自営業その他	-.107	.898
無業	-.313	.731
年収 (参照：300万円未満)		
300～500万円未満	-.789	.454 ** *
500～800万円未満	-1.803	.165 ** *
800万円以上	-2.791	.061 ** *
定数	.594	1.811 *
Narelkerke R ²		.332
モデルχ ²		438.165 ** *
分析 (n)		(2,245)

(+P<.10、* P<.05、** P<.01、*** P<.001)

結婚していない理由に「仕事が忙しい」をあげた人についても同様にみたのが表 3-2(3)である。「仕事が忙しい」を被説明変数とし、それを説明する変数として、表 3-1 と同様の説明変数を用いた。有意水準 5% 未満で影響があるものを列挙していくと、男性より女性で、正規雇用より自営業その他で、無業より正規雇用で、年収300万円未満より800万円以上でみられる傾向である。500～800万円未満でもややその傾向がみられる (10% 水準有意傾向)。また、

45～54歳より35～44歳でも、ややその傾向がみられる。ただし、表の下に記載してある疑似決定係数（疑似 R^2 ）は低い値となっており、これらの説明変数で結婚していない理由（仕事が忙しい、仕事を優先したいから）を説明できているとはいえない。「仕事が忙しい」には、これらの傾向だけでは説明できない多様性があるのだろう。ただし、高所得者は仕事を優先する傾向があり、女性は結婚が仕事の障害になると感じる傾向がある。

表 3-2(3) 結婚していない理由と属性
＜仕事が忙しい、仕事を優先したいから＞

	B	Exp(B)
女性ダミー	.406	1.501 **
中学卒業時の居住地（参照：23区）		
東京圏郊外部	.208	1.231
地方圏	.196	1.216
年齢（参照：35-44歳）		
45-54歳	-.291	.748 +
55-64歳	-.137	.872
学歴（参照：中・高）		
専門学校・短大	-.237	.789
大学以上	-.090	.914
職業（参照：正規雇用）		
経営者・役員、正規管理職	.228	1.256
非正規雇用	-.323	.724
自営業その他	.775	2.170 ***
無業	-1.825	.161 **
年収（参照：300万円未満）		
300～500万円未満	.178	1.195
500～800万円未満	.425	1.530 +
800万円以上	.895	2.447 ***
定数	-2.422	.089 ***
Narelkerke R^2		.075
モデル χ^2		91.042 ***
分析(n)		(2,245)

(+P<.10、* P<.05、** P<.01、*** P<.001)

なお、「結婚する気はない」は少ない。また、インタビュー調査を見ると、「結婚する気はない」と言うのは男女2名だけで、大半は、適当な人にめぐり会えないために独身でいると答えている。ずっと結婚をしないままでよいとする人は年齢が上がるにしたがって減っている。男女ともに経済的理由と心身の不安から「できれば結婚したい」と思う人が増える傾向がみえる。

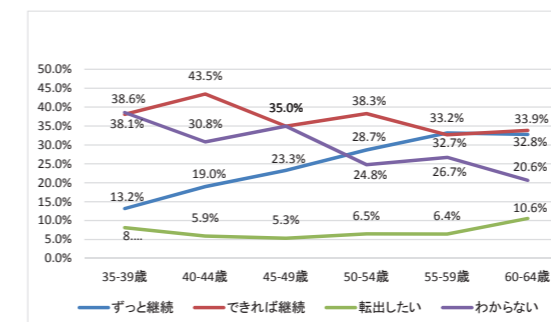
同じくインタビュー調査のなかの女性に限って見ると、高卒者、非正規雇用者で「結婚したかった」「結婚したい」人は少ない。50歳に近づくと将来のくらしに不安を感じ、「結婚」によって将来の安定を得たい思いが強まる人が少なくないと見受けられる。とはいっても積極的に相手を探そうとしている

わけでないことも事実である。

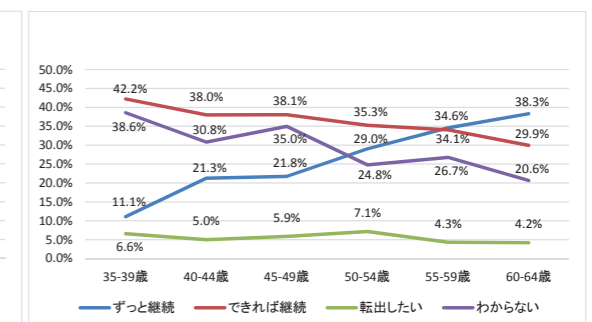
7. 居住継続意向・一人暮らし継続意向・高齢期の経済的備え

アンケート調査では、「あなたは、これからも現在お住まいの区に住み続けたいですか」と聞いている。したがって、別の区への移動の可能性がある人には該当しない設問となっているが、ここでは居住継続意向と呼ぶことにする。「転出したい」はどの年齢でも1割を切っている。「できれば住み続けたい」がもっとも多く、「住み続けたい」と合わせると居住継続意向はかなり強いといえるだろう。図 3-21 は、年齢と居住継続意向との関係を示したものである。視覚的に理解しやすいので、ここでは帯グラフではなく折線グラフで表示した。「ずっと住み続けたい」は年齢が高いほど多く、定住を希望する傾向が強まるといえるだろう。なお、数は少ないが60代の男性で転出したい人がやや増加する。

図 3-21 年齢と居住継続意向 —男性—



年齢と居住継続意向 —女性—



つぎに、「あなたは、今後も一人暮らしを続けたいと思いますか」という問いで一人暮らし継続意向をみた。図 3-22 は、年齢と一人暮らし継続意向の関係を示したものである。男性は「わからない」がもっとも多く、その比率は40歳代後半から50歳代でもっと高いが、同年代の女性は「続けたい」が男性より多く、「わからない」と「続けたい」がほぼ拮抗している。一方、「続けたくない」は30歳代後半でもっとも高く、その後減少する。全体として、女性の方が一人暮らしを続けることを早いうちに受容する比率が高いのに比して、男性は50歳代まで「続けたくない」とする比率が高い。

図 3-22 年齢と一人暮らし継続意向 —男性— 年齢と一人暮らし継続意向 —女性—

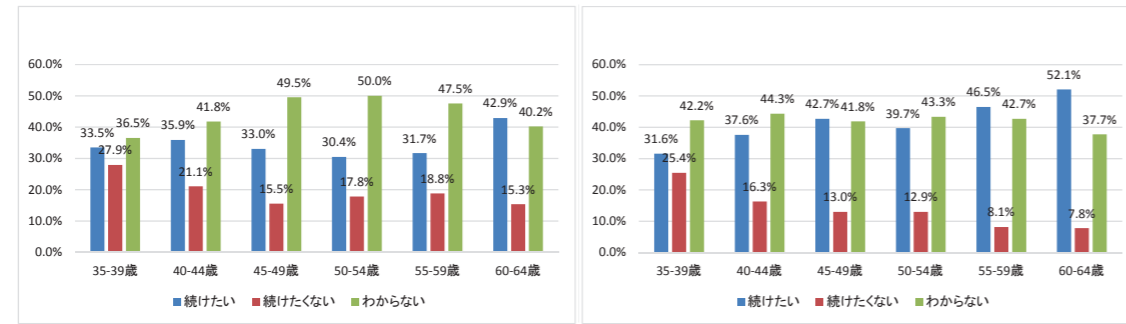
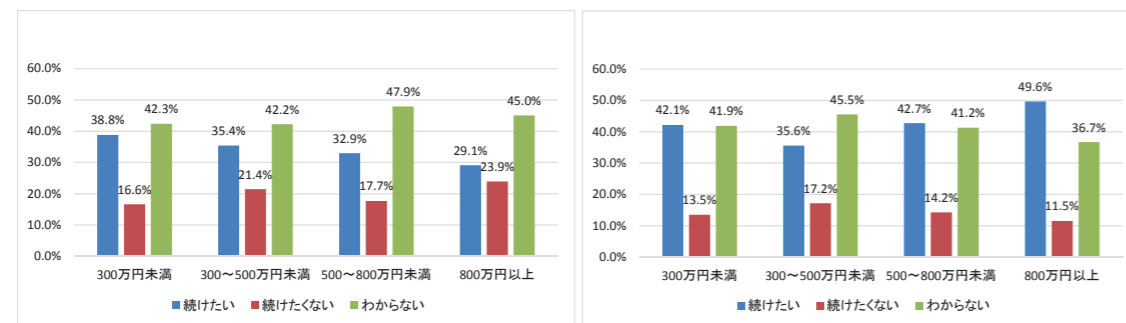


図 3-23 は、所得と一人暮らし継続意向の関係を示したものである。男性の方が女性より「一人暮らしを続けたい」は少ない傾向にあることはすでに見た通りだが、この図でみると男性は所得が高いほど「続けたい」という比率が低く、「続けたくない」が高い傾向がみられる。女性はどの所得層でも「続けたい」とする比率が男性より高いが、その傾向は800万円以上の高所得層でもっとも強い。

図 3-23 所得と一人暮らし継続意向 —男性— 所得と一人暮らし継続意向 —女性—



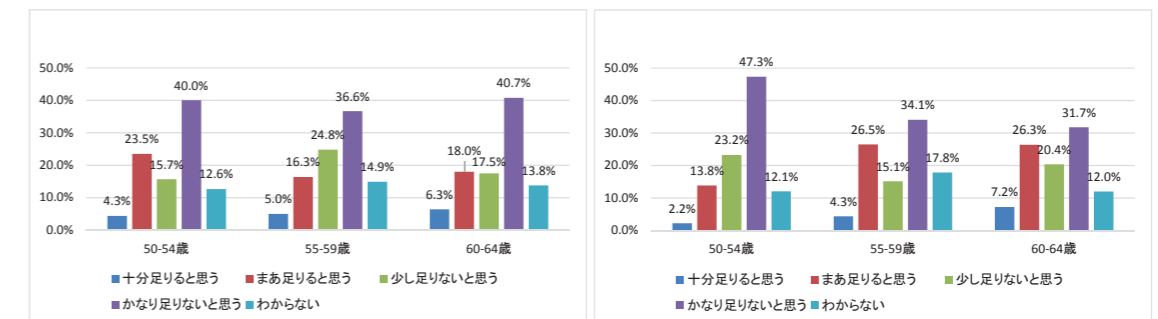
このように、一人暮らし継続意向は男女による差が大きい。女性の場合は30歳代から40歳代前半までは「わからない」が多いが、その時期を過ぎると一人暮らしを続ける意識が固まっていくのだろう。一方男性の場合は意思が定まらないままの状態が続き、60代前半に入ってようやく一人暮らしを続ける「覚悟」または「あきらめ」ができるのではなかろうか。

壮年期後半は高齢期の準備の時期でもある。先行研究によれば、壮年期までの単身世帯は、二人以上世帯よりも所得や資産で恵まれた状態にあるが、高齢期になると二人以上世帯よりも悪化することが示されていた。本調査が対象とした単身者の所得の分散は大きいことからして、高齢期の準備には格差が大きいはずである。そのことが現実味を帯びる50歳代以後における高齢期の経済的備えについて見てみると、「十分足りると思う」4.8%、「まあ足りると思う」

20.5%、「少し足りないと思う」19.5%、「かなり足りないと思う」38.8%、「わからない」13.8%である。6割弱の人が「足りないと思う」と感じていることになる。

図 3-24 は、年齢と高齢期の経済的備えの関係を示したものである。男性は、年齢による差がそれほどなく、60歳代前半で約4割が「かなり足りない」としている。一方女性の方は年齢が増すにしたがって「かなり足りない」は減少し、「まあ足りる」が増加している。先に示した図 3-12 の「年齢と所得」で見たように、50歳以上の女性の所得水準は男性より低い。とくに年収300万円未満の割合がかなり高い。その一方で、表 3-1 の「暮らし向きと属性：重回帰分析」で示したように、＜女性であること＞＜大学以上の学歴：基準は高校以下＞＜職業が経営者・役員、正規管理職：基準は正規雇用＞＜年収が高いこと：基準は300万円未満＞は、暮らし向きを高めている。女性の方が一人暮らしを続ける覚悟が男性より早くに固まり、高齢期の準備をしていることがここに反映している。とはいえ、60歳代前半の男女の3割から4割が「かなり足りない」状態であることは、高齢期の不安定な単身生活を予想させるものといえるだろう。

図 3-24 年齢と高齢期の経済的備え —男性— 年齢と高齢期の経済的備え —女性—

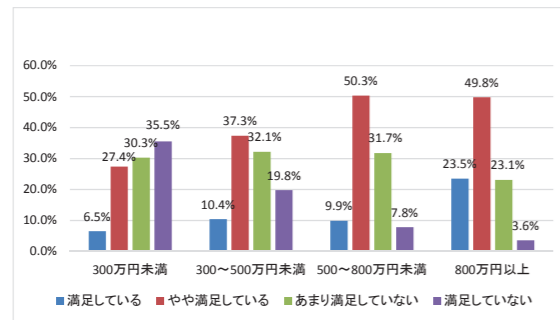


8. 生活満足度

さいごに、現在のくらしに満足しているかどうかを見てみよう。「満足」(「満足」と「やや満足」の合計)は約55%である。男女別では、男性が約50%、女性が約60%と、女性の方が満足度が約10ポイント高い。年齢別ではあまり大きな差は見られない。出身地でも大きな差は見られない。図 3-25 は、所得と満足度の関係を示したものである。高所得になるほど満足度は高いが、男女で比較すると女性は所得が低くても男性より満足度は高めである。図 3-26 は、学歴と満足度の関係を示したものである。高学歴者ほど満足度は高い。しかし所得の場合と同じく、どの学歴においても女性の方が満足度は高めである。図

3-27は従業上の地位と満足度の関係を示したものである。経営者・役員、管理職の満足度は高く、正規雇用がそれに次いでいる。逆に、無業の男性の満足度は際立って低いが、女性にはその傾向がみられない。

図 3-25 所得と生活満足度 —男性—



所得と生活満足度 —女性—

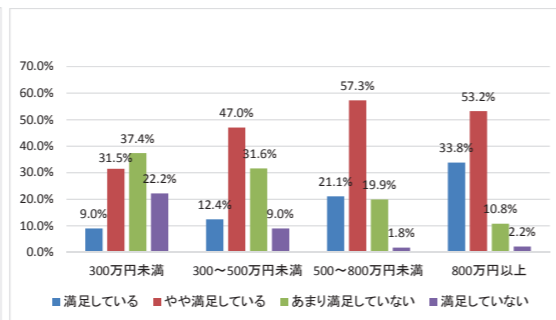
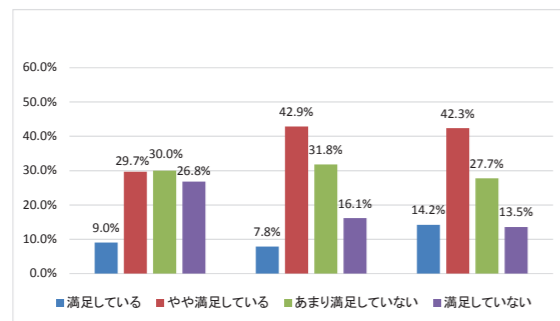


図 3-26 学歴と生活満足度 —男性—



学歴と生活満足度 —女性—

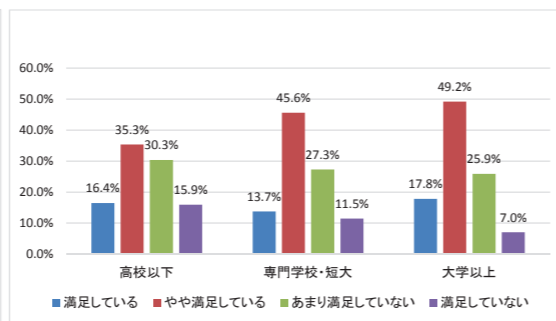
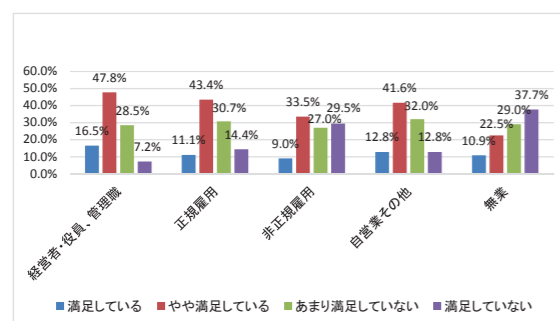


図 3-27 従業上の地位と生活満足度 —男性—



従業上の地位と生活満足度 —女性—

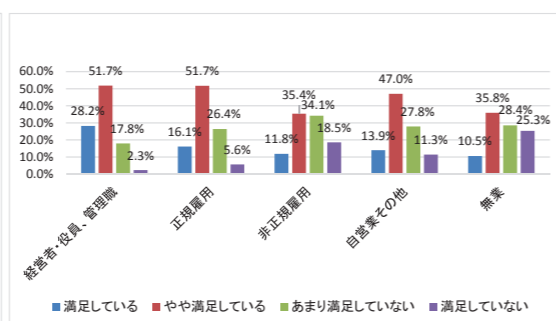


表 3-3は、生活満足度を従属変数とする重回帰分析の結果である。「生活満足度」を被説明変数とし、それを説明する変数として、表 3-1と同様の説明変数を用いた。有意水準5%未満で影響があるものを列挙していくと、男性より女性で、35~44歳より55~64歳で、高校以下より大卒以上で、正規雇用より自営業その他で、年収300万円未満より300万円以上の所得階層で生活満足度は高い傾向にある。また、東京圏郊外部出身や地方圏出身より東京区部出

身で生活満足度は高い。これら説明変数がどのような回路をたどって生活満足度を規定するのかを理解するには、本章で扱った社会経済指標だけでなく、次章で扱う休日の過ごし方にみられる単身者のライフスタイルやソーシャルネットワークなどを取り込んだ総合的な理解が必要だろう。

表 3-3 生活満足度と属性：重回帰分析

	B	標準化係数β
女性ダミー	.285	.160 ***
中学卒業時の居住地 (参照：23区)		
東京圏郊外部	-.124	-.059 *
地方圏	-.170	-.095 ***
年齢 (参照：35-44歳)		
45-54歳	-.001	-.001
55-64歳	.119	.060 *
学歴 (参照：中・高)		
専門学校・短大	.052	.026
大学以上	.108	.061 *
職業 (参照：正規雇用)		
経営者・役員、正規管理職	.027	.012
非正規雇用	-.040	-.018
自営業その他	.163	.053 *
無業	-.095	-.029
年収 (参照：300万円未満)		
300~500万円未満	.350	.179 ***
500~800万円未満	.649	.325 ***
800万円以上	.865	.356 ***
定数	2.026	***
調整R2		.147 ***
度数 (n)		(2,390)

(+P<.10、* P<.05、** P<.01、*** P<.001)

9. 結論

(1) 全体像

分析からわかったことをまとめてみよう。

壮年期単身者は、1990年代半ば以降に東京圏に転入した人々が多く、年齢が若いほど地方圏や東京圏郊外部からの転入者であった。高等教育出身者は6割で、若い年齢層ほど大卒以上の高学歴者が多い。東京圏郊外部出身者の学歴がもっとも高く、地方圏出身者がそれに続く。男女の教育格差は若いほど小さくなっているがそれでも差はかなりある。男性の場合、どの年齢層でも大卒者の比率が高いが、とくに30歳代後半から40歳代前半で大卒以上が6割強と多

く、団塊ジュニア世代の後で高学歴化が一気に進んだことを示している。女性の場合、40歳代後半以上の年齢層では大卒以上の高学歴者は男性よりかなり少ない。それを補完するのが専門学校・短大である。しかし、それより若い年齢層では男女差が小さくなっている。

職業でもっとも多いのは正規雇用の4割、つぎが非正規雇用の2割である。また、会社などの経営者・役員、正規雇用の課長職以上の管理職が2割弱である。夜間や週末に働く人がとくに若い年齢層に多く、男女の差がないことは大都市単身者の働き方の特徴といえるだろう。仕事に対する満足度は高く、男女別、年齢別で大きな違いは見られない。「仕事の専門能力を高めたい」という比率も75%と高く男女で大きなちがいはない。「仕事がきびしい」と感じているのは約45%で、男女別、年齢別で大きな違いは見られない。このように単身者の職業意識は高く、男女や年齢による差がないのは重要な特徴といえるだろう。グローバル化とサービス経済化にともなって雇用機会が東京に集中し、高学歴者の需要が高まったことが東京区部の外から若い単身者を吸引したことが示されている。

(2) 所得格差と低所得者

所得格差は、学歴、従業上の地位、男女でかなり大きい。男性の場合、大卒以上者の4割以上が暮らしに「ゆとりがある」と答え、「苦しい」は2割台である。一方、高卒以下の者の4割強は「苦しい」と答え、「ゆとりがある」は2割前後である。東京区部への転入者が増加したのはバブル崩壊以後であり、その後のリーマンショックを経て、デフレ経済と雇用不安定の時期が長く続いた。壮年期単身者の経済状態は全体として決して良いとはいえず格差も大きい。そのことが未婚者増加の一因となったものと思われる。

壮年期単身者の所得は格差が大きい。年収300万円未満の低所得者は、年齢が上がるのに比例して増加し、60歳代前半では男性で4割、女性で5割半ばに達している。このような状況が結婚していない理由につながっている。40歳以上の男性の3割は、結婚していない理由として「収入面に不安があるから」をあげている。この理由は明らかに所得水準と関係していて、年収300万円未満層では約5割、300～500万円層で4割弱に達している。ところが女性のなかで結婚していない理由に収入の不足をあげる例は少ない。ここには社会規範としての性役割の違いが投影されているといえるだろう。男性にとって結婚することは経済的役割を担うことと認識され、結婚可能性は経済力と深く結びついている。それとは対照的に女性が結婚において経済的役割を感じることは少ない。それにもかかわらず、結婚は同一階層内の男女間で成立しているという

現実に規定されて、女性も結婚相手に出会えない状態になっている。

(3) 男女差が大きい暮らしの意識

女性の所得水準は男性より低い。それにもかかわらず、暮らし向きに関する評価が男性より高いのはなぜだろうか。いくつかの理由が想定できる。第一に、男女のライフスタイルの違いが暮らし向きに投影している可能性がある。単身者にとって住宅費支出と並んで多い支出は、単身男性の外出費で、その比率は二人以上世帯の2倍以上である。自炊をしない比率が高いからで女性との差が大きい。第二に、女性は、一人暮らしを続けるための計画性や生活防衛意識が男性より高く、生活管理能力の点で女性の方が勝っていることが表れているだろう。第三に、男性は、経済力(稼ぐ力)で自己評価する傾向が強いため、暮らし向きへの自己評価が厳しいのだろう。その際、女性より高い男性の所得分布のなかに身を置いて自己評価していることもマイナスの自己評価をもたらしているのではなかろうか。

一人暮らし継続意向も男女差が大きい。女性は年齢があがるにつれ「今後も一人暮らしを続けたい」と答える人が増え、住宅や社会関係づくりによって一人暮らしの環境を整える傾向があるが、男性は50歳代まで「わからない」が多く、「一人暮らし」を受け入れるような気配がみえない。「わからない」は所得が高いほど多く、「続けたくない」も女性のように減少しない。無意識的にも結婚して家庭をもちたいという願望のある男性が、結婚できない状態にある。結婚が個人の選択に任される時代となり、とくに大都市の環境がその傾向を助長する。自由という恩恵であるとともに、家庭をもてるかどうかは自己責任の問題として放置される。

男性の暮らし満足度が女性より顕著に低いのは、単身生活を豊かに暮らすという点で大きな欠落があるからではなかろうか。第4章で明らかにされた通り、社会関係の上で男性は女性より著しく劣勢にある。「一家の大黒柱として経済的責任を果たす」という性役割規範から自らを解き放ち、家庭をもたない豊かさという新たなライフスタイルを確立することが課題ではなかろうか。

(4) 高齢期の貧困と孤立の予兆

壮年期単身者は高齢期単身者へと続くだろう。家計調査等によれば、勤労単身世帯の所得・資産の平均値は二人以上世帯より恵まれた状態にあるが、高齢期に入ると二人以上世帯よりも悪化している。本調査で60歳代前半の男女の半分強は暮らし向きが苦しいと感じている。また、低所得者の半分以上は高齢

期の備えができていないと答えている。現在、独居高齢者の中心は夫に先立たれた女性であるが、やがては壮年期単身者から高齢期単身者へと移行した人々が多数を占めるだろう。その時、高齢者の貧困と社会的孤立が現在とは異なる形で生じるのではないかと予想される。

第4章

壮年期単身者の日常生活： 大都市で「一人で過ごす」 とは？

第4章 壮年期単身者の日常生活:大都市で「一人で過ごす」とは？

1. はじめに

本章は、単身者の大きな特徴の1つである「一人で過ごす」ことに着目し、生活・通勤に便利で好きな所へ行けて、好きなことができる、自らのおもむくままな (footloose) 大都市の状況において「一人で過ごす」とは、どのようなことなのかを社会学の立場から検討する。具体的には、休日に一人で過ごすことの多い人は、そうでない人と比べて日常生活、社会関係、生活満足、高齢期の暮らしの見通しにどのような特徴があるのかをみていく。

従来、「一人で過ごす」ことが何か恥ずかしいこと、道徳的に劣ったことのように見なされるきらいがあった。また、「一人で過ごす」ことは、孤独や孤立、人的ネットワークの脆弱さを連想させ、それらがひいては貧困、孤独死といった個人的な不幸、社会問題へ直結すると捉えられがちであった。人と繋がることが奨励されているがゆえに、「一人で過ごす」ことの否定的な側面が強調されてきたともいえる。

しかし近年、単身者の増加の背景もあってか、「おひとりさま」や「ひとり〇〇」という言葉が日常語として定着しつつある。これは一人で何かをすることに着目した表現であるが、「一人で過ごす」ことに肯定的なニュアンスがある。さらに、外で一人で過ごすという「ソロ活」(単独を意味する「ソロ」+「活動」の略)、「ソロキャンプ」(一人キャンプの意味)という言葉もあり、誰かと一緒にではなく、一人で好きな場所へ行き、一人で好きなことをして、有意義な時間を過ごすことを意味している。

精神医学、心理学、社会福祉など分野では、20世紀の半ばに活躍したイギリスの小児科医、精神科医、精神分析家のD.W.ウィニコット¹の「一人でいられる能力 (The Capacity to Be Alone)」という概念を再評価する動きがある。「一人でいられる能力」とは、簡単にいうと、情緒的に成熟していることの現れであり、自分と相手を個として受け入れ、なおかつ心的なつながりを持っていられることで、安心して孤独を楽しんでいられる力のことである。他人とうまく距離をとることが難しくなっている、あるいはIT技術の進展によって常に他人と繋がっていることが求められる現代社会の対人関係において必要な能力だと再解釈されている²。

1 Winnicott, D. W., 1958, "The Capacity to be Alone". In *The Maturation Processes and the Facilitating Environment*. London: Hogarth Press, 29-36 (=牛島定信訳, 1977, 『一人でいられる能力—情緒発達の精神分析理論』岩崎学術出版社, 21-31)。

2 野本美奈子, 2000, 「Capacity to Be Aloneの逆説性と多重性に関する研究: <一人でいられる能力尺度>精緻化の試み」『大阪大学教育学年報』5, 125-137。

むろん、人間は一人で生きていくことはできない。集団や社会に属し、その中で自分の立場(地位)を確保し、役割を果たしていくことで、集団や社会(他者)と繋がっていなければならない。社会学においては、個人と社会を繋ぐ経路が「役割」であり、それらが束になったものが「地位」として捉えられる。

つまり、社会学や心理学から示唆される「一人で過ごす」ことの意味とは、「自立した個人」としての側面と「役割のない個人」としての側面があることになる。一般に、役割の喪失は社会的な孤立に繋がるので、個人的にも社会的にも望ましくない結果をもたらす。

だが、そもそも単身者の多くを占める独身者(未婚者・離死別者)は既婚者と比べて、生殖家族(自らの選択により配偶者を得て、子どもを産み育てて自ら作っていく家族)を形成していないことにより、配偶者として、あるいは親としての役割がない状態にあり、その点では相対的に「役割のない個人」として生きている(ただし、定位家族[自分が育った家族]での役割、たとえば親の介護などの役割がないわけではない)。

また、東京23区のような大都市居住者は、従来の(あるいは前近代的な)血縁・地縁といった社会関係からも自由であることが多い。つまり、血縁・地縁は相対的に弱く、比較的自由に離脱可能な社会関係の中で、相対的に「役割のない個人」を生きているともいえる。

他方、単身者にとって、個人の役割として大きいのは職業である。職業は社会的役割を実現する手段であるだけでなく、生計を維持(経済的自立)し、自己実現を図る手段でもある。いずれも「自立した個人」との関わりも深い³。特に、経済的自立は、大都市で一人で暮らしていくための重要な要件である。この点で、東京23区は雇用機会や産業の多様性とも豊かであり、経済的な魅力だけでなく、仕事内容や働き方を含めた非経済的な魅力も含めて⁴、単身者を引きつける魅力が突出している空間であるともいえる。

以上を踏まえ、本章では東京23区の単身者がどのようにして一人で過ごしているのかを、特に、最も人数の多い休日に「家で一人」で過ごす単身者に着目して検討する。休日の過ごし方の回答状況を概観したうえで、休日の過ごし方の違いがどのような属性で特徴づけられるのかを検討する。その次に、休日に「家で一人」で過ごすことの多い人は、そうでない人と比べて日常生活、社会関係、生活満足、高齢期の暮らしの見通しにどのような特徴があるのかを検討し、「家で一人」で過ごすことの意味合いを探っていく。

3 尾高邦雄, 1953, 『新稿 職業社会学』福村書店。

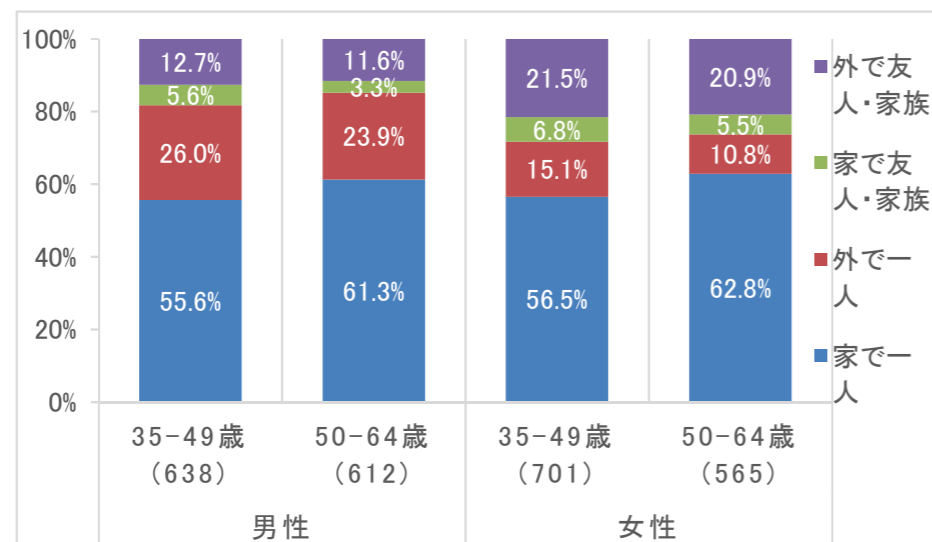
4 田中喜行・東雄大・勇上和史, 2020, 「労働市場<東京>の特徴」『日本労働研究雑誌』718, 4-17

2. 休日にどのように過ごすことが多いか

「一人で過ごす」ことの検討に、休日の過ごし方に関する質問を用いる。休日の過ごし方は、その人の選好や志向（一人で過ごすか人と一緒に過ごすか、インドアかアウトドアかなど）、置かれている環境において総合的に決定されていると考えられるので、「一人で過ごす」の意味を検討する上では一つの指標となる。

具体的には、質問紙調査で「あなたは、仕事のない休日などの日をどのように過ごすことが多いですか」と尋ね、「家で一人で過ごすことが多い」、「外で一人で過ごすことが多い」、「家で友人・家族など親しい人と過ごすことが多い」、「外で友人・家族など親しい人と過ごすことが多い」の4つの選択肢から一つだけを選択してもらっている。以下では、「家で一人」、「外で一人」、「家で友人・家族」、「外で友人・家族」と略記している。この回答の集計をもとに検討していく。

図表 4-1 性別・年齢別・休日の過ごし方



図表4-1は性別・年齢2区分（35-49歳と50-64歳）別に集計したものである。男女どの年齢でも「家で一人」で過ごす人が半数以上である。次に回答割合が高いのは、男性では「外で一人」、女性では「外で友人・家族」で、男女とも「家で友人・家族」は1桁台でかなり低い。

男女間の目立つ違いは、「外で一人」は男性が20%台、女性が10%台と男性のほうが割合が高いことと、その反対に「外で友人・家族」は女性が20%台、男性が10%台と女性のほうが割合が高いことである。

年齢別では、「家で一人」は、男女とも35-49歳が50%台後半、50-64歳が

60%台前半と50-64歳のほうが割合が高い。また、女性で特にそうだが、「外で一人」は、35-49歳のほうが50-64歳より割合が高い。その結果、「家」「外」にかかわらず、休日に一人で過ごす男性は80%前後、女性70%前後であり、男性のほうが休日に一人で過ごす傾向がある。また、年齢では50-64歳のほうが一人で過ごす傾向がややみられる。一般に、男性より女性のほうが、家族・親族や他人との人づきあいにより積極的であり、人的ネットワークが発達しているので、それらの知見と整合的な結果といえる。社会関係については本章第5節で検討する。

次に、主な属性と考えられる配偶関係別、従業上の地位別、労働時間帯別、年収別にみていく。図表4-2は、図表4-1をさらに配偶関係（未婚、離死別、既婚）別にしてクロス集計したものである。

本調査では、男女とも未婚は70%台で多数を占めているため、図表4-1でみられた傾向は、未婚者の傾向とだいたい一致する。

ただ、男女とも35-49歳「離死別」、男性の35-49歳「既婚」では、「家で一人」が40%台と低く、その分「家で友人・家族」「外で友人・家族」の割合が高い。

図表 4-2 性別・年齢別・配偶関係別・休日の過ごし方

性別	年齢	配偶関係	家で一人		外で一人		家で友人・家族		外で友人・家族	
			割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数
男性	35-49歳	未婚(519)	59.0%	306	25.8%	132	4.0%	21	11.2%	58
		離死別(80)	41.3%	33	27.5%	22	12.5%	10	18.8%	15
		既婚(31)	45.2%	14	19.4%	6	16.1%	5	19.4%	6
	50-64歳	未婚(396)	62.1%	247	25.3%	101	2.8%	11	9.8%	39
		離死別(149)	61.7%	92	18.8%	28	3.4%	14	16.1%	25
		既婚(53)	52.8%	28	32.1%	17	5.7%	3	9.4%	5
女性	35-49歳	未婚(582)	59.3%	345	15.1%	89	5.8%	34	19.8%	114
		離死別(98)	40.8%	40	17.3%	17	13.3%	13	28.6%	28
		既婚(16)	56.3%	9	-	0	6.3%	1	37.5%	6
	50-64歳	未婚(332)	63.6%	211	12.0%	40	4.5%	15	19.9%	66
		離死別(194)	60.8%	118	9.3%	18	5.7%	11	24.2%	24
		既婚(33)	63.6%	21	9.1%	3	12.1%	4	15.2%	5

図表 4-3 性別・年齢別・従業上の地位別・休日の過ごし方

		家で一人		家で友人・家族		外で一人		外で友人・家族		
		割合	割合	割合	割合	割合	割合	割合	割合	
男性	35-49歳	役員・正規管理職(144)	41.0%	7.6%	34.0%	17.4%				
		正規雇用(322)	56.5%	5.3%	24.8%	13.4%				
		非正規雇用(71)	64.8%	8.5%	21.1%	5.6%				
		自営業その他(52)	59.6%	1.9%	28.8%	9.6%				
		無業(38)	76.3%	2.6%	13.2%	7.9%				
	50-64歳	役員・正規管理職(144)	53.5%	3.5%	27.8%	15.3%				
		正規雇用(156)	60.9%	3.2%	23.7%	12.2%				
		非正規雇用(125)	68.0%	4.0%	17.6%	10.4%				
		自営業その他(70)	61.4%	4.3%	28.6%	5.7%				
		無業(99)	69.7%	1.0%	22.2%	7.1%				
女性	35-49歳	役員・正規管理職(86)	54.7%	8.1%	15.1%	22.1%				
		正規雇用(390)	54.6%	5.9%	16.7%	22.8%				
		非正規雇用(146)	54.8%	10.3%	13.7%	21.2%				
		自営業その他(53)	73.6%	1.9%	9.4%	15.1%				
		無業(23)	65.2%	4.3%	13.0%	17.4%				
	50-64歳	役員・正規管理職(87)	51.7%	12.6%	11.5%	24.1%				
		正規雇用(180)	63.3%	3.3%	10.6%	22.8%				
		非正規雇用(162)	63.6%	5.6%	9.9%	21.0%				
		自営業その他(60)	58.3%	6.7%	18.3%	16.7%				
		無業(68)	80.9%	1.5%	5.9%	11.8%				

次に、従業上の地位別にみたものが図表4-3である。おおむね男女どの年代でも、「役員・正規管理職」は「家で一人」の割合がやや低く、その分「外で一人」や「外で友人・家族」の割合がやや高い。「無業」は「家で一人」の割合が高く、特に男性35-49歳の「無業」と女性の50-64歳「無業」は、他のカテゴリーと比べて70%台後半～80%とかなり高い。

続いて、労働時間帯別にみたものが図表4-4である。労働時間帯は、働いている人（有業者）に、平日午前9時～午後5時という一般的な勤務時間とは異なる働き方を過去1カ月したかどうか、「午後6時～午後10時」、「午後10時～午前7時」、「土曜日」、「日曜日・祝日」、「いずれもあてはまらない」の5つの選択肢の複数回答で尋ねたものである。

男性35-49歳と女性50-64歳の「いずれもあてはまらない」で、「家で一人」の割合が少し高いが、全体として、労働時間帯別で大きな差がないといえる。

図表 4-4 (有業者のみ) 性別・年齢別・労働時間帯別・休日の過ごし方

		家で一人		家で友人・家族		外で一人		外で友人・家族		
		割合	割合	割合	割合	割合	割合	割合	割合	
男性	35-49歳	午後6時～午後10時(410)	52.9%	6.3%	27.3%	13.4%				
		午後10時～午前7時(180)	55.6%	5.6%	24.4%	14.4%				
		土曜日(293)	53.9%	5.5%	26.3%	14.3%				
		日曜日・祝日(269)	50.2%	5.9%	29.4%	14.5%				
		いずれもあてはまらない(87)	60.9%	3.4%	26.4%	9.2%				
	50-64歳	午後6時～午後10時(226)	58.8%	4.0%	25.7%	11.5%				
		午後10時～午前7時(103)	64.1%	0.9%	25.2%	10.7%				
		土曜日(226)	64.6%	0.9%	24.8%	9.7%				
		日曜日・祝日(200)	65.5%	1.5%	23.5%	9.5%				
		いずれもあてはまらない(158)	57.0%	5.7%	23.4%	13.9%				
女性	35-49歳	午後6時～午後10時(438)	57.5%	5.9%	14.8%	21.7%				
		午後10時～午前7時(156)	58.3%	7.1%	14.1%	20.5%				
		土曜日(305)	59.3%	5.2%	16.1%	19.3%				
		日曜日・祝日(256)	59.4%	4.3%	17.6%	18.8%				
		いずれもあてはまらない(139)	54.0%	10.1%	12.2%	23.7%				
	50-64歳	午後6時～午後10時(238)	58.0%	7.1%	12.6%	22.3%				
		午後10時～午前7時(98)	58.2%	5.1%	13.3%	23.5%				
		土曜日(231)	62.3%	3.9%	12.1%	21.6%				
		日曜日・祝日(188)	62.2%	3.2%	13.3%	21.3%				
		いずれもあてはまらない(136)	67.6%	5.9%	7.4%	19.1%				

図表 4-5 性別・年齢別・年収別・休日の過ごし方

		家で一人		家で友人・家族		外で一人		外で友人・家族		
		割合	割合	割合	割合	割合	割合	割合	割合	
男性	35-49歳	300万円未満(107)	66.4%	7.5%	17.8%	8.4%				
		300～500万円未満(170)	57.6%	5.9%	25.9%	10.6%				
		500～800万円未満(221)	50.7%	4.1%	29.9%	15.4%				
		800万円以上(121)	50.4%	7.4%	26.4%	15.7%				
		300万円未満(195)	70.8%	2.6%	19.5%	7.2%				
	50-64歳	300万円未満(138)	60.9%	3.6%	23.9%	11.6%				
		300～500万円未満(110)	59.1%	1.8%	24.5%	14.5%				
		500～800万円未満(110)	59.1%	1.8%	24.5%	14.5%				
		800万円以上(128)	52.3%	4.7%	28.9%	14.1%				
		300万円未満(135)	63.7%	7.4%	14.8%	14.1%				
女性	35-49歳	300万円未満(262)	51.9%	6.9%	16.8%	24.4%				
		300～500万円未満(226)	57.1%	7.1%	13.7%	22.1%				
		500～800万円未満(226)	57.1%	7.1%	13.7%	22.1%				
		800万円以上(65)	58.5%	3.1%	15.4%	23.1%				
		300万円未満(213)	66.2%	4.2%	11.7%	17.8%				
	50-64歳	300万円未満(139)	62.6%	5.0%	9.4%	23.0%				
		300～500万円未満(110)	63.6%	6.4%	10.9%	19.1%				
		500～800万円未満(110)	63.6%	6.4%	10.9%	19.1%				
		800万円以上(71)	54.9%	8.5%	12.7%	23.9%				
		300万円未満(139)	62.6%	5.0%	9.4%	23.0%				

続いて、年収別にみたものが図表4-5である。おおむね男女どの年代でも「300万円未満」では「家で一人」の割合が高い。反対に言えば、年収の高い人のほうが「家で一人」の割合が低い傾向があり、女性よりも男性のほうがその傾向がはっきりしている。その低い分、男性は「外で一人」、女性は「外で友人・家族」の割合がやや高い傾向がみられる。

本節の小括として、これまでみてきた属性も含め、どのような属性の人が、より一人で過ごす傾向があるのかロジスティック回帰分析の結果からおおまかにみていく。検討する属性は、性別、出身地（中学卒業時）、満年齢、教育年数（学歴）、従業上の地位、年収、配偶関係、現在の区居住年数、一人暮らし年数、居住形態（賃貸、持ち家、団地等）である。

図表4-6にロジスティック回帰分析の結果を示した。表の左側では「家で友人・家族」と「外で友人・家族」を結合して「友人・家族」カテゴリーを作成して、それを基準として、「家で一人」と「外で一人」で過ごす人の特徴を分析した多項ロジスティック回帰の結果を、右側は一人で過ごす人のみで、「家で一人」を基準として「外で一人」の人の特徴を分析した二項ロジスティック回帰分析の結果である。

まず左側の「友人・家族」を基準とした「家で一人」の特徴は、女性より男性のほうが、23区出身よりも東京圏郊外部（23区以外東京および埼玉・千葉・神奈川）や地方圏出身者のほうが、年齢が高いほうが、教育年数（学歴）が低いほうが、役員・正規管理職よりも正規雇用、自営業その他、無業のほうが、「家で一人」で過ごす傾向がある（5%水準未満有意）。

ここで年収の影響がみられないが、これは年収と従業上の地位で交絡があるためである。表には示さないが、従業上の地位を外したモデルでは、年収が低いほど「家で一人」で過ごす傾向がある（0.1%水準有意）。また、図表4-5にある年収4区分で800万円以上を基準としてダミー変数として投入した場合、「300万円未満」のほうが「家で一人」で過ごす傾向がみられるが（1%水準有意）、他の年収カテゴリーでは有意な影響はみられない。よって、従業上の地位と年収に関してはクロス集計で観察された結果とほぼ同じ傾向であるといえる。また、教育年数（学歴）が低いほうが「家で一人」で過ごす傾向があることから、社会階層要因も一定の影響があることがわかる。

クロス集計では検討しなかったが、23区出身者よりも東京圏郊外部（23区以外東京および埼玉・千葉・神奈川）や地方圏出身者のほうが、「家で一人」で過ごす傾向は、23区出身者のほうが親も含めた親族との関係、地元の間人関係があるためと考えられる。

図表4-6 休日の過ごし方のロジスティック回帰分析

	(基準：友人・家族)				一人で過ごす人のみ (基準：家で一人)	
	家で一人		外で一人		外で一人	
	B	Exp(B)	B	Exp(B)	B	Exp(B)
女性ダミー	-.526	.591 ***	-1.090	.336 ***	-.573	.564 ***
中学卒業時の居住地 (基準：23区)						
東京圏郊外部	.337	1.400 *	-.122	.885	-.484	.616 **
地方圏	.325	1.383 *	.155	1.167	-.177	.838
満年齢	.029	1.029 ***	.016	1.016	-.015	.985
教育年数	-.064	.938 *	.032	1.033	.098	1.103 **
従業上の地位 (基準：役員・正規管理職)						
正規雇用	.371	1.449 *	-.002	.998	-.369	.691 *
非正規雇用	.231	1.260	-.370	.690	-.598	.550 **
自営業その他	.860	2.363 **	.531	1.700 +	-.328	.720
無業	.971	2.641 **	.170	1.185	-.796	.451 **
年収 (中央値換算)	.000	1.000	.000	1.000	.000	1.000
配偶関係 (基準：既婚・事実婚)						
未婚	.352	1.422	.476	1.610	.085	1.089
離死別	-.251	.778	-.081	.922	.176	1.193
現在の区居住年数中央値換算	-.005	.995	-.011	.989	-.006	.994
一人暮らし年数中央値換算	.013	1.013 +	.013	1.013	.000	1.000
居住形態 (基準：賃貸)						
持ち家・分譲	.115	1.122	-.018	.982	-.124	.884
団地等	.056	1.057	-.107	.898	-.196	.822
定数	.079		-1.021		-1.005	
疑似R ² (Nagelkerke)		.098				.065
モデルχ ²		199.950 ***				78.876 ***
分析度数(n)		(2284)				(1784)

(+ P<.10, * P<.05, ** P<.01, *** P<.001)

他方、「友人・家族」を基準として「外で一人」の特徴は、女性より男性のほうが過ごす以外は傾向がみられない。つまり、「友人・家族」で過ごす人と「外で一人」で過ごす人のこれら属性上の違いは、性別以外ない。それでは「外で一人」で過ごす人の特徴がよくわからないので、一人で過ごす人だけで、「家で一人」を基準として「外で一人」の特徴を二項ロジスティック回帰分析した結果が、**図表4-6**の右側である。

まず、教育年数（学歴）の高い人のほうが「外で一人」で過ごす傾向がある。これ以外は係数がマイナスなので、「外で一人」で過ごす傾向として解釈すると、女性より男性のほうが、東京圏郊外部より23区出身者のほうが、正規雇用、自営業その他、無業よりも役員・正規管理職のほうが、「外で一人」で過ごす傾向がある。

ただし、以上二つの分析は、表の下に記載している疑似決定係数（疑似R²）が、左側の分析で0.098、右側の分析で0.065と低い値となっており、これら属性による過ごし方の違いの説明力は弱い。つまり、指摘した傾向はみられるものの、これら属性によって過ごし方を十分説明できているとはいえない。先の**図表4-1**で見た通り「家で一人」で過ごす人が半数以上であり、「家で一人」で過ごす人には、これらの傾向だけでは説明できない多様性があると考えられる。

また、**図表4-4**で検討した労働時間帯のダミー変数（している・していない）や数値化（いくつしているか）して変数を投入した有業者だけのモデルで分析をおこなったが、いずれも影響はまったくみられなかった。

以上から、「家で一人」で過ごす人の特徴は、他の過ごし方と比べて、年齢が高い、学歴が低い、年収が低い（300万円未満）、役員・正規管理職より無業の人のほうが、23区出身よりも居住に基づくネットワークがないと考えられる東京圏郊外部や地方圏出身者のほうが、というように、社会的に孤立傾向にある人の過ごし方という側面がある。他方、労働時間帯がまったく影響がないことや、正規雇用、自営業その他のほうが、「家で一人」で過ごす傾向もあることから、社会的に孤立だけでは説明できない別な側面もあると考えられる。

3. 一人ですること、過ごす場所・人

図表4-7 性別・年齢別・休日の過ごし方別・休日一人で過ごすときにすること（「よくある」の割合、全体の降順）

		家事や身のまわりのこと	読書、テレビ・ビデオ・視聴覚	昼寝等、休息	インターネットを閲覧・検索、ネットショッピング	人と交流	電話やメール、SNS等で友人や知人と交流	話、ネットなど	電子ゲーム（ゲーム専用機、携帯電話）	業の仕事	勤め先の仕事や副業	自宅に持ち帰った
全体		78.6%	72.3%	56.3%	55.3%	30.6%	20.8%	11.3%				
	家で一人	73.6%	66.5%	63.5%	69.9%	20.2%	39.0%	12.1%				
	35- 外で一人	69.3%	69.7%	52.4%	64.6%	24.2%	24.8%	12.9%				
	49歳 家で友人・家族	77.8%	61.1%	69.4%	61.1%	44.4%	33.3%	11.4%				
男	外で友人・家族	73.8%	50.6%	46.3%	59.3%	40.7%	25.9%	12.5%				
	家で一人	66.7%	76.5%	53.8%	40.2%	15.8%	8.7%	8.3%				
	50- 外で一人	58.9%	72.2%	38.7%	39.4%	14.4%	11.2%	2.9%				
	64歳 家で友人・家族	80.0%	60.0%	25.0%	45.0%	45.0%	10.5%	10.0%				
	外で友人・家族	64.7%	72.1%	47.1%	42.6%	51.5%	12.1%	13.4%				
	家で一人	87.4%	74.6%	77.9%	69.1%	34.4%	28.4%	11.5%				
	35- 外で一人	88.7%	60.4%	48.1%	66.0%	41.9%	18.1%	9.4%				
	49歳 家で友人・家族	93.8%	72.3%	75.0%	58.3%	55.3%	26.1%	19.1%				
女	外で友人・家族	90.7%	77.0%	59.7%	61.1%	60.4%	18.4%	11.8%				
	家で一人	87.8%	79.9%	49.0%	44.0%	28.3%	12.8%	13.3%				
	50- 外で一人	78.3%	64.4%	30.0%	41.7%	22.0%	5.2%	19.0%				
	64歳 家で友人・家族	90.0%	82.8%	56.7%	51.7%	37.9%	31.0%	17.9%				
	外で友人・家族	88.8%	75.7%	42.9%	48.2%	47.8%	14.4%	9.7%				

※表側の「全体」は性別・年齢の無回答を含むが、表頭の項目は無回答を含まない。列で上位5位のセルを赤字赤塗り表示。以下のこの形式の表も同様。

※%の基数となる度数（無回答除く）は各質問で異なるための表示していない。

3節以降では、2節とは反対に休日の過ごし方（4区分）別に集計して、休日の過ごし方の違いによる日常生活の影響について検討していく。

図表4-7は、性別・年齢別・休日の過ごし方別に「休日一人で過ごすときにすること」の質問の「よくある」「ときどきある」「ない」の3つのうち「よくある」の回答の割合だけ取り上げ、表の左から割合の高い順から並べたものである。さらに列でみて、上位5位のセルを赤字赤塗り表示しており、性別・年齢・休日の過ごし方の16通りの組み合わせのうち、どの組み合わせが相対的に回答率が高いかを示している。以下の形式のクロス集計では、「家で一人」と「外で一人」に主に着目してみよう。

この質問は、外で過ごす人ことが多い人も含めて全員に「休日に一人で自宅にいるとき」どう過ごしているかを尋ねている。

男女とも35-49歳は共通して「家で一人」は、「昼寝等、休息」「インターネットを閲覧・検索、ネットショッピング」「電子ゲーム」などをよくしており、50-64歳では男女とも「読書、ラジオ・テレビ・ビデオ視聴」をよくしている。年代による娯楽メディアの違いがみられる。

また、同じインターネットでも「電話やメール、SNS等で友人や知人と交流」は、上位5位すべて、家・外とも「友人・家族」で過ごす人であり、性別・年齢別の中だけで比較しても、家・外とも「友人・家族」で過ごす人のほうが、家・外とも「一人」で過ごす人よりもよくしている。女性より男性のほうが両者の差が大きい。つまり、男性のほうが家・外とも「一人」で過ごす人は、家・外とも「友人・家族」で過ごす人より、「電話やメール、SNS等で友人や知人と交流」もしていない傾向がある。

次に、住まいの周辺で過ごすとき、どのような場所で過ごすか11項目あげて複数回答で尋ねた（表4-8、「その他」は割愛。ただし、この質問は休日限定していない）。

男女どの年代でも「家で一人」で過ごす人は「近所で過ごす場所がない」とする割合が相対的に高く、女性より男性で高い。また、「家で一人」で過ごす人は「スーパーマーケット、コンビニ、近所の商店」が女性35-49歳で高く（女性35-49歳はどの過ごし方も高いが）、男性35-49歳の中では「家で一人」が最も高い。

図表4-8の一番右側に「累積%」（それより左側の項目の%を足しあげた%。複数回答なので合計100%を超える）を算出してあるが、これをみると、男女どの年代も「家で一人」で過ごす人の累積%が低い。このことから、「家で一人」で過ごす人は、近所も必要最低限しか出歩かない生活をしていると推測できる。

また、「外で一人」で過ごす人は男女で場所の違いあり、男性は「カラオケ、パチンコ、ゲームセンターなどの遊興施設」、女性は「図書館、コミュニティーセンターなどの公共施設」で過ごす割合が相対的に高い。また、男性50-64歳を除いて「スポーツジム、運動場などのスポーツ施設」の割合が相対的に高い。

図表 4-8 性別・年齢別・休日の過ごし方別・近所で過ごす場所（複数回答、全体の降順）

		コンビニ、近所の商店	スーパーマーケット、居酒屋などの飲食店	レストラン、コーヒョップ	歩道、河川	自宅周辺の公園、遊	などのスポーツ施設	スポーツジム、運動場	センターなどの公共施設	図書館、コミュニティー	カラオケ、パチンコ、ゲームセンターなどの遊興施設	近所には過さず場所はない	友人・知人などの自宅	親、子、兄弟、その他親族の自宅	病院、デイケアセンター	累積%	
全体(2553)		57.2%	43.9%	25.1%	19.9%	17.5%	10.8%	10.1%	7.9%	7.7%	5.6%	205.7%					
男性	家で一人(351)	51.0%	34.8%	24.2%	15.4%	15.4%	14.2%	17.7%	3.1%	2.0%	3.1%	180.9%					
	外で一人(164)	47.0%	50.0%	29.3%	25.6%	16.5%	22.0%	6.7%	6.1%	4.3%	2.4%	209.8%					
	35-49歳	家で友人・家族(36)	44.4%	61.1%	36.1%	19.4%	16.7%	16.7%	8.3%	5.6%	2.8%	—	211.1%				
	外で友人・家族(79)	44.3%	62.0%	24.1%	34.2%	16.5%	8.9%	8.9%	11.4%	6.3%	1.3%	217.7%					
	家で一人(366)	42.1%	30.9%	27.3%	12.0%	13.4%	9.6%	16.7%	2.2%	3.0%	5.5%	162.6%					
	外で一人(142)	48.6%	37.3%	30.3%	17.6%	16.2%	21.8%	8.5%	2.1%	5.6%	5.6%	193.7%					
女性	50-64歳	家で友人・家族(20)	70.0%	40.0%	30.0%	20.0%	20.0%	—	10.0%	5.0%	5.0%	25.0%	225.0%				
	外で友人・家族(69)	44.9%	58.0%	39.1%	29.0%	15.9%	11.6%	8.7%	23.2%	21.7%	13.0%	265.2%					
	家で一人(393)	71.8%	45.8%	17.8%	19.1%	16.0%	7.9%	9.2%	8.1%	5.6%	7.1%	208.4%					
	外で一人(106)	66.0%	56.6%	21.7%	34.0%	27.4%	9.4%	4.7%	10.4%	10.4%	2.8%	243.4%					
	35-49歳	家で友人・家族(47)	61.7%	63.8%	31.9%	14.9%	19.1%	12.8%	8.5%	12.8%	14.9%	6.4%	246.8%				
	外で友人・家族(149)	73.2%	56.4%	30.2%	17.4%	22.8%	8.7%	3.4%	16.8%	10.7%	6.7%	246.3%					
50-64歳	家で一人(350)	63.7%	38.3%	19.1%	20.3%	20.0%	5.7%	9.1%	8.9%	12.9%	7.1%	205.1%					
	外で一人(59)	59.3%	52.5%	37.3%	27.1%	22.0%	3.4%	8.5%	11.9%	6.8%	5.1%	233.9%					
	家で友人・家族(31)	64.5%	54.8%	35.5%	16.1%	16.1%	9.7%	6.5%	6.5%	22.6%	3.2%	235.5%					
外で友人・家族(115)	65.2%	61.7%	23.5%	25.2%	20.0%	6.1%	2.6%	15.7%	19.1%	6.1%	245.2%						

※表頭右側「累積%」目は下位5項目に赤字黄色背景

次に、休日に一緒に過ごす人について10項目あげて複数回答で尋ねた（図表4-9）。この質問は「一人」で過ごすことが多い人も含めて全員に尋ねている。

家・外とも「一人」で過ごす人は、当然「誰ともしなかった」の割合が高い。女性よりも男性のほうが高く、家・外とも「友人・家族」と過ごす人との差も男性のほうが大きい。

図表 4-9 性別・年齢別・休日の過ごし方別・休日と一緒に過ごす人（複数回答、全体の降順）

	知人 (元同僚含)	仕事関係の友人・知人	学校時代の友人・知人	それ以外の友人・知人	恋人・(元)配偶者・パートナー	誰ともしなかった	親	兄弟・姉妹	近所の友人・知人	子ども	その他親族・親戚	
全体(2497)	31.4%	29.8%	29.8%	24.9%	23.3%	18.9%	14.4%	7.0%	4.8%	3.9%		
男性	家で一人(345)	22.6%	21.4%	23.5%	14.5%	36.2%	13.6%	6.7%	3.5%	2.0%	0.9%	
	外で一人(161)	22.4%	29.2%	20.5%	14.9%	37.9%	12.4%	9.3%	5.6%	3.1%	2.5%	
	35-49歳	家で友人・家族(36)	13.9%	27.8%	8.3%	86.1%	2.8%	8.3%	2.8%	5.6%	5.6%	—
	外で友人・家族(80)	26.3%	28.8%	47.5%	55.0%	3.8%	12.5%	12.5%	13.8%	6.3%	1.3%	
	家で一人(343)	17.8%	11.1%	16.0%	12.5%	46.9%	8.7%	4.7%	5.8%	3.8%	1.5%	
	外で一人(138)	18.8%	14.5%	18.1%	13.0%	42.8%	8.0%	7.2%	8.0%	4.3%	2.2%	
	50-64歳	家で友人・家族(20)	25.0%	40.0%	20.0%	70.0%	—	35.0%	15.0%	5.0%	25.0%	5.0%
	外で友人・家族(70)	32.9%	28.6%	47.1%	47.1%	1.4%	12.9%	12.9%	21.4%	8.6%	11.4%	
	家で一人(392)	40.3%	39.3%	29.1%	21.2%	18.9%	25.0%	18.9%	5.6%	0.5%	3.6%	
	外で一人(104)	48.1%	43.3%	43.3%	21.2%	12.5%	26.9%	22.1%	7.7%	—	5.8%	
	35-49歳	家で友人・家族(48)	43.8%	41.7%	22.9%	77.1%	—	39.6%	25.0%	6.3%	—	8.3%
	外で友人・家族(150)	50.0%	53.3%	54.7%	49.3%	—	39.3%	31.3%	6.7%	0.7%	6.7%	
女性	家で一人(340)	35.9%	35.3%	33.5%	18.5%	17.1%	17.6%	20.6%	6.5%	11.5%	5.0%	
	外で一人(61)	31.1%	24.6%	44.3%	16.4%	16.4%	14.8%	16.4%	6.6%	1.6%	3.3%	
	50-64歳	家で友人・家族(31)	32.3%	19.4%	19.4%	64.5%	3.2%	29.0%	16.1%	3.2%	35.5%	9.7%
	外で友人・家族(112)	50.9%	42.9%	47.3%	35.7%	—	31.3%	18.8%	16.1%	11.6%	9.8%	

女性35-49歳は、家・外とも「一人」で過ごす人でも「仕事関係の友人・知人（元同僚含）」「学校時代の友人・知人」「兄弟・姉妹」とも過ごす割合が相対的に高い。

他方、「家で友人・家族」と過ごす人は、男女どちらの年代とも「恋人・(元)配偶者・パートナー」と過ごす割合が圧倒的に高く、年齢では35-49歳のほうが割合が高い傾向がみられる。また、男女とも50-64歳では「親」「子ども」の割合も高い。

図表 4-10 性別・年齢別・休日の過ごし方別・参加している地域活動（複数回答、全体の降順、上位5位項目のみ）

	参加していない	組合・商店会などの活動	町会・自治会・マンション管理	趣味の会習いごと・勉強会	健康づくりやスポーツの活動	社会活動・ボランティア活動	
全体(2552)	82.4%	6.2%	5.9%	5.3%	3.3%		
男性	35-49歳	家で一人(351)	90.0%	3.1%	3.4%	2.3%	1.7%
	外で一人(165)	87.3%	2.4%	4.8%	6.7%	1.8%	
	家で友人・家族(36)	86.1%	2.8%	5.6%	5.6%	2.8%	
	外で友人・家族(79)	78.5%	3.8%	10.1%	7.6%	2.5%	
	50-64歳	家で一人(366)	87.2%	5.7%	1.6%	2.5%	1.6%
	外で一人(142)	83.1%	6.3%	4.2%	3.5%	5.6%	
女性	35-49歳	家で友人・家族(20)	70.0%	10.0%	5.0%	5.0%	10.0%
	外で友人・家族(68)	63.2%	14.7%	13.2%	14.7%	13.2%	
	家で一人(393)	86.0%	5.6%	5.9%	2.3%	1.5%	
	外で一人(106)	81.1%	2.8%	8.5%	8.5%	1.9%	
	家で友人・家族(47)	83.0%	2.1%	10.6%	4.3%	4.3%	
	外で友人・家族(149)	78.5%	3.4%	10.7%	9.4%	4.7%	
50-64歳	家で一人(350)	78.6%	10.6%	6.0%	6.9%	2.6%	
	外で一人(59)	72.9%	10.2%	6.8%	6.8%	8.5%	
	家で友人・家族(31)	61.3%	16.1%	16.1%	9.7%	12.9%	
	外で友人・家族(115)	72.2%	9.6%	7.0%	11.3%	7.8%	

次に、地域活動の参加について8項目あげて複数回答で尋ねた。いずれの項目も参加率が低いので回答率上位5項目のみを示した（図表4-10）。

男性35-49歳はそもそも「参加していない」割合がかなり高いが、男女どの年代も「家で一人」が「参加していない」割合が最も高い。

年齢別では、50-64歳のほうが何らかの地域活動に参加しており、男性50-64歳は特に「外で友人・家族」がどの活動も割合が高い。女性50-64歳は「家で友人・家族」が活動の割合が高い。

図表 4-11 (地域活動参加していない人のみ) 性別・年齢別・休日の過ごし方別・どのようなきっかけがあれば参加するか (複数回答、全体の降順)

		町会・自治会などの誘い	活動団体からの呼びかけ	区の広報誌やホームページなどからの情報	友人・知人のすすめ	特にない	問題意識や関心を持つなど自分の意思
全体(2097)		9.1%	10.5%	14.1%	27.0%	35.4%	37.3%
男性	35-49歳	10.1%	7.6%	7.6%	26.9%	38.0%	36.1%
	家で一人(316)						
	外で一人(143)	9.1%	13.3%	9.8%	23.8%	31.5%	39.2%
	家で友人・家族(31)	9.7%	16.1%	6.5%	29.0%	38.7%	38.7%
	外で友人・家族(62)	16.1%	14.5%	16.1%	45.2%	24.2%	33.9%
	50-64歳	9.5%	9.1%	6.0%	15.1%	52.7%	25.9%
家で一人(317)							
外で一人(118)	11.0%	11.9%	14.4%	17.8%	37.3%	34.7%	
家で友人・家族(14)	7.1%	7.1%	28.6%	14.3%	28.6%	50.0%	
外で友人・家族(43)	16.3%	4.7%	11.6%	25.6%	41.9%	16.3%	
女性	35-49歳	7.7%	8.3%	18.0%	30.2%	31.7%	44.1%
	家で一人(338)						
	外で一人(86)	5.8%	14.0%	22.1%	34.9%	25.6%	46.5%
	家で友人・家族(38)	15.8%	13.2%	13.2%	47.4%	15.8%	42.1%
	外で友人・家族(117)	5.1%	11.1%	16.2%	47.9%	26.5%	35.9%
	50-64歳	6.6%	11.3%	22.6%	24.8%	32.5%	42.0%
家で一人(274)							
外で一人(43)	14.0%	16.3%	18.6%	25.6%	23.3%	44.2%	
家で友人・家族(19)	10.5%	26.3%	10.5%	31.6%	21.1%	47.4%	
外で友人・家族(83)	10.8%	15.7%	24.1%	30.1%	27.7%	42.2%	

続いて、地域活動に「参加していない」単身者に対して、どのようなきっかけがあれば参加すると思うか7項目をあげて複数回答で尋ねた(図表4-11、「その他」は割愛)。

「家で一人」で過ごす人は、男女どの年代も「特にない」が最も高いが、女性よりも男性のほうが高く、男性でも50-64歳の人のほうが高い。また、女性35-49歳で家・外とも「一人」で過ごす人は「問題意識や関心を持つなど自分の意思」が相対的に高い。女性35-49歳で「外で一人」、女性50-64歳で「家で一人」「外で一人」とも、「区の広報誌やホームページなどからの情報」が相対的に高い。

4. 食生活、健康

本節では、3節と同様の集計で、休日の過ごし方別に食生活や健康状態に違いがあるかどうか検討していく。

図表 4-12 性別・年齢別・休日の過ごし方別・夕食のとり方(「よくある」の割合、全体の降順)

		自分で調理したもの	出来合いの弁当・惣菜	食堂、レストラン、ファストフードなどが主のお店での外食	冷凍食品・インスタント食品	居酒屋などのお酒(アルコール類)と一緒に外食	テイクアウト、出前	家族、親族、親戚、近所の人が作ったもの
全体		46.8%	31.4%	18.8%	16.0%	11.9%	5.6%	3.4%
男性	35-49歳	31.5%	44.5%	26.6%	19.9%	11.9%	7.3%	1.4%
	家で一人							
	外で一人	29.5%	42.3%	40.6%	12.3%	18.2%	4.3%	3.0%
	家で友人・家族	27.8%	27.8%	36.1%	13.9%	22.2%	5.6%	19.4%
	外で友人・家族	32.1%	29.6%	30.9%	14.8%	27.5%	7.4%	6.3%
	50-64歳	39.0%	34.6%	15.4%	23.2%	13.1%	5.0%	2.2%
家で一人								
外で一人	31.9%	40.3%	32.4%	13.4%	14.1%	2.8%	0.7%	
家で友人・家族	35.0%	35.0%	20.0%	15.0%	5.0%	5.0%	15.0%	
外で友人・家族	40.8%	25.4%	24.3%	16.9%	25.4%	5.6%	9.9%	
女性	35-49歳	51.9%	28.2%	11.7%	16.0%	8.7%	8.7%	2.3%
	家で一人							
	外で一人	54.7%	33.0%	16.2%	16.0%	5.7%	7.5%	3.8%
	家で友人・家族	62.5%	25.0%	16.7%	8.5%	18.8%	2.1%	8.3%
	外で友人・家族	58.9%	21.9%	14.1%	10.6%	15.3%	4.7%	5.3%
	50-64歳	64.0%	23.4%	7.4%	14.7%	5.7%	4.8%	2.3%
家で一人								
外で一人	68.9%	19.7%	11.5%	6.6%	6.6%	1.7%	1.6%	
家で友人・家族	76.7%	17.2%	16.7%	6.9%	6.9%	3.4%	13.3%	
外で友人・家族	61.2%	22.8%	14.3%	13.2%	11.4%	3.6%	3.6%	

図表4-12は、性別・年齢別・休日の過ごし方別に「夕食に次のような飲食をすることがどの程度あるか」の質問で「よくある」「ときどきある」「ない」3つの選択肢のうち「よくある」の回答の割合だけ取り上げ、割合の高い順から並べたものである。

この質問は、「自分で調理したもの」は女性、「食堂、レストラン、ファストフードなど食事が主のお店での外食」が男性というように男女差が大きいですが、「一人で過ごす人の特徴をみていくと、男性では「家で一人」「外で一人」とも「出来合いの弁当・惣菜」、男性50-64歳の「家で友人・家族」も「出来合いの弁当・惣菜」が高い。男女ともどの年代でも「家で一人」は「冷凍食品・インスタント食品」が最も高い。

図表 4-13 性別・年齢別・休日の過ごし方別・健康で気をつけていること（複数回答、全体の降順）

	健康で気をつけていること	年に一度定期健康診断を受ける	朝食をきちんととる	がたよらないようにする	栄養のバランスがとれる	定期的に運動をする	カロリーをとりすぎない	健康食品やサプリメントをとる	いづれもしていない
全体	71.2%	49.2%	42.5%	41.4%	38.0%	35.5%	5.6%		
家で一人(352)	65.1%	37.5%	30.1%	40.1%	33.5%	30.7%	8.8%		
35-49歳 外で一人(162)	71.0%	50.0%	37.0%	52.5%	33.3%	35.2%	6.2%		
家で友人・家族(36)	75.0%	41.7%	41.7%	36.1%	36.1%	41.7%	5.6%		
外で友人・家族(80)	70.0%	48.8%	42.5%	58.8%	43.8%	35.0%	5.0%		
男性 家で一人(367)	63.2%	47.7%	36.2%	37.9%	34.3%	31.3%	7.9%		
50-64歳 外で一人(145)	68.3%	57.2%	44.8%	50.3%	38.6%	27.6%	5.5%		
家で友人・家族(19)	89.5%	68.4%	52.6%	52.6%	52.6%	15.8%	5.3%		
外で友人・家族(67)	79.1%	49.3%	55.2%	58.2%	49.3%	35.8%	3.0%		
家で一人(393)	73.3%	42.0%	38.2%	31.3%	32.8%	37.9%	6.1%		
35-49歳 外で一人(105)	76.2%	55.2%	47.6%	59.0%	41.9%	48.6%	2.9%		
家で友人・家族(48)	81.3%	37.5%	47.9%	35.4%	37.5%	37.5%	4.2%		
外で友人・家族(149)	82.6%	50.3%	52.3%	50.3%	47.0%	36.9%	2.7%		
女性 家で一人(350)	72.6%	58.9%	49.4%	31.4%	42.0%	39.1%	2.9%		
50-64歳 外で一人(61)	73.8%	67.2%	68.9%	45.9%	55.7%	42.6%	3.3%		
家で友人・家族(30)	80.0%	50.0%	60.0%	26.7%	26.7%	43.3%	10.0%		
外で友人・家族(118)	82.2%	57.6%	54.2%	44.1%	44.1%	38.1%	1.7%		

続いて、食生活や健康面で気をつけていることについて7項目をあげて複数回答で尋ねた（図表4-13）。

これらの項目は、過ごし方の違いより年齢による違いが目立つ。50-64歳のほうが相対的に割合が高い項目が多い。

「家で一人」については、「いづれもしていない」の割合が相対的に高い傾向以外、目立って割合が高いものはない。むしろ、特に男性では、どの項目でも割合が低い傾向がみられる。ただ、女性50-64歳では「家で一人」で、「朝食をきちんととる」「健康食品やサプリメントをとる」と栄養の摂取には気をつけている傾向がみられる。

「外で一人」については、男女とも35-49歳で「定期的に運動をする」が50%台と相対的に高い。これは図表4-8の近所で過ごす場所で、男女とも35-49歳「外で一人」で「スポーツジム、運動場などのスポーツ施設」の割合が相対的に高かったことと整合性がある結果といえる。

図表 4-14 性別・年齢別・休日の過ごし方別・精神的健康（「よくある」の割合）および身体的健康（「良い」の割合）

	精神的健康（「よくある」の割合）	身体的健康（「良い」の割合）	健康状態
全体	13.1%	10.9%	15.8%
家で一人	20.7%	20.4%	12.2%
35-49歳 外で一人	13.6%	13.0%	17.3%
家で友人・家族	13.9%	16.7%	22.2%
外で友人・家族	7.5%	7.5%	22.5%
男性 家で一人	12.6%	12.3%	9.8%
50-64歳 外で一人	5.5%	7.6%	13.1%
家で友人・家族	5.3%	5.3%	15.8%
外で友人・家族	10.3%	7.4%	26.5%
家で一人	18.0%	13.2%	16.0%
35-49歳 外で一人	6.7%	4.8%	24.8%
家で友人・家族	8.3%	4.2%	16.7%
外で友人・家族	8.7%	5.4%	20.8%
女性 家で一人	13.7%	9.7%	11.2%
50-64歳 外で一人	4.9%	1.6%	13.1%
家で友人・家族	3.3%	—	23.3%
外で友人・家族	7.8%	3.4%	27.0%

※%の基数となる度数（無回答除く）は各質問で異なるための表示していない。

図表4-14は、性別・年齢別・休日の過ごし方別に「最近1カ月の精神的な状態」について尋ね、「よくある」「ときどきある」「ない」の3つの選択肢のうち「よくある」の回答の割合だけ取り上げたものが表頭の左側3項目で、表頭の右側の「健康状態」はいわゆる主観的健康状態を尋ね、「良い」「まあ良い」「あまり良くない」「良くない」の4つの選択肢のうち「良い」の割合だけを取り上げたものである。

男性35-49歳では「外で友人・家族」を除いて、「気分が沈んだり、憂うつな気持ちになったりする」や「どうも物事に対して興味がわからない、あるいは心から楽しめない感じがする」の割合が相対的に高く、いわゆる抑うつ傾向がやみられる。

「家で一人」は、男女どの年代も「気分が沈んだり、憂うつな気持ちになったりする」や「どうも物事に対して興味がわからない、あるいは心から楽しめない感じがする」の割合は高い。

それらとは反対に、「家で友人・家族」や「外で友人・家族」は「何か新しいことを始めようとする気持ちになる」が相対的に高い。また、女性35-49歳の「外で一人」も相対的に高い。

主観的健康状態は、休日の過ごし方と特定パターンを見出しがたいが、「家で一人」は、男女どの年代も4つの暮らし方の中では「良い」が低い傾向がある。

5. 社会関係

本節では、これまで同様の集計で、休日の過ごし方別に社会関係の状況を見ていく。

親しくしている友人・知人が多いほうか、少ないほうかを尋ね、「とても多いほうだと思う」「多いほうだと思う」「少ないほうだと思う」「とても少ないほうだと思う」「親しくしている友人・知人はいない」の5つの選択肢から一つを選んでもらっている（図表4-15）。表では「とても多いだと思ふ」と「多いほうだと思ふ」を合計して「多いほう・計」、「少ないほうだと思ふ」と「とても少ないほうだと思ふ」を合計して「少ないほう・計」もあわせて表示している。

「多いほう・計」に着目してみると、男女各年代ともカテゴリーが下にいくほど「多いほう・計」の割合が高くなる傾向が明確である。つまり、「家で一人」<「外で一人」<「家で友人・家族」<「外で友人・家族」の順に知人・友人が多い傾向がある。

その分、「少ないほう・計」と「いない」をあわせてみると、その反対の傾向になっている。

図表 4-15 性別・年齢別・休日の過ごし方別・親しくしている友人知人の多寡

		多いほう・計		少ないほう・計		いない
		多いほう	とても多いほう	少ないほう	とても少ないほう	
男性	家で一人(345)	11.6%	2.0%	76.5%	44.9%	31.6%
	外で一人(163)	15.3%	1.2%	77.3%	43.6%	33.7%
	家で友人・家族(36)	22.2%	2.8%	72.2%	52.8%	19.4%
	外で友人・家族(78)	37.2%	2.6%	61.5%	47.4%	14.1%
女性	家で一人(357)	11.8%	1.7%	70.0%	44.8%	25.2%
	外で一人(141)	14.9%	2.8%	74.5%	44.0%	30.5%
	家で友人・家族(20)	30.0%	5.0%	70.0%	55.0%	15.0%
	外で友人・家族(68)	50.0%	16.2%	50.0%	42.6%	7.4%
男性	家で一人(368)	14.4%	0.3%	81.5%	58.4%	23.1%
	外で一人(98)	18.4%	2.0%	78.6%	58.2%	20.4%
	家で友人・家族(42)	35.7%	7.1%	61.9%	57.1%	4.8%
	外で友人・家族(140)	54.3%	5.0%	49.3%	40.7%	4.3%
女性	家で一人(333)	18.9%	0.9%	74.2%	51.7%	22.5%
	外で一人(59)	20.3%	1.7%	79.7%	59.3%	20.3%
	家で友人・家族(29)	34.5%	3.4%	58.6%	51.7%	6.9%
	外で友人・家族(110)	49.1%	4.5%	49.1%	36.4%	12.7%

図表 4-16 性別・年齢別・休日の過ごし方別・気軽におしゃべりしたり、気晴らしする人（複数回答、全体の降順）

		(元同僚を含む)	仕事関係の友人・知人	学校時代の友人・知人	それ以外の友人・知人	親	恋人・(元)配偶者・パートナー	兄弟・姉妹	近所の友人・知人	誰ともしなかった	その他親族・親戚	子ども
全体(2552)		62.5%	40.8%	33.0%	29.3%	25.3%	25.0%	11.1%	7.8%	6.5%	4.8%	
男性	家で一人(351)	53.3%	37.3%	25.4%	22.5%	13.7%	12.5%	6.6%	15.7%	2.6%	1.7%	
	外で一人(160)	57.5%	41.9%	29.4%	30.0%	14.4%	21.9%	8.1%	11.3%	4.4%	2.5%	
	35-49歳 家で友人・家族(36)	58.3%	36.1%	22.2%	30.6%	83.3%	11.1%	8.3%	2.8%	—	2.8%	
	外で友人・家族(81)	63.0%	43.2%	55.6%	30.9%	53.1%	19.8%	13.6%	—	1.2%	3.7%	
女性	家で一人(366)	54.6%	22.4%	22.4%	17.5%	15.6%	15.8%	11.5%	17.8%	4.1%	4.9%	
	外で一人(143)	53.8%	26.6%	22.4%	21.0%	14.0%	21.0%	14.0%	14.7%	8.4%	3.5%	
	50-64歳 家で友人・家族(20)	70.0%	45.0%	30.0%	50.0%	55.0%	30.0%	20.0%	—	10.0%	20.0%	
	外で友人・家族(70)	60.0%	48.6%	51.4%	28.6%	44.3%	31.4%	32.9%	—	18.6%	12.9%	
女性	家で一人(394)	72.3%	48.0%	31.5%	37.6%	22.8%	29.4%	6.6%	2.8%	6.3%	0.8%	
	外で一人(104)	75.0%	51.9%	39.4%	48.1%	26.9%	33.7%	11.5%	3.8%	8.7%	—	
	35-49歳 家で友人・家族(48)	64.6%	50.0%	31.3%	33.3%	70.8%	31.3%	6.3%	—	8.3%	—	
	外で友人・家族(151)	76.2%	58.3%	51.0%	57.0%	50.3%	42.4%	7.3%	—	6.0%	0.7%	
女性	家で一人(350)	64.0%	43.7%	35.1%	23.4%	19.7%	30.3%	13.4%	3.7%	8.3%	11.1%	
	外で一人(61)	63.9%	37.7%	49.2%	13.1%	21.3%	26.2%	14.8%	3.3%	6.6%	3.3%	
	50-64歳 家で友人・家族(31)	64.5%	38.7%	19.4%	41.9%	58.1%	35.5%	6.5%	—	6.5%	25.8%	
	外で友人・家族(118)	68.6%	54.2%	50.0%	32.2%	34.7%	34.7%	22.9%	—	15.3%	12.7%	

続いて、社会関係の中身をみていこう。図表4-16は、気軽におしゃべりしたり、気晴らしすることを誰としているかを、10種類の選択肢をあげて複数回答で尋ねた。いわば「情緒的サポート」の相手が誰かという質問として設定した。

まず、男女差が大きいように見え、特に男性35-49歳では相対的にどの項目も低い。男性ではどちらの年代も「家で一人」「外で一人」とも「誰ともしなかった」の割合が相対的に高い。他方、女性35-49歳「家で一人」は、「仕事関係の友人・知人（元同僚を含む）」「親」の割合が相対的に高く、「外で一人」ではその二つに加えて、「学校時代の友人・知人」「兄弟・姉妹」なども相対的に高い。

図表 4-17 性別・年齢別・休日の過ごし方別・入院や介護が必要なとき、身の回りの世話をしてくれそうな人（複数回答、全体の降順）

	兄弟・姉妹	親	誰もいない	ケアマネジャーやヘルパーなどの行政の専門家	恋人・(元)配偶者・パートナー	仕事関係の友人・知人(元同僚を含む)	その他の友人	その他親族・親戚	子ども	近所の友人・知人
全体	36.9%	33.7%	19.9%	18.2%	18.0%	10.8%	9.8%	7.4%	6.2%	5.0%
家で一人(352)	25.6%	43.5%	29.8%	11.1%	13.1%	8.5%	3.7%	4.0%	0.3%	2.8%
	外で一人(162)	30.2%	45.1%	30.9%	13.6%	11.1%	4.9%	3.7%	1.2%	2.5%
35-49歳	家で友人・家族(36)	13.9%	44.4%	2.8%	11.1%	75.0%	5.6%	5.6%	—	2.8%
	外で友人・家族(78)	28.2%	50.0%	10.3%	15.4%	52.6%	11.5%	15.4%	3.8%	2.6%
男性	家で一人(369)	28.7%	10.0%	34.7%	19.5%	10.6%	8.9%	5.4%	5.1%	8.7%
	外で一人(145)	32.4%	9.7%	26.9%	20.7%	14.5%	10.3%	5.5%	5.5%	2.1%
50-64歳	家で友人・家族(19)	47.4%	31.6%	10.5%	21.1%	52.6%	10.5%	10.5%	10.5%	15.8%
	外で友人・家族(68)	39.7%	16.2%	5.9%	22.1%	45.6%	8.8%	16.2%	16.2%	14.7%
35-49歳	家で一人(393)	45.0%	56.2%	15.3%	16.3%	9.9%	12.0%	7.1%	7.6%	0.8%
	外で一人(105)	46.7%	57.1%	14.3%	21.0%	14.3%	11.4%	12.4%	9.5%	—
女性	家で友人・家族(48)	47.9%	52.1%	2.1%	16.7%	54.2%	12.5%	8.3%	—	8.3%
	外で友人・家族(149)	51.7%	69.8%	3.4%	12.1%	34.9%	15.4%	22.1%	7.4%	0.7%
50-64歳	家で一人(350)	40.6%	14.6%	15.4%	28.0%	11.4%	8.9%	14.0%	13.1%	16.9%
	外で一人(61)	45.9%	13.1%	11.5%	26.2%	11.5%	21.3%	19.7%	13.1%	3.3%
50-64歳	家で友人・家族(30)	36.7%	13.3%	3.3%	20.0%	40.0%	20.0%	20.0%	13.3%	40.0%
	外で友人・家族(118)	48.3%	19.5%	5.9%	22.0%	22.0%	20.3%	22.9%	12.7%	17.8%

また、「家で友人・家族」は男女どの年代も「恋人・(元)配偶者・パートナー」の割合がかなり高い。さらに、男女とも50-64歳では「親」「子ども」の割合も高い。この点は、図表4-9でみた「休日と一緒に過ごす人」とほぼ同様の傾向である。

続いて、図表4-17は、病気やケガで入院や介護が必要なとき、身の回りの世話をしてくれそうな人は誰だと思えるかを、11種類の選択肢をあげて複数回答で尋ねた（「その他」は割愛）。いわば「手段的サポート」の相手が誰かという質問として設定した。

参考：図表 4-18 性別・年齢別・休日の過ごし方別・手段的サポート%と情緒的サポート%の差分

	兄弟・姉妹	親	恋人・(元)配偶者・パートナー	子ども	その他親族・親戚	仕事関係の友人・知人(元同僚を含む)	近所の友人・知人
全体(2552)	11.9%	4.4%	7.3%	1.4%	0.9%	-51.7%	-6.1%
家で一人	13.0%	21.0%	0.6%	-1.4%	1.4%	-44.8%	-3.7%
	外で一人	8.4%	15.1%	3.3%	-1.3%	-2.5%	-52.6%
35-49歳	家で友人・家族	2.8%	13.9%	8.3%	0.0%	—	-52.8%
	外で友人・家族	8.5%	19.1%	0.5%	-1.1%	2.6%	-51.4%
男性	家で一人	12.9%	-7.5%	5.0%	3.8%	1.1%	-45.7%
	外で一人	11.4%	-11.3%	-0.5%	-1.4%	-2.9%	-43.5%
50-64歳	家で友人・家族	17.4%	-18.4%	2.4%	-4.2%	0.5%	-59.5%
	外で友人・家族	8.3%	-12.4%	-1.3%	1.8%	-2.4%	-51.2%
35-49歳	家で一人	15.6%	18.7%	12.9%	0.0%	1.3%	-60.4%
	外で一人	13.0%	9.1%	12.6%	—	0.9%	-63.6%
女性	家で友人・家族	16.7%	18.8%	16.7%	—	—	-52.1%
	外で友人・家族	9.3%	12.8%	15.4%	0.0%	1.4%	-60.7%
50-64歳	家で一人	10.3%	-8.9%	8.3%	5.7%	4.9%	-55.1%
	外で一人	19.7%	0.0%	9.8%	0.0%	6.6%	-42.6%
50-64歳	家で友人・家族	1.2%	-28.6%	18.1%	14.2%	6.9%	-44.5%
	外で友人・家族	13.6%	-12.7%	12.7%	5.1%	-2.5%	-48.3%

※表頭右側「友人・知人」2項目は下位5項目に赤字黄色背景

男女ともどちらの年代も「家で一人」「外でも一人」とも「誰もいない」の割合が相対的に高いが、男性ではそれが顕著である。

他方、女性35-49歳「家で一人」は、「親」の割合が相対的に高く、「外で一人」ではそれ加えて「兄弟・姉妹」が相対的に高い。女性35-49歳は過ごし方にかかわらず、「親」「兄弟・姉妹」など家族をあげる割合が高い。

また、情緒的サポートと同様に「家で友人・家族」は男女どの年代も「恋人・(元)配偶者・パートナー」の割合がかなり高いが、「外で友人・家族」も「恋人・(元)配偶者・パートナー」の割合が高い。

図表4-17の手段的サポートと図表4-16の情緒的サポートの割合(%)で共通する項目での差分をとったものが図表4-18である。質問の選択肢が少し異なるので、こうした分析はあまり適切ではないので参考としてみていく。表の%は、「手段的%」から「情緒的%」を引き算したものであるから、プラスは「手段的」>「情緒的」、マイナスは「情緒的」>「手段的」ということになる。

全体として、親族はふだん情緒的でなくても手段的サポートの相手としてあがってきて、友人はふだん情緒的でも手段的サポートの相手としてあがってこないという傾向がある。ただ、同じ親族でも50-64歳は「親」は手段的サポートの相手として、あがってこない。また、「恋人・(元)配偶者・パートナー」は、男性は情緒的であれば手段的であるが(ほぼ割合が同じ)、女性は情緒的でなくても手段的サポートの相手としてあがってきている傾向がみられる。

過ごし方の違いでは一定のパターンは見出しがたいが、35-49歳の男女については、男性35-49歳で「家で一人」「外で一人」とも最後は親頼み、女性35-49歳は、「仕事関係の友人・知人」とはふだんつきあっているが、手段的サポートとしては親族と明確な区分しているようにみられる。

6. 困っていること、区政に望むこと

本節では、これまでと同様の集計で、休日の過ごし方別に一人暮らしで困っていることや区政への要望をみていく。

図表4-19は、一人暮らしで困っている・困るだろうと思うことを、14種類の選択肢をあげて複数回答で尋ねた。なお表には上位11項目だけを表示した(これら以外の項目は全体で10%未満)。

女性50-64歳では上位5位にあがってくる項目が相対的に少ない。

男性はどちらの年代も家・外とも「一人」では、「病気になったときに身の回りの世話をしてくれる人がいない」「人との会話が少ない」の割合が相対的に高い。さらに、男性35-49歳では「家で一人」「外で一人」とも、「家事をするのが面倒である」「時間の使い方がい加減になる」も相対的に高い。

「病気になったときに身の回りの世話をしてくれる人がいない」は、女性のどちらの年代でも割合は高い。これは、さきほど図表4-17の手段的サポート「誰もいない」の結果と同じ傾向である。

「人との会話が少ない」も、女性のどの年代でも「家で一人」は割合が高いし、35-49歳「家で一人」「外で一人」でも高い。

また、男性35-49歳「外で一人」で「寂しいと感じることが多い」の割合が相対的に高い。寂しいと感じるから外に出かけるということであろうか。

図表 4-19 性別・年齢別・休日の過ごし方別・一人暮らしで困っていること(複数回答、全体の降順)

		れる人がいない	病気がなったときに身の回りの世話をしてくれる人がいない	重い	家賃や生活費の負担が重い	人との会話が少ない	ある	家事をするのが面倒である	できない	宅配便の依頼や受取ができない	習慣から抜け出せない	不規則な生活習慣や食	不在時の防犯への不安	近所つきあいが少ない	減になる	時間の使い方がい加減になる	収入の使い方が雑になる	多い	寂しいと感じることが多い	
全体		64.8%	42.2%	29.7%	28.0%	27.6%	26.2%	25.3%	23.5%	21.6%	20.1%	16.4%								
男性	家で一人(355)	67.9%	38.0%	35.5%	32.7%	28.2%	29.6%	18.6%	24.5%	26.2%	22.8%	16.1%								
	外で一人(164)	67.1%	41.5%	37.2%	36.6%	39.0%	31.7%	25.0%	22.6%	28.7%	31.7%	26.8%								
	35-49歳																			
	家で友人・家族(36)	44.4%	50.0%	11.1%	25.0%	33.3%	36.1%	13.9%	22.2%	16.7%	25.0%	19.4%								
	外で友人・家族(81)	56.8%	35.8%	16.0%	28.4%	35.8%	35.8%	22.2%	24.7%	23.5%	29.6%	12.3%								
	50-64歳																			
	家で一人(374)	70.3%	38.2%	34.0%	27.3%	20.6%	25.4%	17.4%	23.5%	19.0%	18.2%	16.6%								
	外で一人(146)	67.8%	27.4%	37.0%	27.4%	21.2%	30.1%	24.7%	26.7%	22.6%	21.2%	17.8%								
	家で友人・家族(20)	35.0%	50.0%	20.0%	10.0%	30.0%	20.0%	20.0%	20.0%	15.0%	10.0%	15.0%								
	外で友人・家族(70)	54.3%	40.0%	18.6%	32.9%	32.9%	28.6%	21.4%	28.6%	18.6%	31.4%	18.6%								
女性	家で一人(395)	67.1%	48.6%	30.6%	31.6%	30.1%	29.9%	32.7%	18.2%	26.8%	20.3%	19.0%								
	外で一人(106)	65.1%	46.2%	32.1%	24.5%	42.5%	28.3%	28.3%	25.5%	17.0%	20.8%	16.0%								
	35-49歳																			
	家で友人・家族(48)	47.9%	62.5%	27.1%	29.2%	39.6%	29.2%	31.3%	31.3%	22.9%	27.1%	16.7%								
	外で友人・家族(151)	66.9%	47.0%	17.2%	23.2%	39.7%	20.5%	33.1%	21.2%	18.5%	21.2%	17.2%								
	50-64歳																			
家で一人(354)	65.3%	42.9%	30.2%	25.7%	16.4%	20.6%	28.2%	26.0%	16.9%	11.3%	12.4%									
外で一人(60)	65.0%	40.0%	18.3%	11.7%	33.3%	15.0%	26.7%	25.0%	16.7%	11.7%	6.7%									
家で友人・家族(30)	53.3%	40.0%	16.7%	16.7%	13.3%	6.7%	30.0%	23.3%	16.7%	13.3%	3.3%									
外で友人・家族(118)	54.2%	45.8%	22.9%	23.7%	24.6%	21.2%	31.4%	22.0%	19.5%	16.1%	12.7%									

図表 4-20 性別・年齢別・休日の過ごし方別・区政への要望（複数回答、全体の降順）

	一人暮らしの人向けの施策・サービスは特に必要ない	詐欺などの犯罪に巻き込まれないための情報提供	結婚・交際相手との出会いの場の提供	話し相手、困ったときの相談相手の紹介	契約・交渉などの支援	一人暮らしの人が参加しやすい生涯学習講座などの開催	一人暮らしの人が参加しやすい地域活動の推進	高齢になった時のための買い物・外出・通院支援	一人暮らしの人向けの住宅対策	病気や入院時などに身の回りの世話をしてくれるサービスの提供	
全体(2540)	58.4%	56.5%	42.2%	25.9%	20.9%	19.9%	18.9%	16.3%	13.9%	5.7%	
男性	家で一人(353)	47.0%	49.3%	32.0%	24.1%	15.6%	15.6%	19.5%	24.6%	9.1%	11.0%
	外で一人(164)	46.3%	54.3%	29.9%	28.0%	18.9%	18.9%	22.0%	31.1%	9.1%	9.1%
	35-49歳 家で友人・家族(36)	44.4%	47.2%	36.1%	30.6%	13.9%	8.3%	8.3%	16.7%	5.6%	8.3%
	外で友人・家族(81)	44.4%	50.6%	23.5%	17.3%	12.3%	8.6%	12.3%	18.5%	7.4%	12.3%
	家で一人(370)	60.5%	56.5%	30.3%	22.7%	17.8%	13.8%	20.0%	14.1%	12.4%	6.8%
	外で一人(145)	63.4%	54.5%	34.5%	29.7%	20.7%	15.9%	17.2%	17.2%	9.0%	4.1%
女性	50-64歳 家で友人・家族(20)	65.0%	60.0%	40.0%	25.0%	10.0%	15.0%	15.0%	20.0%	20.0%	5.0%
	外で友人・家族(70)	62.9%	52.9%	45.7%	25.7%	21.4%	25.7%	18.6%	21.4%	18.6%	8.6%
	家で一人(394)	61.4%	58.9%	53.3%	23.6%	24.4%	24.1%	17.8%	13.2%	16.5%	4.1%
	外で一人(105)	61.9%	63.8%	40.0%	25.7%	21.9%	29.5%	22.9%	21.9%	20.0%	1.9%
	35-49歳 家で友人・家族(48)	64.6%	58.3%	52.1%	22.9%	25.0%	27.1%	25.0%	14.6%	16.7%	6.3%
	外で友人・家族(150)	56.7%	61.3%	49.3%	30.7%	18.0%	20.7%	16.7%	21.3%	16.0%	2.7%
女性	家で一人(355)	65.9%	60.3%	55.8%	29.0%	26.8%	23.1%	18.9%	7.6%	16.3%	2.0%
	外で一人(61)	65.6%	67.2%	39.3%	26.2%	24.6%	19.7%	19.7%	6.6%	14.8%	1.6%
	50-64歳 家で友人・家族(31)	61.3%	38.7%	54.8%	19.4%	12.9%	29.0%	9.7%	—	9.7%	6.5%
	外で友人・家族(118)	64.4%	57.6%	52.5%	32.2%	30.5%	22.9%	18.6%	7.6%	19.5%	3.4%

続いて、図表4-20は、一人暮らし向けの施策・サービスとして区に力を入れてほしい取り組みを、11種類の選択肢をあげて複数回答で尋ねた（「その他」は割愛）。

男性より女性で回答率が高い傾向がある。男性は「一人暮らしの人向けの施策・サービスは特に必要ない」がそれほど高い割合ではないが、女性よりも相対的に高い。

過ごし方で特定のパターンは見出せないが、男性35-49歳で家・外とも「一人」で過ごすほうが、「結婚・交際相手との出会いの場の提供」の割合が相対的に高い。特定のパートナーが現在いなくて結婚願望があるということである

う。女性も35-49歳「外で一人」「外で友人・家族」で相対的に高いことからみると、男性と違って「一人」で過ごすのではなく、特定のパートナーが現在いない女性は「外」で過ごす人のほうが結婚願望があるのかもしれない。また、女性では家・友人家族とも「外」で過ごす人は、「一人暮らしの人向けの住宅対策」の割合も高い。

7. 生活満足度と高齢期の暮らし方の意向

本節では、休日の過ごし方が、現在の生活満足度、高齢期の自宅での一人暮らし意向に繋がるものであるか検討していく。

現在の暮らしに満足しているか、「満足している」「やや満足している」「あまり満足していない」「満足していない」の4つの選択肢から1つを選んでもらっている（図表4-21）。表では「満足している」と「やや満足している」を合計して「満足・計」、「あまり満足していない」と「満足していない」を合計して「不満・計」もあわせて表示している。

過ごし方で一定のパターンは見出しにくいですが、男性ではどちらの年代も「家で一人」は、「満足・計」が低く、「不満・計」が高い傾向がみられる。

図表 4-21 性別・年齢別・休日の過ごし方別・生活満足度

		満足・計		不満・計	
		満足している	やや満足している	あまり満足していない	満足していない
男性	35-49歳 家で一人(348)	49.7%	37.1%	50.3%	33.9%
	外で一人(165)	53.3%	43.0%	46.7%	29.1%
	家で友人・家族(36)	66.7%	50.0%	33.3%	19.4%
	外で友人・家族(80)	60.0%	50.0%	40.0%	22.5%
	50-64歳 家で一人(367)	48.0%	36.5%	52.0%	29.2%
	外で一人(140)	60.7%	48.6%	39.3%	28.6%
女性	35-49歳 家で友人・家族(19)	57.9%	36.8%	42.1%	42.1%
	外で友人・家族(65)	56.9%	40.0%	43.1%	24.6%
	家で一人(394)	61.4%	47.5%	38.6%	28.9%
	外で一人(105)	64.8%	47.6%	35.2%	32.4%
	35-49歳 家で友人・家族(47)	55.3%	42.6%	44.7%	34.0%
	外で友人・家族(151)	68.9%	51.0%	31.1%	22.5%
女性	50-64歳 家で一人(350)	60.6%	43.7%	39.4%	26.9%
	外で一人(60)	60.0%	45.0%	40.0%	25.0%
	家で友人・家族(31)	71.0%	45.2%	29.0%	16.1%
	外で友人・家族(114)	62.3%	44.7%	37.7%	27.2%

図表 4-22 性別・年齢別・休日の過ごし方別・高齢期の住まい方意向

	自宅で一人	同居等計	住まい方意向				わからない	
			家族・親戚と同居	高齢者専用施設・住宅	シェアハウス・コレクティブハウス	その他		
男性	家で一人(349)	41.3%	28.9%	17.5%	6.9%	4.0%	0.6%	29.8%
	35-49歳 外で一人(165)	34.5%	41.8%	27.9%	6.7%	6.1%	1.2%	23.6%
	家で友人・家族(35)	28.6%	54.3%	48.6%	-	2.9%	2.9%	17.1%
	35-49歳 外で友人・家族(81)	24.7%	51.9%	33.3%	7.4%	7.4%	3.7%	23.5%
	50-64歳 家で一人(364)	49.5%	23.9%	11.3%	8.5%	2.7%	1.4%	26.6%
	50-64歳 外で一人(143)	51.0%	25.9%	12.6%	5.6%	5.6%	2.1%	23.1%
女性	35-49歳 家で友人・家族(19)	26.3%	52.6%	26.3%	15.8%	10.5%	-	21.1%
	35-49歳 外で友人・家族(67)	38.8%	37.3%	20.9%	9.0%	4.5%	3.0%	23.9%
	50-64歳 家で一人(395)	31.1%	42.5%	16.2%	13.2%	11.6%	1.5%	26.3%
	50-64歳 外で一人(102)	28.4%	44.1%	17.6%	14.7%	11.8%	-	27.5%
	50-64歳 家で友人・家族(48)	22.9%	58.3%	22.9%	16.7%	16.7%	2.1%	18.8%
	50-64歳 外で友人・家族(151)	17.2%	59.6%	30.5%	7.3%	19.9%	2.0%	23.2%
女性	50-64歳 家で一人(352)	46.9%	32.1%	7.1%	12.2%	10.8%	2.0%	21.0%
	50-64歳 外で一人(61)	39.3%	47.5%	6.6%	18.0%	19.7%	3.3%	13.1%
	50-64歳 家で友人・家族(30)	43.3%	50.0%	20.0%	16.7%	10.0%	3.3%	6.7%
	50-64歳 外で友人・家族(116)	35.3%	39.7%	9.5%	12.1%	13.8%	4.3%	25.0%

続いて、高齢期(65歳以上)においてどのような住まい方を望むかについて、「自宅で一人暮らし」「家族・親戚と同居」「高齢者専用施設・住宅」「シェアハウス・コレクティブハウス」「その他」「わからない」の6つの選択肢から1つを選んでもらっている。このうち「自宅で一人暮らし」と「わからない」以外は「同居等・計」として、まとめて表示している。(図表 4-22)。

男女どの年代でも「家で一人」は、「自宅で一人」の割合が高く、「同居等・計」の割合が低い傾向がみられる。男性および女性35-49歳では「外で一人」も、同様の傾向がみられる。

男性両年代および女性50-64歳で「家で友人・家族」は「同居等・計」の中でも「家族・親戚と同居」の割合が高い。特に、男性35-49歳の「家で友人・家族」は半数近くあげていることから、現在のパートナーとの結婚(事実婚も含め)を前提にした回答と考えられる。

8. 一人で過ごすことと生活満足度、高齢期の暮らし方との関係

本節では、分析の最後として7節で扱った、現在の生活満足度、高齢期の自宅での一人暮らし意向を被説明変数とする回帰分析をおこなう。特に、現在の生活満足度のクロス集計では暮らし方との関係性がつかめなかったため、他の変数を統制した上での暮らし方の影響を確認するとともに、どのような要因が現在の生活満足度と高齢期の自宅での一人暮らし意向に影響を与えているのか

を明らかにする。

説明変数は、2節で示した休日の過ごし方のロジスティック回帰分析(図表 4-6)を基本として、これまでのクロス集計の検討の結果から、下記の図表 4-23の変数を加えて分析を行う。

図表 4-23 回帰分析に使用する変数の得点化変数とダミー変数

得点化変数		
	得点範囲	得点付け
生活満足度得点	1～4	満足度の最も高いほうを4点(生活満足度の分析では被説明変数、高齢期の住まい方の分析では説明変数として使用)
主観的健康状態得点	1～4	最も良好なほうを4点
精神的健康状態得点	2～6	下記の2つの質問の合成変数、最も良好なほうを6点。「気分が沈んだり、憂うつな気持ちになったりする」「どうも物事に対して興味がわからない、あるいは心から楽しめない感じがする」
ダミー変数		
	カテゴリ数(基準を含)	基準カテゴリ
親しくしている友人多寡	3	多いほう
入院・介護世話してくれる人	2	いない
一人暮らし継続意向	3	続けたくない
現在の区定住意向	3	続けたくない
交際相手との出会いの場の提供希望	2	希望なし
休日過ごし方	4	外で友人・家族
高齢期の暮らし方意向	3	同居等(高齢期の暮らし方分析の被説明変数として)

(1) 生活満足度

図表 4-24 生活満足度の重回帰分析 一人で過ごすことの影響

	B	ベータ
女性ダミー	.153	.086 ***
中学卒業時の居住地 (基準：23区)		
東京圏郊外部	-.078	-.037
地方圏	-.085	-.048 +
満年齢	-.003	-.029
教育年数	.014	.029
従業上の地位 (基準：正規雇用)		
役員、正規管理職	-.050	-.022
非正規雇用	-.132	-.059 **
自営業その他	.073	.023
無業	-.052	-.016
年収 (中央値換算)	.001	.261 ***
配偶関係 (基準：既婚・事実婚)		
未婚	.055	.027
離死別	.051	.023
現在の区居住年数中央値換算	-.004	-.049 *
一人暮らし年数中央値換算	-.004	-.041 +
居住形態 (基準：賃貸)		
持ち家・分譲	.255	.129 ***
団地等	.122	.023
親しくしている友人多寡 (基準：多いほう)		
少ないほう	-.104	-.053 *
いない	-.200	-.058 **
入院・介護世話してくれる人ダミー	.122	.054 **
主観的健康状態得点	.193	.141 ***
精神的健康状態得点	.154	.208 ***
一人暮らし意向 (基準：続けたくない)		
続けたい	.342	.186 ***
わからない	.149	.083 **
現在の区定住意向 (基準：続けたくない)		
続けたい	.234	.127 ***
わからない	.097	.050
交際相手との出会いの場の提供希望ダミー	-.135	-.056 **
休日過ごし方 (基準：外で友人・家族)		
家で一人	.105	.058 *
外で一人	.079	.035
家で友人・家族と	.108	.027
定数	.396	+
調整R ²		.308 ***
分析度数 (n)		(2134)

(+) P<.10, * P<.05, ** P<.01, *** P<.001)

図表4-24は、生活満足度得点を被説明変数とした重回帰分析の結果である。表の上から順に、属性要因から、有意水準5%未満で影響があるものを列挙していくと、女性のほうが、非正規雇用より正規雇用のほうが、年収が高いほうが、現在の区への居住年数が短いほうが、賃貸より持ち家・分譲のほうが、より生活に満足している傾向がある。本報告書の第3章で行っている属性の重回帰分析と比べ、中学卒業時の居住地(出身地)の影響がなくなっている。これは居住形態と交際があるため、居住形態をモデルから除外すると、第3章と同様、中学卒業時の居住地(出身地)の影響がでてくる。属性要因の中では、標準化係数のベータが最も高いのは年収、次が持ち家・分譲となっている。

続けて、属性以外の要因を表の上から順に、有意水準5%未満で影響があるものを列挙していくと、親しくしている友人「少ないほう」「いない」より「多いほう」が、入院・介護世話してくれる人いるほうが、主観的健康状態得点、精神的健康状態得点とも高いほうが、一人暮らしを「続けたくない」より「続けたい」「わからない」のほうが、現在の区定住を「続けたくない」より「続けたい」ほうが、交際相手との出会いの場の提供希望がないほうが、生活満足度が高い傾向がみられる。「交際相手との出会いの場の提供希望ダミー」の変数は、交際・結婚願望の指標として捉えると、交際・結婚願望がない人のほうが現在の生活に満足し、願望のある人のほうが満足していない傾向があることになる。これらの中で、標準化係数のベータが最も高いのは、精神的健康、次に、一人暮らし継続意向の「続けたくない」に対する「続けたい」、次に、主観的健康状態である。

社会関係要因は、これまでの社会学等の先行研究が示すように、社会関係が充実しているほうが、サポートネットワークのあるほうが、生活満足度が高い傾向がある。現在の区での暮らし、一人暮らしを続けたいと思っているほうが満足している。これらは満足しているがゆえに、変える必要がないという因果関係が逆であると考えた方がよいかもしれない。

肝心の休日の過ごし方は、「外で友人・家族」よりも「家で一人」のほうが満足している傾向がある。クロス集計では男性ではむしろ「家で一人」のほうが不満の割合が高いようにみえたが、これらの変数を統制した上での単独の影響があるといえる。「家で一人」以外の過ごし方は満足度に影響がない。ただし、標準化係数のベータは.058と小さく、ベータの絶対値は「親しくしている友人多寡」「入院・介護世話してくれる人」「交際相手との出会いの場の提供」などの社会関係要因とほぼ同じくらいの影響力である。

社会関係要因、継続居住要因で統制した上でも、「家で一人」が独立した影響として出てくるということは、「家で一人」で過ごすということ自体、これらで説明できない意味を生活満足度に対しては持っている。つまり、「家で一人」で過ごすことはそれだけで、生活の満足度をもたらしているといえる。

(2) 高齢期の暮らし方意向

図表4-25 高齢期の暮らし方意向の多項ロジスティック回帰分析 一人で過ごすことの影響

	(基準：同居等)			
	自宅で一人		わからない	
	B	Exp(B)	B	Exp(B)
女性ダミー	-.767	.464 ***	-.432	.649 **
中学卒業時の居住地 (基準：23区)				
東京圏郊外部	-.111	.895	.062	1.064
地方圏	-.342	.710 *	-.143	.867
満年齢	.030	1.031 **	.010	1.010
教育年数	-.029	.972	-.071	.932 *
従業上の地位 (基準：正規雇用)				
役員、正規管理職	-.030	.971	.023	1.024
非正規雇用	.267	1.306	-.013	.987
自営業その他	.136	1.145	-.114	.892
無業	.217	1.243	-.089	.914
年収 (中央値換算)	.000	1.000	-.001	.999 *
配偶関係 (基準：既婚・事実婚)				
未婚	.924	2.519 **	.399	1.490
離死別	1.187	3.278 ***	.326	1.386
現在の区居住年数中央値換算	.002	1.002	.004	1.004
一人暮らし年数中央値換算	.007	1.007	.006	1.006
居住形態 (基準：賃貸)				
持ち家・分譲	.482	1.619 ***	-.079	.925
団地等	-.191	.826	-.848	.428 *
親しくしている友人多寡 (基準：多いほう)				
少ないほう	.594	1.811 ***	.246	1.279
いない	1.087	2.964 ***	.635	1.887 *
入院・介護世話してくれる人ダミー	-.536	.585 ***	-.607	.545 ***
主観的健康状態得点	.049	1.050	.074	1.077
精神的健康状態得点	-.003	.997	-.085	.919
一人暮らし意向 (基準：続けたくない)				
続けたい	2.061	7.857 ***	.519	1.680 **
わからない	.938	2.555 ***	.816	2.262 ***
現在の区定住意向 (基準：続けたくない)				
続けたい	.274	1.315	.527	1.695 *
わからない	-.005	.995	.619	1.857 *
交際相手との出会いの場の提供希望ダミー	-.343	.709 *	-.071	.931
生活満足度得点	.128	1.137 +	.063	1.065
休日過ごし方 (基準：外で友人・家族)				
家で一人	.400	1.492 *	.189	1.208
外で一人	.129	1.138	-.003	.997
家で友人・家族と	-.111	.895	-.493	.611
定数	-3.985	***	-.600	
疑似R ² (Nagelkerke)		.284		
モデルχ ²		607.621		
分析度数 (n)		(2104)		

(+ P<.10, * P<.05, ** P<.01, *** P<.001)

図表4-25は、高齢期の暮らし方意向について「同居等」を基準とした多項ロジスティック回帰分析の結果である。「同居等」に対して、「自宅で一人」「わからない」の結果を表示しているが、まず本章の関心である「同居等」に対して「自宅で一人」の結果についてみていく。

表の上から順に、属性要因から、有意水準5%未満で影響があるものを列挙していくと、男性のほうが、地方圏より23区出身者のほうが、年齢が高いほうが、既婚・事実婚よりも未婚、離死別のほうが、賃貸より持ち家・分譲のほうが、「同居等」に対して「自宅で一人」とする傾向がみられる。ロジスティック回帰分析の効果量としてオッズ比 (Exp (B)) を表示しているが、最も大きいのは、既婚・事実婚に対しての離死別 (約3.3倍)、次が未婚 (約2.5倍)、その次が女子ダミーであるが、マイナスの効果なのでオッズ比の逆数をとると、約2.2倍で男性がより「自宅で一人」となる。

続けて、属性以外の要因を表の上から順に、有意水準5%未満で影響があるものを列挙していくと、親しくしている友人が「多いほう」より「少ないほう」「いない」が、入院・介護世話してくれる人がいないほうが (手段的サポートがないほうが)、一人暮らしを「続けたくない」より「続けたい」「わからない」のほうが、交際相手との出会いの場の提供希望がないほうが、生活満足度が高いほうが、「同居等」に対して「自宅で一人」とする傾向がみられる。これらの中で効果が大きいのは、一人暮らし意向の「続けたくない」に対して「続けたい」が約7.9倍で最も高く、親しくしている友人多寡の「多いほう」に対して「いない」が約3.0倍、「自宅で一人」となる。

一人暮らしを続けたいと思っている人ほど、高齢期も続けたいと思っているのはある程度予測できる結果である。社会関係要因は、結果を逆に読むと、社会関係が充実しているほうが、サポートネットワークのあるほうが、交際相手の出会いの場を望んでいる人のほうが、高齢期の暮らし方で同居等を望むと解釈できる。

休日の過ごし方は、「外で友人・家族」よりも「家で一人」のほうが、「同居等」に対して「自宅で一人」とする傾向がみられ、これらの変数を統制した上での単独の影響がある。「家で一人」以外の過ごし方は高齢期の住まい方に影響がない。ただし、オッズ比 (Exp (B)) は約1.5倍であるから、このモデル中では、マイナスの効果で逆数をとった場合の「地方圏」「交際相手との出会いの場」などの要因と同じくらいの影響でそれほど大きくはない。

生活満足度と同様、社会関係要因、継続居住希望要因、生活満足度得点で統制した上でも、「自宅で一人」が独立した影響として出てくる。つまり、「家で一人」で過ごすことはそれだけで、高齢期に自宅で一人で暮らすとライフスタイル志向しやすいということである。

ちなみに、「同居等」に対して、「わからない」の結果については、「自宅で一人」と同じような結果になっている部分もあるが、「自宅で一人」で有意でなく、「わからない」だけで有意なものは、表の上から順にみていくと、教育年数が低いほど、年収が低いほど、賃貸より団地等の集合住宅のほうが、現在の区定住を「続けたくない」より「続けたい」、「わからない」のほうが、「同居等」に対して、「わからない」とする傾向がみられる。これらの要因から、現在の経済的な暮らしむきが芳しくなく、動くに動けない状況にある単身者が、高齢期の暮らし方に見通しが立たない結果、「わからない」と回答すると解釈することができる。

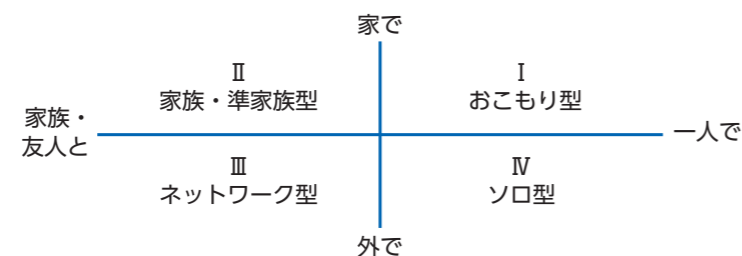
9. まとめと考察

本章の各節の検討によって様々な結果が得られたが、それら踏まえ、**図表4-26**のようなネーミングで、休日の過ごし方をもとにした単身者のライフスタイルを整理してみる。

まず、「家で一人」で過ごすタイプⅠは家から外に出ないという特徴から「おこもり型」、タイプⅡは、家でパートナーや家族と過ごすという点がはっきりしているのが「家族・準家族型」、タイプⅢは家族もそうだが、家族以外の友人とのつきあいも多いのが特徴なので「ネットワーク型」、タイプⅣは、一人で外で活動するという点で「ソロ型」と名付けた。

まず先に、これまで詳しく扱ってこなかったⅡの「家族・準家族型」とⅢの「ネットワーク型」について述べる。

図表 4-26 休日の過ごし方による単身者のタイプ



Ⅱの「家族・準家族型」は、パートナーとの関係性が顕著である。このタイプの未婚者・離死別者は、将来の結婚に移行する過渡的な形として現れている面と、必ずしも結婚を想定しない新しいタイプのパートナーシップの形との面と両方が含まれていると考えられる。本調査でみる限り、量的には多いタイプでなく、今後増加するとしたら後者のような、同性婚も含めたパートナーシップの多様化がすすむことで一定の存在感が出てくるタイプかもしれない。

Ⅲの「ネットワーク型」は、家族に加えて、家族以外の友人・知人とネットワークがあり、「何か新しいことをはじめようという気持ちになり」やすく、4つのタイプ中では最も家族・親族以外の他人と積極的に活動している。従来の独身貴族のような、大都市に住む単身者である利点を最大限活かして生活しているように見える。本調査では、男性よりも女性に多いが、このタイプの女性は、一人暮らし向けの住宅政策を求めている割合が高いことなどから、経済的・社会的に脆弱な立場である女性が大都市で単身として暮らしていく際の生活戦略としての側面が強いのかもしれない。

Ⅳの「ソロ型」は、一人で好きな場所へ行き、一人で好きなことをして、自身にとって有意義な時間を過ごすという点で特徴がある。中には、自宅とパチンコ店やギャンブル場・施設とを往復するというⅠの「おこもり型」の亜種のような面も含まれている可能性がある。他方、近所のスポーツジムなどのスポーツ施設に出かけ、そこで定期的に運動していたり、それゆえにか、精神的・身体的に健康状態も悪くない。女性は図書館、コミュニティーセンターなどの公共施設も活用したりしている。また、女性は友人・知人の数は少ないが、家族や職場・学校時代の友人と交流はある。あえて休日是一个人で過ごしているようにもみえ、現代的な新しいライフスタイルといえる側面もある。ただ、Ⅲの「ネットワーク型」と同様、女性で一人暮らし向けの住宅政策を求めている割合が高い。いっぽうで、特に男性は35-49歳で出会いや結婚相手を求めており、「寂しいと感じることが多い」が4つのタイプの中で最も割合が高い。相手が見つければⅡの「家族・準家族型」に移行するような過渡的な形として現れている側面もある。この「ソロ型」も、数は決して多くないが、男女差もあり、いくつかの異なったライフスタイルが混在していると考えられる。

Ⅰの「おこもり型」は、どの分析においても傾向としては、社会的孤立によるものとみられる要因が目立つ。低学歴、低年収、無業、非23区出身者、友人・知人少ない、電話やインターネットでも交流していない、サポートネットワークが弱く、精神的にも身体的にもあまり良くない傾向があるなど、列挙すれば、何一つ社会的に望ましいとされることはなく、この点では単身者の「役割のない個人」として生きる負の側面が出ているといえる。

「おこもり型」は、全体の半数以上を占めており、分析はあくまでも他のタイプと比較しての特徴となるため、すべてがそうした単身者であるわけでないし、多様性があることもわかったが、社会的に孤立している、その傾向のある人が一定数含まれていることは間違いなし、孤立するリスクが高いタイプであるといえる。

他方、「おこもり型」は、生活に満足しており、高齢期も自宅で一人で暮らしていきたい単身者でもあり、暮らしの面で「自立した個人」として生きる側

面が強いといえる。よって、この意味で「おこもり型」として生きていくには、「役割のない個人」としての脆弱さや危うさ（リスク）をカバーできるような条件、いわば社会的に「一人で生きられる能力」が絶対的条件であり、それが失われれば、ふだんは大都市の摩天楼によって不可視化されている「役割のない個人」として生きる負の側面が表面化し、場合によっては深刻化すると考えられる。

また、Ⅳの「ソロ型」と同様に、男女差があり、女性は友人・知人の人数はⅢの「ネットワーク型」より少ないが、家族や職場・学校自体の友人との交流はあり、男性ほど孤立しているようには見えない点と、若い男性は出会いや結婚相手を求めており、相手が見つければⅡの「家族・準家族型」に移行するような過渡的な形として現れている側面もある点では、Ⅳの「ソロ型」とも共通している。

単身者のライフスタイルの過渡期としての側面は、長寿化、晩婚化・未婚化などによるライフコースの長期化にともなう青年期のモラトリアム期間の延長によって生じている。特に男性については、第3章でも述べられているように、性別役割分業に基づいた家族の中での稼得役割中心のライフスタイル以外に、男性のライフスタイルが確立しておらず、パートナーを得て結婚するまでのモラトリアムのまま時間が過ぎている状態とみることもできる。

他方、孤立するでも、群れるわけでもなく、「自立した個人」として「役割なき世界」を生きるといった新しい単身者のライフスタイルを「一人で過ごす」タイプに見出すとすれば、どちらかといえば女性のほうにそうした傾向があるといえ、その点ではネットワーク型とは別の形の女性の生活戦略なのかもしれない。

さらに、回帰分析で明らかになったように、「家で一人」で過ごすことは、生活満足を満たすことや高齢期の自宅での一人住まいを希望することに単独の影響を与えていることがわかった。けして大きい効果でないので、今後の研究によって他の要因で説明されてしまうかもしれないが、少なくとも本研究において主要な属性要因、社会関係要因等、考えられうる様々な要因で統制しても効果が残ることは興味深い。つまり、「家で一人」過ごすことじたいが他で説明できない意味をもっているということであり、新しい単身者のライフスタイルの確立の兆しがここに現れているのかもしれない。もしそうだとすると（そうでないとしても）、「家で一人」過ごすことで生活の満足が満たされ、高齢になっても自宅で一人で過ごしたいと希望している「おこもり型」の単身者に対して、外野から社会的な孤立のリスクを喧伝したとしても、これまでのライフスタイルを急に変えるようにも思えない。

社会学的にみれば、Z.バウマン⁵が指摘するように、社会の個人化はますます

すすみ、地域や職場・家族といった、近代において安全強固だった関係性は失われていく（「液状化する近代」）。その代わりになるものとして考えられているのは、家族の絆、地縁や血縁のような強固な必然的なものでなく、偶然性の支配する中で、たまたま遭遇した共感する考え方や共通の目的・目標を通してゆるやかに繋がるネットワークとされる⁶。つまり、「自立した個人」のあり方を尊重しつつ、東京23区という魅力ある空間の特性を活かした、ゆるやかな社会的なネットワークへの参画を促すしか方策はないと考えられる。

単身者のライフスタイルの過渡期の側面も含め、もはや、東京23区では「おこもり型」と「ソロ型」の単身者が主流であって、そうした志向の単身者を支えていくような都市政策が求められているといえよう。

本調査からは示唆される点として、第1に地域活動である。単身者の7～8割は地域活動をしていないが、女性35-49歳の「おこもり型」も「ソロ型」も「問題意識や関心を持つなど自分の意思」があれば地域活動のきっかけになると考えている。また、女性35-49歳の「ソロ型」と女性50-64歳の「おこもり型」と「ソロ型」も、「区の広報誌やホームページなどからの情報」がきっかけになると答えている。女性については、問題意識や関心を喚起できれば、あるいは区の広報誌やホームページなどからうまく情報発信できれば（単身者向けの情報発信を工夫する、単身者向けに情報を組み直す等）、女性の「おこもり型」・「ソロ型」の単身者は地域活動への参画を促すことができるかもしれない。ただし、男性には女性ほど効果がなさそうではある。

第2に、経済的な側面では後述する住宅政策の他に、メンタル面での支援施策もあげられる。「おこもり型」は、「気分が沈んだり、憂うつな気持ちになったりする」や「どうも物事に対して興味がわからない、あるいは心から楽しめない感じがする」の割合が高い傾向がみられた。メンタル面が不調ゆえ家で一人で過ごしているとも考えられる。本稿の分析から休日の過ごし方とメンタル面との間の因果関係はわからないが、相関関係があることがわかった。メンタル面での不調は働くことに直結する問題であり、それが原因でいったん職場をやめてしまうと、家族の支援がなければ、経済的に困窮してしまい、質のよい雇用の再就職もままならない。働いているときは、職場でのメンタル支援が利用できるが、無職になるとこれが利用できない。地域の福祉メニューへの切り替えがうまくいくように、地域でのメンタルサポート体制について情報発信を積極的に行う必要がある。

第3に、困ったことや区政に求める単身者向けの施策についてである。「お

5 Bauman, Zygmunt, 2000, *Liquid Modernity*, Polity Press (= 森田典正2001訳『リキッド・モダニティ：液状化する社会』大月書店)

6 荒川和久, 2017, 『超ソロ社会：独身大国日本の衝撃』PHP新書

こもり型」・「ソロ型」とも「病気になったときに身の回りの世話をしてくれる人がいない」「人との会話が少ない」という悩みが多い。前者は手段的サポートの結果とも整合的で、実際にそういう人がいないから困っているといえる。また、タイプにかかわらず、区政に求める取り組みとして「病気や入院時などに身の回りの世話をしてくれるサービス」は第1位にあげられている。

さらに、さきほども指摘したように、男性35-49歳で「おこもり型」と「ソロ型」、女性35-49歳も「ソロ型」と「ネットワーク型」で「結婚・交際相手との出会いの場の提供」を求める割合が高いこと、さらに、女性35-49歳の「ソロ型」と「ネットワーク型」では、単身者向けの住宅政策を求める割合も高いことなど、単身者に特徴的なニーズが存在する。こうしたニーズを市場原理に基づいた解決に求めるだけでなく、東京23区という大都市空間の特性を活かし、「自立した個人」として、ゆるやかな社会的ネットワークへの参画を促すというような政策、文化・スポーツ政策等を含めて総合的に模索していく必要がある。

以上のように、社会学的立場からは、他人と何らかの形で繋がることを奨励せざるを得ない。しかし、一度繋がってしまえば、他人とうまく距離をとることが難しかったり、常に他人と繋がっていることが求められる煩わしさはある。東京23区のような大都市は、何でもできる状況ではあるが、あえて「何もしない」自由さもある。何もしなくても誰からも干渉されることない、中世のドイツの諺のような「都市の空気は自由にする」を「おこもり型」は満喫しているのかもしれない。こうした他人と繋がりから一歩身を引いているような単身者はどうすればよいのだろうか。実際にこうした単身者は本調査の結果からみても少なくないように見える。

さきほど紹介したZ.バウマンの「液状化する近代」においては、他者とゆるやかに繋がることは、目に見える他人と繋がることだけを意味しない。現実の世界でもネットの世界でも、目に見えない他者と目に見えない形で繋がることも含まれる。「はじめに」でも述べたように、壮年期を単身者として生きることは、働いて生きることであり、それによって生計を維持し、自己実現を図り、社会的役割を実現することでもある。仕事上の役割を果たすことは、クライアントなどの目に見える誰か（他人）に対する役割だけを果たしているのではなく、目に見えない誰か（他者）の役にも立っている。つまり、人間は社会の中で生きていく限り、目に見える他人とともにあるだけでなく、常に目に見えない他者のためにある存在としても存在している。例えば、私たちは働いて、東京都と居住区に対して住民税を支払っている。その税金は自分や身近な他人のためだけでなく、見知らぬ地域の誰か（他者）のために役に立っている。あるいは、地域で買い物すれば、ふだん地域と関わりがまったくなく見知らぬ人ば

かりの地域（他者）の経済の活性化にいくばくかの貢献をしている。

大都市で一人で過ごす単身者にとって、「役割なき個人」としてだけで生きるのではなく、自らの存在を積極的肯定して、「自立した個人」として、見える地域で見えない他者に貢献するという、地域や社会（他者）との連帯を保ちながら（それがインターネットを通じたものでもよいし、むしろそのほうが可能性が開けているかもしれない）、目には見えない他者への「役割を自覚した個人」として生きることが、偶然遭遇するかもしれない見知らぬ他人とのゆるやかな繋がりへの入り口になるかもしれない。つまり、常に「他人とともにある」（閉じられた私的な・親密的な・共同的な）存在としてよりも「他者のためにある」（第三者に開かれた公共的な）存在⁷を意識して生きていくことが、単身者が大都市で一人過ごすことの現代的な意味ではないだろうか。

そうした、他人と繋がってなくても、他者との連帯感をもち「役割を自覚した自立した個人」として、「他者のためにある」存在として生きる「見知らぬ」存在としての単身者を排除せず、包摂するような社会システムの構築がコロナ禍の中では、単身者向けとしてだけでなく、社会全体の問題として求められているともいえる。

7 中島正男, 2009, 『バウマン社会理論の射程：ポストモダニティの倫理』 青弓社

参考文献

- 荒川和久, 2017, 『超ソロ社会：独身大国日本の衝撃』 PHP新書.
- Bauman, Zygmunt, 2000, *Liquid Modernity*, Polity Press (= 森田典正2001訳 『リキッド・モダニティ：液状化する社会』 大月書店).
- シチズン時計株式会社編, 2016, 「調査概要 独身ビジネスパーソンの休日時間」 (<https://www.citizen.co.jp/research/time/20161122/outline.html> 2020年11月1日閲覧).
- Klinenberg, Eric, 2012, *Going Solo: The Extraordinary Rise and Surprising Appeal of Living Alone*, NY: Penguin Press (= 白川貴子訳, 2014, 『シングルтон ひとりで生きる!』 鳥影社).
- 久我尚子, 2018, 「増えゆく単身世帯と消費生活の特徴」 『統計』 69(4), 14-19.
- 三輪哲, 2019, 「中年単身層における生活様式と意識にみられるジェンダー差」 『家族社会学研究』 31(2), 160-171.
- 村山陽・長谷部雅美・高橋知也・小林江里香, 2019, 「首都圏に居住する単身世帯の中高齢者における近隣との世代間交流の必要性の認識：同居世帯の中高齢者との比較から」 『日本世代間交流学会誌』 9(1), 3-11.
- 中島正男, 2009, 『バウマン社会理論の射程：ポストモダニティの倫理』 青弓社.
- 野本美奈子, 2000, 「Capacity to Be Alone の逆説性と多重性に関する研究：＜一人である能力尺度＞精緻化の試み」 『大阪大学教育学年報』 5, 125-137.
- 尾高邦雄, 1953, 『新稿 職業社会学』 福村書店.
- 田中喜行・東雄大・勇上和史, 2020, 「労働市場＜東京＞の特徴」 『日本労働研究雑誌』 718, 4-17.
- 園部雅久, 2014, 『再魔術化する都市の社会学：空間概念・公共性・消費主義』 ミネルヴァ書房.
- Winnicott, D. W., 1958, "The Capacity to be Alone", *In The Maturation Processes and the Facilitating Environment*, London: Hogarth Press, 29-36 (= 牛島定信訳, 1977, 『一人でいられる能力—情緒発達の精神分析理論』 岩崎学術出版社, 21-31).

第5章

インタビュー調査からみた 壮年期単身者のライフ ストーリーと展望

第5章 インタビュー調査からみた壮年期単身者のライフストーリーと展望

1. インタビューの概要

本章では、今回インタビューを行った特別区に暮らす壮年期単身者22名のライフストーリーを短い記述で提示し、その内容についていくつかの項目に着目してまとめを行う。

第1章でも示した通り、本インタビューは、性別、居住区、出身地などに偏りが無いよう対象者を抽出した。その結果、様々な生活歴を経て現在特別区に居住している様子、親や兄弟・姉妹などとの家族関係や友人関係、将来への展望を聞くことができた。

さらに、本インタビューは40代、50代を中心に行うことで、特徴ある年代の違いを見出そうとした¹。40代は就職時にいわゆる氷河期を経験している年代であり、一方50代の多くはバブル景気の最中に就職をしている。さらに彼らの親世代の状況を考えると、40代ではまだ自立している親が多い一方、50代の親は後期高齢者として様々な問題に直面していることも想定される。インタビューではこのような違いが東京23区に居住する壮年期単身者に異なる影響を及ぼしているのかを見ることもできると考えた。また、本インタビューは新型コロナの影響が長引く2020年後半に行われたことから、単身で暮らす方たちがどのようにこの状況を捉えているかについてもあらためて聞くことができた。

なお、ストーリーを書き起こすに際しては参加者のプライバシーを尊重し、一部職業、地名などを内容に大きな変化を与えない範囲で変更している。ここでも改めて貴重な時間を割いていただいたインタビュー参加者の皆さまに厚く感謝申し上げたい。

¹ 22名中、30代が1名、60代が1名含まれている。

2. 22人のライフストーリー

Aさん、40代、男性

Aさんは東京都郊外で育ち、大学に進学し、就職氷河期の真っただ中に卒業した。しかし、氷河期という意識はあまり強くなく、システム系の会社に正社員として比較的スムーズに就職が決まった。しかし5年勤務した後に転職、その後数回の転職を経て現在は派遣社員である。システム系の仕事は非正規で、時間外、長時間労働が多く、次の仕事を探す不安は付きまとうが、好きな仕事なのでできるだけ長く仕事をしていきたいと思っている。

体力のある限り、ずっとやっていきたいんですけども、ちょっとこの先、自分の体力的に今の夜勤の仕事とかが耐えられるかどうかというのは、なってみないと分からないので何とも言えないんですけども、はい、自分の体が大丈夫な限りはずっと続けていきたいですね。
会社同士の契約のタイミングで、もしかして契約が取れなかったときに仕事を失う可能性があるということと、あとは、そうですね、例えば増税とかですかね。当然、今回のコロナで大分お金を政府も使っていますから、今後当然、税金上がるでしょうし、そういった面での不安がありますね。

今の会社では学ぶ機会も多く、同僚とは良好な関係を保っている。友人は少ないが、彼らの多くはAさんと同じ単身者である。

父が数年前に亡くなったために、母が一人暮らしをしており、月に1回程度は訪問をし、正月は一緒にすごしている。家庭を持っている兄とはあまり交渉がない。

[兄とは] 何かないと会わないですね。何かというのは、法要とか、あと最近でしたら先週会ったんですけども、父の墓がまだ決まっていなかったんですね。お墓の契約をしに、一緒に墓地のほうに行ったという感じで、そういう何か出来事があれば会うという感じですね。

家族からは結婚を勧められているが、あまりその気はない。ネットで出会い、交際している女性もいるが、一人暮らしを気に入っている。職場も独身が多く、都会で暮らすことで、結婚へのプレッシャーは感じていない。

趣味もあるが、一人であることを好んでいる。もっとも老後のためには違う

趣味があるといいな、と思うこともある。収入は低いので節約にも努めている。

趣味がバイクとかキャンプなんですけど、その年になっても続けられるのなら続けたいですし、どちらも割と体力が必要な趣味なので、それが続けられるかどうか、そのときになってみないと分からないんですけども、そうですね、ちょっと違う趣味もこれから探していけないといけないのかなと思いますね。
無理のないような形で生活していると。要するに高いものは買わないということですよ。高級なものは買わない、車とかは持たないようにする、お酒もたばこもやらないという形で、可能な限りの出費を抑えていますので、それで何とかなっている感じですね。

30歳までは親元で過ごしていたが、当時の勤務先に便利だった現住所でマンションを購入した。休日に周囲に出歩くことはよくある。順番なのでマンションの理事もつとめ、何人か顔見知りもマンション内にいる。単身者が多いマンションなので居心地は悪くない。何か困ったことがあったら、隣人と相談して、マンションの管理事務所に連絡をするだろう。そのほか地域の活動に積極的に参加することには興味はない。

会社以外ではあまり他人と社会関係を結ぶことには必要性も興味も感じていない。一人暮らしに現時点では不満はなく、あまり将来起こり得ることに対して不安も感じていない。将来高齢で身体が不自由になった場合は介護付きの施設に入るだろうと思っはいる。

[会社以外で知り合いを作る、付き合いたいということは] 特にないですかね。特に、はい、無理に。無理にというか、あえて新しい知り合いをつくっていかうという必要性も感じないですし、はい。
体に不自由が出てきて難しいようでしたら、そういった介護付きの施設に入る必要性も出てくるのかなとは思っていますね。そうするしかないようでしたら、もうそうします。

Bさん、40代、男性

Bさんは明るい口調ながらも現在は失業中。新型コロナの影響もあり、就業の見通しも立っていない。もともとは東京で生まれたがすぐに両親が転居したため地方で育った。地元の情報系専門学校を卒業し、そのまま両親の家に同居しながら飲食業や派遣の仕事をしてきた。東京に移動したのは30歳の時。役

者にあこがれ東京の養成学校に入学をした。その際、子どものころからあこがれていた東京の中心部に住むことにした。場所が気に入っているので、それ以来ずっとこの地域に住んでいる。

子どもの頃に何となく[現住所]に引かれたというのが一番だったので、何でかは分からないんですが、[現住所]に引かれて、何となく[現住所]に住みたいなというので、じゃあ東京行くな[現住所]周辺から探していこうかなという感じでした。仕事とかが決まったら引っ越さなきゃいけない場合もあると思うので、それはちょっとまだ分からないですけども、気持ちとしては[現住所]に住み続けたいなとは思っていますね。

しかし数年で役者になることはあきらめた。その後正社員でWeb関係の仕事をしたが、仕事の内容に不満があり退職。ここ2、3年は無職である。今はコロナ禍で仕事もなかなか探せず小康状態。生活は貯金の取り崩し、多少の収入、親からの仕送りなどでまかなっている。落ち着いたら仕事を見つけ、貯金をして、結婚もしたいし、子どもを持ちたいという希望もある。せっかく都心に住んでいて周囲に美味しい店も多いので、結婚をして、相手と一緒に外食をするなどの楽しみがあればよいと思っている。

両親は地方で健在で、母親はよく電話をしてきてBさんの状態をこころがけてくれているようだ。何かあったときにまず相談するのはおそらく母親であろうと思っている。休職中ということもあり、新型コロナの影響がなくても帰省することはあまりない。将来親になにかあったら、現在は離婚をして親元にいる弟が面倒をみるのだろうと考えている。

友人は少なく、仕事関係で知り合った人も仕事を辞めたのちには会うこともない。

[かつての仕事関係の友人とは] 連絡取りにくいとかいうよりも、連絡してこなくもなりますし、しにくくなるかな。それで音信不通になっちゃう感じですね。プライベートまで仲よくなるほど仲よくなるはならなかったというのがあるのかなとは思っていますね。

出身地には連絡を取っている小学校時代の友人がいるが、たまにLINEでやり取りする程度。近所にも顔見知りと呼べるような人はいない。無職であったり、コロナであったり、というネガティブなことをなるべく考えないように努めながら、日々自宅でパソコンでの情報収集やゲームなどをして過ごしている。

たまには孤独感を感じたらばそういうふうを感じる時はありますが、なるべくそういうふうにならないように、何かテレビであったりインターネットであったり、そういうのに触れていればまだ紛れるのかなとは。

それでも東京は仕事が多く、都心のマンションは利便性もよく、なかなか故郷に戻る、という選択肢は生まれにくいようである。

一番は自分がやりたい仕事があるのが東京かなとは思っていて、今はIT関係の仕事探してるという話をしたと思うんですけど、地元のほうではそういう関係の仕事ほとんどないので、探してもなかなか仕事に就けないのかな、求人自体があんまりないような状況なので。そう考えると東京で探すしかないのかなとは思っています。

Cさん、40代前半、女性

Cさんは地方出身。東京の短大に進学するまでは地元の親元で暮らしていたが、そのときから高校を出たら東京に行きたいと思っていた。念願かなって東京で大学生活を送っているときに、イベントのアルバイトで経験した仕事にあこがれ、これを仕事にしたいと思うようになる。卒業後は就職をせずに、アルバイトで経験を積み、少しずつキャリアを重ね、今はその仕事をフリーランスでこなしている。もう仕事としてはこれしかできないだろうし、楽しんでやっているのでなるべく長く続けたいと思っている。しかしフリーランスとして仕事に保証はなく、今年は新型コロナの影響でずいぶん減った。将来受け取れる年金も少ないであろうことは心配している。弟が二人いて連絡もよくするが、将来彼らや甥、姪たちに迷惑はかけたくないと思っている。

離婚を経験した後に、やはり東京にずっといよう、との思いが強くなり、親の支援もあって5年前にマンションを購入した。

ちょっと正直、もう結婚するかは分からないし、私は願わくばずっと東京にいたいなと思ってもいるから、とにかくもっと前から、本当は家賃のことを考えると、月々払っていくことを考えると、もったいないから買っちゃったほうがいいなというのはずっと思っていたんですけど。

年をとったら最後はこのマンションを売却して老人ホームに入るつもりであり、将来のことはいろいろと考えてはいる。今は交際している年上の相手もあり、何か困ったことがあれば助け合うこともあるであろう。一方で結婚については互いに離婚経験があることから必ずしも積極的には考えておらず、交際相

手は年齢も上、ということで老後に頼れるとは思っていない。

本当に例えば私も将来自分が仕事をできないぐらい年を取ったときには、正直お金の面はすごく心配なので、それぐらい年を取ったら例えば一緒にもし養ってもらえるんだったら養ってもらって、一緒にそのときには暮らしたらいいかなとは思ってるんですけど、ただ、とはいってもそんなところばかり都合よく願うのは自分勝手でもあるので、そんなにそこを100%求めているわけではなくて、年齢的にも一応男性のほうが寿命が短いとかいうのもあると、そう考えると私のほうが生き残ってしまうと思うので、なのでどうにかこうにか自分が何か老後生きていけるようにはしなきゃいけないなとかというのはいろいろ考えて、何か積立での保険に入ったりとか終身保険入ったりとかということはいろいろ自分なりに頑張ってみてはいるんですね。

Cさんは友人関係も豊富である。お酒が好きで友人と飲みに行くことが多い。たまたま引っ越した後に近所に友人が住んでいることがわかり、気軽に会うことができるなど、現在の住居はその点も気に入っている。また仕事を通して付き合いしている友人も多い。

何か仲よく老後も一緒に楽しく同じ老人ホームなんていったら楽しくて、それはうれしい話なんですけど、実際のところどうだろう。何か人にもよるんでしょうけど、近所に住んでいる何人かの中でも、一番仲いい子は何か老後は沖縄に移り住むとか言っていたりするので、いなくなっちゃうんだろうなと思ったり、でも仕事関係の仲よくしていただいている先輩は、おばあちゃんになってまで仲よくしてねとかって、よろしくねって言ってくれてる先輩もいたりして、先輩はずっとここに一人にいるかなとか思ったりとか。

その一方で仕事柄休みが不定期で、週末に働くことも多く、地域のお祭りなどには参加が難しく、また子どもがいる人とは付き合いにくい。その結果、友人の多くは同じくシングルか、子どもが大きくなった人に限られてしまう。それでも、気軽に出かけたり、趣味の舞台鑑賞には東京が一番であり、東京生活を楽しんでいる。故郷に帰ることは考えていないようである。

Dさん、50代、女性

Dさんは東京都郊外の出身。高校を卒業後、22歳まで実家で過ごし、その後一人暮らしを始める。きっかけは周囲に一人暮らしが多くなり、自分も、と思ったこと、さらに仕事に近いほうが良い、との考えもあって引っ越しをした。その後結婚、離婚を経て、現在の住居に住むようになった。交通も便利で、公園もあり、エンターテインメントも多く住みやすい。

[現居住] 区内に、にぎやかなところにあるにしては公園があったり、いろいろお店もいっぱいあったり、お芝居好きなので、あちこちでやったり。遊ぶとこいっぱいある。

住まいは賃貸のワンルームマンションで、セキュリティもいいが、逆に隣人や地域とのかかわりは薄い。災害の時はどこに避難すればいいのか、不安があるのだが、情報などが回ってこないと感じている。

マンション住んで、本当に誰とも関わらないんですよ、隣のうちとかも。そういう関わり持てるような何かあればいいなと思います。
うちの隣、いつの間に引っ越してて、またいつの間に新しい人がやってくる。
前、台風が来て、避難しなきゃいけないとき、去年か何かあったんですけど、連絡全然ないんで、実際どこに行ったらいいかも分かんなくて。

仕事は18歳の時に就職したがまもなく倒産、その後結婚をする前にイベント関係の会社に正社員で就職し、今に至る。会社での仕事は楽しく、出張でいろいろな場所に行けるので、なるべく長く続けたいと思っている。新型コロナの蔓延で仕事が減り、現在は在宅。給料は元からあまりよくなく、昇給もないのだが、さらに減らされている。早く元通りに戻ることを願っている。

両親はDさんが若いころに離婚、その後父は亡くなり、母とは会っていない。兄弟もいないため、身寄りはない。病院に入院するときなど、心細いし、保証人がいないと困ることがあった。災害の時も心配である。

[去年病気になって動けなかったとき] 友達に食べ物だけ買ってきてもらって、うつしたらまずいんで、玄関の前へ置いといてもらって。
身内がないんで、もっと本当に動けなくなったらどうしようって考えます。再婚できてなかったら老人ホームしかないなって思ってます。それ入るお金もすごいかかるだろうし、考えると不安になっちゃうんで、あんまり考えてないです。
[災害時に友人と] 連絡は取れるんですけど、ちょっと住まわせてとか、そういうことは言えない。

ただ、趣味の演劇鑑賞（主にお笑い）を通じて女性の友人は多く、東京でイベントなどがあると地方の友人が泊っていくことも多い。離婚した後も、良い人がいれば結婚したいと思い、ネットなどを通して機会を探そうかと思ったこともあったが、なかなか出会わない。周囲も50歳を過ぎたころから結婚については言わなくなったし、友人も彼氏がない人たちが多い。

Eさん、40代、女性

Eさんは東京都心部で生まれ育った。親に促されて高校卒業後に一人暮らしになってからも慣れ親しんだ地域の賃貸に長く住んでいたが、その建物が取り壊されることになり、都心中心部と比べれば価格の手ごろな現在の居住区で中古のマンションを購入。リノベーションをして暮らしている。生まれ育った区の外に出ることには少し抵抗があったが、今は良かったと思っている。かつて長く住んでいた都心部のマンションでは地域の人達とも知り合いだったが、今はまだ日も浅いせいか、あまりそういう付き合いはない。しかし、入院するときと同じフロアの人に食料品を引き取ってもらったりして喜んでもらえた、というような付き合いはある。

[現居住区に引っ越すのは] 何か最初ちょっと抵抗っていうか、わあ、何かこう [以前の居住区から離れたところに] 随分来るなみたいな感じがあったんですけど。住んでみたら、本当に今、私がいるところ、住宅地なので静かで、意外と住みやすくて。同じフロアに外人さんとかいるんですけど、私が急に入院することとかもあったので、食べられないフルーツとかを食べてもらおうと思って、ちょっと、食べてもらえますかって言ったら食べれるって言ってくれたので。

両親は、東京を出て、母の故郷である地方に移住している。弟もその近辺で自分の家族と暮らしているため都内にはいない。弟の家族には将来迷惑をかけたくないと思っている。実家には頻繁には帰らないが、親も弟も病気をしてからいろいろと心配してくれているようである。かつては結婚をすすめられていたが、それも今はない。

多分もう30過ぎたあたりから、こいつは結婚をする気ないなって諦めてくれた。多分ね、35ぐらいからお見合い話を持ってこなくなりましたので、多分諦めがついたんだと思います。

仕事は高校を卒業後、家具や建築設計の仕事をしていた。その後Web作成の仕事などをしてきたが、おとし末にがんが診断され、仕事は辞めざるを得なくなり、今は無職である。抗がん剤の治療が続いていて食欲がなく疲れていることが多い。新型コロナにかからないように細心の注意をし、外出なども避けている。

そんな中でも会社の同僚だった友人などが心配して食べ物を届けてくれたりする。比較的近くにそういう友人がいることは心強く、都会に住むメリットを感じている。会社の同僚以外では、かつての趣味を通して知り合った友人などがいる。若いころから子どもを産み育てるということに自信も興味もなく、結

婚にはいたらなかった。病気になると、パートナーがいるといいな、と思うこともある。

何だろう。私がすごい、これは結構もう二十歳ぐらいのときぐらいから、なぜか子どもが要らないっていうふうに。私の中で、子どもは私はちょっと育てたくないっていうのがあって。で、多分それを望む、まあ、付き合ってた人っていうのがあまりなくて、やっぱり。家族になったら子どもをつくって家族をつくるっていう人が多かったの。まあそういう、子ども要らないって人って、を望む人ってあまりいないんだろうなと思ったので、結婚はあんまり考えてなかったんですよ。でも何か、パートナーみたいな人がいたら絶対いいな、年を追うごとに思いますね。[特に病気もしたので] もうそういう人がいたら、もっと何か気楽にこういういろいろ頼めるのかなとか。そんな、そのために何か召使みたいに使うわけじゃないですけど。

病気のこともあり、金銭面での心配は大きい。この後病気が治っても雇ってくれるところがあるのだろうか、と考えてしまう。今は傷病手当と失業保険でまかなっているが、今後のことは不安である。ただ、病気をしてから、生きようと思う気持ちが強くなってきている。

いや、私も本当にがんになる前は、いつ死んでもいいぐらいなポテンシャルで生きていたのに、いざ、がんです、で、がん治療をこのまましなければ1年ですよって言われたときに、いや、生きたいってすごい思っちゃったんですよ。

Fさん、50代、女性

Fさんは会社員だが、都心に近い場所で小さいながらも一戸建てを所有し、1階部分を賃貸に出してローンを返済している。2階の自分の居住部分はワンルームほどの広さであるが、不動産会社にすすめられてこの住居を7年ほど前に購入した。新型コロナの影響で在宅勤務が増えた今となっては、もっと広いところに住めたらよいのに、と思うこともある。

そうですね、本当は預貯金がたくさんあったらもっと広いとこに住みたいんですけど。[将来再雇用になると] やっぱりお給料も下がるって分かってましたので、ちょっとやっぱり将来にお金的に不安なので、いずれ定年退職になった場合、年金だけではちょっと心もとないなっていうことで、少しでも家賃収入が入ればっていうことで、実際、住んでるとこは狭いんですけど、都心に近いですし、お家賃が入るのは、やっぱり安心感があります。賃貸はもう怖いので、[もっと広い家を] 買いたいですけど、購入したいんですけど、お金がないんです。やっぱり都心の便利さに気づいたんで、あんまり遠くには行きたくないんです。病院もやっぱり、都心はたくさんあるので、便利なんですよ。

この住居のまわりの印象は最初良くなかったが、近くの公園などは気に入っている。見栄をはることなく自然体でいられる地区だと思っている。また隣の住人とはときどき噂話をしたりしている。

隣のおばさんがすごく、いい意味のおせっかい焼きの人です。すごい情報網持ってて、その方とはお話ししたり、ちょっと、いつも掃除もしてくださってるんで、メロンあげたり、お礼に。こういう人が引っ越してきたわよとか教えてもらえるんで、そんなに変な人は、前はもう崩れかけたような家がいっぱいあったんですけど、そこが今、新しく一戸建てになったりして、大分きれいになってきました。そういえば電話番号も教えてもらったんですよ、もし何かあったら。

出身は地方で、大学進学の際に上京。卒業後は親の要望もあり、地元に戻って就職。その後40代に入ったころ、母親が亡くなった時期と転職の話が重なり、東京に戻ってくることになった。仕事は総務関係の正社員で、定年の60歳以降も再雇用してもらえそうで、経済的な面からもなるべく長く勤めたい、と思っている。また、どこかに所属していれば、倒れたりしても気づいてもらえるということもある。休みを取ることを奨励したりするような会社なので、旅行などにも行きやすいことはとてもありがたいと思っている。

故郷にいる弟、弟の配偶者とは折り合いが悪く、ほぼ音信不通の状態、今後も付き合う気はない。父が亡くなるまで弟夫妻が面倒をみたこともあるので、親の遺産も放棄したし、お墓と一緒に入るつもりもなく、自分のためには樹木葬なども考えている。

それ[樹木葬]にして、友人たちが年に一度、会食しながらお墓参りに行くとかいう話を聞いて、何か現実味を帯びてきたなと思って。でも樹木葬のほうがいرونな人が来てもらえていいのかなとか。

ただ、老人ホームに入るとか、病気の時などに保証人などが必要な場合、甥や姪に頼らざるを得ないのかどうか、心配している。

その一方で、友人関係は豊富で、新年会などの集まり、旅行など頻繁に出かけることが多い。友人の多くは独身か、子どものいない女性で、気軽にでかけている。

[友人はほとんどが] もう女性ですね。あと、結婚しても子どもがいなくて、同じ独身の人ばかりです。やっぱり子どもがいる人だと、ちょっと話も合わないっていうか、まずそっちのほうが大変ですからね、子どもの、いろいろありますしね。

結婚については、かつて見合いをしたこともあるが、縁がなかった。周りで

もDVなどで不幸な人もいますので、これはこれでいいかと思っているが、若い人には結婚をすすめたいとは感じている。一人で高齢者になる、ということついて健康面、経済面とも心配はおおいにある。

よくお年寄りの方がお餅を喉に詰まらせてってありますが、あれ何であんなことって思って、でも自分が、何かちょっと、変な飲み込みが悪いと、うっとなるようなときがたまにあるんですよ。そのとき、どうしよう、このまま息が吸えなくて死んだらどうしようっていうときにそばに誰かいるといいなとは思いました。

Gさん、40代、女性

Gさんは習い事の教室を営む40代、都心近くの賃貸ワンルームマンション暮らししている。実家は近隣県で30代になる前までは両親と暮らしていたが、生活時間も合わなくなり、そろそろ独立をしようと思ひ、現居住区に引っ越した。その後転居をしたが、便利で、教室として借りる場所にも近く、さらに実家にも帰りやすいこのあたりが気に入っている。ただ、フリーランスという仕事柄、ローンも組めないだろうから住宅購入は難しいだろうと思っている。また両親の家には頻りに顔をだすが、そこに戻って暮らすことは考えていない。

地元の高校を出て、首都圏の大学を卒業し、教室を始めるまでは秘書などとして働いていた。習い事については幼少のころから祖母や叔母から学び、当初は趣味程度に教えていたのだが、次第に需要がでてきて、6年前に独立した。生活の安定を考えれば秘書をしていたほうがよかったのであろうが、やりたいことを優先し、一念発起した。3年くらい前から収入を補うために個人事務所でアルバイトもしているが、時間もフレキシブルで働きやすい。週末に教室をすることもあるので、休日の概念がなく、自分で管理をしないとイケない。

現在生徒は60名くらいいる。新型コロナの影響で4-6月は教室を休んだが、無料でリモート指導をするなど、生徒さんたちをつなぎとめる努力はしている。将来は教室が増えたり、自宅で教えられるようになったりしたら、という希望をもっており、死ぬまでやりたいと思っている。

近隣県に住む両親との関係は密接で、新型コロナの影響がなければよく実家に顔を出していた。父とは特に仲が良い。例えば父が相撲好きなので自分もファンになった。最近自分が料金を支払って両親にスマホを持ってもらったところ、連絡がより増えたと思う。兄がいるが、将来の介護は自分が主にするだろうと思っている。

実家には大体週に1回ぐらい顔出してはいるので、あまり、前、コロナの前はもう例えば日曜日とかお昼ぐらいから行って夜帰ってくるなんてことはよくあったんですけど、コロナがあってからはちょっと時間を短縮して、夕方ぐらいに行って、実家に犬がいるので犬の散歩をして、で、夕飯食べて帰るみたいな感じで。
[両親に介護が必要になったら] 両親との距離、心の距離が私が一番近いので。この間、ちょっと母が中耳炎になって熱が出ちゃったときとかも、親は私にしか連絡をしてこなくて、兄たちは知らなかったっていう、何かそういうのも、やっぱり私なんだろうなって感じですね。

二人の兄も実家の近辺に住んでおり、Gさんとも関係は良好である。父も音楽好きだが、特に上の兄の影響で小さいころからGさんも音楽好きになり、趣味はライブ鑑賞である。あるバンドをもう何年も応援していて、一緒に応援する友人たちもいる。都内だけではなく地方にもライブに参加するため出かけるのだが、その点フリーランスで、一人暮らしなのは時間が自由でよい。

学生のときには一緒に行ってた子たちとかがもう今は主婦だったりとかして、多分、あいつまで同じことやってるのかなって思ってるのかもしれないし、逆に、何だろう、いいなって言われることもあるんですよ。子どもがいなかったら行きたいのになとか言われることもあるので。

そのほか幼少からの友人、近所の友人なども多く、困ったときに助けてもらうこともある。

先週も高校のときの部活の友達と、その子は結婚してるんですけど、GoTo イートだしなって言ってランチをして、その後、その友達のおうちにお邪魔して、そしたらお子さんたちが帰ってきて、旦那さんも帰ってきて、みたいな感じなところで、それで、何かお茶して帰ってくるみたいな。

コロナ禍の中、結婚について考えないこともない。今付き合っている人もいるのだが、その人と結婚するとはあまり考えていない。自分は自由人で、一人暮らしの自由さが合っているのでは、と思うし、結婚しでも子どもがいなければ老後に頼る人はいないだろうが、一方でいい人がいれば、という気持ちもある。将来甥や姪に心配をかけたくはないと思っている。友人の中には将来一緒に暮らそうという人もいるが、どうなのかわからない。なるべく金銭的に困らないように準備をしている。

この年になると周りのいろいろ、結婚した方のいろいろを見てきてしまっているので、余計慎重になってしまうのもあって。だから、このまま一人でいたときにどうすればいいかは考えましたね。

今は全部自分の時間で楽しく過ごせてしまっているので、この時間がなくなるのかななんて思ってしまったりもあったり。

Hさん、40代、男性

Hさんは地方出身、近隣の県で大学では情報系を専攻し、そのまま東京周辺で就職した。その後数回の転職とともに東京都23区内で何回か転居をした。もともとは技術系の仕事で入社をしたのだが、その後すぐある業務の担当となった。何社かで経験を積んだ後、会社に縛られずいろいろな仕事をしてみたい、と思い、その分野でのエキスパートとしてフリーランスになった。

フリーランスになれば複数社の仕事を並行して行えたり、プロジェクト単位で仕事に携われればというところがあったので、新しい経験もできたり、知見とか幅も広がるかなというところで、フリーランスになってみようかなというふうにして転身したということですね。

現在は仕事をあっせんする紹介会社に登録しており、独立当初は順調で収入も増えたが、その後新型コロナの影響もあり、状況が一変し、再度企業に勤務しなくてはならないのか考えているところである。

一人って自由でいいなという反面、よりどころがないんですね。会社ってある種安心感がすごいあるんじゃないですか。社会保険だとかいろいろ保障してくれるし、毎月黙ってても給与入ってくるという側面があるので、逆にそこにすごい甘えてた自分がいたのをすごく今、実感させられています。なので、ある種、逆に言うといい経験してるなと思うけど、不安感もありつつも、どうやって自分で生きていくかっていうところを考えなきゃいけないというのはすごく今、真摯に考えてるところですね。

住まいについては、以前は賃貸でその都度勤め先に近いところに移り住んでいた。今の住居は分譲で、投資もかねて古い物件をリノベーションした。通勤はしやすいが、それよりも資産価値が上がりそう、ということを重視している。

リノベーションをしたいなと以前から思っていて、手頃な中古物件があれば買いたいと思ってたところと、あとは家を買って結構、何でしょうね、一生に一度みたいなのが世の中的な価値観としてあると思って、私はあんまりそう考えてなくて、何でしょうね、価値のあるところに買えば売れますし、貸せますし、なので、ある程度そういった価値が資産価値として落ちない場所に買いたかったっていうのがあって、たまたま[現居住区内に]あったっていう感じですね、はい。

両親は今も故郷におり、姉夫婦と同居している。両親の家はHさんが購入して、そこに姉夫婦、姉夫婦の子ども、両親が住んでいる。実家から時々荷物が送られてきたり、連絡も数か月に1回あったりするが、姉、両親ともそここの距離感があって良い関係であると感じている。親の介護は姉がするであろうが、Hさんがサポートに入ることもあることは予想している。

30代で一度結婚をし、1年ほどで離婚した。その直後は再婚も考えていたが、すぐに一人の生活になれてしまい、今では自分で積極的に探すということにはしていない。良い人がいれば、という程度である。

ああ、離婚した後とかは割とやっぱりこう急に一人になるので、結婚相手を探す活動をしたこともあったんですけど、時間がたつと、この環境に慣れてきてしまうとか、そんなに必要性を感じなくなってしまうとか、はい。もともと結婚願望が薄いついていうのがあったんですよね。なので、元に戻った感じはです。

今はあまりやらないが、以前は頻繁にスノーボードに行っていて、その仲間とは今でもたまに飲みに行ったりしている。地元の幼馴染も、大学時代の友人とも現在は付き合いはほぼないし、職場では友人付き合いはしない。一人で過ごすのが好きなので、区立の図書館や、体育館などもよく利用し、一人で近くの喫茶店で本を読むことも多い。

[仕事をしていないときは] 読書したり、ネットしたり、散歩したり、あるいは割と一人なんですけど、外に出るのは好きなんです。なので一人で街をうろろして、ちょっとお茶飲んでみたいなのとか、割と落ち着きますね、はい。

一方で、コロナの影響もあり、仕事がどうなるのか、経済的な不安はある。しかし、高齢になったときの生活についてはイメージがわからないので、その時になって考えるしかないと思っている。

また、ちょっと私が高齢になるときに時代が思い切り変わってるような気がする。世の中がどうなってる、また何か新しいコミュニティがあるのかなとちょっと思ったりもするので、ううん、ちょっと形も変わるのかなとは思ったりしますね。

Iさん、50代、男性

Iさんは都内で生まれ、現在はその近くの区に住んでいる。都内の商業高校を卒業し、就職。その後就職した会社が経営不振となり、Iさんが債務の一部と従業員を引き継ぐ形で数年前に独立した。これはそれまで仕事で築いてきた信頼関係があってできたことだと思っている。これまでのキャリアには満足しているが、若いころにビジネス関係の資格を取っておけばよかったとも思っている。また、現在は新型コロナの影響もあり、業績は良くない。

20代で結婚をし、東京の郊外、近隣県などで暮らしたが、不便で友人たちとも離れてしまっていたので、都心にもどろうと、23区内に家族で転居。しかし5年前に離婚し、子どもは前妻がひきとったため、一人暮らしとなった。離婚の際近隣県の持ち家を売却し、慰謝料と養育費を支払った。その後、子育てをした地でもあり、その時の父親同士のつながりなどもあって愛着があったため、現居住区に住んでいる。子どもが小学校の時に、知りあった父親たちと強い絆があり、子どもたちの学区は隣の町なので、住んでいるところではなく、となりの町内会の行事などに参加している。

[子どもの小学校の] PTAみたいなもの、おやじの会っていうのに私入ってまして、学校の、そのOB、もうみんな卒業しちゃってるからOBなんですけれども、代々小学校のお父さんたちはおやじの会っていうのが続いているんですけども、そのOBとしてその会のほうに参加して、地域のお祭りとか、餅つき大会とか、そういうなんかのあれに携わったりはしてるんです。

両親はすでに他界している。特に父親はIさんが主に介護をしたが、今思い返すと、もう少し優しくしておけば、と後悔することもある。

私もやっぱりいらいらしたりして、ちょっときつい言葉も最後ちょっと浴びせちゃったりするので、本当申し訳ないことしたなって、今もちょうど目の前に仏壇あるんですけども、いつもお父さん、ごめんねっていう感じで謝っている状況ばっかですね。

兄は都内在住で、必要があるときのみ連絡する間柄である。父方のおじ、おばとやりとりはある。子どもは二人いて、社会人と大学生で、今も関係は良好。前妻とは必要があれば連絡をしている。おやじの会の友人のほかに、小中学校の友人ともまだ付き合いが続いている。彼らは単身者で、結婚していないので小学校がある都内の地元にそのまま残っている。また趣味のゴルフを通して仕事関係の人たちとも付き合いがある。

今後再婚をする気持ちは持っていない。65歳くらいで仕事は辞めたいが、その時にどうなっているかはわからない。現居住区では地域とのつながりも強いので住み続けたいのだが、家賃が高いのはネック。そうすると、また地方へ移ることになるかもしれない。慰謝料などで貯蓄はなくなったので、年金に頼るのだろうが、経済的な不安は大きい。とにかく現状では経営が不安定なのが心配である。

また、孤独死を心配しているのだが、子どもの一人が面倒をみるよ、と言ってくれている、とても心強く、うれしく思っている。

この間、次男と、つい最近、先週の金曜日に会ったんで、お父さんも会社、今厳しくて、ちょっといろいろやってあげられないけど、ごめんねっていう話はして、お父さんが何かあったら、おまえが助けてくれなって軽い感じで言ったんですけど、任せとけなんて、まだ大学3年生の次男のほうは、まあ任せとけなんて、何かそんな軽い感じで言ってくれたので、どうなるか分かんない、大学生だから分かんないですけども、気持ち的にはつながってるかなっていうような感じだと、気持ち的にはうれしかったです。

Jさん、50代、男性

Jさんは地方で生まれ、高校を卒業した後上京し、営業社員として長年同じ会社に勤務してきた。小さな会社で家族的な雰囲気でも残業も少なく良い会社だと思っている。ただ新型コロナの影響前からあまり業績は芳しくなく、さらにコロナの影響で給料も4割ほどカットされている。一人暮らしなのでなんとかやっているが、今後は厳しいかもしれないと感じている。

働き続けるとかっていう、一般で言えばもうずっとですけど、ただ、会社っていうことになる、もうそろそろ限界かなっていうふうには思ってますけど。これから多分、子どももそうだけど、人口自体が減ってくるってなれば、ますます不利ですよ、そういうものを売ろうとすること自体がっていうふうにと考えると、ちょっともうって感じですけど。

住まいは賃貸のワンルームで20年近く同じ部屋に暮らしている。その前も同じ地域に住んでいた。会社にも近く、便利なので、特に知り合いが近くにいるわけでもないが、今後も住み続けたいと思っている。大家さんとは月に1回世間話をする間柄で、何かあったら相談できると思っている。

職場の同僚とは長いつきあいで、飲みに行ったりもするし、取引先の人とも付き合いはある。また、自分と同じ地域から東京に出てきた小中学校の友人と

は年に一回同窓会を行っている。また都内にいる親戚ともやり取りをすることがある。

家に一人でいるのはあまり好きではないので、友人と出かけたり散歩に行くが、新型コロナの影響でそれも今はままならず、結局家でネットや映画を見たりという感じである。

父は30年ほど前に他界した。母は80代後半だが故郷におり、家族のいる弟と暮らしている。Jさんも定期的に会いに行くが、母はだいぶ足腰も弱くなってきて、デイケアに週に一回通ったりしている。本格的な介護はまだ必要ないようだが、もし必要になれば、同居している弟一家が面倒をみるのだろうと思っている。弟は母を通して得た仕事をしていて、実家も弟名義なので、家を継いだ、という感覚である。なので、東京にいるJさんが介護を手伝うということはないであろうと考えている。

結婚や子どもを持つことについては、希望は持ってきたが、出会う機会がなかった。自分からも積極的に探すようなことはなく、時間がたった。今後も結婚をしたくないわけではないのだが、チャンスは少ないだろうと思っている。

そうですね。その相手の年齢とかいろいろありますけど、もしできるのであれば、普通に、無理なくできるのであれば[子ども]欲しいですね。別に僕の場合はそこまでの消極的になっていうことじゃなくて、単に周りにいなかったということのほうが大きいんだと思います。

将来の不安という、やはり会社にあまり将来性がないので、定年までこのまま勤められるのか、今後は自分で独立してネットなども使ってやっていくか、と考えたりしている。まだまだ具体的には動いていないのだが、経済的不安は大きい。年金も頼れるかどうかかわからず、株取引などを少しやっているが、まだ今は収益があがっていない。今後はもう少しいろいろな手を考えていきたいと思っている。また今は賃貸だが、将来の住まいについても心配はある。

現時点で健康にはあまり不安はないが、何かあったとき、例えば入院など、保証人は弟に頼むしかないか、と思うが、こういう問題は行政で何とかならないものかと思っている。そのほか、社会問題には幅広く意見を持っており、行政には光ネット回線の値段、各種手続きのデジタル化、選挙制度、空き家問題など幅広い問題で対応してほしいと考えている。

[年金への不安は] 大きいです、大きいです、すごく大きいです。それは、大きいというのは、ある程度当てにしているから大きいんであって。そこ[高齢者の住宅問題]が、そのネックが解決されれば、かなり楽だと思うんですね。年金、その他、仮にうまくいかなくても、そこさえ取りあえず何とかなれば。

Kさん、50代、女性

Kさんは地方で生まれ育ち、高校を卒業して地元の企業に就職した。5年ほど働いたが、英語力を身につけ、海外で大学に行きたい、と会社を退職し23歳の時に1年間語学留学をした。その後資金を貯めるためにいったん日本に戻り働いた。そのうち1年は海外で旅行ガイドとして働いた。27歳で海外の大学に入学を果たし、教育学を専攻。卒業後3年間現地で働くが、ビザの問題もあり日本へ帰国した。

帰国後は故郷の近くでしばらく派遣社員をしていたが、なるべく英語が使えるように外国人の上司の元で働く希望を出し続けた結果、数年たって外資系企業で働く外国人のもとで働くことになった。この仕事は紹介予定派遣ということで、3か月後に正社員となった。たまたま会社が東京で支社を開業する計画があり、上司も東京に移るということで誘われて東京に移動することになった。その後様々な業務を任される機会があり、キャリアを築くことができた。今は課長もしくは部長のレベルである。

東京に来た当初は土地勘もなく、勤務先に便利な場所で賃貸マンションに住んでいたが、7年半前に現居住区に中古マンションを購入。独身なので、将来高齢者施設に入るときに売ればいい、という思いがあった。すでにローンは完済しており、今は投資もしている。ただ、老後にどのくらいあればいいのかはよくわかっていない。

[7年半前に] 日本の会社でいうと、やっぱり係長レベルの役職になったので、お給料も少し上がりましたし、あと、結婚をしてなくて独身で子どももいるわけではないので、何かこう、何でしょうね、家の一つでも持っとかないと将来が結構不安というかっていう形で、ちょっと家も買ってみようという形で、その時点で購入しました。

故郷にいる両親のうち父が最近倒れたりしたので、心配はしている。弟がずっと引きこもりで自宅にいたが、最近少しずつ働きだし、また親の世話もしてくれている。しかし、様々な交渉事や経済的支援などは自分の役割だと思っている。

経済的な部分でいうと、弟より私のほうが安定した生活なので、経済的に恵まれているので、例えば何か入院をして大きな金額が必要だとかっていったときは、私は東京から送金をするというような形で。病院に連れていってこれたり病院で介護みたいなことをしてくれるのは弟のほうがやってくれていますね。

母は古風な考えの人で、かつては女性は結婚をして子どもを産むもの、と自分に期待していたのであろうが、最近は何も言わなくなっている。留学をしようとしたときは大反対されたが、伯母が理解ある人で応援してくれた。以前は親からお見合いの話をもちかけられたりしたが、東京に出てからはあまりうるさく言われなくなった。友人が紹介しようとしてくれることもあるし、いい人がいれば、とも思うが、これまで付き合った人とは結婚には至らなかった。

[母は] やっぱ古い考えで、結婚して子どもをつくってっていう、一般的な昔の女性の生き方をしてくれる娘なんだというふうに分かっていたと思うんですね。それが全然そうじゃなくて、語学留学に行くし、[海外の] 大学に行くし、わけの分かんない [中略] 国にも行ったみたいな。ちょっと母は本当に、もう最初の頃はかなり半狂乱というか、電話でももうどなられてばかりでした。

故郷には以前の仕事を通しての友人がいて、30年来の付き合いである。時には実家にもよらず、彼女に日帰りで会いに行くこともある。また月に1回くらいは誰かしらと旅行に行っている。東京にも親しい同僚がいるが、皆単身で、自分と似た経済レベルや価値観をもち、専業主婦ではない人達である。

数年前にがんを患い、手術と抗がん剤治療をしたが、今はもう問題がない。その際に最も困ったのは、病気の説明を受けるのに親族が立ち会わなくては行けない、という規則だった。自分では十分理解して受け止めていたが、故郷から来た母のほうが動揺してしまい、困ったことがある。

[がんになって心配だったか?] ううん。ちょっと、ほかの方に、皆さんに驚かれますけど、やっぱりあんまり動揺はしなかったですね。しょうがないっていう、もうなったものはしょうがないので、あとはもう治療していくしかないですし、髪の毛も全部、体毛が全てなくなるっていう、カツラもかぶってましたし。
何か先生にはその説明はしたんですけど、[母を説明に立ち合わせるために] 連れてくるのはもうしょうがないんですけど、ただ、一番理解もしてきちんとした決断ができるのはもう自分自身しかないと思うので、じゃあ母を東京にわざわざよこす意味が本当にあるのかなっていうふうに、ちょっとそこは本当に独身であるときの何か不便さを初めて感じたときですね。

Lさん、40代、女性

Lさんは地方出身で高校卒業後に就職のため状況した。最初は社宅だったが、いくつかの転職にともなって都内の賃貸アパート、借り上げ社宅などに住んできた。仕事はまかされると頑張ってしまう性格なので、一生懸命働いたと思う。

なかなか大変ではあったんですけど、もう結構ガッツでやるしかないっていう、割と体育会系のそういう姿勢があるので、やれない、駄目じゃなくて、とにかく放り込まれたらやるしかないわっていう格好でやってきたので、何とか乗り切ったは乗り切ったですね。

しかし、数年前に母が亡くなったことと仕事上の問題が重なり、ストレスで体調を崩すことになってしまった。会社には理解がなく退職せざるを得なくなり、その後いくつかアルバイトをしたが体調は悪くなり、区役所に相談して生活保護を受給した。その時は申し訳ないという気持ちがあった。また精神病に対する知識が周囲にも自分にもなく、受け入れることが当初難しかった。

その当時はまだ2000何年ぐらいかな、2000、多分2年とか3年とかそのぐらいだったので、メンタルヘルスとかが全然受け入れられてなかった時期なんですね。なので、全く体調不良とかあっても会社側には一言も言えなくて。

その後区の担当者にすすめられて障がい者手帳を申請。障がい者枠で働くことができるようになった。それでもなかなかうまくいかないこともあり、失業保険を受けたりしていた。しかし最近になってハローワークを通して公的団体の嘱託社員として働くこととなった。福利厚生もよく、職場の人たちも理解があり、雰囲気がよく、ここで就職できてたいへんありがたかったと思っている。これからはできるだけ長くここで働いていきたいと希望している。

私たちの部署って、みんな障がい者枠で採用されてる方ばかり、通院とかの配慮も、すごくもともとしていただけるというふうな話を聞いていて、1月1日時点で有休が初年度から20日もフルで付与される、なので、比較的やっぱりこういう取りやすいんですよ、休みも取りやすくて。
生活保護も完全に抜けられたので、[これまで恩恵を色々受けてきて] 反面すごく申し訳ない気持ちがずっと続いてたんですけど、今はそういうのが全くなくて、自分で全部払ってやりくりする形が当たり前になって、戻ってきて、そういう意味では、変な気疲れもなくやっていけてるのがあったかと。

父は今も故郷に住んでいる。Lさんが精神的に不安定になったときには病気

のことを理解することができずに厳しいことを言うこともあったようである。今はだいぶわだかまりも溶けてきて、時々電話をしたりしている。単身の兄が父と同居しているが、たまにLINEで話をしている。父は年をとっても迷惑をかけたくない、と言っているが、いざとなったら兄と相談して世話しようとは思っている。

最初、父親が全く理解してくれなくて、何ていうんですかね、やっぱり私も最初は自分がそういう精神的にちょっと、体の不調は精神からきてる、精神の、というのが信じられなくて、[中略]父親ともその話を一応自分なりにしたんですけど、やっぱり何か最初受け入れてもらえなくて、いつになったら治るんだみたいな感じなんです。今はちゃんと仕事も安定してできて、状況もこういう形でできてるので、あとは結構テレビとかで取り上げてくれることが多くなって。父親のほうが、この間テレビでね、そういう何か精神とかやってたから、おまえ、こういう感じなんだろうみたいな。こんなのがあるのかみたいな感じで、結構歩み寄ってくれることが多くなって。

東京には趣味の音楽を通しての友人が多くいる。ライブや夏フェス（コンサート）で知り合った友人の中でも東京近郊にいる友人とは親しくしている。半年ほど前に足を痛めたときはその友人が助けてくれた。友人には恵まれていると自覚している。

みんな割と話に付き合ってくれたりとか、あとは病気の影響で一時期ご飯が食べられなくなったんですけど、そういうのもちょっとした外食に行って、私が本当にスープ1杯でちょっと、したりしたときがあったんですけど、根気強く話をしながら、ちょっと、一口でいいから飲んだらみたいな感じで何人か付き合ってくれた友達がいて、それで結構回復が地道にできた。

結婚についてはあまり真剣に考えていなかったが、病気になって余裕がなく、考えることはなかった。今は、一人では困るのではないか、と思い、縁があれば、という気持ちはある。ただ一番親しい友人とは将来お金をためて共同で家を買って住もうか、という話が時々出たりする。

Mさん、50代、男性

Mさんは大学卒業まで地方で過ごし、その後就職のため上京した。バブル景気最後の時期で、就職先は多く、なんとなく東京に行ってみようということで選んだ職場であった。仕事はIT関係だが、これまで数回、ヘッドハンティングなどを通して転職。2008年には退職して仕事を探そうとしていた矢先にリーマンショックで不景気になり、派遣で仕事をつないだこともあった。今は

正社員として働いている。仕事は多忙だが、コロナ禍でも仕事があることはありがたいと考えている。

当時はバブル全盛期だったんで。そんなえり好みしなくても、大体どこでもどうにかなるかなという、そんな軽い気持ちで。東京とかは1回住んでみたいなって希望があったんで、あんまり当時は深くは考えずに東京に来たという感じですね。

東京にきて最初の数年は会社の寮で暮らし、その後23区内に賃貸マンションを借りた。15年ほど前に生活時間の相違から隣人から苦情がきて、そのときにマンション販売のチラシをみて、それならば、と購入をした。

とにかく隣の人は、何かそういうトラブルがあるとやっぱり自分は嫌なんで、もうさっさと動けるんだったら動いちゃおうといったときに、もうそれが来たから、もういいやというか、結構、勢いで買った部分がありますね。

故郷は台風や洪水の被害が多い土地なので、そのことが気になって、突風で物が飛んでこないような物件を選んだ。災害への備えもしているので、多少の停電や断水ならやっていけると思っている。

3年ほど前から大型バイクに乗り始めた。マンション近くには工場跡地などにつくられたガレージがいくつかあり便利。サークルに入り、新型コロナの前は山や海などヘツーリングにでかけていた。サークルのメンバーとは暗黙の了解で会社の話はしない。どこで働いているかも知らないが、趣味を楽しんでいる。学生時代の友人も3人ほどいるが、家族がいるので日常的に親しいわけではない。

私が入ってるサークルの中では、相手の何ですか、勤めてるところとか、そういう情報は詮索しないというほうが何かおきてじゃないですけど、紳士協定で結ばれてる。みんな、相手がどこに勤めてるか大体知らない。どういう業界かは知ってるんですけど。

結婚については35歳くらいまでは結婚相談所に登録もしたりしたが、良い経験がなく、今に至っている。会社内ではセクハラ規定などもあるので、親しくなるのは難しいし、もうそういう機会はないと思っている。基本的には家族のある人とは生活や話題が違うと思っている。

みんなバイク、私は一人もんだからいいんですけど、妻帯者とかでどっか連れていけないときは、もう何かみんなオートバイ整備して、朝から夕方まで、今日、嫁さんと子どもに愚痴られたとか、何、それを私に愚痴られても知らんよって感じですけど。

母親が故郷で一人暮らしをしているが、兄二人が比較的近くで暮らしているし、母はしっかりした人で、人の世話になるタイプではないので、自分も正月に帰るくらいである。

[帰ってこいと言われないか?] それは言わないですね。やっぱり私が三男だということもあるし、男は出ていったら、基本帰ってこないよみたいなこと言う人ですから。[その地方]の女性はあんまりこういうこと言ったらどうなんですか、やっぱりちょっと気は強いというか。ああだ、こうだって世話焼くと、あんまりそれをうっとうしいと感じるほうの人なんで、適当なところで切り上げとかなないと、もう結構文句を言ってくる人ですから。

特に自分の老後についてあまり今は心配していないが、過去に知り合いが孤独死のような亡くなり方をして、その発見をしたことがあるので、それは怖い。退職したら誰も気が付いてくれないかと思うと、行政でそういう、あまり立ち入らないが、見守り的なことをしてくれるといいと考えている。女性はおしゃべりが得意な人も多いが、男性は閉じこもりがちになりそうだ。

一方で死んだ後はどうなっても良いと思っている。人の世話になって生きていくよりは尊厳死を選びたいと思っている。

確認とかメールとか、何か SNS とかでそういうのが飛んできて、1日返事がなかったら、何かこれはとかがいうのがあったら便利、今の時代は多分そっちの、スマホとか私たちの世代以下とかだと、もう大体みんなスマホ持ってんで、何かそういうので飛んできて、ワンタッチで生存確認のタッチっていったら変なんですけど、何かそういうのがあれば、多分お互いに過干渉しなくてもいいかなと。

〇さん、50代 男性

〇さんは地方出身で大学もその県内だった。卒業時はバブル景気で、就職口には不自由せず、給料が良い東京の金融機関に就職をした。配属は地方勤務だったが、あまり社風になじめず、また投資で失敗もして、精神面からも体調を崩してしまった。そこで退職し、前から興味があった調理について勉強しようと、学校で1年学んだ。その後仕事を転々としたが、あまりうまくいかず、精神的な状態も改善しなかった。病気の関係で知り合った人から勧められて、ある法人で仕事をするようになった。社会的意義を感じるが、収入が少なく経済的な不安がある。障がい者手帳を持っており、手当が支給されているが、区によっては扱いが違い、現居住区は手厚いと感じている。

[法人の仕事は] 社会的にも意義がありますし、今までの仕事よりもやりがいとしてはかなりあるかなとは思っています。ただ、収入は追いつかないんで、なかなかそこは現実的には厳しいかなとは思っています、はい。

現在の住まいは古い賃貸アパートで老朽化が進んでいるが、周囲は便利な住宅街にある。アパートの人たちとはあいさつ程度。地域に関する活動は煩わしいという気持ちを持っている。

本当は例えば大きな災害が起きたときなんかは近所で協力し合うというのが非常にいいだろうなと思うんですけども、うん、今のところ、日常生活の中では特に不便は感じていないので。逆にちょっとその、人間関係が煩わしく感じることも多かったですりするんで、はい、あまり自分から積極的に関わりを持つとはしていませんね。

両親は故郷にいて、二人とも持病や手術歴がある。2、3か月に1回親から電話がくる程度。妹が同居しているが、あまり生活力はない。弟は家族がいるが、もう何年も連絡をとっていないのでどう接してよいかわからない。年をとってきて、故郷に帰ってのんびり暮らすことも良いな、と思うことはあるが、まだわからないし、難しいこともあると思っている。

ちょっと同居している妹には若干荷が重いかなという気はします。ちょっと状況を見てですけど、私もいずれはちょっと[出身地]に帰らなければいけないかなというのは少し思っています。ただ、仕事を考えると、すぐにはやっぱり移れないんですね、はい。なので、ちょっと少しずつ考え始めてはいますが、ちょっと具体的なものはまだ見えてない状況ですね、はい。

[東京は] 物事が目まぐるしく動くのと、人が多いことで、だんだん疲れてもきますので、のんびりと[出身地]に戻って暮らすというのは、もしかしたら年を取ってからはいいかなとは思っています、はい。

〇さんはゲイであることから、パートナーと結婚することはなかなか難しく、住んでいる自治体によって状況が違うことも認識している。それでも相手がいればいいとは思っているが、現在は交際相手はおらず、日々の生活に追われている。特に現在は新型コロナの影響もあって、人と知り合う機会はネットに限られ、関係をきちんと作ることは難しいと感じている。

全く一人でののか、誰かお互いに支え合う人がいるのかでは、大分状況は変わるかなとは思いますが、現時点では現実一人なので、一人でどう安定した生活を送るかってことを考えるほうが現実的かなとは思って、そういう方向で今、考えていますけれども、まあ、もしその支え合えるような人がいれば、もうちょっと見通しが明るくなるかなとは思いますが、はい。

学生時代の友人などとは連絡もなく、友人という趣味の音楽関係でいる人が、ネット上で知り合った人、もしくは仕事を通じて知り合ったりする人である。しかし、病気になったときに助けを求められるような間柄ではない。一方で数年前に10日間ほど入院したときは友人たちが見舞いに来てくれた。

普段も休日は一人で過ごす。新型コロナの時は電子ピアノを買って一人で弾いたりする。一人でいることは自由でもあり、不安もある。悪いことばかりが次々とやってくるような感じである。今は安定した生活を続けられるよう、コロナが落ち着いたら副業などもしていきたいと思っている。

その時代の流れに従って、例えば収入もずっと落ちていき、メンタルの部分もやっぱりちょっとずつ落ちていくような状況が続いていて、年齢も重ねてくるので、年を重ねることによって出てくるいろんな問題もありますし、あとはちょっと親のこともあったりしまして、ちょっと大変な時期を今過ごしてるかなとは思いますが、はい。

Pさん、40代、男性

Pさんは地方で生まれ育った。高校を出て地元の会社に就職をし、転職もしたが、結局続かず、仕事をするのがいやになって引きこもった時期もあった。しばらくしてネットで知り合った人を頼りに上京し、友人宅に居候しながら彼らのついででいくつかの仕事をした。

ちょっと3年、何年かな、えっと、19、22、ちょっとその後大分、もう何か仕事するのが嫌になって、もう籠もっちゃって、半分引きこもりみたいになって、始まった頃っていうか、ネットで知り合った人に何か仕事手伝ってって言われて上京してきたんですけど。

いろいろやったんですけど、結局何かもう、そんなに言うほど、生活できるほどの稼ぎじゃなかったの。

[その後] 別の友達っていうか、そこへ遊びに来てた友達に、家に来ればとかみたいな感じで軽く言われて、また仕事もらえるのかなって移って、やっぱり1年か2年ぐらいかかっちゃって、で、次が警備員の仕事やるまでに大分空いちゃいましたね。

紹介された仕事は長くは続かず、景気も悪く、東日本大震災などもあって、住居もなかなか定まらなかった。仕事でいらいらが続き、切れやすくなっていた時期である。会社員は無理かと感じ、その後、政府がすすめていた、個人で事業を立ち上げるという制度を利用して、空き店舗で店を開き、人から頼まれた商品を販売している。ただ、あまり身も入れておらず、十分な収入を得られ

てはない。そこで生活に困窮し、役所に相談したところ、精神科にかかったほうが良いということになり、結果として生活保護も受けられた。役所とはお店からの収入をめぐって、生活保護費との関係で争いもあるが、最近はもうあきらめている。

何か[仕事として]お使い頼まれてね、やるっていったって、もうだから、もうそのたびに大げんかですよ、区役所と。だから、何ていうのかな、だから、仕事の準備金でもらったお金も結局、区役所に報告しないと駄目とかって言われちゃうと、それならってって、仕事で使う金だと言ってただろうがよって大げんかになっちゃって。

故郷には高齢の母が一人暮らしをしている。もともと一人親、母子家庭で父はいなかった。母との関係は良いが、それは離れていればこそ、であろうと感じている。今はコロナの影響で会いに行くことは難しい。よく電話で長話をしていて、電話代の負担が大きい。今のように病気で無職の状態では故郷に帰ることは難しい。引っ越しをすると生活保護をもらえるか不安もあるし、金額も変わってしまうだろう。特に関西の自治体は財政が厳しいと聞いているので心配である。帰るなら自立してからだと思っている。現在障がい者手帳を持っている。生活保護を受給すると様々な制限を受けるのだが、役所とのやり取りなどは煩雑でやる気がなくなる。抜け出せるような支援なども、自営業をやっているからか、何もしてもらえないと感じている。

ガイドラインがちゃんとあればいいんですけど、何かそのたびに聞かれちゃう。そのたびに何か言ったら、えっみたいな感じで言われちゃうと、それはちょっと困るかな、うん。だから、仮に幾ら稼いでたら保護から卒業ですよって言われちゃうと、言われたら、それ目指して頑張ろうとか、そういうふうなやりがいも出てくるんだろうし、何ていうのかな、自信がなかったらそれはそれなりにまた考えようとかできるんだけど、ただ単に報告して、取りあえず稼いだら報告してくださいって言われちゃうと。

友人はアプリで知り合った人たちや、高卒後に入学してのちに除籍となった大学の通信教育を通じた友人。地域に知り合いはいないのだが、町内の行事を手伝うことはあるので顔見知りくらいの人たちはいる。

高校時代に女性との間で嫌なことがあって、それ以来女性には興味はなく、結婚するつもりはない。高齢期のことは考えたことはなく、介護が必要になったらヘルパーを雇うのだろうかと思うが、それにはお金を貯えないといけないと思っている。

今は特に考えてないですね。今生きるので精いっぱいっていうか、うん。だから、もう最悪、お手伝いさん雇うしかないかなぐらいな、そのために稼ぐかっていう、そっしか考えてないですよ。

というか、まあ、取りあえず生活を自立しないとどうにもならないんで、うん、ずっと今の状態で、今の状態っていうか、一旦保護から離れて、年いったときに戻るのはしょうがないとしても、それまでに世話にならなくてもいいぐらい稼げるんだったら稼ぎたいなっていう感じですよ、今。

Qさん、40代、男性

Qさんは都心の母の実家近くで一人っ子として生まれ、その後幼いころに都内で数回引っ越しをしたが7歳からは現居住区で暮らし、都内の高校、専門学校を卒業した。その後営業の仕事をしてきたが、待遇が良くなく、趣味を通して知り合った友人の紹介で転職をした。その後も異なる業種での転職を数回し、現在の職場では12年間働いている。会社はシフト制だが30分ほどで行けるし、そんなに追われている感じはない。自分と一緒に仕事をしたい、と顧客に言ってもらえるような仕事をしたい。

あんまり上昇志向がないんですけども、自分と仕事がしたいというふうに思われたらいいというのは思っています。要は、例えば会社に発注をするんですけども、でも、[Q]と仕事がしたいとか、[Q]の仕事だったらっていうふうに思われるような仕事の仕方をしたいなどは常々思っている。

ただ収入はあまり上がらないので現在転職を考えている。モータースポーツが趣味だがお金がかかるのであまり余裕があるとは感じていない。将来への不安はあるが、投資は怖いのでやっていない。

30歳までは実家で暮らしていたが、母からも独立を勧められ、一人暮らしになった。

これは私は特に離れるつもりはなかったんですが、本当に個人的にはこちらの事情なんですけど、母がちょっと生活感を持ったほうがいいんじゃないかっていうことを急に言ってきました、そうですね、本当それがきっかけで、それもいいのか、すごく不安はあったんですけども、実家から隣の駅ということもありますので、一旦一人で住んでみようかなというぐらいのきっかけでした。

現在は1Kのマンションに住んでいる。住人の中に会社の人が一人居るが、

他の住人とはあいさつをするくらいで、あまり付き合いはない。

父母は離婚しており、父は数年前に亡くなった。母は一人暮らしだが定期的にメールをし、何かあれば会いに行ったり、食事に行ったりしていて、必要な時には経済的な支援もしている。母と、横浜にいる祖母の面倒は将来自分が見るだろうと思っている。母と祖母は関係が薄いので、祖母には一人で会いに行っている。母はマンションを所有していて、相続する可能性が高い。古いマンションだが、自分が住むかもしれない。最近生命保険に入って、母を受取人にした。健康には気を付けていて、食生活にも気をつけている。お酒が好きだが、少し減らした方がいいかもしれないと感じている。

結婚はしたいという希望を持っている。50歳までには結婚したいし、子どもも欲しいと思っている。過去に付き合い合った人もいるし、知り合いに紹介されることもあったが、うまくいかなかった。性格が臆病なこともあるし、経済的な心配もあった。今はそういう思いはない。相手について特に強い希望があるわけではないが、妻が不満を持たないようにも、子育てや家事を一緒にやりたいと思っている。

もちろん[女性とは]付き合っておったんですが、ちょっとやっぱりそこに至らなかったのと、私自身が結構臆病な性格なのか、今の自分の給料、環境で結婚できるのかなというのは常に思っていたので、何かそこで尻込みしている自分がいたと思います。何かしてしまえばしちゃったで進められるのでしょけども、何か当時そういう話になったりすると自分でそういうことが、何だろう、生活できるのかなという不満を持ったりとかして、機を逃してしまったというのがあります。また今はちょっとそういう感情とは別になってきてはいるかなとは思っていて、何とかなるだろうっていうふうなものなんで、自分が満足いくほど稼いでいるかっていうとちょっとそこはまた違うんですけども、結婚に対する気持ちが以前思っていた、自分の、何だろう、稼ぎとかっていうこととは今ちょっとまた違う感情ですかね。

もし結婚しても住む場所は現居住区にこだわっている。

もう7歳からおりますので、私としてはやっぱり、ほかに住んだことがないのでちょっと比べにくいんですけども、やっぱり、むしろ離れたくないなという気持ちはあります。

学生時代の友人、特に高校との友人とは今も親しく、モータースポーツを一緒にするグループもできて、週に一回程度は集まっている。彼らはほぼ全員が単身者。飲み会もよくあったが結婚や家族の話などはしない。自分は人と話をするのも得意だし、友人とは仲良くやっていると思う。旅行も好きで、10年

ほど前から気に入って台湾によく旅行をしている。日本と違うリズムが心地よい。友人と行くことも多い。英語も学んでみたいと思っている。

Rさん、50代、女性

Rさんは30代で離婚を経験し、その後シングルマザーとして二人の息子を現居住区で育てた。今は一人で、子どもたちと住んでいたアパートにそのまま住んでおり、その期間は28年ほどになる。子どもたちは家を出て独立していて、たまにLINEで連絡をする程度。男の子なので、あまり口も出さないし、こっちからはお金もださないという主義。子どもたちの結婚や人生に口をはさむ気はない。面倒を見てもらう気もない。ただ、次男は優しいのか、言い訳をしながら様子を見に来ることがある。

次男は、2か月ぐらい前にふらっと夜中に来たかなという感じです。終電がなくなっただけって、うちのほうが若干近い、駅からも近いのと電車の本数が多いので、電車がなくなったら。

長男よりは次男のほうが、気が回るといいますか、ちょこちょこ様子は見に来る感じでは、まあ数か月に1回だけなんですけど、終電なくなるとか言いつつも、まあ様子を見に来てくれてるんだろうと。

実家は近隣県で田舎だった。高校までは地元だったが、ずっと東京に出たいと思っていた。高校の時に大型バイクの免許を取ったので、それに乗りたくてバイク便のドライバーをやった。その後退職。派遣社員として様々な会社で事務をしてきた。派遣なので同じ場所で働くのは長くても3年まで。2020年は4月から仕事を始めるとことだったが、新型コロナの影響で契約が終了となり、今は無職である。失業保険もないので親の遺産を取り崩している。コロナは心配なので在宅で仕事をしたいと思うが、家のパソコンにはオフィスのソフトが入っていないのでそれがネックとなっている。今はハローワークに通いながら簿記などの勉強をし、資格試験も受ける予定。希望としてはずっと同じところで落ち着いて仕事をしたいと思っている。3年で仕事が変わると職場での友人は作りにくい。

そうですね、ずっと派遣でしか仕事をしてなかったのが長いので、まあ入れて3年、マックス3年っていう縛りがあると、やっぱりこれから。例えば、60まで頑張っても、3年ごとでまた何回か替わるのも厳しいかなとは思ってはいるので、できれば、簿記の資格とか取って、一応ちょっと携われるようなので長く、パートなりなんなりでも長くできるような職場があればいいかなぐらいで。

両親はすでに他界し、故郷には妹が残っているが、ほとんど連絡は取っていない。地元は不便なところで自分は戻りたくないが、妹は自分と違って地元知り合いもいるから将来もそこにいるほうがいいのであろう。母が存命の時、たつての希望で墓と一緒に購入した。先に亡くなっていた父も一緒に入っているが、自分はその墓に入ることにあまり興味はない。

私は、お墓に入るのは全然考えてないので、できれば、ちょっとやっぱり [両親の墓は] 山奥、奥でもないんですけど、そっちのほうなので、子どもらが通うのが大変になっちゃうので。

趣味はスポーツ観戦で、コロナ前はよくスタジアムに行き応援していた。同じ趣味の友人がいて、コロナ禍でもテレビをつけながらビデオ会議システムで一緒に応援するなど工夫をして楽しんでいる。また音楽も好きで、あるバンドのファン。これも今はライブに行けないので友人に教えてもらってオンラインで鑑賞している。友人は多いが、一方で再婚はあきらめており、今は気楽にすごしている。

[今はコロナでスポーツ観戦に] 行くまでがちょっと厳しいかなっていうので。何か拍手するだけとか聞いてたので、つまらないなっていうのもあって。で、地上波じゃないか、BSとかテレビでやってるときは、やっぱりオンライン飲み会も兼ねつつ、テレビ見つつっていうような。[友達と] 一緒にわあって。

去年から猫を飼い始めた。猫のことはとても大切に思っていて、健康にいいペットフードを探すなど大事に飼っている。子どもは放っておいても大丈夫だが、猫の世話はやかないといけない、と強く思っているようである。

人間はもうカップラーメンとかで食べてればいいやとかちょっと思っちゃうけど、猫は結構好き嫌いとかも出てきてるみたいなのと、おやつしか食べないときとかもあるのね。人間よりよい物を食べてると思うので、本当はちゃんと働いて、食い扶持を稼がないと。

年金もあまり期待できないので60歳くらいまではしっかり働かないと、と思っている。とはいえ、体力もなくなってきているし、視力もよくないので短時間労働がいいと思っている。東京は車やバイクがなくてもふらっと歩けるところがある。すぐデパ地下などに行けるので今の住居には満足している。

Sさん、40代、女性

Sさんは地方出身、地元で高校を卒業後大学進学のため上京。学びたい専攻があるため選んだ大学だが、東京に来たいという気持ちもあった。学生時代は都内の学生寮に住んでいた。就職氷河期にあたったので仕事を選ぶというよりも、内定をもらったならそこにいく、ということでそのまま東京で就職をした。国内各地で仕事があり、拠点は東京に置きながらも各地のウィークリーマンションに住んで行ったり来たりという生活だった。その後転職をし、5年ほど働いたが、その間に近隣県でマンションを購入。さらに現職に転職する際、通勤に便利な今の場所へ買い替えた。便利な場所で気に入っているが、もし何かあればまた買い替えることもあるかもしれない。

最初の仕事は大手で安定はしていたが、男性社会で保守的だったため、女性として活躍は難しいと感じ、今はベンチャーで、小規模の会社で仕事をしている。現在の職場で給料は下がったが、管理職として働き、雰囲気良く満足している。会社の同僚とも良い関係を築いている。年齢を重ねてきて、お金を稼いで出世をするということよりも、仕事の充実や感謝されるようなことを無理なくしていくことに軸足を移そうとしているところである。

だから偉くなるとかっていうよりは、何か誰かに認めてもらうとか、認めてもらうってのは何か役職をもらうっていう意味じゃなくて、何か誰かにありがとうって言われるとか助かったって言われるとか、あなたがいてくれてよかったって言われるとか、そういうような何かそれだけでもすごく意義があると思うんで、そういうことをしていきたいなとは思ってました。

両親は故郷で暮らしており、持病などもある。車がないと不便な場所だが、高齢になり免許返納もしていて次第に生活に支障がでてきている。連絡はLINEなどで週に1回はしている。普段は夏と冬に帰省しているのだが新型コロナの影響もあり今年は帰省できていない。仲の良い親戚もいて帰省すれば会うのだが、家庭を持っている弟は地元ではない県に住んでおり、あまり会うことはない。将来は自分が親の面倒を見るのだろうか、故郷に帰ることは考えられず、そうなる親を東京に呼ぶのか、悩んでいる。

やっぱり距離が離れてると、ちょっと様子を見に行くというのがハードルが高くて、せいぜいでもやっぱり年に数回なんですよね。だからやっぱり近くにいたほうがいろいろ面倒は見えてあげやすいけれども、父にとっても母にとってもそれがいいかどうかっていうのはちょっと私も相当疑問ですし、私も、じゃあ、近くにいればどの程度サポートしてあげられるのかっていうのがやっぱりちょっと自信のない部分もありますし、ちょっとそこは何とも言えないですね。

仕事関係の集まりで知りあった男性と現在交際しており、週に2、3回は会っている。信頼をしている人が近くにいるのは大きく、安心感がある。

ポイントとなるのは信頼関係であって、この人は絶対私を裏切らないっていうような安心感があります。それは日々の言動だったり何かあったときの行動、考え方、そういうことから今に至ってるわけなんですけれども、絶対この人は裏切らないっていうのがあるから安心感につながるのかもしれないですね、はい。

災害などがあれば助け合えると思う。ただ結婚や同居、ということは話に出てはいないし、考えていない。若いころから自立して生活したいという気持ちが強かった。周囲がどんどん結婚していく中で考えないこともなかったが、具体的に結婚生活のイメージを描けず今に至っている。

どういう結婚生活がしたいとかっていう答えも自分の中で自問自答しても見つからなかったし、じゃあ、私はどうしたいのかって考えたときに、私は別に結婚イコール誰かに経済的に頼るってということではないんですけども、やっぱり自立して生きていきたいっていうのはすごく自分の中の強い気持ちとしてありました、常に。

友人たちは仕事を通じて知り合う単身者が多い。家族を持っている人とは話も合わないし、環境も違う。趣味はスポーツ観戦で、日本中で開催される試合を見に行くこともある。コロナ前は観戦仲間と盛り上がるが多かった。

将来については漠然とした不安感はある。何が不安かと聞かれると答えられないのだが、社会全体の不透明感を感じている。それを一つひとつ少しでも明確にしようと思っている。経済面でなるべく収入はあった方が良さそうだし、高齢期になっても社会と接点をもっていることは大事だと考えている。

何かもっと先がある程度見通しがつくのであれば、もうちょっとはっきりした目標とかも持ちやすいと思うんですけど、何かそういうはっきりした道筋が立てられるイメージが全くない。それは社会全体もそうだし、私個人もそうですし、個人、個人もそうですし、そうですね、なので、自分がどういうふうに住んでいくか、どういうふうにするのか、このままずっと勤めるのか勤めるってことを辞めて何か別の形で働くのか、どうなるのかっていうことも全く分からない。

Tさん、50代、女性

Tさんは東京都心部で生まれ育った。大学まで実家で暮らし、卒業後は事業をしていた両親の元で家事手伝いとして、習い事を教えたり、父の事業を手伝ったりしたこともあった。しかし両親が50代の若さで相次いで亡くなり、弟と親戚が事業を継いだので、その後自分は家業には関わっていない。仕事としては最近までボランティア団体の仕事を手伝っていた。

3年ほど前に大きな病気を経験して、自宅で療養中なので今は仕事をしておらず、所有している資産で暮らしている。病気のことについては弟に心配をかけたくないの、あまり詳しく話していない。

[弟には] 心配させるようなことは伝えたくないの、いいことは伝えたいんですけど、心配の種は言わないようにしているので、昔から。

都心で暮らしていた期間が長かったが、7年ほど前に当時仕事をしていたボランティア団体のメンバーと近いところに、ということで現居住区に越してきた。最初は家族名義の家だったが場所が気に入らず、今は賃貸に住んでいる。前の家より狭いが、掃除も楽でよい。現居住区に移った直後は、都心と比べるとどこに行くにも時間がかかり、遅刻ばかりしていた。今は空気もいいし、公園や美術館、図書館も充実していて気に入っている。環境問題に興味があり、車を使わないようになった。

ハイヒールをやめました。駅まで行けない、たどり着けない。つまずいたり、スニーカーを買い、ローヒールの靴を買い、腰に優しい生活を。[現居住区]ライフはローヒールなんだなというのが分かりました。

同窓会の幹事もしていたので、学生時代の友人とは今でもつながりがある。習い事を教えていた時の生徒さんとも友人として付き合い合っている。そのうちの一人は近所にいるのでよく合う。いとこが近くにいるので月に2、3回は会う間柄で親しい。ときどき地方に住んでいる友達が東京にきて泊っていくこともある。

いとも近所にて、先ほど申し上げたお稽古のお友達、生徒さんがお友達に昇格した方と、仲よくしていただいている方も、比較的歩いて行ける範囲。会えなくても親戚や知り合いが歩いて行ける範囲にいるというのは心の支えになっています。

結婚については25歳のころに婚約をしていたが、その時期に父が亡くなって、話は立ち消えになった。両親がいない、ということがその当時は足かせになっていたかもしれないと今は思うし、両親から結婚しろというプレッシャー

もなくなってしまったので、その婚約以降は結婚の話にはならない。自分と価値観、死生観が合う人というのは難しいのかもしれないと感じている。

[早くに両親が亡くなったので結婚については] せかされないですし、またいいことを人に言えない時代が長かったので、ちょっと、何か隠してふうな生き方をしていたのかなと思います。[今は] そこで色眼鏡で見ることがない時代になってきましたので、楽に、楽な時代になってよかった。
[自分の死生観と] 同調しなくても、相手の考え方を理解できるという方じゃないと、パートナーとしては難しいのかなと思います。

今後も弟は彼の家庭もあるので自分のことで心配はかけたくないと思っている。将来また病気になっても治療はしてもらわなくていい、延命措置は拒否する、と伝えてある。葬式もしなくてよいし、お墓にも入りたくはない。死んだら自然に帰りたい。仏教的な生死観に影響を受けていると思っている。これは両親が早くに亡くなったことも影響があるのだろうと感じている。

治療してまで生きたい、生きないといけない理由は、何か研究の途中とかっていうのであれば、それをやり遂げたいという気持ちがあるんですが、それもないので、それが自然界の定めた寿命と捉えてるんで、無理な治療はね。
あとは自分の痕跡をこの世に残したくないので、お墓や樹木等も。

もし自分が一人で、自宅で死んだときには処理をしてもらわなければならないと思うのでその費用と、家の鍵は弟に預けてある。体調も回復しつつある中、今後は日本文化と海外の架け橋になるようなことを少しずつやっていきたいと思っている。

Uさん、50代、男性

Uさんは地方出身。別の地方の大学に進学した。その後大手企業に就職し、しばらくして東京に転勤となった。会社では長時間働くこともあったが、そんなものだろうと当時は思っていた。会社から派遣されて海外留学をしたこともある。

周囲にはびっくりされたが、50代前半で早期退職し、現在は無職。企業年金は選択すれば50歳からもらえるので、受給し、残りは貯金を取り崩している。コロナ以前は一人で海外旅行をしたり、ウォーキングやジョギング、山歩き、趣味のカメラを楽しんだりと気ままにすごしている。

どうしてるかと聞かれると困るんですが、何もすることないんですけど、朝早く、4時から5時ぐらいには起きてまして、その後、ウォーキングとかジョギングとかちょっと体は動かすことにしてまして、あとは食材の買い出しなんか、9時頃から行きまして、それ以降は特に決まってないですね。

[海外旅行は月に一か月くらいいくことがあるので] そうなるとなかなか人と一緒にというのは難しいですよ。恐らく誘わないです。あとは結構、何ていうんですか、気ままっていうんですかね、向こうに行って見て、あれっと思ったとこをさささっ行って見てくるとか、自由にできますので、1人はいいんじゃないですかね。

父親はすでに亡くなっているが、80代の母が故郷で一人暮らしをしている。最近耳が遠くなっているようで、年に3回くらいは会いに行っていたが、今年は新型コロナの影響で訪問できていない。実家は山がちの場所なので、母も移動が難しいだろうと心配している。兄は他県に住んでおり、その子どもはもう独立しているのだが、母親の面倒をみるのは自分ではないかと思っている。そろそろ母と一緒に住んだ方がいいのか、と思うこともあるが、まだ具体的には考えていない。

大学時代のクラブ活動を通じた友人、会社の元同僚などとは今も付き合いがあり、コロナ以前はよく飲みにいっていた。何か困ったときは、どうしても必要があれば友人を頼ることはできるかもしれない。結婚をしたいとは特に思っていない。若いころは相手を探したこともあったが、男性中心の職場だったし、いい人に出会わなかった、ということ。住まいは分譲のマンションに住んでいる。商店街があり、カメラ撮影で行く公園も近く、よく散歩もしている。ただ周囲に友人がいるわけではなく、マンションの住民とは挨拶くらいはするが名前は知らない。孤独死はいやだが、あまり気にはしていない。

[東京は結婚しなくても様々な人と柔軟につきあえる、と言われているが、その考えは] 僕はないですね。あんまり、僕、興味、人間ってものすごい興味があるんですけど、人間に対して、だけど、人との付き合いにはあまり興味ない、それほど興味はない。

将来について特に計画などはない。プランがあって退職したわけではなく、仕事をしてきた時代を懐かしく思いだすときもある。こんな暮らしでそう思うのは申し訳ないかもしれない。暇すぎると思えばアルバイトくらいするかもしれないと思っている。将来は施設などに入った方がいいのかもしれないがまだ真剣に検討はしていない。

何かプランがあって辞めたわけでもなくて、それこそ、友達なんかには何もしないために辞めるっていうような言い方、何かやる気は基本的にないんですね。それで、よくそんなこと言ってたって、みんな何か月かしたら暇で暇でやり切れなくなるんだぞなんてことも言われたんですけど、そういうこともなくて。

客観的に見れば、[早期に退職して] やっぱり何をやってるんだろう、僕って思いますよね、客観的には思いますよ。でも、主観的にはとても僕には自然なことで、何か今の生活も性に合ってるなどと思って。

将来的なことは、確かに嫌だなと思うのは、孤独死みたいなね、マンションで死体で発見、何か見つけた人にも迷惑になるだろうし、嫌だなとは思ったりするんですけど、ただ、それで気がめっちゃうとか、そういうような感じでは今のところはないんですね。だから、あまり具体的じゃないんですけど、ちょっと考えたのは、さっき言ったように、将来的に1人で、それこそ死んじゃう、孤独死とかなんとかというふうなことをもし真剣に考えるんなら、元気をうちから入れる施設みたいなのが今あるじゃないですか。見回りしていただいて、ちょっと不自由が出てくれば介護みたいなものもしてくれるような施設があると聞くんです。

Vさん、30代、男性

Vさんは東京の下町で生まれ育ち、そして現在も同じ地域で賃貸マンションに暮らしている。両親が暮らす実家も同じ町内にあり、週に1回程度顔を見に行っている。二人の兄もこの地域の周辺でそれぞれの家族と暮らしている。大学在学中に海外留学、その後就職し、結婚。結婚後も数年は実家で両親と暮らしていたが、いったん別の区に家族で引っ越した。しかし9年前に離婚して、二人の子どもたちは元妻の元で暮らすようになり、地元にもどって一人暮らしとなった。現在交際している人がおり、再婚を考えているような関係である。結婚前に今の自宅でその交際相手と同棲を始めるかもしれない。前の結婚の時の子どもたちともこれまでどおりうまくやっていきたいと思っている。また将来は新しいパートナーとの子どもを持つことも考えている。

現居住区には愛着がある、というよりは、とても馴染みがある場所で他の土地に行く特別な事情がないかぎり、ここにいるのだろうと思っている。

まず一つは、やっぱりちょっと人間なんで慣れちゃっているんで、なかなかほかで暮らすという、何というんですかね、勇気がないと、想像がつかないというのと、車も持っているんですがどこか出かけるにしても電車でも出かけるにしても、やっぱり何となくこう行って、ああ行ってという想像が付きやすいので、いろいろ神奈川だったりどっかだったり、ちょっと遊びに行った先に魅力を感じて引っ越してみたいという気持ちは生まれたりはしますが、なかなかやっぱりなれ親しんだところというのがあるのと、やっぱりずっとなかなかほかに行くというあれがないですね、きっかけが。

長く同じ地域に住んでいるので、実家の近所の年配の人たちとは会えば挨拶をするような付き合いはある。町内会の行事を手伝ったり、防災訓練にも参加したりしている。また、母親のすすめで、地元で神輿をかつぐ会に参加していて、多い時には月2回くらい集まっていてよい気晴らしである。小中高校時代の友人ともまだ接点があり、そのうちの数人とは会うことが時々ある。区の情報誌などにも時々目を通して興味があるイベントや教室などもあるのだが、平日だと参加できない。

やはり、小さい頃から生まれたときから住んでるので、まだ一応その当時の人たちはご健在でいらっしゃるんで、会えば挨拶するという感じですかね。あと、神輿を担ぐ会に入っているんでそこで年長者の人とか町内の人と関わることもあるので、それですれ違ったら挨拶したりとかというレベルですかね。
私の母とのお神輿の会の人を知り合いで、やっぱりなかなか特殊な世界なので飛び込んで来る人が少ないので、会員が減っているというところで僕が男3兄弟なんのでということで、取りあえず来てみてというので行ってきてそのまま。

休みになると、出かけることが多く、一人で街歩きや、ショッピング、デイズニーランドなどに行くこともある。今は新型コロナの影響であまり人と会えないのが残念である。

大学を卒業後は海外留学をし、その後就職をし、現在も同じ会社に勤務している。新型コロナの影響は会社としては若干あるものの、自分の仕事では今までと変わらず出社している。以前はよく職場の友人や、取引先の人たちと飲みに行っていたが、それはなくなった。会社は入社当時よりずいぶん組織が大きくなり、やや戸惑っている。今後は転職もあるかもしれないと思っている。新たに勉強していることもある。それでも今の仕事にはおおむね満足しており、プライベートとのバランスもとれていると思っている。経済的にも現在あまり不満はない。

両親の介護が必要になった場合は、親と仲の良い次兄を中心に兄弟3人で面

倒をみることになるだろうから、あまり心配はしていない。父方の墓が都内にあり、両親はそこに入ることになるだろう。しかし自分はそこに入るかどうかはわからない。散骨などでもいいと思っている。自分の老後については年金に不安があるので、投資なども考えていかないと、とは思っているがまだ漠然としている。できれば高齢になっても現居住区に住んでいたいと思っている。人生の方向としては、経済的に豊かであることも大事だが、それよりも健康で、楽しく過ごしたいと考えている。

一応今、やっぱりいろいろ世間でも年金の問題とかというのはよくよく目にしてるので、何か確実にできる投資というのがあればというのは考えているんですけど、やっぱりちょっとそういうのでただただ何となく調べているだけでとどまってしまうので、特に何か備えとかというのはまだしてはいいですね。
何をやっぱり満足して一日一日過ごしたいなというのがあるので、それがお金ありきなのか、心のゆとりありきなのかはちょっと難しいですけど、必要最低限生活ができていれば何よりも健康で笑顔でいればいいなという気持ちですかね。

Wさん、60代、男性

Wさんは地方出身。大学卒業後就職で東京近郊に移動した。最初は会社の寮に暮らし、その後都内の賃貸マンションに移った。しばらくして、家賃を払い続けるなら買った方がよいのでは、と会社に近い現居住区にマンションを購入した。

50代半ばまでは同じ会社に勤務していた。40代後半に過労や年齢などのせいか体調を崩し鬱状態となり、2年間の休職を経験した。復帰はしたが、その後50代半ばになって、会社が提案していた早期希望退職に応じた。

[最初の会社では] 今の基準で言ったら過労死する水準も1年ぐらい続けて働いていました。なので、今、生きているのは非常にラッキーだと思います。何というんですか、体がけがしたとかいうのじゃなくて、本当に鬱病、そんな感じなので、本当に自宅療養みたいな感じです。[その後会社に] 戻ったんですけども、その後やっぱり会社としては扱いにくかったんだと思うんですね。
担当役員が来て、君にはもう仕事はないと言われました。こちらでもそこまで言うなら応募してやろうということで[希望退職に] 応募しました。

退職後少し休んだが、その後再就職し、最後は取締役まで務め60歳で退職。結果としては恵まれていて、充実した人生だったと思っている。現在はこれまでの経験を生かして、非常勤で法務関係の案件調査をしたり、執筆請負をした

りしている。法務関係の仕事は調べものも多く、勉強しないといけないという意味でとても楽しんでいる。ほかには区の環境ボランティアというものにも参加している。もっと忙しくてもいいかもしれないと感じている。

故郷の実家では、母親は亡くなったが父親が存命で、独身の弟と一緒に暮らしている。故郷に帰っても仕事もないだろうから、戻ることはないと思っているが、普段は盆と正月に帰省しているし、弟とはメールなどで連絡をしている。

やっぱり東京のほうがいちいち便利なのと、刺激がありますね。知的好奇心を満足させる刺激になる。

父親は優しく、理解もある人である。弟が面倒をみているが、Wさんは東京にいて、離れていると死に際などでできないこともあるかもしれないと考え、数年前に父の生前葬というのをWさんが提案して行った。父が元気なうちに故郷で親戚を集め、会を催した。親戚も高齢者が多いので、集まるときに集まろうという趣旨であったが、やってよかったと思っている。

弟と父親と相談して5年前に生前葬をやりました。私がこういうふうにしたんだけどというので、そうしたら父親がいいよというのでやりました。結局、私が離れているので、何か起きたときに多分間に合わないですね。父親に、それであれば知り合いが元気なうちに顔見せしておこうということで生前葬式、この後の葬儀はやりませんよということで皆さんにお伝えしてあります。

友人はこれまでの仕事を通して知り合った人がほとんどで、一人元同僚とは特に親しくしている。狭く深く付き合うタイプなので、あまり人数は多くない。結婚は30代のころに機会があったのだが、事情で立ち消えとなり、その後は仕事が忙しく考えることもなかった。母親も悲しんでいたし結婚はしておきたかった、という気持ちは今でもある。

現在の住居にはすでに30年ほど住んでおり、管理組合の理事をしているため知り合いもいる。町内会はお年寄りばかりでありあまり参加しようと思わないが、近所の行きつけの店にはよく顔をだしている。

趣味は国内を旅行することで、それもガイドブックに頼るのではなく、なるべく人の知らないようなところでおいしいお店を発見するのが楽しい。親しい友人と行くこともあるし、一人で行くこともある。知的好奇心が強いと思っているので、雑学を学ぶことも楽しい。知的好奇心を満たすことを大切にしている。一方で、自転車で近所を1、2時間走ることも気分転換になって楽しい。

現在は健康面でも問題はなく、経済的にも安定しているので、さしあたっての心配はないが、漠然とした不安はある。認知症は怖いと思っているし、食生

活など健康にも気を付けてはいるが、どうしようもないことは多い。かといって、行政にそこまで頼るものではないと考えている。

行政にこれを要求したらバンクしちゃうでしょう。してもらえたらありがたいですけど、そこまではお願いするものじゃないと私は思っています。

政治、地方行政についてはほかにもいろいろと意見があるが、地球温暖化問題、社会保険制度などにもっと取り組んでもらって次の世代を支えてほしいと感じている。

やっぱりこれからの世代の人のことを考えていかないと、日本が駄目になっちゃうじゃないですか。それ何で偉い人たちは考えないのかなというのが残念ですね。

3. インタビューからみた壮年期単身者の生活歴

今回のインタビューはコロナ禍という状況の元、オンラインで実施された。したがって、そのようなオンライン環境を持たない方たちにはアクセスすることができなかった。また、インタビューを受けてくださった方たちは、調査会社に自ら登録し、もともとインタビューに抵抗のない方たちであることも注意したい。さらに22名という人数は、これをもって東京の単身者像全体を捉えることにはならない。

しかしこのような事情を考えても、今回の、様々な立場、状況、そして人生の展望を持つ方たちのストーリーは、東京23区に居住する壮年単身者の多様性を示唆していると考えられる。その中からいくつかポイントとなる点をまとめてみたい。

前章までに指摘されているように、壮年単身者は多様な地域から特別区に流入、もしくは特別区内で移動をしている。今回のインタビューでは近隣県（神奈川、千葉、埼玉）を含む北海道から九州までの地方、東京都郊外からの移動、そして出身も現住所も23区内というケースが見られる。世代別には40代では地方での就職が難しく東京に必然の結果として移動したケース（Sさん）、50代ではバブル景気の中仕事の選択が幅広く、東京で働きたいという希望で流入してきた人たち（Mさん、Oさん）が見受けられる。いずれにしても、（第6章で指摘されるように）進学、仕事によって地方から都内に流入し、定着している様子がうかがえる。また東京郊外、近隣県の出身であっても、仕事の都合などで23区内に移動することもある（Gさん、Rさん）。さらに、23区内で生まれ育ちながら、そこから仕事や住宅取得などを期に別の近隣区へ移動する人

(Eさん、Tさん) もいる。東京都心部が持つ多様な仕事を提供する場合、利便性が、地方出身者および東京出身者の双方から重要視されている様子がインタビューからも見受けられる。

そのような中で、今回のインタビューでは総じて転職を経験した人が多く、22名のうち、卒業後から現在まで同じ会社で勤務している（もしくは、勤務していたが退職した）人はわずか2名（Jさん、Wさん）である。会社員を経てフリーランスをしている人も複数名（Cさん、Gさん、Hさん）いる。ここからは特別区の壮年期単身者が様々な職種はもちろん、その就業形態も多様であることをうかがわせ、彼らが職業選択に対して流動性をもっていることが想像される。自らの家族がいない自由な状態ということは、仕事の選択にも自由が生まれ、居住する地域についても柔軟な考えを持つ人が多いということが可能性としてあげられる。一方で、仕事以上に、生まれ育った区、もしくは子育てなど人生の中で重要な経験した居住区に愛着をもって暮らし続ける人（Vさん、Iさん、Rさん）も少数ながらいる。彼らのケースでは地元と家族（親や子ども）との関係性が大きくその土地の愛着へ結びついていることがうかがえる。

さらに今回のインタビューでは、大きな病気について語る人が多かった。壮年期は高齢者と比較すれば健康な人も多く、軽微な病気であれば一人で対処できるであろうが、がんなどの深刻な病気、精神的な病気を経験する人は単身であることの困難さが表れやすい。働き盛りの時期に仕事ができなくなり唯一の収入減を失う、病気であることに対して家族のサポートが無い、もしくは乏しく、周囲の理解が得難い、というような問題が起り状況を悪化させる可能性も高い。離れて暮らす実家や兄弟姉妹に頼ることも難しく（もしくはそれを避けているため）、友人にどこまでサポートを依頼できるか、できれば迷惑をかけたくない、という声が聞かれた。そもそもこのような困難時に頼れる友人がいない、という人も多い。

4. インタビューからみた壮年期単身者の社会関係

このように、多様な地域から移動し、時間を経て壮年期へ入った単身者は、故郷や地元との関係も様々である。親、兄弟姉妹が地元に残っているケースも多く、単身者としてどのように故郷との関係を持つのか、様々な状況が見て取れる。経済的に比較的安定しているグループは、故郷に残る親世代への支援を検討しつつ、安定的な関係を保っているケース（Hさん、Kさん、Sさん）も

見られるが、仕事が不安定な場合などに帰省をためらうなど、関係が不安定な様子も見受けられる（Bさん、Oさん）。また地方出身者の場合、小中学校の同級生との関係を維持することが難しいこともうかがえる。一方都内、近隣県出身であっても、単身者であるということから既婚で子育てをしている、もしくは経験した友人とは付き合いが難しいことが語られている。先に述べたように転職が多い彼らは、職場での長期的な友人関係も豊かとはいえず、学校からの友人とも地理的な距離、生活観の違いなどから疎遠になりがちなか中、特に男性では親しい友人、頼れる友人が少ないという例が見られる。そのような中、顕著に見られるのが、趣味を通しての友人との付き合いである。特に女性においては、趣味を通じて友人と頻りに連絡をし、また何かあれば助けてくれる存在として語られていることが多かった。そしてその趣味を楽しむためにも便利で文化の中心である東京に住む意味を評価している様子もうかがえる。

一方地域での社会関係は、地元に着しているケース（Iさん、Vさん）を除くと総じて薄く、住んでいるマンション内での関係もない、と答える人が多い。元から興味がない、煩わしい、というケースもあるが、きっかけや情報がない、という答えも多い。一方で人と関係しない受動的な形で、街の雰囲気、飲食店や買い物の充実、図書館、公園などの施設を好意的に評価する人は多い。

5. インタビューからみた壮年期単身者の将来への展望

今回のインタビューで繰り返し語られたのは、壮年期単身者が持つ将来への漠然とした不安である。前年度のアンケート調査にもその不安は現れているが、特に今回は新型コロナの影響下でのインタビューでもあり、将来どのような社会となるのかについて、見えない不安を語る人は多い。不安の中でも顕著なものは経済的な不安であり、これは現在の経済状態に関わらず述べられたことである。では、その不安に対して壮年期単身者はどのような対策をしているのか、と見ると、男女での違いが見られる。男性の中には投資をしている、という人もいるが、実際にどのくらい必要であり、どのくらいの資産形成を目指すのか、という具体的なプランを持つ人は少ない。女性も同様に、どのくらい資産が必要なのか、ということは曖昧な人も多いが、第3章でも述べられているように不動産を持つことを一つの手段として考えていることが、インタビューでも見受けられた。将来一人暮らしが継続することを十分想定し、老後も一人で暮らしていくために、不動産は安住の空間であるだけでなく、高齢者施設へ入るための準備でもあることがうかがえる。男性で不動産を所有する人ではこのように明確に不動産の活用方法を考える、というよりも、とりあえず資産を増やす、成り行きで取得、という人がおり、老後の準備という視点はあ

まり見られなかった。

また、親の介護についての不安もある。40代ではこれから老いていく親の介護についても、自分がどの程度関わるのか、兄弟姉妹との兼ね合いもあり、まだ不明な中、不安を述べる人たちが多く、一方50代ではすでに両親が高齢化し、ある程度兄弟姉妹との役割が決まってきた人が多く、むしろ、親の介護についての心配は少ないようにも感じられた。将来への不安というのは高齢期に高まる、ということだけではなく、あらゆる意味で流動性があり選択肢が多い壮年前期の単身者でも高いということを認識する必要があるのではないだろうか。

一方で孤独死については50代でより具体的になっている。孤独死が嫌だ、という人と、孤独死によって周囲に迷惑をかけて死んでいくのが嫌だ、というコメントがみられた。さらに多くの人々が、墓について、従来の家族墓ではなく、樹木葬、散骨、などに言及していることは印象的である。墓というものの自体が、家族を単位としている中、そこに入るということが考えにくい彼らの気持ちの表れとも言えるかもしれない。

先にも述べたように今回インタビューを行った22名の人たちは、特別区に暮らす壮年単身者の代表、典型であるとは言いきれない。しかし、彼ら彼女らが語るライフストーリーには、多様化する壮年単身者の生活と将来への展望の一端が見出されていることは確かであろう。自らの家族（配偶者や子ども）を持たない単身者は、これまでの典型的な家族世帯とは異なる様々な悩みや不安を抱えつつ、一方で大都会が提供する仕事やアメニティを享受している。壮年期において、家族がいないということは、すべての生活の責任は自分に帰することとなり、それは転職や転居が多いということと同時に、失業や病気などになったときには深刻さが深まることにもつながることを示唆している。一方で、趣味などを通じた友人関係、さらに同じような境遇にある単身者の友人と社会関係を築ける人にとって、それは家族の代替とはならずとも、何らかの形で支えとなっていることが見受けられる。学校、職場、地域といった場での社会関係ではない、さらに家族でもない関係は壮年期単身者にとっては重要である可能性が高く、そのような観点にたって、今後高齢化していく単身者の支援をしていく必要が行政には求められているのかもしれない。

第6章

特別区をめぐる 人口移動の変化

第6章 特別区をめぐる人口移動の変化

現在特別区に居住する壮年期単身者の出身地は多様である。その背後には過去に生じた日本国内の地域間人口移動があり、その移動パターンの変化が反映されていると考えられる。本章では特別区をめぐる人口移動について、その量的な変化としての移動パターンの変化、転出先地域および転入先地域の変化といった地域間移動パターンの変化、配偶関係別居住期間等の分析から明らかにすることを目的とする。

1. 特別区をめぐる人口移動数の推移

(1) 3大都市圏の転入超過数

図 6-1 3大都市圏の転入超過数の推移 (1955～2020年)

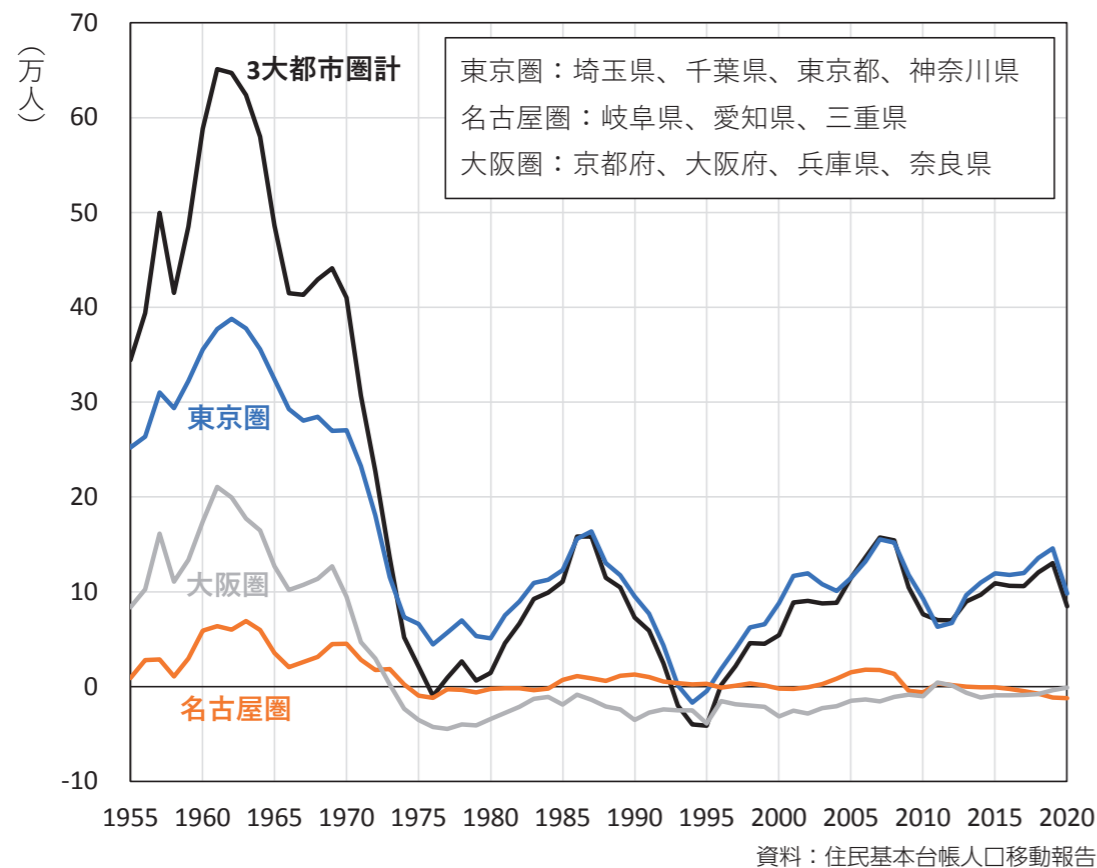


図 6-1 は住民基本台帳人口移動報告による 3 大都市圏の転入超過数について、1955 年～2020 年の推移を示している。1960 年代の高度経済成長期には三

大都市圏の全てで転入超過であり、合計して毎年 40 万人以上の転入超過を記録していた。中でも 1961～63 年は毎年 60 万人を超えており、非大都市圏から大都市圏への大きな人口移動が発生していた。

その後、1970 年頃から三大都市圏の転入超過は急速に縮小し、1976 年には転出超過となったが、バブル経済を背景としながら 1980 年代半ばに拡大に転じ、2 つ目のピークを迎える。この時、高度経済成長期とは異なり、名古屋圏と大阪圏の経済的な地盤沈下も背景としつつ、東京圏のみが転入超過となるように変わっている。バブル崩壊後に東京圏は転出超過となるが、1990 年代半ば以降は再度拡大に転じている。バブル経済期と同様に東京圏のみが転入超過であり、2007 年と 2008 年の転入超過数は 15 万人を超え、バブル経済期に匹敵する水準となった。リーマンショックによる影響で転入超過数がやや縮小するが、従前の水準に戻るような拡大傾向を見せている。2020 年はコロナウイルス感染拡大の影響を受け、前年の 14.5 万人から 9.8 万人まで縮小した。この縮小傾向が続くのか、また拡大に転じるのかは現時点では判然としないが、人口移動の結果として東京圏人口が増加するという構造は維持されると見てよいだろう。

(2) 東京圏内の地域別転入超過数の推移

図 6-2 東京圏内の地域別転入超過数の推移 (1960～2019年)

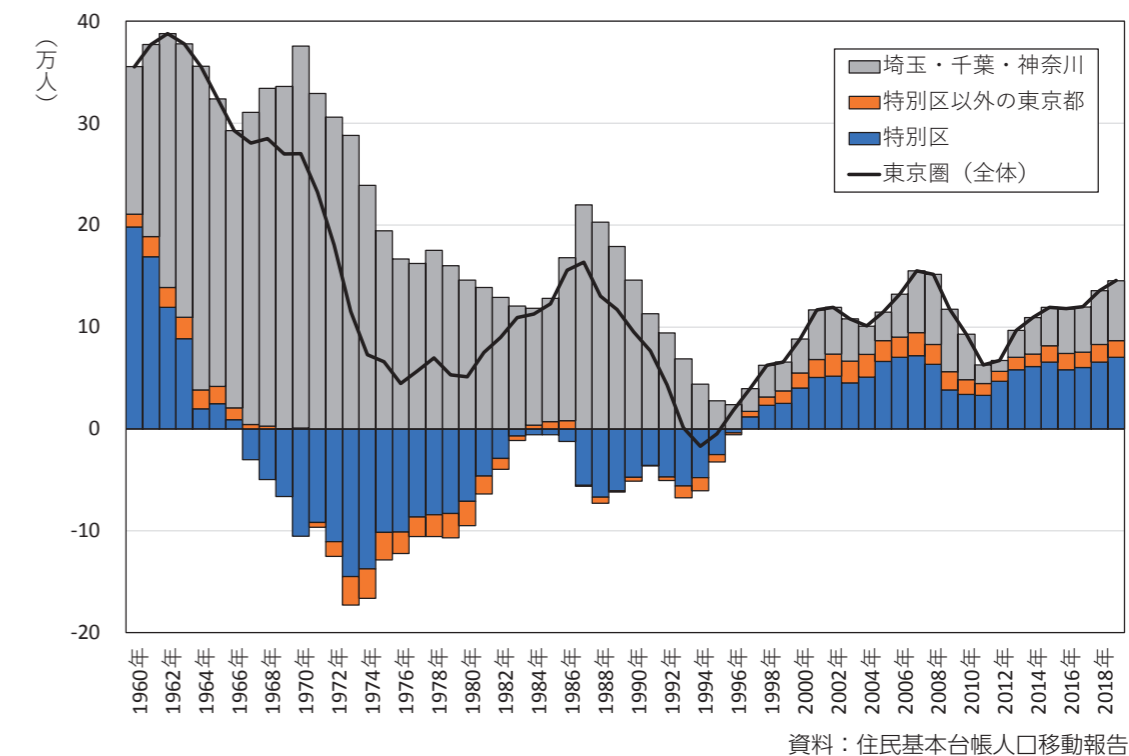
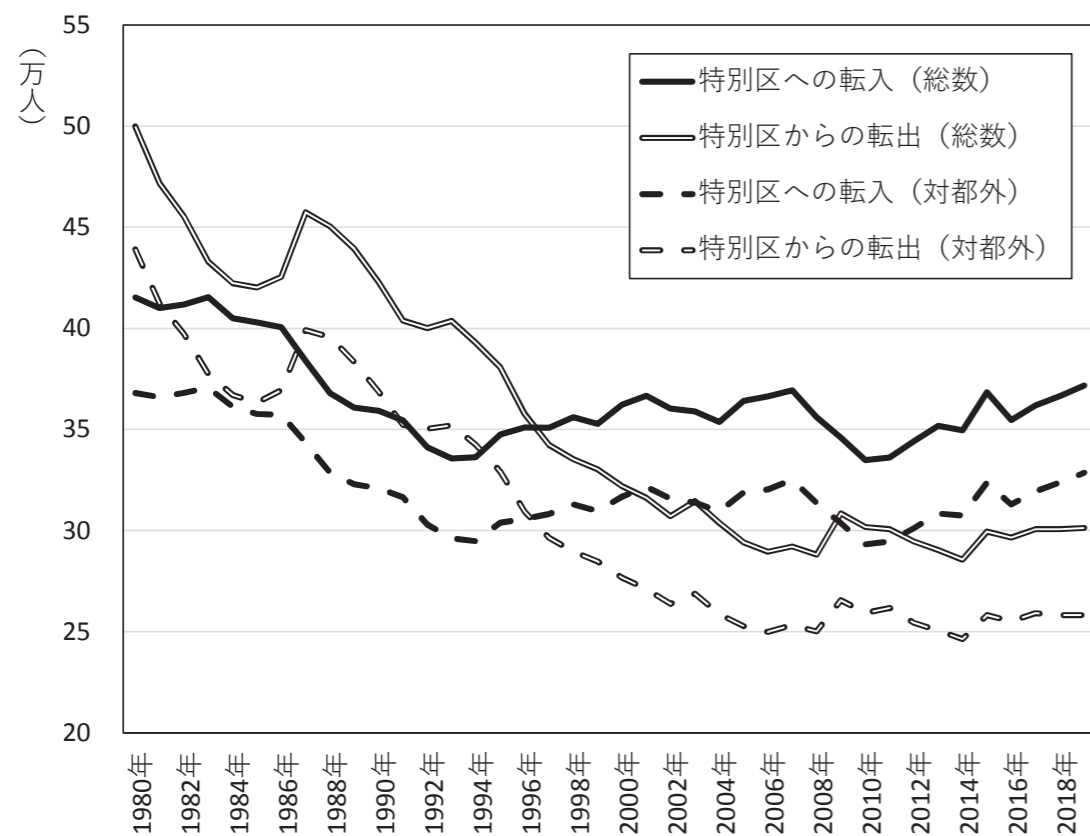


図 6-1 で東京圏の転入超過数の推移を確認したが、この転入超過の傾向が東京圏内のいずれの地域でも同様に生じてきたわけではない。その内、特別区の転入超過の推移がどのようなものであったかを見るべく、東京圏内を「埼玉・千葉・神奈川」、「特別区以外の東京都」、「特別区」の3つに分類し、それぞれの転入超過数の推移を示したのが図 6-2 である。2021年2月13日時点では、2020年の住民基本台帳人口移動報告の詳細集計が公表されていないため、ここでは1960～2019年の推移を示している。

高度経済成長が始まった1960年代前半では、3地域全てが転入超過であったが、1960年代後半以降は埼玉・千葉・神奈川の転入超過が拡大する一方、特別区以外の東京都と特別区は転出超過に転じた。これは東京圏の郊外化を意味しており、東京圏全体が転入超過である中、東京都は転出超過であり、その大部分を特別区が担ってきたことがわかる。これがバブル崩壊後の1990年代半ば以降では大きく傾向が一転し、特別区が転入超過に転じる。次第に東京圏の転入超過の4～5割程度を占める状況へと変化してきており、東京圏内に新しい移動パターンが生じている。

(3) 特別区の転入と転出

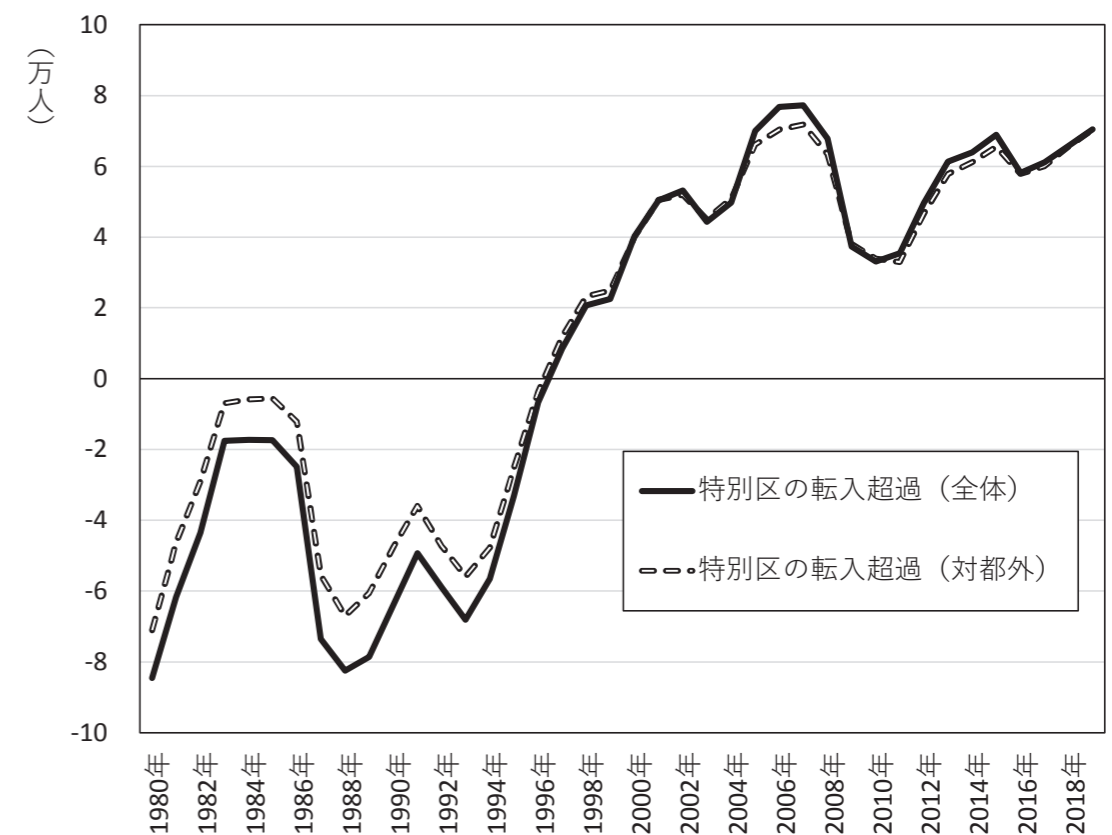
図 6-3 特別区の転入数と転出数の推移（総数、対都外の別）（1980～2019年）



資料：住民基本台帳人口移動報告

図 6-3 は1980～2019年の特別区の転入数と転出数の推移を示している。総数とは特別区と特別区外との間に生じる転入数と転出数であり、対都外とは特別区と東京都外との間に生じる転入数と転出数である。総数と対都外の変化は、ほぼ平行であるとみてよい。1980年から1990年代前半までは転出数と転入数ともに減少しているが、転入数が増加に転じて2000年代前半までその傾向を継続するのに対し、転出数は減少を続ける。リーマンショックの影響で転入数は一時的に縮小するが、その後は2019年まで増加を続ける。一方、転出数はリーマンショックの影響でやや増加するが、転出数の変化ほどではなく、その後はおおむね横ばいで推移している。1990年代半ば以降の変化量としてみると、転入数の増加よりも転出数の減少の方が大きいことから、一見すると特別区部では人口の吸引力の高まり以上に、域内にとどまる人が増加したことにより、転出超過から転入超過に転じたことになったと考えられる。

図 6-4 特別区の転入超過数の推移（総数、対都外の別）（1980～2019年）



資料：住民基本台帳人口移動報告

なお、図 6-4 は特別区の転入超過数を総数と対都外で示しており、両転入超過数のギャップは特別区と特別区以外の東京都との間に生じる転入超過数を意味する。1990年代半ば以降はギャップがほぼなくなって人口移動が均衡するようになっている。図 6-2 で見たように東京圏全体で郊外地域ではなく

都心部で人口増加が拡大しているが、特別区から東京都内の郊外地域への人口移動パターンも変化している。

2. 特別区をめぐるモビリティの変化

(1) モビリティの視点

1 で見たように特別区の転入数と転出数は変化してきているが、これが直ちに移動率や移動傾向の変化を意味するわけではない。移動率は年齢によって異なり、20～30歳代の若年層で高い。そのため地域人口の減少と高齢化という年齢構造の変化によって若年人口が減少すれば、たとえ移動率が不変であっても、移動数が減少することは起こりうる。したがって、転入数と転出数の変化を見るだけでは、特別区をめぐる人口移動の本質的な変化を捉えることはできない。

ところで近年、「地方創生」の動きに呼応するように人口移動統計の拡充が進んでいる。例えば、「住民基本台帳人口移動報告」は1954年の開始以来、長らく男女別総数ベースの転入数と転出数の表章のみであったが、2010年以降は年齢5歳階級別転入数と転出数及びそのODデータが詳細に表章されるようになり、研究の展開可能性が広がりつつある。こうした中、小池(2017)¹はその方向性の一つとして、従来、主に出生や死亡の地域分析に用いられてきた間接標準化の人口移動への適用を提示し、東京都区部における都心回帰の人口学的分析を行っている。この手法を用いることで年齢別移動率が得られない期間の人口移動に対しても、移動総数の変化から人口構造の変化(年齢構造の高齢化)の影響を取り除いたモビリティの変化(男女年齢を通じた全般的な移動性向の変化)を抽出することが可能となる。

このモビリティの変化こそが、本質的な人口移動の変化といえるものであり、小池の手法は「住民基本台帳人口移動報告」の男女年齢別転出数・転入数データを活用しつつ、人口学的に人口移動の時系列変化を分析するための最適な手法といえる。本節ではこの分析手法を用いて、特別区をめぐる人口移動のモビリティ変化を分析する。

1 小池司朗(2017)「東京都区部における「都心回帰」の人口学的分析」『人口学研究』第53号, pp.23-45.

(2) 分析方法

本節では小池の分析手法で特別区の地域別人口移動を分析する。その流れは特別区の転入数と転出数それぞれについて、2015年の男女年齢別移動率を標準移動率として過去の標準化移動数を算出し、実際の移動数と比較することでモビリティ比を算出するものである。分析プロセスや作成指標は基本的に小池の論文と同様であるため、ここでは当該論文を直接引用しつつ重要なポイントの記述にとどめる。

①利用するデータと分析対象期間

人口移動数は総務省統計局「住民基本台帳人口移動報告」(以下、「住基移動」)の日本人移動数を利用し、男女年齢5歳階級別人口は国司調査の日本人人口利用した。分析対象とするのは1980年から2015年である。

住民基本台帳法が改正された2012年以降、「住基移動」にも外国人の人口移動が表章されるようになってきているが、直近のデータしか得られないため、本稿では日本人の移動のみを扱う。これは35年間の時系列分析をするにあたって、過去の外国人の人口移動のデータが得られないことによるものであるが、日本国内の外国人人口が増加するにつれ、外国人の国際人口移動・国内人口移動が各地域の人口に与える影響が強まっていることも指摘されている²。外国人の人口移動の変化については、今後の検討課題としたい。

②分析指標作成プロセス

1) 標準化移動数の算出

標準化移動数について、まず転出の標準化を説明する。特別区の2015年住基移動による男女年齢5歳階級別転出数を分子、2015年国勢調査による男女年齢5歳階級別人口を分母として算出される転出率を標準転出率とする。2010年以前の国勢調査の男女年齢5歳階級別人口に標準転出率を乗じ、合計した転出総数が標準化転出数である。

転入の標準化では、特別区への転入が特別区外から生じていることを踏まえ、標準化転入率は特別区の2015年の男女年齢5歳階級別転入数を分子、2015年の特別区を除く全国の男女年齢5歳階級別人口を分母として算出される値となる。標準化転入数は転出と同様の方法で算出する。一般的に転入率とは転入数を当該地域人口で除した値であるが、ここで用いる転入率はそうした指標とは異なっている。

2 例えば、中川雅貴, 小池司朗, 清水昌人(2016)「外国人の市区町村間移動に関する人口学的分析」『地学雑誌』第125巻第4号, pp.475-492.

2) モビリティ比の算出

t年の標準化移動数と住基移動による実績移動数との違いは、男女年齢5歳階級別移動率の違いによって生じるため、t年の標準化移動数に対する実績移動数の比は、2015年のモビリティを基準とした場合のt年の相対的なモビリティ水準を表すことになる。この相対的なモビリティ水準をモビリティ比とする。例えば、t年の転出モビリティ比 ($ME(t)_{2015}$) は、次のように表される。

$$ME(t)_{2015} = \frac{E(t)}{SE(t)}$$

ここで $E(t)$ ：「住基移動」による特別区のt年の転出数、 $SE(t)$ ：特別区のt年の標準化転出数である。モビリティ比が1を上回っていれば2015年水準よりもモビリティの水準が高く、1を下回っていれば低いことを意味する。転入モビリティ比も同様の方法で算出される。

また、2015年のモビリティを基準としたモビリティ比を用いて、任意の年のモビリティを基準とした場合のモビリティ比も計算ができる。例えば分析対象期間の期首時点である1980年を基準とした場合のt年の転出モビリティ比 ($ME(t)_{1980}$) は、以下の式で算出される。なお、転入モビリティ比 ($MI(t)_{1980}$) についても同様の方法で算出できる。

$$ME(t)_{1980} = \frac{ME(t)_{2015}}{ME(1980)_{2015}}$$

3) 地域類型別移動に関する指標作成

ここまで説明してきたのは、特別区と特別区外との間の人口移動であった。「住基移動」では2012年以降、参考表として男女年齢10歳階級で市町村間のOD表を再現できるデータが表章されている。これを活用することで、特別区と任意の地域間の人口移動に対しても同様の分析が可能となる。本節では、特別区・特別区外との間の移動に加え、東京圏内、東京圏外、都道府県別の移動のモビリティ比を算出する。

(3) 分析結果

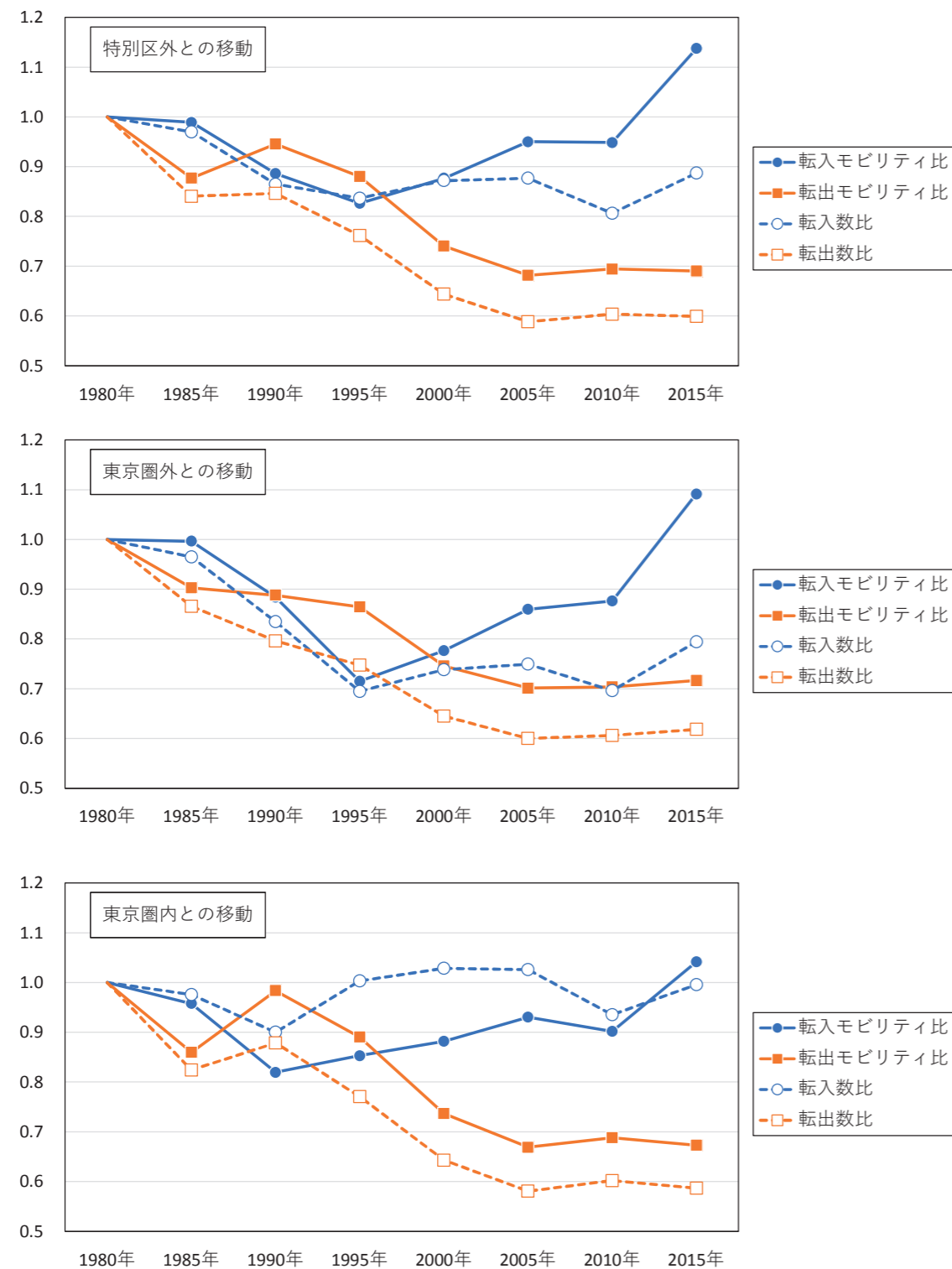
①地域別に見たモビリティ比と移動数比の推移

図6-5には、特別区の転入モビリティ比、転出モビリティ比（いずれも1980年基準）に加え、転入数と転出数の実績値の1980年値を基準とした比に

ついて、特別区外、東京圏外、東京圏内の地域別に示している。直近の人口移動を中心に分析するべく、主に1995年以降の変化について述べる。

特別区外との移動について転入を見ると、転入モビリティ比と転入数比ともに1980年から1995年までは同様の変化であるが、1995年以降は変化のパターンが異なる。転入数比は概ね横ばいに推移するのに対し、転入モビリティ比は上昇を続ける。これは特別区に対して主要な人口創出地である地方圏において、1995年以降に若年人口が減少したことが原因と推察される。すなわち、特別区への転入モビリティは上昇するが、移動する人口が減少したため、双方の変化が打ち消し合って転入数には大きな変化が生じていないということである。2005年から2010年にかけて転入比は低下し、リーマンショックの影響であると推察されるが、転入モビリティ比は横ばいであり、特別区へ移動パターンが変化したわけではなかった。2010年から2015年の転入モビリティ比の上昇は2005年までよりも大きく、特別区への人口集中傾向は強まる傾向にあるといえる。これに対して転出は、転出モビリティ比と転出数比ともに概ね同様の変化をしている。

図 6-5 地域別に見た特別区の転入モビリティ比（1980年基準）の推移



資料：住民基本台帳人口移動報告、国勢調査

1990年から2005年までは低下し、2005年以降は横ばいである。これは特別区への地方圏からの転入の結果として特別区内の若年人口数が減少しないことにより、モビリティ比の変化と移動数の変化の傾向が一致しているといえる。

東京圏外との移動について転入を見ると、概ね特別区外との移動と同じ変化とみてよいが、1980年から1995年までの低下の幅はこちらの方が大きい。転入モビリティ比は0.72まで低下し、その後の上昇によって2015年は1.09となっており、特別区の転入数の変化に対し、東京圏外からの転入モビリティ比の変化が大きく寄与しているといえる。転出の変化については、特別区外との移動とほぼ同じとみてよい。

東京圏内との移動について転入を見ると、1980年以降の転入モビリティ比の低下が1990年で底を打つ点が、他の地域間移動のパターンと異なっている。バブル崩壊前から転入モビリティ比は上昇するが緩やかであり、リーマンショックの影響でやや低下し、2015年には1.04となる。転入数比の変動パターンはこれとは異なり、1980年から1990年までは転入モビリティ比の低下ほど減少せず、1990年以降は転入モビリティ比の上昇ほど増加していない。とりわけ1990年代半ば以降は東京圏内の郊外住宅地で高齢化が進み、若年人口が相対的に減少していることが、モビリティ比の上昇を打ち消していると考えられる。転出の変化は、やはり特別区外との移動とほぼ同様の傾向である。

これらの分析から以下の点を指摘できる。1) 1995年以降の特別区の転入モビリティ比の上昇は、東京圏外からの転入の影響が大きく寄与しており、特別区への人口移動はより強まっている。2) 東京圏内からの転入モビリティ比も上昇しているが、東京圏外からの転入モビリティ比に比べると緩やかな変化である。3) いずれの地域との転出でも、転出モビリティ比が1995年以降は明確に低下するが、2005年以降は横ばいで変化がない。こうした変化の結果として、1995年以降の東京圏の転入超過の拡大により、特別区への人口集中傾向はより強まっている。

②都道府県別のモビリティ比の変化（2000→2015年）

①で見た転入モビリティと転出モビリティの変化をより詳細に捉えるべく、都道府県別のモビリティ比を算出した。全体的には1995年から転入モビリティ比は上昇に転じているが、変化が2000年以降になる県もあることから、ここでの転入モビリティ比は2000年基準とし、転出モビリティ比もそれに合わせた。図 6-6 と 図 6-7 はそれぞれ2000年を基準とした2015年の転入モビリティ比と転出モビリティ比を示している。

転入と転出ともにはっきりとした東西の地域格差が見られ、2000年以降、西日本と特別区との人口移動が活発化したことがわかる。高度経済成長期の頃から、東北地方や北関東から東京圏へ向かう移動とその還流移動は顕著に確認されており、移動数が増加しつつもこれらの地域では転入・転出モビリティ比は相対的に小さい上昇にとどまったと推察される。それに対し、大阪圏

や名古屋圏への移動の後、東京圏への移動が生じていた西日本地域では、2000年以降に直接東京圏へは特別区に移動するパターンが増加したものと推察される。

図 6-6：2015年の転入モビリティ比
(2000年基準)

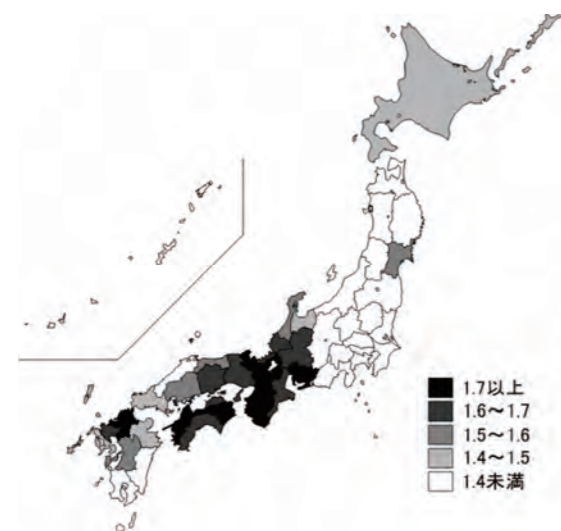
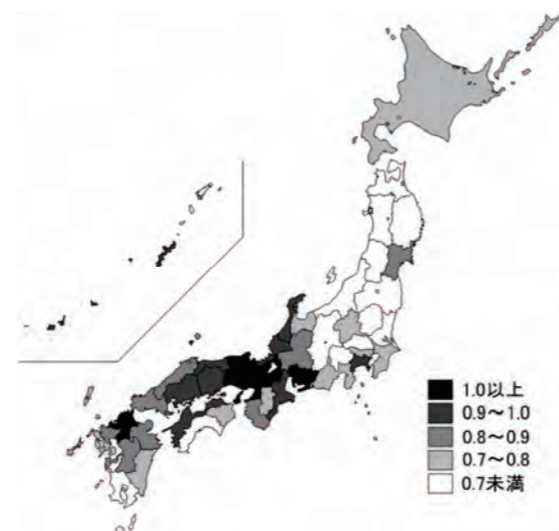


図 6-7：2015年の転出モビリティ比
(2000年基準)



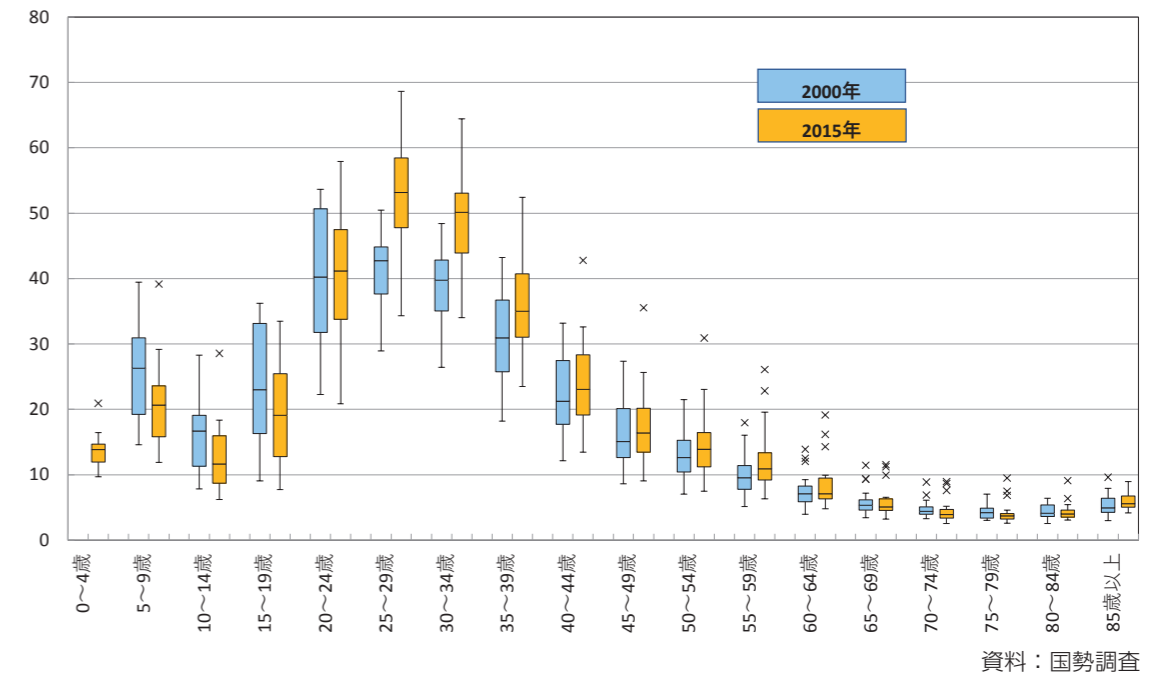
3. 国勢調査による2000年と2015年の5年間転入率

1と2は住民基本台帳人口移動報告を用いた分析であった。ここでは国勢調査を用いて特別区の転入移動を分析する。西暦下一桁が0の年に実施される国勢調査では、5年前常住地前常住地の項目があり、それと現住地との関係から過去5年間に生じた人口移動のデータが得られる。2015年は東日本大震災の影響を把握するため、例外的に同項目が調査されている。この過去5年間の移動に基づく転入移動による特別区および23区の転入率を5年間移動率³と称し、その2000年と2015年の値を比較することで、2000年以降の人口移動パターンの変化を捉えたい。

3 移動状態不詳、5年前常住地不詳を除いて算出している。

(1) 23区の5歳階級別5年間転入率と15年間の変化

図 6-8 23区の年齢5歳階級別5年間転入率（男女計）（単位%）



資料：国勢調査

図 6-8 は、23 区の別に算出した2000年と2015年の年齢5歳階級別5年間転入率（男女計）を箱ひげ図で示している。横軸の年齢は2000年および2015年時点の年齢であり、箱ひげ図は上から90パーセント値、75パーセント値、中央値、25パーセント値、10パーセント値である。2000年と2015年を比較した際に確認できる特徴が2つある。1点目は15～19歳までの5年間転入率は2000年よりも2015年の方が低水準となっている点である。特に5～9歳と10～14歳の5年間転入率の低下は、ファミリー層の転入が相対的に減少したことによる随伴移動の変化を反映していると考えられる。2点目は25～29歳から35～39歳にかけて2015年が2000年の5年間転入率を大きく上回っている点である。1点目で指摘したファミリー層の転入縮小と合わせて考えると、これらの転入率の上昇は単身者によるものと推察される。

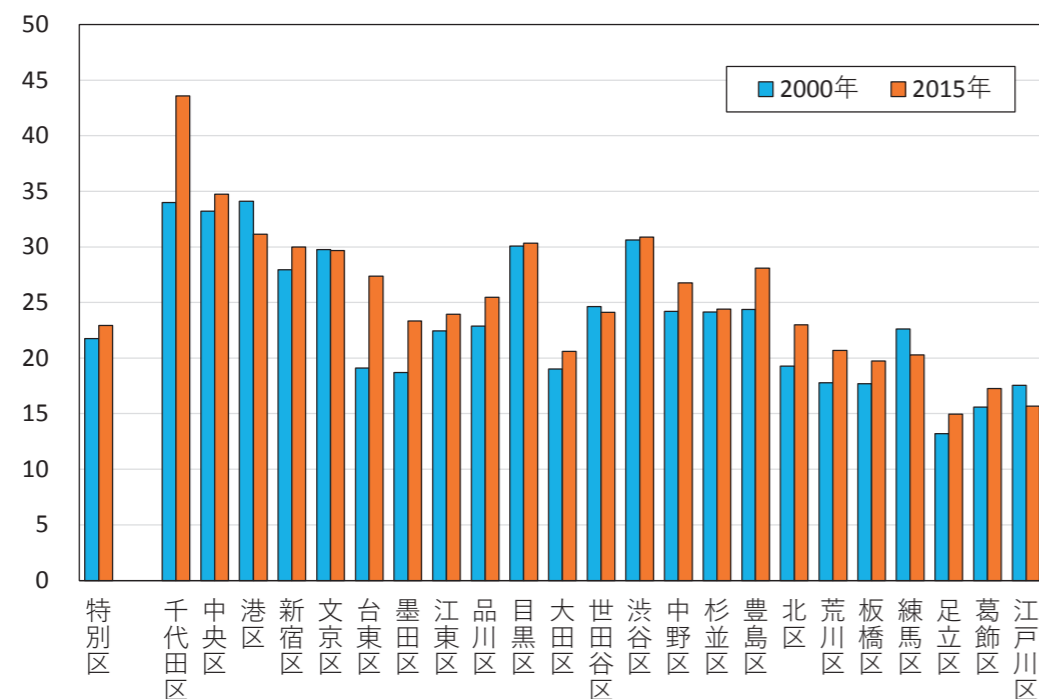
40歳代以降の5年間転入率は2000年と2015年とで大きな差はないといえるため、2000年から2015年までの15年間では、ファミリー層の転入の縮小と若年単身者の転入の拡大が生じているといえる。第2章でも指摘するように既に特別区の壮年期単身者割合は高い。この状況に加えて2015年時点で若年単身者の転入拡大は、20～30年後の壮年単身者の増加につながるだろう。これには移動に加え、特別区における居住期間の影響も受ける。居住期間については配偶関係別の分析を後述する。

(2) 壮年期の5年間転入率の特別区内地域差

図 6-8 を見る限りにおいては、壮年期の5年間転入率は2000年と2015年とで大きな違いは生じていない。しかし、23区の別に変化を見ると地域差が確認できる。ここでは35～49歳と50～64歳の別に2000年と2015年の5年間転入率を比較する。

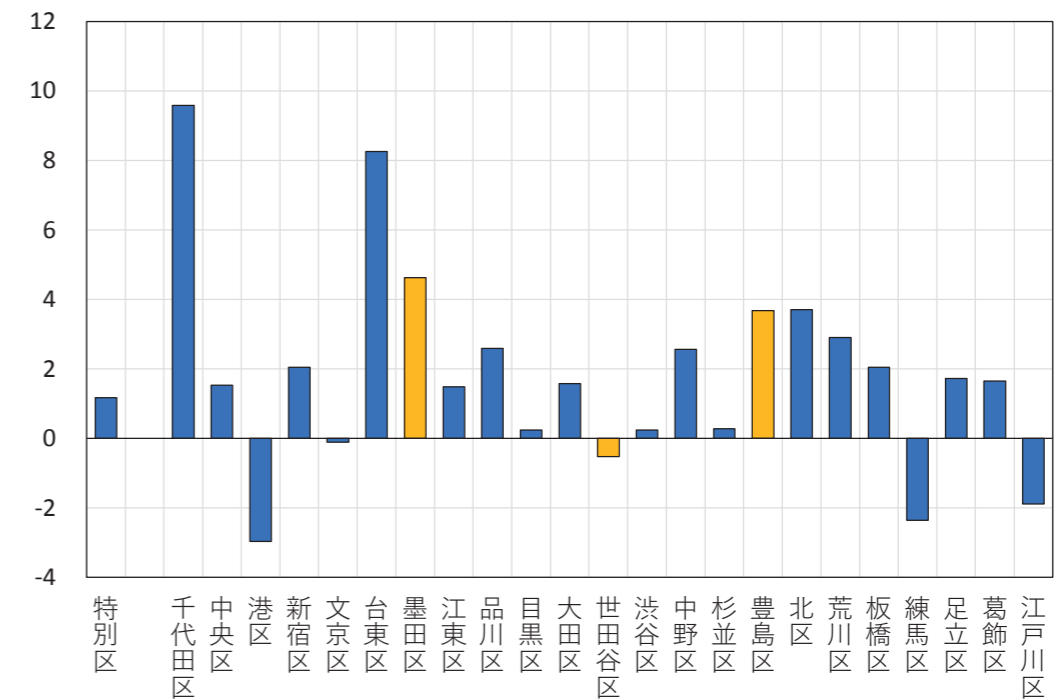
図 6-9 は特別区部および23区の2000年と2015年の35～49歳の5年間転入率を示している。2000年の5年間転入率は特別区では21.8%であり、23区中最大となるのは港区の34.1%で最小となるのは足立区の13.2%である。2015年の5年間転入率は特別区では22.9%であり、23区中最大となるのは千代田区の43.6%であり、最小となるのは足立区の14.9%である。2000年と2015年とも最大と最小の5年間転入率には2～3倍程度の違いがあり、23区内にも大きな地域差があることがわかる。2000年から2015年の変化量にも特別区内で地域差がある。図 6-10 は2000年から2015年の5年間転入率の変化量を23区別に示している。特別区全体では1.2%ポイントの上昇でほぼ同値であったが、最も上昇したのは千代田区で9.6%ポイントの上昇である。台東区の8.3%ポイント上昇がこれに続く。一方で低下した区もあり、港区が-3%ポイントで最も大きく低下している。今年度にアンケートを実施した墨田区、世田谷区、豊島区では世田谷区のみが低下している。

図 6-9 35～49歳の5年間転入率（単位%）



資料：国勢調査

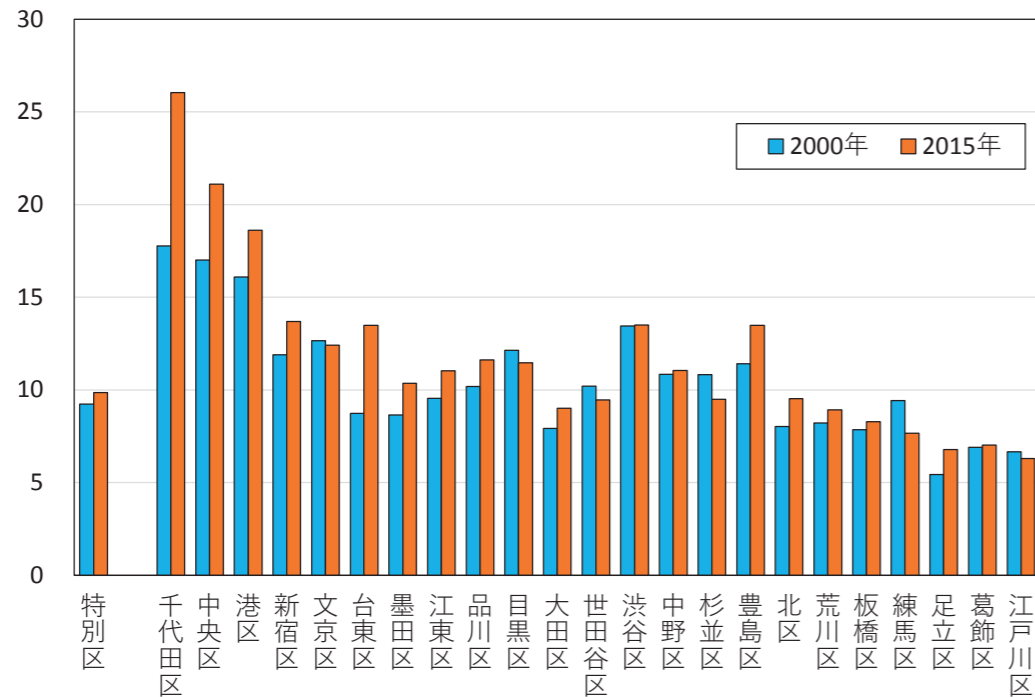
図 6-10 35～49歳の5年間転入率の変化（2015年-2000年）（単位%ポイント）



資料：国勢調査

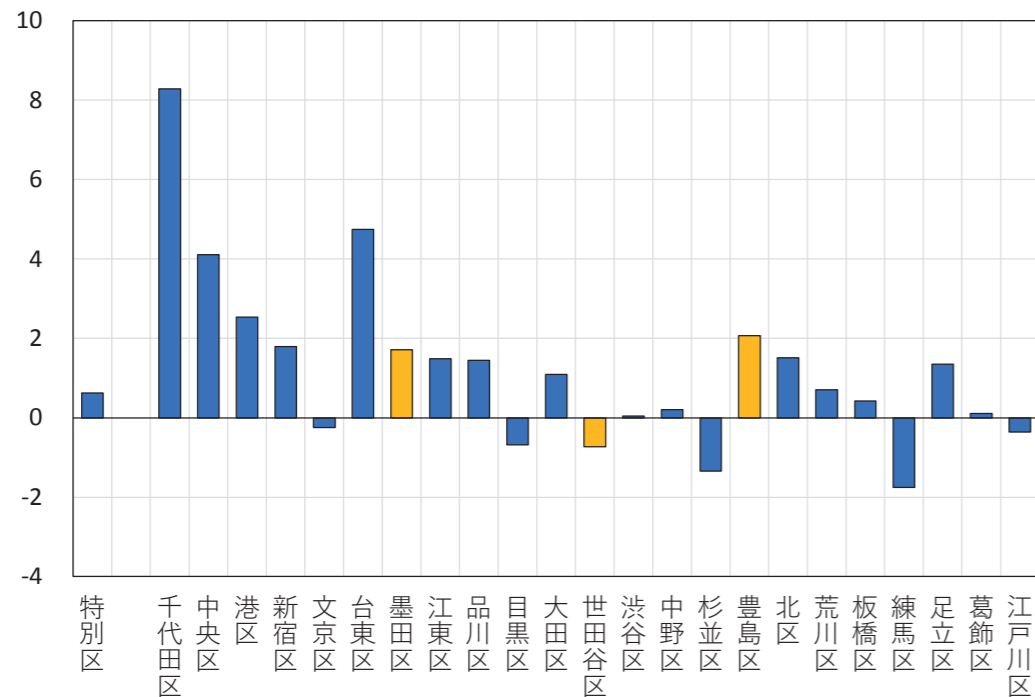
次に50～64歳の5年間転入率を示したのが図 6-11 である。2000年の5年間転入率は特別区では9.2%であり、23区中最大となるのは千代田区の17.8%で最小となるのは足立区の5.4%である。2015年の5年間転入率は特別区では9.9%であり、23区中最大となるのは千代田区の26.1%であり、最小となるのは足立区の14.9%である。地域差の特徴は35～49歳と概ね同じとみてよい。図 6-12 は2000年から2015年の5年間転入率の変化量を23区別に示している。特別区全体では0.7%ポイントの上昇でほぼ同値であったが、最も上昇したのは千代田区で10.9%ポイントの上昇である。また35～49歳と同様に低下した区もあり、練馬区では-1.7%ポイントである。アンケート対象である墨田区、世田谷区、豊島区では世田谷区のみが低下している点も含め、5年間転入率およびその変化量の地域差は、35～49歳と50～64歳とで同様の傾向が確認できる。

図 6-11 50～64歳の5年間転入率(単位%)



資料：国勢調査

図 6-12 50～64歳の5年間転入率の変化(2015年-2000年)(単位%ポイント)



資料：国勢調査

4. 配偶関係別に見る壮年期居住者の特別区内居住期間

ここでは2015年国勢調査の居住期間別人口を用い、特別区に居住する壮年期の男女について、配偶関係総数と未婚者の居住期間別割合を分析する。図 6-13は特別区の35～49歳居住者の居住期間別割合について配偶関係総数の値を示しており、図 6-14は未婚者の値を示している。まず図 6-13を見ると、居住期間が「1年未満」と「1～5年」という2010年以降に特別区に転入してきた者の割合は、男女計38.1%、男39.0%、女37.2%であり、いずれも3分の1を超え、男女差は小さい。「10～20年」まで含めると1995年以降の転入者となり、全体の80%を超える。これはちょうど1で指摘した、東京圏の転入超過が特別区の転入超過の拡大によって牽引されるようになった状況と合致し、さらに3の(1)で見た2000年から2015年にかけて上昇した25～39歳の5年間転入率の動きとも合致している。

次に図 6-14で未婚者の居住期間を見ると、図 6-6で示している配偶関係頭数と比較して、「20年以上」と「出生時から居住」の割合が高く、それ以外の分類の割合は低い。これは直近20年間で特別区に転入した者と、それ以前から居住していた者とを比較すると、前者の方が特別区内で結婚・家族形成をして、そのまま居住している割合が高いと考えられる。逆にバブル崩壊前に転入した「20年以上」に該当する者は、結婚する機会を作れないまま、2015年に至るまで特別区に居住し続けたものが多く見られたと言える。恐らく、進学や初職のタイミングでの特別区への転入であり、バブル崩壊によって正規雇用とならず、生活が不安定な層も含まれていると推察される。「出生時から居住」も未婚者の方が配偶関係総数よりも割合が高く、結婚しなかった者ほど特別区から転出しない状況があると考えられる。また、「20年以上」と「出生時から居住」の割合は女性よりも男性で高い。上述したような結婚の機会を持たずに居住し続けたとい状況は男性でより多く生じているかもしれない。

図 6-15と図 6-16は特別区の50～64歳居住者の居住期間別割合について、それぞれ配偶関係総数と未婚者の値を示している。図 6-15を見ると、居住期間20年以下の割合は男女とも6割程度であり、この居住期間は35～49歳で指摘したのと同様に1995年以降の特別区の転入超過の拡大と時期が一致する。図 6-13と比較して居住期間20年以下の割合が低いのは、移動率の高い20歳代に転入した者が相対的に多いためであろう。図 6-15と図 6-16を比較すると、未婚者の方が居住期間20年以上の割合が高くなる。これは35～49歳で指摘したのと同じように、結婚する機会がなかった者ほど特別区に居住し続ける傾向にあることを意味していると考えられる。

図 6-13 特別区の35～49歳居住者の居住期間別割合（配偶関係総数、2015年）

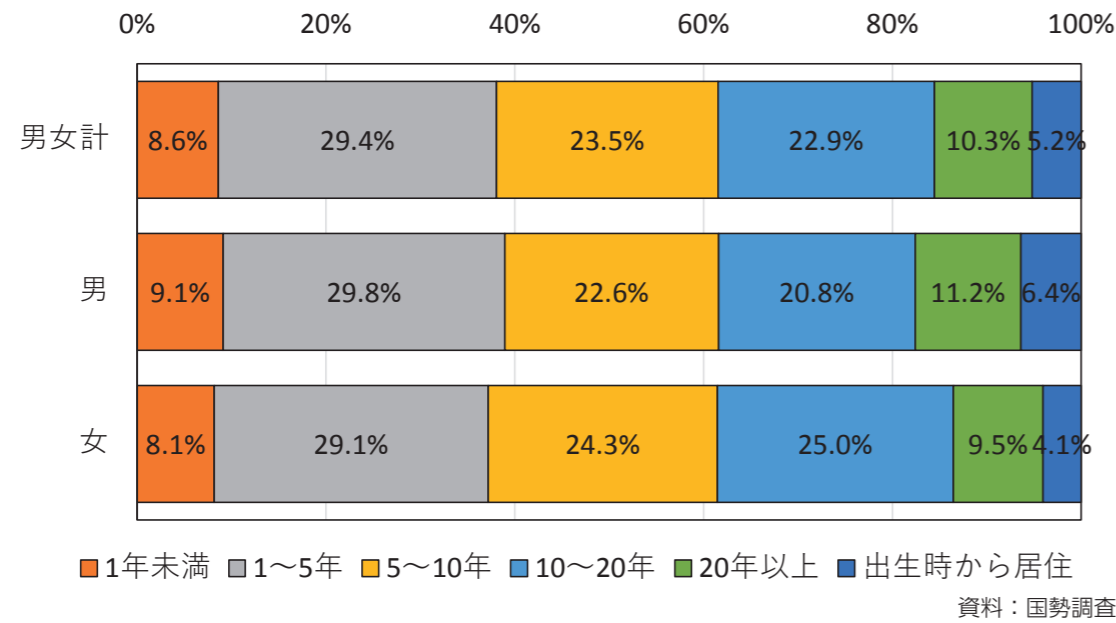


図 6-15 特別区の50～64歳居住者の居住期間別割合（配偶関係総数、2015年）

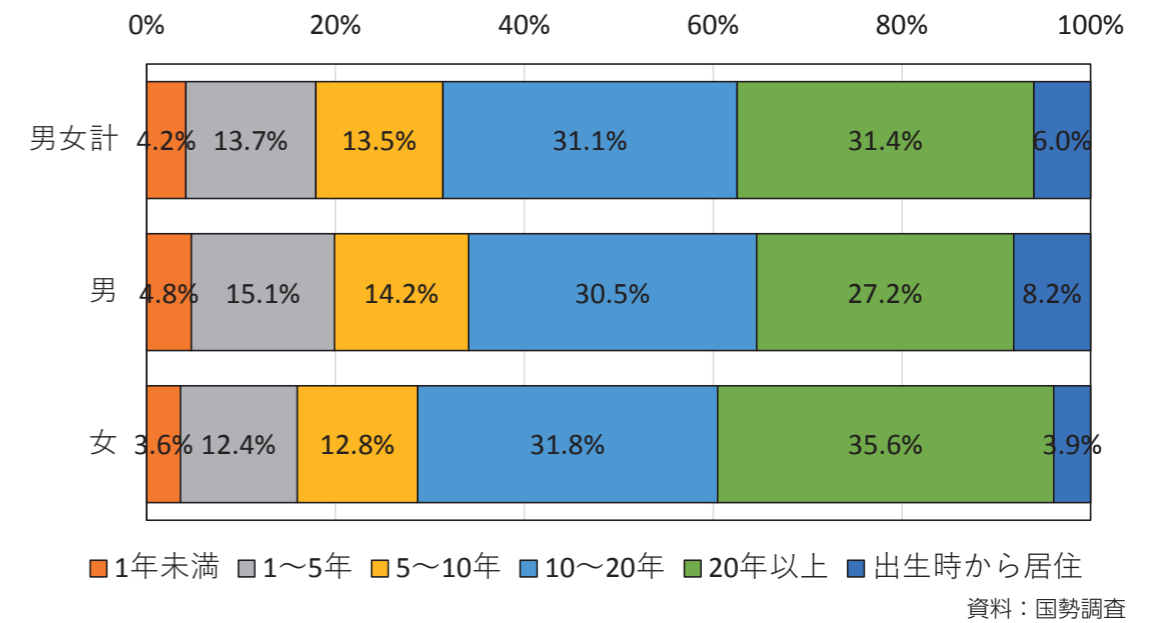


図 6-14 特別区の35～49歳居住者の居住期間別割合（未婚、2015年）

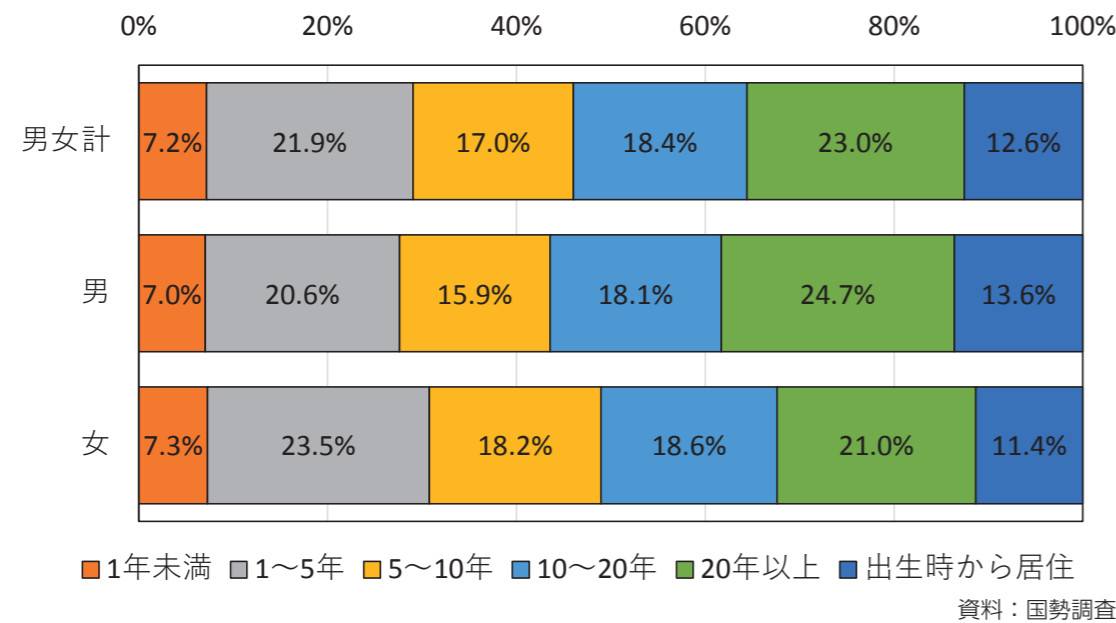
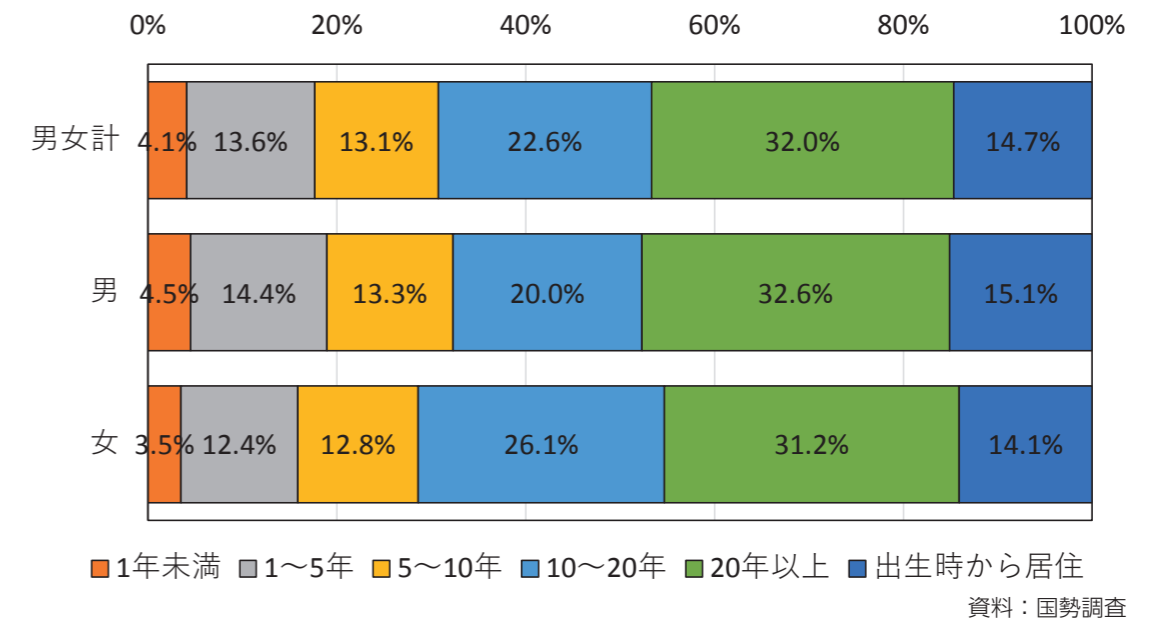


図 6-16 特別区の50～64歳居住者の居住期間別割合（未婚、2015年）



第1章
1
2

第2章
1
2
3
4
5
6

第3章
1
2
3
4
5
6
7
8
9

第4章
1
2
3
4
5
6
7
8
9

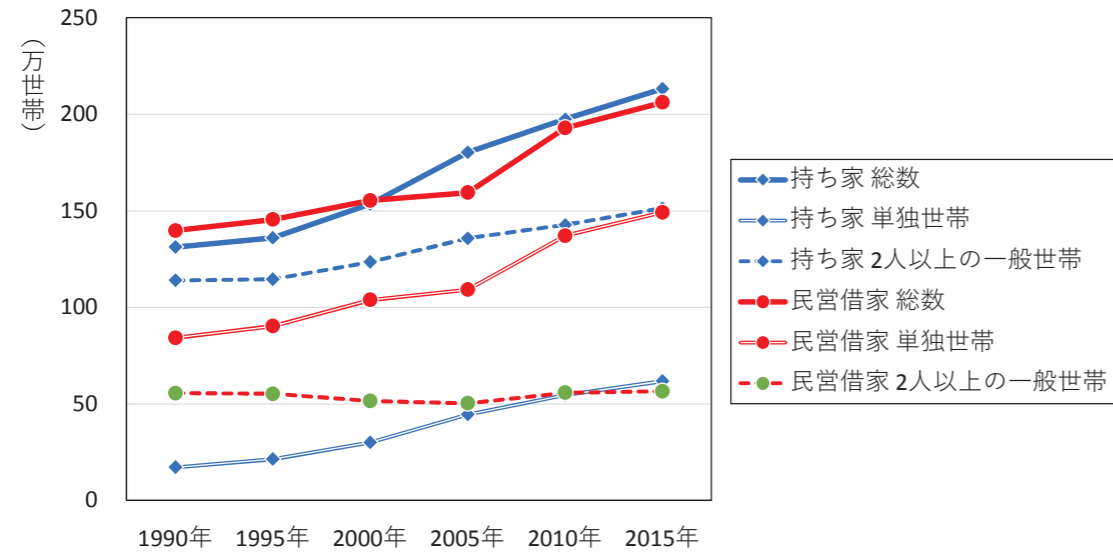
第5章
1
2
3
4
5

第6章
1
2
3
4
5
6
7
8

第7章
1
2
3
4
5
6

5. 住宅所有関係別に見た世帯数の変化

図 6-17 特別区の住宅所有関係別、世帯規模別一般世帯数の推移



資料：国勢調査

ここまで分析してきた人口移動パターンの変化、配偶関係による居住期間の特徴と関連するものとして、居住する住宅の所有関係と世帯規模との関係を整理しておきたい。図 6-17 は特別区に居住する一般世帯のうち、住宅所有関係が持ち家と民営借家の世帯の1990年以降の推移について、それらの総数と居住世帯を単独世帯と2人以上の一般世帯で分類したものを示している。1990年から2015年にかけて持ち家世帯は82.0万世帯増加（増加率62.5%）し、民営借家世帯は66.3万世帯増加（同47.4%）している。持ち家世帯は25年間で単独世帯が44.6万世帯増加（同259.2%）、2人以上の一般世帯が37.4万世帯増加（同32.8%）で、世帯規模によらず増加しており、特に単独世帯の増加が大きい。これに対して民営借家世帯では、同じく25年間で単独世帯が65.1万世帯増加（同77.3%）であるが、2人以上の一般世帯は1.0万人増加（同1.8%）であり、単独世帯のみが増加している。

こうした住宅所有関係別世帯数の変化は、以下のように解釈できる。まず、バブル経済崩壊に伴い、オフィスの住宅転用が進んだ。さらに土地の高度利用が進んだことも合わさって、特別区内に多くの分譲住宅が供給されることになった。これにより、持ち家居住の家族世帯（2人以上の一般世帯）が増加したと推察される。また、持ち家居住の単独世帯の増加は、単身者向け分譲住宅が供給されたことに加え、持ち家に居住してきた高齢夫婦が配偶者の死亡によって単身化したというケースも多く含まれていると考えられる。民営借家で

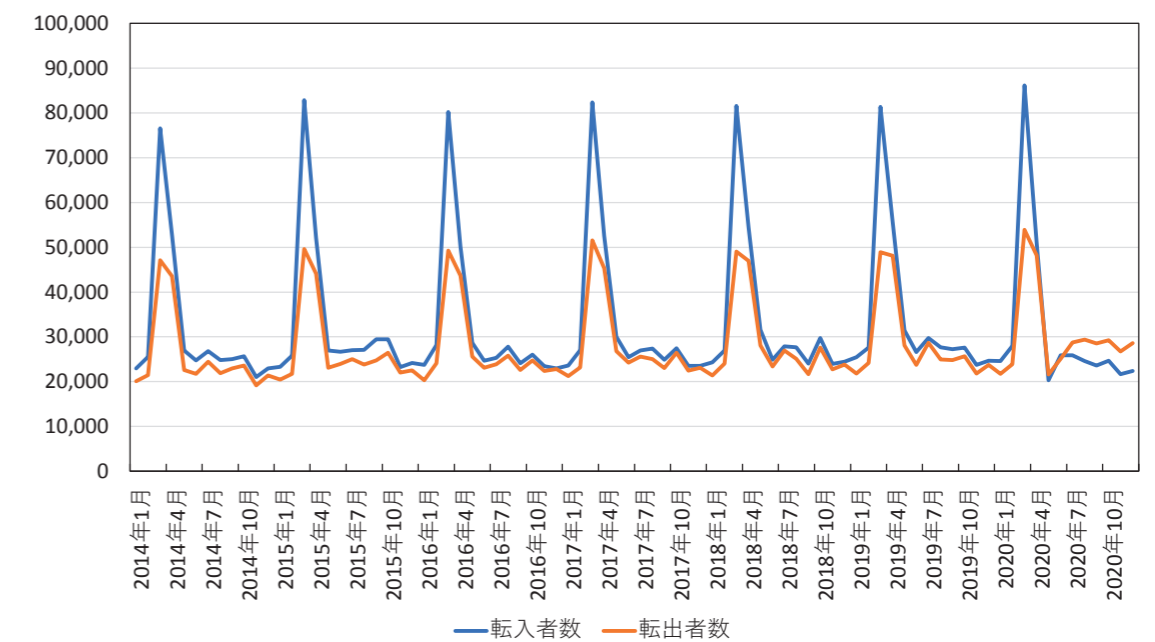
は単独世帯のみが増加している点は、単身者向け賃貸住宅が多く供給されたと解釈されよう。多くはワンルーム等の狭小住宅と思われるが、晩婚化によって家族形成が遅くなる分、一人暮らし期間が長くなるため、こうした住宅への居住期間も長くなっている。あるいは特別区内で就業する若年・壮年期の労働者が、職住近接を求めた結果とも考えられる。このように見ると、バブル経済崩壊後に新しく特別区へ転入する若年層や家族世帯を受け入れるだけの住宅供給があり、それを可能にする不動産価格や住宅価格の下落があったことが、1～4で分析した人口移動パターンの変化にも寄与したと考えることができる。

6. コロナウイルス感染拡大の人口移動パターンへの影響

2020年は新型コロナウイルス感染拡大とその防止のため、我々の生活には多くの変化が生じた。人口移動もその一つである。2020年はそれ以前と比較して、地域間人口移動のパターンはどのように変化したのだろうか。2021年2月時点で入手できる住民基本台帳人口移動報告の結果を利用して分析する。

図 6-18 は2014年以降の特別区の月別転入者数と転出者数を占めている。いずれの移動数も3月と4月が多くなり、それ以外の月の違いは少ない。2014年以降、ほぼ全ての月で特別区は転入超過となっていたが、2020年は5月に転出者数が転入者数を上回り、6月は逆転するが、7月以降は再び転出者数が上回って転出超過の規模は徐々に拡大している。

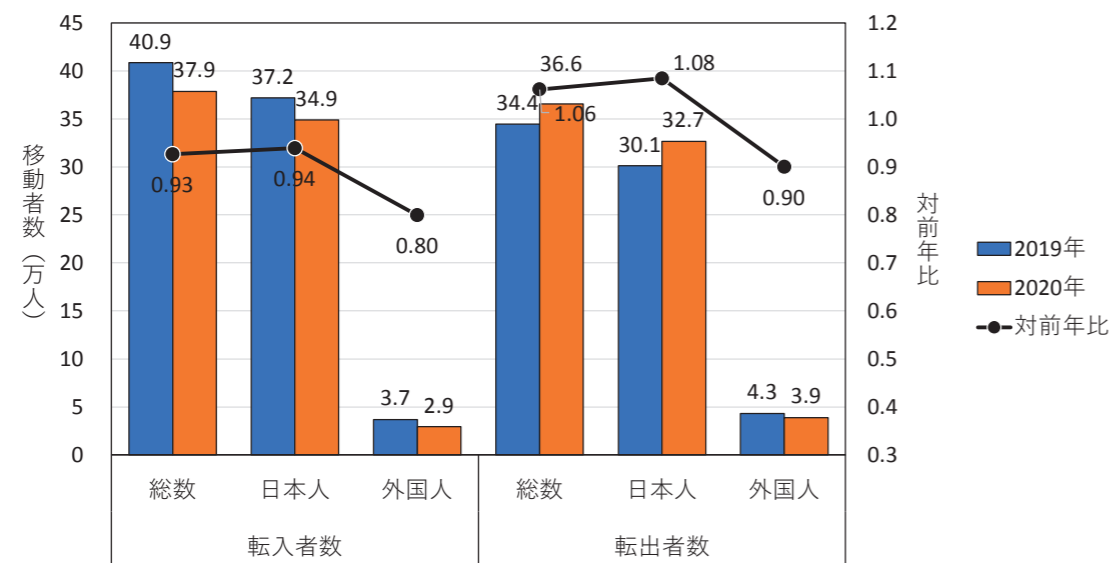
図 6-18 特別区の月別転入者数と転出者数



資料：住民基本台帳人口移動報告

図 6-19 は年間の転入者数と転出者数の2019年と2020年の比較であり、国籍別にも比較している。図 6-18 で指摘した5月以降の変化の影響を受け、2020年の転入者数は減少し(対前年比0.93)、転出者数は増加している(同1.06)。国籍別に見ると、日本人移動者は移動者総数と同様の变化であるが、外国人移動者は転入、転出ともに減少しており、国内人口移動自体が沈静化したといえる。その他に国外への出国移動の影響もあるかもしれない。コロナウイルスの影響により、特別区の転入数は減少し、転出数は増加したが、2020年度全体で見れば転入超過を維持している。2019年は日本人が70,461人の転入超過、外国人が6,285人の転出超過で全体としては64,176人の転入超過であったところ、2020年は日本人が22,421人の転入超過、外国人が9,387人の転出超過で全体としては13,034人の転入超過となった。コロナウイルスに関連した移動パターンの変化が2020年5月以降の転入超過の縮小につながったと見てよいが、この傾向が今後も継続するかは判然としない。まだ、5月以降という移動数の少ない時期の変化しか軽々していないことも、事態の把握を難しくしている。少なくとも2021年の3月・4月の移動数の変化を見なければ適切な判断はできないだろう。

図 6-19 特別区の国籍別転入者数と転出者数の2019年と2020年の比較



資料：住民基本台帳人口移動報告

転入者数と転入者数の変化という移動パターンは確認されたが、移動の地域パターンにも変化が生じたのかを確認するべく、2019年と2020年の都道府県別特別区への転入者数、特別区からの転出者数の変化を表 6-1 に示した。転入者数の減少が大きいのは、北海道、埼玉県、千葉県、東京都、神奈川県、愛知県、大阪府、福岡県といった、東京圏と地方中核都市を含む県である。ほと

んどの都道府県で転出者数は減少しているが、特別区あるいは東京圏に向かう移動が減少したというよりは、日本全体で人口移動が控えられたことが影響しているとも言える。これに対し、転出者数の増加が大きいのは東京圏に集中しており、茨城県や長野県、静岡県といった比較的東京圏から近い県で大きい。これは転入数の減少が全域的に起きていたのとはやや異なっている。移動数の変化に対して東京圏が占める割合は転入者数では39.5%、転出者数では63.7%である。特別区ひいては東京圏の転入超過が縮小しているが、転出の増加によって人口が分散する方向に向かっていると必ずしもいえない状態にある。2020年の5月以降の東京都や特別区の転出超過を見て、東京一極集中が解消に向かっているという考えもあるが、今の段階では早計であろう。

表 6-1 2019年と2020年を比較した特別区の転入者数と転入者数の変化

	転入者数	転出者数
北海道	-1,575	561
青森県	-485	24
岩手県	-251	66
宮城県	-650	-61
秋田県	-404	58
山形県	-272	30
福島県	-362	321
茨城県	-682	982
栃木県	-810	438
群馬県	-396	207
埼玉県	-2,901	1,679
千葉県	-2,908	2,690
東京都	-2,771	3,100
神奈川県	-3,299	5,959
新潟県	-562	168
富山県	-190	-7
石川県	-152	74
福井県	-83	79
山梨県	-195	150
長野県	-408	694
岐阜県	-227	90
静岡県	-835	624
愛知県	-1,499	-63
三重県	-170	65
滋賀県	13	2
京都府	-422	162
大阪府	-1,975	215
兵庫県	-989	401
奈良県	-157	65
和歌山県	-63	96
鳥取県	-106	102
島根県	-42	138
岡山県	-192	249
広島県	-393	357
山口県	-233	77
徳島県	-125	34
香川県	-130	36
愛媛県	-214	59
高知県	-154	120
福岡県	-1,276	130
佐賀県	17	63
長崎県	-72	87
熊本県	-127	131
大分県	-264	96
宮崎県	-190	101
鹿児島県	-368	185
沖縄県	-505	254

資料：住民基本台帳人口移動報告

7. 特別区内に居住する壮年期人口の小地域分析

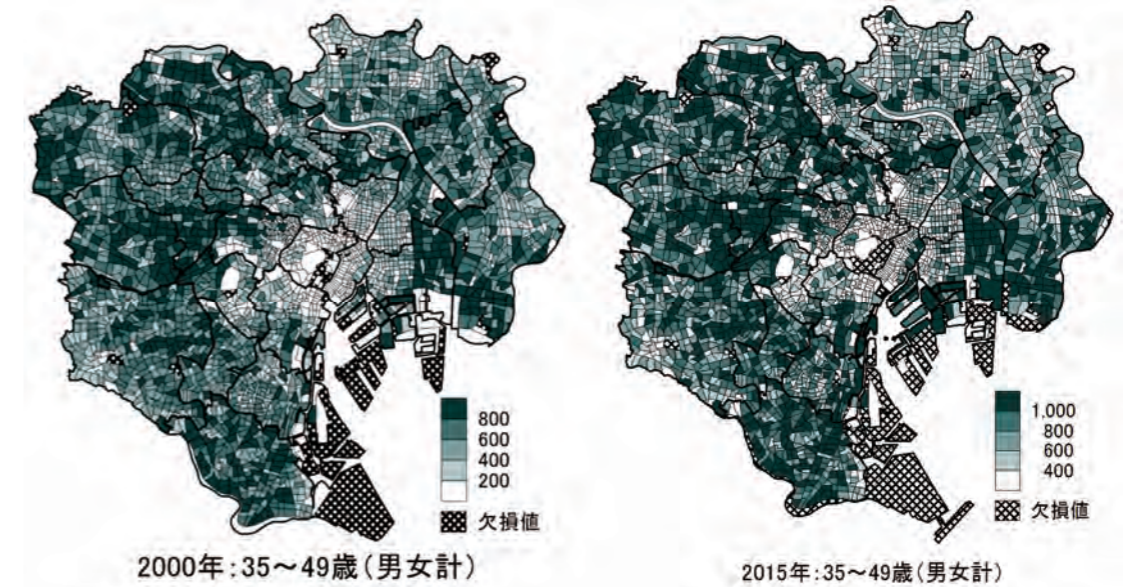
ここまでに分析してきた人口移動の帰結として、特別区に居住する壮年期人口の地域分布を確認したい。国勢調査の小地域別人口データを用い、2000年と2015年の壮年期人口（35～49歳、50～64歳）とその変化を分析する。

(1) 35～49歳人口

図 6-20 は、特別区内小地域別 35～49 歳人口を示している。凡例はおおよそ 5 分位数となっている。2000 年と 2015 年の地域的差異の特徴は共通しており、千代田区、中央区、港区の都心 3 区で少なく、その周辺部の方が多い。ただし、同心円状の分布というよりも、西部の方が東部よりも人口の多い小地域が分布しており、特に 2015 年ではその傾向が強い。また、鉄道路線も 35～49 歳人口の分布を特徴づけており、東武東上線や中央線、小田急線等の沿線上で人口が多い。都心部へ通勤するに当たり公共交通機関の便がよい場所を選択して居住していると推察される。

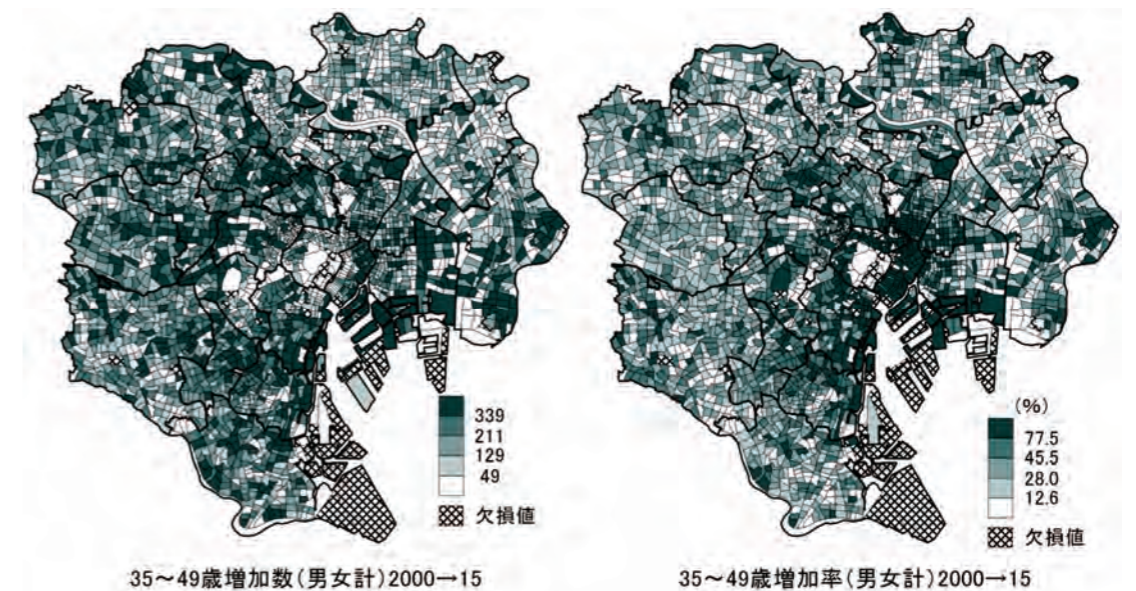
図 6-21 は 2000 年から 2015 年にかけての 35～49 歳人口の増加数と増加率を示している。小地域の分類が完全には一致していないため参考値的な側面があるが、地域的な特徴が見出せる。増加数はモザイク状の分布ではあるが、図 6-20 で見た 35～49 歳人口の分布に近く、東部よりも西部で増加数が多く、鉄道沿線上でも増加数が多い。それに対し、増加率は都心部で高い分布が明瞭であり、人口規模は小さいながらも、この 15 年間では都心 3 区を中心に 35～49 歳人口が大きく増加したことがわかる。また、前述したように 2000 年から 2015 年にかけて 25～39 歳の転入率が上昇しており、図 6-21 の 35～49 歳人口の増加は、そうした転入移動の影響を受けていると考えられる。

図 6-20 35～49歳人口



資料：国勢調査

図 6-21 35～49歳人口の増加数と増加率（2000年→2015年）



資料：国勢調査

(2) 50～64歳人口

図 6-22 は、特別区内小地域 50～64 歳人口を示している。凡例はおおよそ 5 分位数となっている。35～49 歳人口と同様、2000 年と 2015 年の地域的差異の特徴は共通しており、都心部で少なく、鉄道路線の影響を受けつつ周辺部が多い。ただし、35～49 歳ほど東西差異は強く見られない。図 6-23 は 2000 年

から2015年にかけての35～49歳人口の増加数と増加率を示している。図6-21の35～49歳人口の増加とは違って増加数と増加率の地域分布の特徴が似ており、都心部と特別区西端で増加数が多く、増加率も高い。また、東部より西部の方が全体的に50～64歳人口は大きく増加している。2015年の50～64歳人口の分布を考える場合、過去15年間は既に人口移動率の低い年齢になっていることから、15年間の増加は転入移動によるものというよりは、新たに50～64歳となる世代（1950年代コーホートが中心）の居住地の分布が大きく影響したと推察される。

図 6-22 50～64歳人口

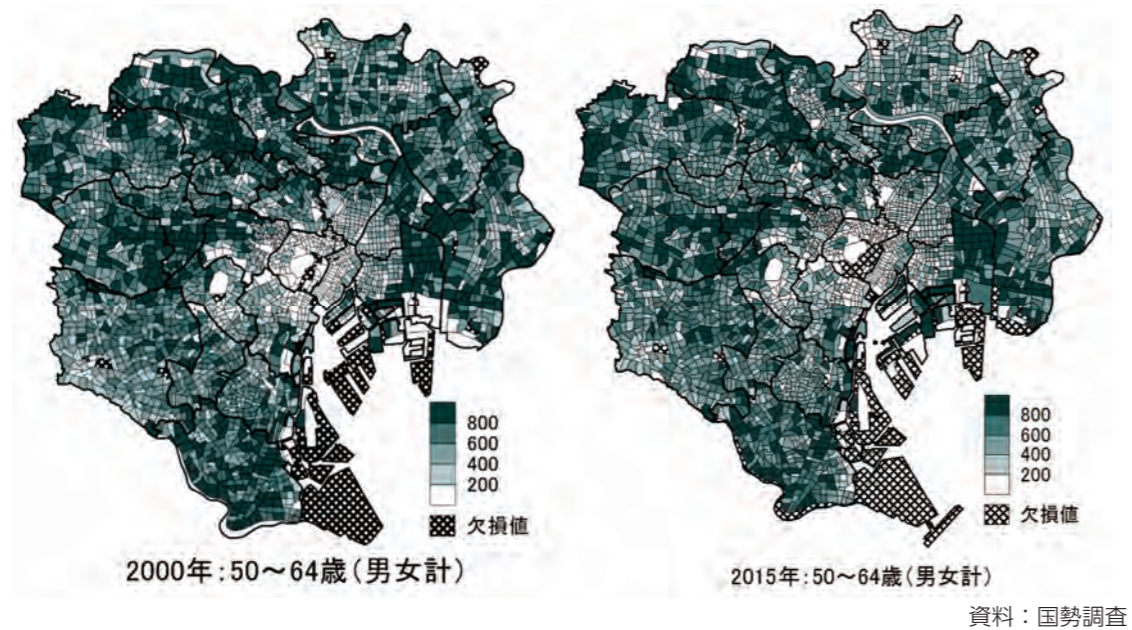
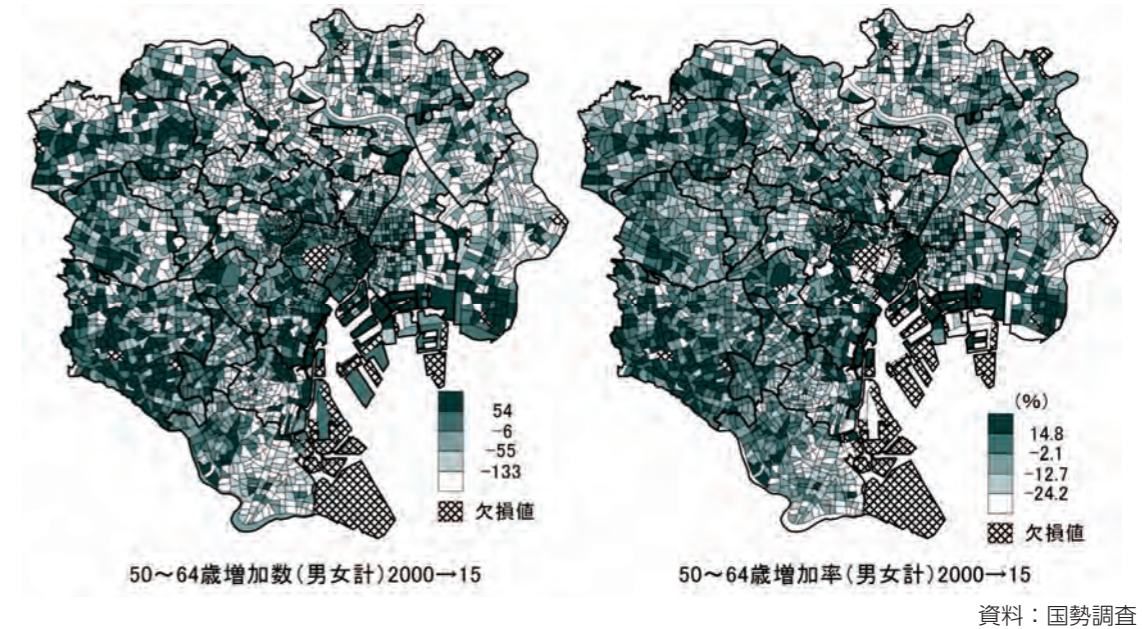


図 6-23 50～64歳人口の増加数と増加率（2000年→2015年）



(3) 35～49歳と50～64歳の人口割合

図6-24は、特別区内小地域の総人口に占める35～49歳人口の割合（35～49歳人口割合）を示している。凡例は5分位数である。2000年と2015年では地域分布が変化している。2000年は全域的にモザイク状の分布となっているが、2015年では35～49歳人口割合の高い地域が都心部を中心としたエリアに集積するようになっている。2015年の分布は、図6-21で示した35～49歳人口の増加率の分布と近く、2000年から2015年にかけての転入者によって都心部で35～49歳人口が増加し、その割合も上昇している。

第1章
1
2

第2章
1
2
3
4
5
6

第3章
1
2
3
4
5
6
7
8
9

第4章
1
2
3
4
5
6
7
8
9

第5章
1
2
3
4
5

第6章
1
2
3
4
5
6
7
8

第7章
1
2
3
4
5
6

図 6-24 35～49歳人口割合

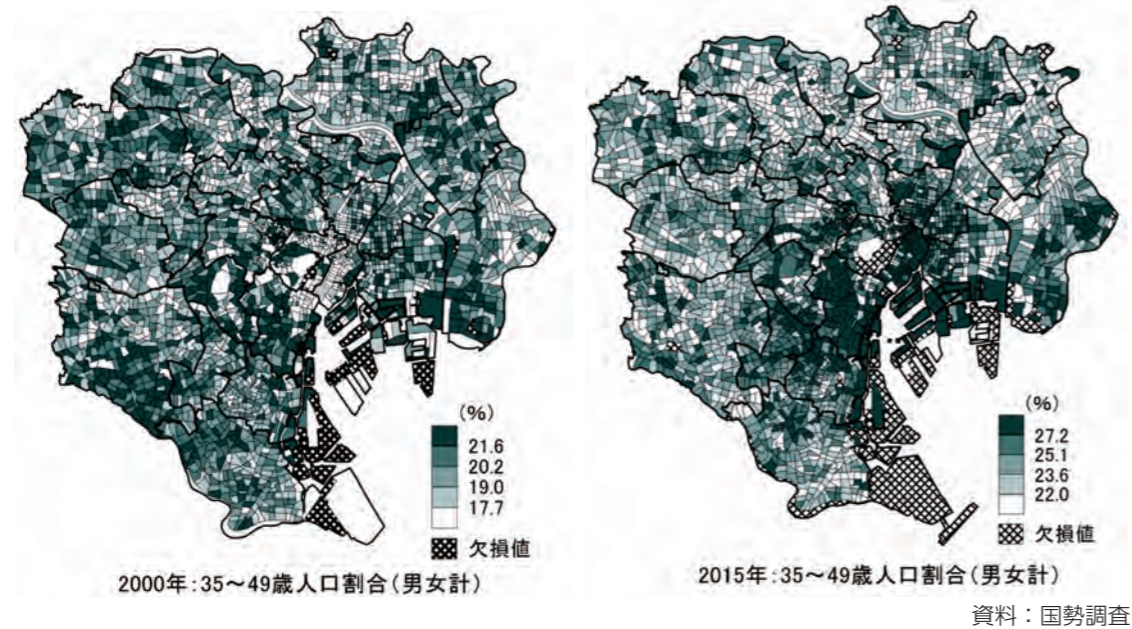


図 6-25 50～64歳人口割合

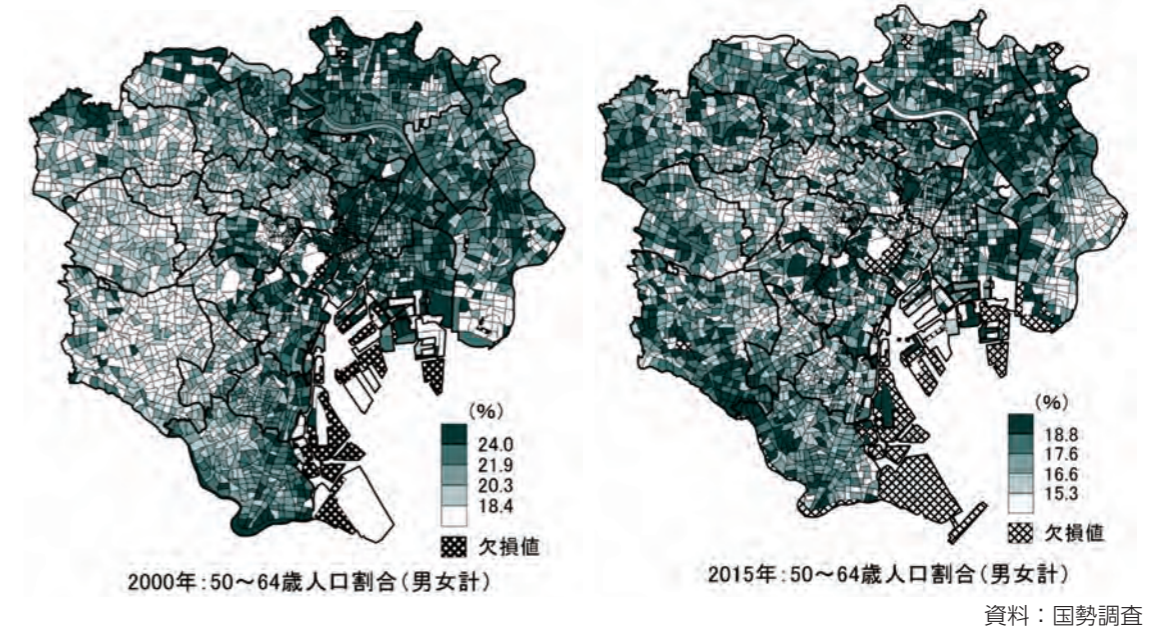
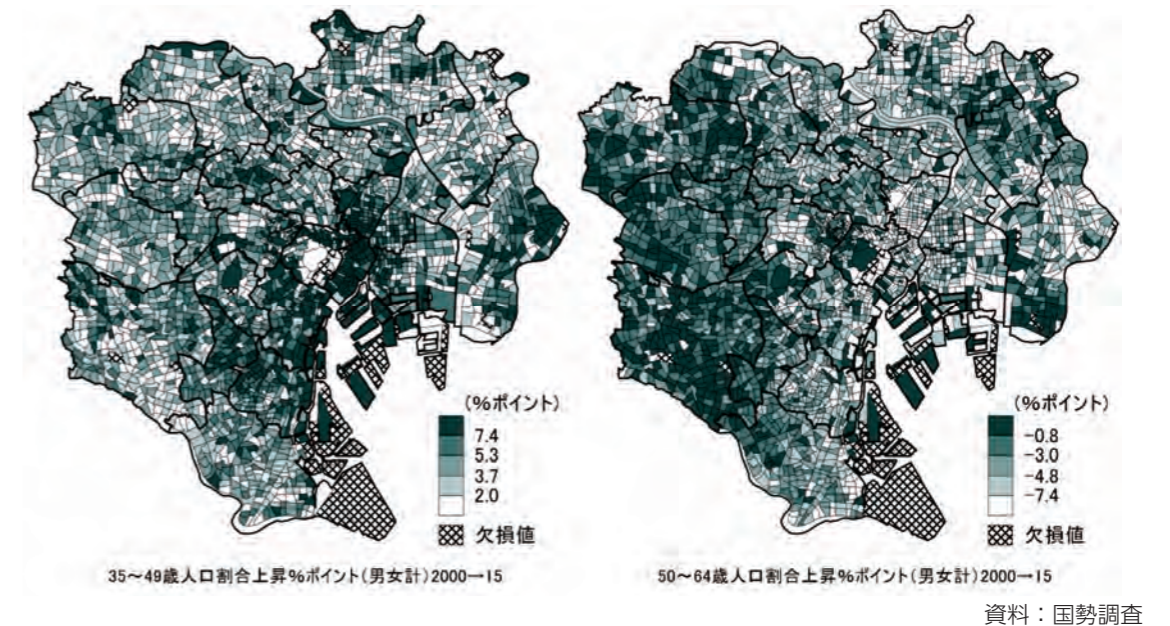


図 6-25 は、特別区内小地域の総人口に占める50～64歳人口の割合（35～49歳人口割合を示している。凡例は5分位数である。35～49歳人口割合と同様、2000年と2015年では地域分布の変化が確認できる。2000年は東西にはっきりと分かれ、東部で50～64歳人口割合が高い。2015年では東部に割合の高い地域は残りつつ、西端地域でも割合の高い地域が見られる。とりわけ2015年の西端地域の分布は、図 6-23 で示した50～64歳人口の増加数、増加率の分布と似通っており、若い時期からこれらの地域に居住していた者が加齢によって50～64歳に達したものと考えられる。

図 6-26 は35～49歳人口割合と50～64歳人口割合について、2000年から2015年にかけての上昇%ポイントを示している。35～49歳人口割合は都心部を中心に上昇し、50～64歳人口割合は西部を中心に上昇しており、同じ壮年期でも前半と後半とで上昇の地域パターンが大きく異なる。これまでも指摘しているように、35～49歳人口割合の上昇は15年間の人口移動による影響が大きく、50～64歳人口割合の上昇は継続して居住している世代が50～64歳に達したことによる影響が大きいと考えられる。

図 6-26 35～49歳人口割合と50～64歳人口割合の上昇%ポイント（2000→15）



8. 第6章のまとめ

1では1990年代半ば以降の東京圏の転入超過の拡大が、それ以前とは異なり、特別区の転入超過の拡大によって牽引されるようになったことを明らかにした。また、その変化の背景として、とりわけリーマンショック後から特別区の転入者数が増加する一方で転出者数が横ばいの推移であった。こうした人口移動パターンの変化に対し、2では標準化によって人口構造の変化の影響を取り除き、モビリティ変化を分析した。その結果として明らかとなったのは、1995年以降に特別区への転入モビリティは上昇しており、特に東京圏外から特別区への転入モビリティにおいて上昇傾向が強く、地方圏から特別区への移動性向は強まっていることである。また、転入モビリティ比は1995年以降も低下を続けて2005年以降は横ばいとなっており、特別区での人口吸引力が高まることに加え、域内にとどまる人が増加したことにより、転入超過が拡大しているメカニズムがあることも同時に明らかになっている。さらにこれらのモビリティの変化がどのような地域との間に生じているのかを明らかにするべく、都道府県別に2000年から2015年にかけてのモビリティ比の変化を分析したところ、西日本でモビリティ比の上昇が大きく、特別区との人口移動が活発になっていた。3では国勢調査の5年前常住地データを用いて、特別区の5歳階級別5年間転入率を分析し、2000年と2015年の比較から、ファミリー層の転入の縮小、25～39歳の単身者の転入の拡大が確認された。また、35～49歳と50～64歳の5年間転入率を23区別に見ると大きな地域差があり、本研究会がアンケート配布対象とした3区のうち、墨田区と豊島区は2000年から2015年にかけて両年齢層で5年間転入率が上昇していたが、世田谷区は若干の低下があった。4では2015年における特別区在住者（35～49歳、50～64歳）の居住期間を配偶関係別に分析し、未婚者が相対的に居住期間の長い者が多くなる傾向にあることが明らかとなった。居住期間が「20年以上」の者はバブル崩壊前から特別区に居住しており、バブル崩壊に伴う新卒採用の縮小等の就業上の問題を抱えたことにより、生活が安定せず、結婚する機会が得られないまま2015年に至ったものと推察された。5では、1990年以降の住宅所有関係別、世帯規模別一般世帯数の推移を分析し、2015年までの25年間で持ち家世帯は世帯規模に依らず増加し、民営借家世帯は単独世帯のみが増加していた。バブル崩壊後の単身者と家族世帯の新たな転入を受け入れるだけの十分な住宅供給があり、またそれを可能にした住宅価格や不動産価格の下落が1～4までの人口移動パターンの変化にも寄与したと考えられる結果となった。6では、コロナウイルス感染拡大による2020年の人口移動パターンの変化を分析し、2019年と比べて特別区の転入者数減少と転出者増加は起きているものの、転

入超過は維持されていることを示した。転入数の減少は東京圏や地方中核都市の変化量が大きく表れてはいるが、ほぼ全ての都道府県で減少しており、日本全体で人口移動が控えられたことも影響していると考えられた。それに対し、転出数の増加は東京圏で集中して起こっており、必ずしも東京圏一極集中が是正されるような人口の分散が確認されたわけではなかった。

これらの分析に基づき、本章の知見として以下の3点を指摘したい。1点目は、特別区との人口移動が近年に活発化しているのは西日本地域であり、これまで以上に特別区に居住する単身者の出身地が多様化する点である。2点目は、2015年時点で未婚者の方が相対的に特別区への居住期間が長くなっており、特別区の5年間転入率が2000年から2015年にかけて25～39歳で上昇したことと相まって、将来的な壮年期の未婚単身者の増加につながると考えられる点である。3点目は、コロナウイルス感染拡大の影響は人口移動にも表れているものの、現時点では特別区の転入超過は継続すると考えておいた方が妥当であるという点である。

将来に家族を持たず、社会的に孤立しやすい壮年期・高齢期単身者のさらなる増加は現実視されている。さらに今後特別区へと移動してくる地方圏出身者をはじめ、その一部は非正規雇用による不安定な経済状況に置かれ、新たなアンダークラスを形成する可能性もある。上述した3つの知見は、特別区において出身地がより多様化する壮年期未婚単身者の増加、そしてその帰結として高齢期未婚単身者の増加へ対応するための仕組みづくりの必要性を示しているといえるだろう。

第7章

壮年期単身者の研究から
明らかになったこと
～増加する壮年期
未婚単身者問題への
特別区の政策対応～

第7章

壮年期単身者の研究から明らかになったこと ～増加する壮年期未婚単身者問題への特別区の政策対応～

はじめに：研究の目的と方法の振り返り

まず、本研究の目的と方法を振り返っておきたい。特別区においては、以前から34歳以下の若年単身者が全国や東京圏と比較して多いことはよく知られているが、近年増加傾向を示している35～64歳の壮年期単身者に対しては十分に目が向けられてこなかった。単身のまま高齢期に入ると、現在の高齢者よりも一層孤立的な状態に置かれる可能性も高いことから、壮年単身者の現状や将来に対する意識等を明らかにするとともに、政策的にどのような枠組みで捉えていくかを検討することを研究目的とした。

初年度の研究では、壮年期の未婚単身者が特別区部に地域的差異を伴いつつ集中する傾向があること、人間関係が薄い層が確実に存在すること、6割が定住意向を持つことなどが明らかになった。

そこで本年度は、東京区部の壮年単身者の動向を明らかにするために、国勢調査データを用いて東京区部全体の単身者のコーホート分析を行った。また、壮年単身者が東京区部外との移動によって入れ替わりながら増加している点に着目し、移動傾向を詳細に分析した。またこれと並行して、初年度に実施した壮年期単身者を対象とするアンケート調査データの踏み込んだ分析をするとともに、22名を対象とするインタビュー調査を実施して分析を深めた。

これらの分析を通して明らかになったことをまとめ、増加を続ける壮年期単身者問題に対応する都市政策上の課題を提示したい。

1. 国勢調査データから見た壮年期単身者の動向と将来

(1) 1976-80 コーホートから上昇の勢いを増す未婚単身者比率

まず、国勢調査データから見た壮年単身者の動態をまとめよう。東京区部の人口が増加に転じたのは1995年以後であるが、その後の動向の特徴は、35～49歳の壮年前期単身者の増加・集中傾向が顕著だという点、とくに女性においてそれが一層顕著であるという点である。

東京区部の単身化の傾向は高いレベルで一貫して続いており、弱まる兆候はない。全国の傾向も同じであるが、その水準は東京区部の半分から4分の3といったところであり、東京区部は単身化が最も先鋭的に現れている場所だといえる。単身者の多数を占める未婚単身者に着目すると、未婚者に占

める未婚単身者の比率は壮年前期に入る1976-80コーホートから上昇の勢いを増している。とくに女性の動きが目立つ。

単身者全体の将来動向を見通すうえでとくに着目すべき点は、近年、未婚者の親との同居傾向が減少に転じつつある点である。未婚者が若い年齢層で単身化する傾向をもちはじめたこと（親と同居しないこと）は、単身者率の一層の上昇に結びつく可能性のある動きである。なお、全国の女性は男性とほぼ同様の傾向をみせている。

(2) 高い専門・技術職の割合

2015年時点で、全国、東京圏と比較した東京区部の就業者全体の特徴は、男性の管理職、専門・技術職、女性の事務職が多いことである。それを未婚者に限ってみると、最も目立つ点は、男性の30代を中心とした専門・技術職の割合の高さで、このような傾向は2010年には東京圏とほとんど差がなかったことから、近年こうした傾向が現れたと考えることができる。

(3) 顕著な上昇が見込まれる女性の壮年前期単身者

東京区部における単身者の将来推計をした結果、単身者総数は、2015年の243万人から増加を続け、20年後の2035年には326万人に到達すると見通される。また、壮年単身者にしぼってみると、男女とも前期の方が後期よりも数は大きく、割合の上でも顕著に上昇するが、とくに女性の壮年前期の割合の上昇が大きく、2035年に全国の36.2%を占めると見通される。2035年における東京区部人口は全国人口の8.8%であり、36.2%という割合はきわめて大きい。東京区部における壮年単身者の将来を全国との比較でみると、女性の壮年前期単身者の存在が一層顕著になる見通しである。

2. 特別区をめぐる人口移動の実態

次に住民基本台帳人口移動報告データと国勢調査の5年前常住地データ等を用いて、特別区をめぐる人口移動の実態を、量的な変化としての移動パターンの変化、転出先地域および転入先地域の変化といった地域間移動パターンの変化、配偶関係別居住期間等の分析から明らかにした。

(1) 特別区の転入超過の拡大が東京圏の転入超過の拡大を牽引した

1990年代半ば以降、東京圏の転入超過の拡大は、特別区の転入超過の拡大によって牽引され、とりわけリーマンショック後から特別区の転入者数が増加する一方で転出者数が横ばいになった。都道府県別にみると、2000年から2015年にかけて西日本で特別区への転入モビリティ比の上昇が大きく、これまで以上に特別区に居住する単身者の出身地が多様化することが予想される。

(2) バブル崩壊後の環境条件が単身者の転入を可能にした

2000年と2015年の5年間転入率の比較から、ファミリー層の転入の縮小、25～39歳の単身者の転入の拡大が確認された。住宅環境の変化はその要因のひとつである。1990年以降2015年までの25年間で持ち家世帯は世帯規模に依らず増加し、民営借家世帯は単独世帯のみが増加していた。世帯数の増加をもたらしたのは、バブル崩壊後の単身者と家族世帯の新たな転入を受け入れるだけの十分な住宅供給があり、またそれを可能にした住宅価格や不動産価格の下落があったからであり、そのことが人口移動パターンの変化にも寄与したと考えられる。

(3) 未婚者ほど特別区への居住期間が長くなる

2015年時点で未婚者の方が相対的に特別区への居住期間が長くなっており、将来的な壮年期の未婚単身者の増加につながると考えられる。居住期間が「20年以上」の者はバブル崩壊前から特別区に居住しており、バブル崩壊に伴う新卒採用の縮小等の就業上の問題を抱えたことにより、生活が安定せず、結婚する機会が得られないまま2015年に至った人たちが多かったものと推察される。

3. 壮年期単身者はどのような人たちか

国勢調査データから把握した壮年期単身者の全体像をもとに、アンケート調査データを用いて主に年齢、性別、出身地、学歴、職業、所得を軸にその実像を探った結果明らかになったのは以下の通りである。

(1) 若い年齢層ほど高学歴の地方圏・東京圏郊外部出身者が多い

壮年期単身者は、1990年代半ば以降に東京圏に転入した人々が多く、地方圏、次いで東京圏郊外部からの転入者の比率が高い。また、若い年齢層ほど大卒以上の高学歴者が多く、団塊ジュニア世代の後で高学歴化が一気に進んだことがわかる。それ以降に男女の教育格差は縮まり、若くなるほどより差が小さくなっているが、それでも男女の学歴差はある。

(2) 高い職業意識と「働くこと」の比重の高さ

就業上の地位をみると、もっとも多いのは正規雇用で4割、つぎが非正規雇用で2割、また、会社などの経営者・役員、正規雇用の課長職以上の管理職で2割弱という構成である。夜間や週末に働く人がとくに若い年齢層に多く、男女の差がないことは大都市で家庭をもたない単身者の働き方の特徴といえるだろう。

仕事に対する満足度は高く、男女別、年齢別で大きな違いは見られない。「仕事の専門能力を高めたい」という比率も7割強と高く男女で大きな差はない。このように、単身者の職業意識は壮年期の前・中期の人々のなかで高く、ジェンダーや年齢による差がなく、暮らしのなかで「働くこと」の比重が総じて高いといえる。

1990年代以後のグローバル化とサービス経済化にともなって雇用機会が東京に集中し、高学歴者の需要が高まったことが地方圏や東京圏郊外部から若い単身者を吸引した結果があらわれている。

(3) 未婚者増加の一因は格差の大きい経済状態

壮年期単身者の経済状態は一様ではない。東京区部以外からの転入者が増加したのはバブル崩壊以後であり、その後のリーマンショックを経て、デフレ経済と雇用不安定の時期が長く続いた。その反映で壮年期単身者の経済状態は全体として決して良いとはいえず、学歴、従業上の地位、男女間の格差も大きい。年収300万円未満の低所得者は、年齢とともに増加し、60歳代前半では男性で4割、女性で5割半ばに達している。一定の生活水準を確保するために一人暮らしをせざるをえなかった例が少なくない。

40歳以上の男性の3割は、「収入面に不安がある」ことを結婚していない理由としている（複数回答）が、年収300万円未満層では約5割、300～500万円層では4割弱に達し、所得と負の相関関係にあることは明らかである。とこ

ろが女性のなかで結婚していない理由に収入の不足をあげる例は少ない。そこに社会規範としての性役割の違いが投影されている。結婚は同一階層内の男女間で成立しているという現実の規定されて、低所得層においては女性も結婚相手に出会えない状態になっている。

(4) ジェンダーによるちがいを暮らし向き評価・一人暮らし継続の意向・社会関係

壮年期単身者の意識やライフスタイルにはジェンダーによるちがいがあ

る。女性の所得水準は男性より低いにもかかわらず、暮らし向きに関する評価は明らかに男性より高い。その理由は、第一に、女性は、一人暮らしを続けるための計画性や生活防衛意識が男性より高く、高齢期を見越して準備している例も少なくないこと。第二に、外食への依存度の違いなど男女のライフスタイルの違いが暮らし向きに投影していること。第三に、男性は、経済力（稼ぐ力）で自己評価する傾向が強いために、暮らし向きへの自己評価が厳しいことなどをあげることができる。

一人暮らし継続の意思にもジェンダーによるちがいがあ

る。女性は年齢があがるにつれ「今後も一人暮らしを続けたい」と答える人が増え、住宅や社会関係づくりによって一人で暮らす環境を整える傾向があるが、男性は50歳代まで「わからない」が多く、「一人暮らし」を受け入れるような気配がみえない。潜在的であっても家庭をもちたいという願望のある男性が、結婚できない状態にある。

最も大きなちがいは社会関係で、その豊かさは明らかに女性が上回っている。男性単身者は、「一家の大黒柱として経済的責任を果たす」という性役割規範から自らを解き放ち、家庭をもたない豊かさという新たなライフスタイルを確立することが課題といえるだろう。

(5) 予想される高齢期単身者の貧困と孤立問題

壮年期単身者の多くは高齢期単身者へとつながっている。高齢期を目前に控えた60歳代前半をみると、男女の半分強は暮らし向きが苦しいと感じている。また、低所得者の半分以上は高齢期の備えができていないと答えている。現在、独居高齢者の中心は夫に先立たれた女性であるが、やがては壮年期単身者から高齢期単身者へと移行した人々が多数を占める時代になるだろう。その時、高齢者の貧困と孤立問題が現在とは異なる形で生じることが予想される。家族や親族によるケアを得られない高齢者の増加と一体化した問題といえるだろう。

4. 社会的孤立傾向の未婚単身者

つぎに着目したのは、壮年期単身者はどのようなタイプで構成されているかというテーマである。そこで、休日の過ごし方をもとにした単身者のライフスタイルを整理して、4つのタイプを析出した。①家で一人で過ごす「おこもり型」、②家でパートナーや家族と過ごす「家族・準家族型」、③家族や友人とのつきあいが多い「ネットワーク型」、④一人で外で活動する「ソロ型」の4つである。そこで、日常生活、社会関係、生活満足、高齢期の暮らしの見通しにどのような特徴があるのかを探った。

(1) 半数を占める「おこもり型」

大都市単身者の特徴が表れているのは休日に「家で一人」で過ごす「おこもり型」と「ソロ型」であるが、全体の半数を占める「おこもり型」に着目してまとめてみよう。

この型には、低学歴、低年収、無業、非23区出身者、友人・知人が少ない、電話やインターネットでも交流していない、サポートネットワークが弱く、身体的・健康的に不健康傾向にあるなど、社会的に孤立し、かつ「役割のない個人」として生きる負の側面が出ている。このタイプの人々には、脆弱さや危うさをカバーできるような条件、社会的に「一人で生きられる能力」が絶対的条件であり、それが失われれば、ふだんは大都市の摩天楼によって不可視化されている、「役割のない個人」として生きる負の側面が表面化し、場合によっては深刻化すると考えられる。

(2) 「役割のない個人」として生きる未婚単身者

単身者の多くを占める未婚者・離死別者は既婚者と比べて、配偶者として、あるいは親としての役割がない状態にあり、その点では相対的に「役割のない個人」として生きている。また、東京23区のような大都市居住者は、従来の（あるいは前近代的な）血縁・地縁といった社会関係からも自由（離脱可能な自由）であることが多い。一方、経済的自立は、大都市で一人で暮らしていくための重要な要件であり、壮年単身者の主要な役割は職業をもって働くことである。この点では、東京23区は、雇用機会や産業の多様性とも豊かであり、経済的な魅力だけでなく、仕事内容や働き方を含めた非経済的な魅力も含めて、突出した魅力で単身者を引きつけている。

5. 壮年期未婚単身者の不安とニーズ

アンケート調査では把握のむずかしい意識や生活実態をインタビュー調査で把握した。印象に残ったことを、ランダムではあるがまとめてみよう。

特別区の壮年期単身者の職種と就業形態は多様であり、転職回数も多い傾向がうかがわれる。大都会の中で、仕事の選択にも自由が生まれ、住まいの選択もそれに応じて変化していることが多い。

その一方で、単身であることへの不安も見えた。特に大きな病気に際しては単身であることへの困難さが表れやすい。収入を失う、家族のサポートが無い、もしくは乏しいというような問題が起こりやすいと思われる。離れて暮らす家族や親族、友人に頼ることへの遠慮もある。

故郷や地元との関係も様々である。経済的安定や仕事の安定が出身地での社会関係の質を規定している傾向もみられる、また、地方出身者の場合、東京へ移動したことによって幼少期、青年期の社会関係を維持することが難しいこともうかがえる。

墓に関する意識には共通する傾向がみられた。従来の家族墓ではなく、樹木葬、散骨、などを希望する単身者は多く、性別による違いがないことは印象的である。墓という家族を単位としているものに単身である自分がフィットしない、という気持ちが読み取れる。

このようにインタビューからは、単身者がもつ様々な特性が読み取れるとあってよいであろう。大都市で一見解放されているかに見える単身者は、壮年期に入り親世代がいなくなる中、今後何かあれば誰に頼めるのか、どのような社会関係を築いていくのか、と不安を抱えていることも事実であろう。その不安を解消するための資産形成や友人との絆はこれからますます重要性を持っていくのかもしれない。その一方で、都市の持つアメニティ（例えば利便性、公共空間、無名性など）は彼らを東京都心に留める理由であることもインタビューで明らかになったことであろう。

6. 増加する壮年期単身者問題への特別区の政策対応

自治体行政のなかの住民サービスは、高齢者、若者、女性、子ども、子育て世帯、外国人といった住民の属性に応じて問題を整理し、それに対応する形で組み立てられているものが少なくない。もちろん、必要な行政サービスを必要な属性の人たちに届ける上で、こうした政策の組み立て方は必要である。ただ、こうしたアプローチでは、属性による問題が明確でない対象が政策の狭間におかれる可能性がある。

この研究で対象にした壮年期単身者は、行政サービスの観点からみて、属性的に問題があるとは考えられていない人々であった。しかし、単身者全体は、2015年に東京区部人口の26%をすでに占めており、2035年には34%まで上昇し、そのなかでも壮年期前期単身者は相対的に増加が大きいと見通されている。日本で住民に占める単身者の割合が最も高い都市である東京特別区部は、納税者としての比重も相応に大きい壮年期単身者を、まず政策対象として認識するところから始める必要がある。

一つのアプローチとして、壮年期単身者のニーズを日常生活レイヤーと非日常生活レイヤーに分けることが考えられる。

日常生活レイヤーでは、まずニーズそのものを把握することが求められる。行政が住民（以下「区民」と記述）との接点として重要視している自治会町内会というチャンネルでは、単身者からのニーズ把握も単身者への行政情報伝達も十分に機能していない可能性が高い。区民意向調査等の既存のニーズ把握チャンネルでも単身者の存在を意識しつつ、さらに新たな接点も模索することが求められる。

今回の調査では、タイプと年齢による違いはあるが、「結婚・交際相手との出会いの場の提供」を求める声、また、女性のなかに、単身者向けの住宅政策を求める声があった。こうしたニーズに対して、市場原理に基づいた解決だけに求めるのではなく、23区という最も都市性の高い地域特性を活かし、「自立した個人」として、ゆるやかな社会的ネットワークへの参画を促すというような政策を、文化・スポーツ政策等を含めて多方面から探っていく必要がある。ゆるやかな社会的ネットワークは、個人の特徴的技能（特技や専門性等）の存在を知る機会となり、地域資源の発掘と行政を介した当該個人の役割の獲得につながる場合も想定される。

また、単身者に特有なニーズとして、「病気になったときに身の回りの世話をしてくれる人がいない」や「人との会話が少ない」があがっている。区政に求める取り組みとして「病気や入院時などに身の回りの世話をしてくれるサービス」が第1位にあげられてもいる。インタビューではそれに加えて、単身者が入院したり、高齢者施設などへ入居したりする際に、家族の保証人や立ち合い等を求められ、従来の家族形態に頼った社会システムでは対応が難しいことが述べられている。

こうした日本社会全体を覆う社会システムを変えるには時間がかかるが、そこを切り拓く役割は特別区に期待したいものの一つである。渋谷区で始まった「パートナーシップ証明書」はそうした先駆的取り組みの好事例である。

非日常生活レイヤーは、壮年期単身者が持つリスクへの認識ということでもある。それは、壮年期単身者の一部にある潜在的リスクと、長期的な変化のな

かで顕在化するおそれのある潜在的リスクに分けられる。

前者のリスクは、東京区部が様々な形で生み出す就業機会に惹かれて転入した単身者が、結果的に不安定な経済状況に置かれ、社会的孤立と生活困窮度を高めるリスクであり、就労支援・生活支援・社会的包摂政策の拡充を必要とする。また調査のなかで、壮年期単身者の社会関係が少ないタイプに、「気分が沈んだり、憂うつな気持ちになったりする」や「どうも物事に対して興味がわかない、あるいは心から楽しめない感じがする」の割合が高い傾向がみられた。地域でのメンタルサポートの対象者が発生しやすい対象として、壮年期単身者を認識することも必要である。

長期的な変化のなかで顕在化するおそれのある潜在的リスクは、高齢単身者のなかに未婚者が増加し、現在よりも親族ネットワークに頼ることのできない孤立の高齢者が増加するリスクである。

未婚者にとって、趣味などを通じた友人関係、さらに同じような境遇にある単身者の友人は、家族の代替とはならずとも、何らかの形で支えとなっている。学校、職場、地域といった場での社会関係ではない、さらに家族でもない関係は壮年期単身者にとっては重要である。そのような観点にたって、今後高齢化していく単身者の支援をしていく必要が行政には求められる。未婚単身者は地域への関心もかわりも極めて低く、具体的な支援の手段を見いだしていくことは簡単ではないが、日常生活レイヤーでの取り組みを地道に進めることが、この問題への解決にもつながると考えられる。

研究体制（◎はリーダー）

◎	放送大学／千葉大学名誉教授（機構顧問）	宮本 みち子
◎	慶應義塾大学名誉教授	大江 守之
	札幌市立大学デザイン学部准教授	丸山 洋平
	独立行政法人労働政策研究・研修機構リサーチ・アソシエイト	酒井 計史
	神戸大学キャリアセンター特命講師	松本 奈何
	調査協力区：世田谷区・豊島区・墨田区	

活動実績

活動項目	実施日・期間	内容
第1回研究会	令和2（2020）年 4月20日	メンバー紹介、国勢調査データ分析・アンケート結果分析の検討 等
第2回研究会	5月18日	文献調査結果の共有・意見交換、国勢調査データ分析の検討 等
第3回研究会	6月22日	分析結果の共有・意見交換（アンケート結果分析、国勢調査データ分析）、インタビュー調査の検討（実施方法） 等
第4回研究会	7月21日	分析結果の共有・意見交換（アンケート結果分析、国勢調査データ分析）、インタビュー調査の検討（募集要項検討） 等
第5回研究会	8月24日	分析結果の共有・意見交換（アンケート結果分析、国勢調査データ分析）、インタビュー調査の検討（募集要項確認） 等
第6回研究会	9月25日	分析結果の共有・意見交換（国勢調査データ分析）、インタビュー調査の検討（質問項目検討） 等
第7回研究会	10月26日	分析結果の共有・意見交換（アンケート結果分析）、インタビュー調査の検討（委託事業者との調整）、報告書の検討 等
第8回研究会	11月30日	インタビュー調査結果の報告・意見交換、報告書の検討 等
第9回研究会	令和3（2021）年 1月8日	報告書の検討 等
第10回研究会	2月15日	報告書の検討 等

執筆担当

第一章 第二章	大江 守之
第三章	宮本 みち子
第四章	酒井 計史
第五章	松本 奈何
第六章	丸山 洋平
第七章	宮本 みち子 大江 守之

インタビュー調査委託

株式会社サーベイリサーチセンター

令和2年度

特別区長会調査研究機構調査研究報告書一覧

テーマ名	提案区等
基礎自治体におけるテレワークの活用と実現方法	品川区
「持続可能な開発のための目標（SDGs）」に関して、特別区として取り組むべき実行性のある施策について	荒川区
自尊感情とレジリエンスの向上に着目した、育児期女性に対する支援体制構築に向けての基礎研究	板橋区
大局的に見た特別区の将来像	江戸川区
特別区における小地域人口・世帯分析及び壮年期単身者の現状と課題	基礎調査
特別区における職場学習の現状と効果的な学習支援のあり方	千代田区
特別区におけるごみ減量に向けた取り組みの推進と今後の清掃事業のあり方	江東区
将来人口推計のあり方	世田谷区
特別区が行うソーシャルビジネスの活動支援策～地域課題の現状把握を踏まえて～	世田谷区
債権管理業務における生活困窮者支援・外国人対応	中野区
地域コミュニティ活性化のためにとりうる方策	葛飾区

以上の11テーマを各テーマ別の報告書（計11冊）にまとめて発行しています。各報告書は、特別区長会調査研究機構ホームページで閲覧できます。

<https://www.tokyo23-kuchokai-kiko.jp>

特別区長会調査研究機構

検索



令和2年度 調査研究報告書

特別区における小地域人口・世帯分析及び 壮年期単身者の現状と課題

令和3年3月31日発行

発行：特別区長会調査研究機構 事務局：公益財団法人特別区協議会

〒102-0072 東京都千代田区飯田橋 3-5-1 TEL：03-5210-9053 Fax：03-5210-9873

※本書の無断転載・複製は、著作権法上での例外を除き禁じられています。

印刷所：図書印刷株式会社